

# 重家豊資料目録

おも や ゆたか

広島県社会・労働・文化運動史料



広島市  
職員労働組合



表紙デザインは、重家三嘉(重家豊長男)

# 勤勞者文學



# 地方

詩作研究の論評



# 傍人

三原車輪文學サークル機関誌



# 木下尚江の詩

18



# 木下尚江の詩



# 山脈

昭和



# 木下尚江の詩

950



# 沿河詩人

No.1

平和特集號



ひろしま地方の会 創刊

如何は... 組合員諸君に訴ふ... 権中組合員

われは... 組合員諸君に訴ふ... 権中組合員

われは... 組合員諸君に訴ふ... 権中組合員

われは... 組合員諸君に訴ふ... 権中組合員

われは... 組合員諸君に訴ふ... 権中組合員

重家豊の起案草稿、彼の労働運動に対する情熱が随所にかがえる (1946年12月19日)

声明書

世界的不成功... 人民解放戦線が...

我が国の政治情勢... 共産党を中心とする人民解放戦線は...

日本組織労働者及びその党... 野望を刷新しようとする...

人民の要求を踏破... 反共的攻撃を打ち破り...

かこよ、反共階級労働者... 組合員諸君に訴ふ...

労働組合、農民組合も... 人民解放戦線が...

組合の組織分裂時に出された日本共産党三車細胞の声明書 (1948年7月20日、重家豊草稿)

## まえがき

私たちの運動は、過去の成果の上に立っています。私たちは先人たちの勝利の闘いに勇気づけられ、苦難の歴史に多くのことを学んできました。昭和52年7月刊行の『広島市職労三十年史』は、こうした三十年間の闘いを正確に跡づけ、これからの運動の発展を展望するための、それ自体一つの運動の所産でもありました。

ここにお届けする『重家豊資料目録』は、『広島市職労三十年史』の姉妹編として、故重家豊氏のご遺族のご理解をはじめ、多くの方々のご協力によって刊行されたものです。渡辺悦次・鈴木裕子両氏には、資料の調査、整理・分類にいたるまで献身的にご尽力いただいただけでなく、両氏の労働運動史研究の豊富な蓄積を生かした解説を寄せていただきました。これによって重家資料の全体像がいつそう分かりやすく、使いやすい目録になっています。

重家氏と親交のあった山代巴氏の玉稿は、この目録を特徴づける大きな魅力の一つです。山代氏の力強い描写と証言は、一編の優れた文化運動史を見る思いがします。重家氏の内面とともに、資料の一点一点を生きた史料として理解する上で欠かすことのできない一編といえましょう。

奥地圭子氏の「父重家豊の思い出」は、この目録に温い彩を添えています。運動に生きた重家氏の間人像が、ここでは子の目を通して生き生きと描かれ、親子の織りなすいくつかのエピソードは、淡々としたなかにも強く胸を打つものがあります。

重家豊氏が闘いのなかで生み、残した資料は、まだその光を失ってはいません。これらの資料が語る歴史の声が多くの人々にしっかり受けとめられ、明日への運動の糧となることを強く希望するとともに、志なかばにして逝った重家氏のご冥福を心からお祈りいたします。

昭和59年3月31日

広島市職員労働組合

中央執行委員長 佐藤 光 雄

# も く じ

口 絵

まえがき

凡 例

重家豊と文学運動	山代巴	1
父重家豊の思い出	奥地圭子	33
解 説	渡辺悦次・鈴木裕子	42

## 社会労働運動資料

### 第1部 1945—1951年

I 労働運動	59
1 三車従組・全車三原支部・全日本金属広島支部三車従分会・三車再建同盟	59
2 三菱重工業労働組合連合会・中日本重工業労働組合	71
3 全国車輛産業労働組合	72
4 全日本金属労働組合・全日本金属産業労働組合協議会	78
5 産別会議・全労連	83
6 県下地域組織	87
II 共産党関係	89
1 本部	89
2 広島県党関係	92
III 救援運動	94
IV 平和運動	96
V 文化・文学運動	96
1 新日本文学会関係	96
2 勤労者文学会議	98
3 労働者教育・文化運動	98
4 日本民主主義文化連盟・その他	98
VI 占領軍	99
VII 三原市政・その他	99
VIII 重家選挙・経歴	100

## 第2部 1952—1980年

I 文化・文学運動	103
1 新日本文学会	103
2 地方の会	105
3 広島県文化会議	105
4 三原みんな歌う会・その他	107
5 峠三吉関係	108
6 山代巴来翰	109
II 平和運動・原水爆禁止運動	109
1 平和運動	109
i 日本平和委員会	109
ii 広島(県)平和委員会	111
iii 平和問題研究会	112
iv その他	112
2 原水爆禁止運動	113
3 60年安保闘争	114
III 公害反対運動	114
1 公害をなくす三原市民連絡会	114
2 その他	117
IV 労働運動	120
V 三原市・御調郡向島町	121
VI 共産党関係	121
1 本部	121
2 広島県党関係	123
VII 救援運動	124
一般図書・逐次刊行物・その他	
I 一般図書	127
II 逐次刊行物	188
III その他	197
補遺	202
あとがき	

## 凡 例

この目録は、故重家豊(1918—1982年)旧蔵にかかる社会労働運動関係の原資料、雑誌・蔵書など4,582点を主体に、山代巴・奥地圭子の回想記および資料解説によって構成されている。

### 1 回想記・解説の資料引用部分についての凡例事項

- (1) 資料は横書に統一し、漢字・かなづかいは、原則として原文のままとした。
- (2) 段落・改行は資料の意図をそこなわない限り適宜整えた。
- (3) 誤字・脱字と思われるものは訂正し、〔 〕内に収めるか、原文のままを掲げて〔ママ〕を付した。
- (4) 判読不能の文字は、□□で示した。

### 2 資料目録の分類・配列

- (1) 全体を社会労働運動資料と一般図書・逐次刊行物・その他の二大分類とし、それぞれについて、いくつかの分類を施した。
- (2) 社会労働運動資料は、全体を二期、占領期(1945—1951年)とそれ以後(1952—1980年)に大別したうえ、さらに内容別に分類した。内容別区分のなかは、おおむね発行年月日順に配列したが、一部その限りでないものもある。そのなかには重家氏の分類に従ったものも含まれている。
- (3) 一般図書・逐次刊行物・その他については、それぞれ発行年月順に配列した。なお、発行年月が同じときは、さらにそのなかを五十音順に配列してある。

### 3 資料目録の記載事項

- (1) 社会労働運動資料は、登録番号、発行主体、資料名、発行年月日、形態の順に、一般図書・逐次刊行物・その他は、登録番号、資料名(書名・雑誌名)、著者または編者・訳者、出版社、発行年月日、ページ数の順に記載した。
- (2) 登録番号は原則として、資料1点につき1番としたが、新聞切抜・書簡などでは、複数の資料をまとめて1つの番号を付したものもある。
- (3) 発行主体・資料名は、原則として原資料に記載されている字句を用いた。ただし、旧漢字は新漢字に改めた。
- (4) 発行主体・発行年月日が不明な場合、推定可能なものについては〔 〕内に記載したが、それ以外は空欄のままとした。
- (5) 〔 〕および\*は編者が付したもので、内容を補っている。
- (6) 資料の形態は、印刷方法、大きさ、枚数(ページ数)の順に略号で示した。



(i) 印刷方法の略号は次のとおりである。

活一活版印刷、ト一謄写印刷、タータイプ、複一複写、肉一肉筆。

(ii) 大きさは、A 4 ・ B 4 などの判型で示したが、規格外のものについては、ヨコ  
×タテ(cm)で示した。なおタブと記したのはタブロイド版の略である。

(iii) 枚数(ページ数)が記入されていないものは、1枚だけのものである。

# 重家豊と文学運動

山 代 巴

## 1 敗戦すぐの頃

敗戦後の民主化運動の根拠地となったのは、多くの県で県庁のある市であったが、広島県の場合は広島が原爆により復興不可能と言われるほど壊滅していたので、戦災を受けない三原が、敗戦直後の県下の民主化運動の根拠地の観を呈していた。その中心になったのが三菱三原車輛工場の労働組合結成の動きであったろうと思う。

重家豊は組合結成（20年12月）後間もない昭和21年2月、慶応大学卒業という学歴を秘してこの工場の労働者となった。彼の遺品の中に、このころの資料を見たとき、私は20代半ばの燃えるような彼の平和と民主化への情熱の凝縮がそこにあるように思った。

私も彼と同じ頃から三原に足場を持ち、三原農民連盟結成の書記的な役割を担って、連盟の綱領・規約作成に参加している。21年の早春、私は農民連盟の事務所でもあった、円一町の当時の三原農業会の二階の窓から、三原での戦後最初の労働者のデモ行進を眺めたときのことを、今も感動をもって思い出す。これは三車従組が敢行したもので、重家豊はそのデモ行進の中の一人だったのだ。彼も私も当時は日本共産党に命を託していた。労働組合の活動家であると同時に、共産党員でもある重家豊たちは、三菱三原車輛工場を、ロシヤ革命の拠点工場となった赤色ブチロフ工場のようにしようという夢を持っていて、県下の至る所の労働者の中へ、組合結成を促す活動を起こして行き、その翌年の2・1ゼネストまでに革命はもうすぐかと思わせる気運を醸成して行った。

私達が文化活動の上で大きな影響を受けている美学者中井正一先生が、戦後初の地方労働委員として、最高点で当選され、地労委の会長に就任できたのは、三車の労働組合が結成されるや、すぐに文化活動を始め、度々中井先生を呼んで講演を聞き、地方労働委員の選挙に当っては、中井先生を推薦、その選挙応援の推進力になったからだった。

中井先生が地労委の会長に就任されてからの最初の大事業は、戦争中の政府が強制的に組織した工場労働者による、産業報国会の財産（多くは会費）を分け取りするのではなく、県下の全労働者の文化活動の基金として使うことを、地労委の名によって決議し、広島県労働文化協会を誕生させたことだった。これは又、三車労組の文化活動が、県下全域の労働組合の文化活動の先駆的な活動の担い手にならざるを得ない宿命を担うことにもなったのである。

重家豊の収集マニヤかとも思える昭和20年代の、雑多なビラやパンフ、新聞、雑誌類の寄せ集めは、彼の当時の位置がさせたとと思われる。しかし私は当時の重家豊の日々を知る位置にはいなかったから、彼の当時を語るに相応しい存在ではない。私が語れるのは彼の文学運

動に限られている。

## 2 お互の文学への近づきの違い

重家豊の場合は学生時代から文学書にひたり、文学を通して反戦平和の目覚めを持ち、詩作・歌作・創作・評論・同人誌発行など、なんでも一応はやってみた人である。そこから苦しい軍隊生活を経て、こんどこそその意気どみで、郷土で一番大きな三菱三原車輦の労働者となり、労組結成、共産党細胞結成に参加し、21年夏までには自分の目撃した職場での一人の労働者の事故死を扱った佳作「ノロ」と言う短篇を書いた。それは今でも私にはあの黎明の一点の灯としての作品として記憶にきざまれている。

21、2年の頃の三原は、労働運動・農民運動の根拠地であると同時に、勤労者の文学運動の根拠地でもあって、22年暮に重家豊が責任者となって勤労者文学会議を持つまでには、ほとんど労働者ばかりの会員200余名を持つ『青い花』、三菱車輦の若い労働者が中心になって階級的立場を守ろうとして集っている『太陽文学会』、旧三原短歌会の機関誌『三原短歌』が、敗戦後、戦中の産業報国会が、労働文化協会に変わり、指導の主軸が軍国主義から民主主義に変わるにともない、二転三転して、総合的な文学の世界へ目を向けて、機関誌『山河』を出すに至った、『山河』同人等が、拮抗してその勢力をひろげていた。重家豊はその中での最も力ある詩人であり、歌人であり、創作家であり、評論家であり、同時に組織者であった。そこから敗戦2年めの夏、三菱三原車輦の労働者を中心に「勤労者文学研究会」が生まれ、『青い花』『太陽文学会』『山河』の同人達の有志が参加し、数回の研究会を経て、「勤労者文学会議」となり重家豊が責任者となって、23年1月1日を期して、機関誌『働く人』を出すに至るのである。



『働く人』創刊号

それにくらべて私の方は、学生時代は画家を志望し、文学書にはあまり縁もなく、詩作・歌作・創作・評論・同人誌発行など手がけたことはない。一途に反戦と解放運動の捨石たろうとして戦前の地下活動へ入り、挫折からの再起のために工場生活に入り、治安維持法により検挙、起訴、投獄となって戦後を迎えている。

私が戦後最初に依拠した大衆組織の三原農民連盟は、戦前の全農全国会議派(共産党支持の農民組織)の闘土岡利夫を顧問にして、県下の旧全農全会派の農民協議会に属していたから、書記局は三原農民連盟の書記と同時に、県下の旧全農全会派の書記でもあったから、私は瀬戸内の島や沿岸、中国山地と、広い地域を歩くことになり、戦前の自分の視野がいかに狭か

ったかを知らされた。

当時の広島県下の農民運動は群雄割拠時代とでも言うか、大まかに分けても5派の勢力が拮抗していた。一つは社会党右派の森戸辰男を顧問に持ち福山に事務所を持つ勢力、一つは社会党左派の高津正道を顧問に持ち日農広島県連の看板を掲げて尾道に事務所を持つ勢力、一つは全農全会派の上岡利夫を顧問に持ち三原に事務所を持つ勢力、一つは社会党の佐竹新市・村井一夫らが指導する広島に事務所を持つ勢力、一つは社共統一派の有馬四郎の指導する県北一帯の勢力。これら5つの各派の中には、不毛の勢力争いはやめて、5派が日農広島県連の旗の下に統一して一大勢力になろうとする動きもあり、21年8月、福山での統一大会を成功させ、9月には事務所を県庁所在地の広島に置くことになった。

この統一への闘いの後、私と城間功順とが県連大会に指名されて、複雑な5派統一後の事務の責任を負う、県連の常任書記となった。このことは私をも城間功順をも視野を全県的にひろげさせ、全国的な観点で行動させ、農民の中での、働く人の立場からの文学を開拓する方向に動かさせた。

敗戦の翌年のこの年、日本農民組合の中央の書記局は、加盟する一切の組織に婦人部と青年部を置き、婦人と青年の力によって農家の封建制や軍国主義の残滓を早急に掃き捨てようとしていて、矢継早に婦人部設置や青年部設置の指令や通達を送って来て、私は婦人部を、城間功順は青年部を、組織するために、県下全域の農村を歩くことになった。この行脚で私も城間功順も大衆に語る言葉の訓練のないことを痛切に感じた。

私は「農家の婦人に月に1回、全1日の休養日を」という呼びかけで、組合幹部や行動的な青年の助けを借りて、婦人部の組織化を始めたが、戦前小作争議の盛んだった香川あたりでは婦人部は早く組織され、共同耕作や共同炊事、共同のパン焼窯の設置などを成功させていたから、私は自分の提唱する月1回の婦人の休養日に、共同耕作、共同炊事を呼びかけた。

だがそれは不人気だった。小作の大集落のない広島県下では戦前の自発的な団結や闘いの経験がなく、戦時中の上から押しつけられた共同耕作や共同炊事の苦い体験の思い出が色濃く残るところから、「少しばかり仕事はかどるからと言って、少しばかり栄養のあるものが食べられるからと言って、あんな気苦勞はもうせんどよう。少々は人より遅れても水入らずの稲刈りがええ、味噌汁やコウコだけでもええ、親子水入らずで食べる方がなんぼかええ」と言う反発が強かった。

では戦時中の婦人の共同労働は何を経験させたのか、第一には「これは誰にも言ってもらっては困る。あんただけに言うのだ」と打ち明けた話ほど、右から左へ筒抜けになり、打ち明けた正直者が窮地に立たされるという経験。第二には、目上から目下への批判は針のように鋭く、目下から目上への批判は取り上げられないばかりか、仲間はずれにされてしまう。第三には、こういう社会ではどのようにすれば言いたいことが言えるようになるのかわからない、ということである。この状態を乗り越えないことには、共同耕作や共同炊事が楽しく

進められる民主的な婦人部は育たない。ここで私は、第一には互が先ず打ち明けられた秘密の守れる懐にならねば、お互を民主的な人間に育てることは出来ないこと、第二には弱者への批判は補促にならねば意味がないこと、第三には互が本音の吐ける場を持って本音の表現力を育てること、この三つを、農家の主婦の集りで訴えることになった。その訴え方は、人は顔に墨が付いている場合、「あんたの顔に墨が付いているよ、みっともない、拭きんさい」と批判めいて言われなくても、鏡を見れば自発的に拭く、その姿に学ぼうとするもので、私は自分が話に呼ばれた会場へは必ず黒板を用意させ、そこに自分達の地方の一般的農家の屋敷の中の母屋や納屋のたたずまい、その間取りなどを描き、納戸や台所での言葉のやり取り、そこに起きる家族の葛藤などを、時には演技を交えながら具体的に話し、「誰にも言ってもらっては困る」と言う本音の世界の打ち明け話を、どこの誰のことかわからぬようにして訴えた。

それが呼び水となって、ひそかに「どこの誰のことかわからんようにして広い世間の人に聞いてもらってくれ」と言う、本音の言葉が集って来て、私の胸の中で醗酵することになる。これがやがて重家豊が編集兼発行人となって創刊する『働く人』に共鳴する土台になった。つまり私は私の壁を突き破る模索から、重家豊の提唱する文学運動へ近づくことになったのである。

### 3 より一層の壁を破るため

2・1ゼネストに対するマッカーサー司令部からの中止命令。これは我が国の労働者の進路への大きな鉄鎚だったが、農民運動も同じ鉄鎚を受けている。日本農民組合第2回全国大会は、2・1ゼネストの直後の2月12・13両日、早稲田大学の大隈講堂で開催され、広島県連からは30人近い代議員がこの大会へ送られ、その中には城間功順も私もいた。

この大会は戦時中軍に加担して農民を裏切ったれっきとした戦犯の平野力三らを指導部に置けないとする勢力と、指導部に置こうとする勢力との激しい衝突の場でもあり、幾多の派閥のからみ合う裏取引の場でもあり、遂に右派は退場して、やがて日農を分裂させる歴史的なドラマの場でもあった。

その会場での広島県連は終始統一を守る立場にいて、この大会で私を中央委員に選出した。全国の婦人代議員で中央委員に選出されたのは私が一人だったから、私は県連の婦人部長と兼ねて日農中央の婦人部長を仰せつかることになったのだが、前途は波乱に満ちていた。「日農広島県連を守るためには、先ず事務局の共産党員を除名せよ」の裏工作は、大会帰りの汽車の中から始まっていた。けれども4月の総選挙がひかえており、森戸辰男・高津正道・佐竹新市は衆議院議員に、村井一夫は県会議員に、桑木健一は市会議員に、有馬四郎は村会議員にと県連の上層はみな立候補の予定だったし、町村の農民組合でも代表が町村会議員に立候補するところが多く、また、県知事には労働戦線からの申し入れを受けて、民主戦線統一で中井正一先生を推薦する運びとなり、3月・4月は事務局の共産党員を追い出す機会は

なかった。選挙により森戸辰男・高津正道・佐竹新市・村井一夫・桑木健一・有馬四郎、みな当選した。中井正一先生は現職知事の楠瀬常猪との一騎打ちで、得票数は4対3の比で落選した。落選とはいえこの闘いの民主統一戦線の善戦と勇躍は若者を勇気づけ、5月1日のメーデーは各都市で爆発的に行われ、2・1ゼネストの中止も何のそのの感があった。こうしたとき私はNHKのローカル放送で5月3日の新憲法施行を記念して、新憲法と婦人解放についてのラジオの15分放送を依頼されて、5月1日のメーデーの日に尾道の千光寺山へ登った。当時は千光寺山の上に放送局があったから。私は今その放送の内容をはっきりは覚えていないが、放送局からの帰り途で、千光寺山名物の岩割りの松のところに立ち止まり、大岩を割って亭々と立つ松の、風を呼ぶ勇壮な姿よりも、岩の中に張りめぐらされた毛根の網の目と、岩の中に太った根によって岩を割っている姿に感動したことは、今もはっきり覚えている。松の実は柔らかい土の中で根を太らせてから岩を割ったのではなく、岩の上に落ちて、その双葉の時から、岩を溶かしつつ岩の中に根を伸ばし、遂には岩を割るほどの力になったことを目の前に暴露している。私は囚われの5年と、敗戦後この日までの農民の中での活動を通して、これから施行される新憲法の精神を思い、日本列島に落とされた平和憲法の精神は、岩上に落とされた松の種子のようなものだ、我々が松の毛根のようにたえず岩を溶かして伸びひろがる努力を重ねなくては、とてもこの国の不拔のものにはなるまいと思ひ、松の根の姿にこれから先の自分の運命を重ねて涙にむせんだ。これが私のその後の活動のスタイルをきめる基礎になったのだ。

私はこの感動を4月の総選挙の際、中井正一候補の応援に来て、城間功順と共に山村地帯を行脚して下さった大阪市大の栗原佑教授への礼状の中に書いた。それは全くの私信だったのだが、栗原氏はそれを、当時京都で発行されていた総合雑誌『時論』の8月号へ、「岩で出来た列島」と題して載せて下さった。私が書いたものが活字になったのはこれが初めてで、私がものを書く道はここから開けることになった。

このころ私が最も書きたいと思っていたものは、アカ功撃への反撃であった。と言うのは、県下の農民運動の5派が統一したとき、常任書記として私と城間功順とを満場一致で推薦し、日農第2回大会への代議員に選び、また中央委員にまで推薦したその人々の多くが、第2回大会での右派の退場による分裂のきざし以来は、日農県連の一層の大衆化と安全を守るためにと言うたて前で、共産党員追出しを画策して、5月の県連大会で一代議員からの「事務所からアカを追え」と言った式の緊急動議が出るや、罪状の調査も何もなしにその場で、多数決で私や城間功順の除名に賛成したからであった。

この豹変も驚きであったが、単位組合の婦人集会へ呼ばれて行き、大会前と同じように黒板を用意し、絵説きで、「どこの誰のことかわからぬようにして訴える、婦人達の本音の世界に、涙さえ流しているその最中に、誰からの差図で登場したのかわからない人が、「そいつはアカぞー、刑務所もどりぞー」とおらべば、座は一度に白けて、人々は聞く耳を持たなくなる。それも私には驚きで、アカとは一体なんなのか、治安維持法の罰した囚われとは一体

どう言うものなのか。普通の人々が異常に恐れている罪人とは一体どんな人間たちなのか、私は自分の見て来たその人々のことを、千夜一夜の物語りのようにしよう。そうすることが岩を割る松の根の営みでもあるだろうと思った。

日農広島県連の事務局を追われた私は芦品郡栗柄村（現在は府中市）の、母が営む2反農業に生活をゆだね、運動としては同じように県連の事務局を追われた城間功順と共に、自分達を受け入れてくれる備後路の農民と結んで、その夏から労働文化協会が全県的に操りひろげる夏期大学に便乗して、労働者の夏期大学に招かれて来た講師を、奥地の農村にも招いて、地元有志の自営の大学を開校し、これを土台に文化活動、文化組織を定着させて行こうとした。

この運動は必然に、冬という農閑期に、自分達が自分達を楽しくするための活動が求められた。ここから私は日農県連の書記時代から、「どこの誰のことかわからんようにして、広い世間の人に話してほしい」と訴えられた生活の聞き書きを、人に話せるように醗酵させたり、自分に対するアカ攻撃に対する反撃として、囚われの時代の体験や、そこで学んだものを、千夜一夜のお伽話のようにする、文学前夜のノート作りを始めることになった。

現金収入は皆無と言っていい2反百姓のその頃の私には原稿用紙や大学ノートは貴重品だったから、古障子を貼り替えるときに、古い障子紙を丁寧にはがして、それをノートのようにとじ、ガラスペンに墨汁をつけて、そこに刑務所時代の忘れ難い人々のことを書きはじめた。それがやっと400字詰の原稿用紙に50枚でいどたまったとき、『働く人』が送られて来た。私はその創刊のことばを読んで、「これだ、この雑誌にこそ、私の千夜一夜の物語の草稿を載せたい」と思った。ちょうどその23年1月、東京で共産党の会議があって、私もそこへ出席するため上京して、旧友の家に泊った。その家は『大衆クラブ』という、共産党の大衆雑誌の編集者の来る家で、私が出かけている間に、私のリュックサックからのぞいていた、まだ原稿にはなっていない障子紙へガラスペンで書きつけた、覚え書き的な草稿を見て、「これは大衆クラブの小説にもってこいだ」と早速、『大衆クラブ』の3月号に載せることになった。これが私の処女作「露のとう」で、その出発からしても、現在発刊中の『囚われの女たち』全10部の始まりで、このときから紆余曲折、挫折また挫折の私の文学勉強が始まっている。

ちなみに『働く人』の創刊のことばは、次のようである。



『働く人』創刊のことば

## 創刊のことば

働く諸君

働くもの自身の手による永遠の解放と建設のより深刻な、より苦しい闘をむかえ、政治の上でも生産の上でも、のるかそるかの所に立つて、働くものの力が今日程、われわれ自身にもひしひしとせまつて来た時はありません。

しかし、文化の上でのわれわれの力わどうでしょうか。残念ながら過去の日本の支配者階級から押しつけられて来た貧しい文化の糧を、われわれ働くものの力を弱める以外にお何の役にも立たないことがわかりました。文化の上でも、働くものわ、むかしの愚かさや、貧しさから、不幸や非人間的な暗さから立ち上つて闘わなくてわ、われわれ最大の任務である日本民主主義革命わ、むかしのようにかたわになつてしまうのです。

このことわ文学について特に強く言へます。

それわ、文学の影響力が極めて大きいため、文学をつかつて働くものをもとの奴隷にしてしまおうという意図がますます烈しく露骨になつている現状です。われわれ働くものが真に求めているものから眼をそらせるような、闘う気持ちを摩擦させ、くずしてゆくような、逆に支配者階級にこびへつらわせるような、そして社会の正しい判断を狂はせるような多くの小説や詩や短歌俳句が氾濫しているではありませんか。

もともと文学わこのようなものでわないのです。社会の眞の姿、人間のいつわりのない悩み、いかり、よろこび、をわれわれにぢかに伝えてくれ、それによつて正しいもの、眞実なもの、より幸福なものを求めて闘う勇気を与えてくれるものなのです。だから文学わ、働くものこのころといつもピッタリ連つているわけです。どうしてもわれわれわ、ゆがめられた文学を洗い清めて、正しく高く愛すべき文学に育てあげてやらなければなりません。やろうとすれば働くものにお出来るが、働くもの以外におこの仕事わ出来ないことなのです。不幸のない社会をつくるために闘つてゆける働くものの手によつてのみ、文学わ本来の姿にかえり人間の役に立つことが出来ることわもはや疑いありません。そのために一人でも多くの働く人々から、飾り気なく、眞実に自分のみづみづしいよろこびやかなしみの歌をうたつてもらいたい。

そして、われわれ働く仲間たちの胸にひびかせ、よろこびに充たせて闘いの勇気を与えたい。それわ最も価値の高い文学となり、文学わ働くもの全部に愛せられるだろう。

こういう気持で、われわれ働くものゝ文学仲間が集い、その旗じるしとしてこのささやかな雑誌を発刊することになつたわけです。

働くものの地方である備南地方の労働者、農民、一般勤労者諸君

働くものの文学の旗をおしたてゝ進もうでありませんか。

働クモノノ手ニヨツテ

働クモノノタメニ

働クモノノ世界を文学にしよう。

(おもや・ゆたか)

## 4 新日本文学会と私達

重家豊の『働く人』創刊の昭和23年は、社会党参加の連立内閣の時代でもあり、新憲法は農村の婦人会活動の中にも社会教育の名で浸透しようとしている時代だったから、私が雑誌『大衆クラブ』に載せた「露のとう」は、さっそく県下の農村婦人を対象とした『新農村新聞』から連載小説を頼まれる糸口になった。8月の農村夏期大学は前年よりも盛大で、吉舎と言う山間の町では400人もの聴講生を得、講義と講義の間に若い女性たちが自分たちで脚



色した「落のとう」を上演して、大喝采を受けるような場面も展開した。

国内的には政令201号反対の職場離脱が全国にひろがる時代でもあり、全学連が結成され、学生の社研運動が全国津々浦々に及ぶ時代でもあった。国際的には9月に朝鮮民主主義人民共和国が成立し、12月半ばには中国人民解放軍が北京を占領した。暮おしせまった国会で内閣不信任案は可決。衆議院は解散、東条英機ら7戦犯は絞首刑を執行され、岸信介らA級戦犯容疑者は釈放された。共産党提唱の社共共同のはじまる中で選挙戦は闘われ、24年1月の衆議院の総選挙の結果は、社会党は40、共産党は35の議席を得た。

この空前とも言うような共産党の大飛躍をバックに、新日本文学会の支部結成が各地で行われた。私は自分の住む栗柄から最も近い尾道支部結成に参加して、この年の2月から新日本文学会の一員になったが、当時の新日本文学会の事務所となった尾道の萬亀ビル3階は、古ぼけた建物の雨風をしのぐに過ぎないところではあったが、そこには坪田正夫、城間功順らが屯して梁山泊の餓を呈していた。彼らは革命はもうすぐと思っていた。そうした人達には岩を割る松の根のようにあろうとする私の文学への志向などは、時代錯誤のはなはだしいものだったのだ。三原では重家豊・小川明人・麻井比呂志らが、尾道よりも戦闘的で、私のような発想は「手工業的生産の考え方」として排除して、ダイナマイトで一挙に大岩を粉砕する文学運動の夢を描いていた。そしてその夢はその4月中国人民解放軍が決河の勢いで南京を占領する報道の中で、すぐにも可能に思っていた。

この年6月の日本製鋼所広島工場の、600余名の解雇に反対する争議は、県下の労働組合の一切が応援に立ち上がる大争議になり、警官隊との衝突になった。これに参加した新日本文学会の会員は誰もが、自分の所属の団体ヘルボや詩や、コントを送った。この闘いできわだつ変化を見せたのは峠三吉で、それまではハイネ流の抒情詩人と見られていた彼が、戦闘的な「怒りのうた」や「共闘の誓い」を書き、新日本文学会の県下の同志に大きな影響を与えた。それは彼を代表とする「われらの詩の会」への動きともなった。

同じ6月、ソ連引揚げ第一船高砂丸は2,000人を乗せて舞鶴に入港。そこから各人の故郷へ帰って来た。引揚げ者を迎える故郷の駅々は、出迎えの歓呼にわき、引揚げ者は一様に日本の民主化のために闘いと叫んだ。私は三原では東洋繊維の女子工員が工場から三原駅まで長蛇の列で出迎えに行くのを感涙で眺め、『広島民報』にルボを送ったことを今も記憶している。

しかし、7月に入ると国鉄は3万700人の第1次人員整理を発表した。続いて下山国鉄総裁が突然行方不明となり、常磐線の線路に死体となって見つかる事件が起きた。それから10日もたたないうちに国鉄は6万3,000人の第2次人員整理を発表、騒然とした労働者の抵抗と蹶起の気運の中で、三鷹事件（中央線三鷹駅で無人電車が暴走して死傷者を出す）、松川事件（東北線松川駅で列車が転覆して死傷者を出す）が矢継早に起きて、三鷹事件に関しても松川事件に関しても、共産党員や活動家の大量の検挙が始まり、あたかも共産党員のしわざであるかの如き宣伝がなされた。

しかし広島に於てはこの8月6日、これまでにない盛り上りの平和の大集會が持たれ、市長は大集會の席上で平和都市宣言を行った。9月トルーマン大統領はソ連が原爆を保有すると発表、次の日ソ連は1947年以来原爆を保有していると発表した。続いて10月1日中華人民共和国が成立した。それらの報道は、革命的で、同時に平和と民主主義の文学を志向する文学仲間を大いに刺激し、峠三吉を代表とする平和と革命の「われらの詩の會」が発足し、11月には『われらの詩』を創刊した。評論や創作の方も、全県的なスケールで機関紙を持つという相談が始まった。しかしそれは難航した。

難航の第一の原因は25年1月6日のモスクワ放送が、コミンフォルム機関紙が日本共産党指導者野坂の平和革命理論を批判した、と報道したことから、日本共産党に分派闘争が始まったことに影響された為だった。次の原因はレッドページと朝鮮戦争である。2月13日東京都教育庁は120人の赤い教員に退職勧告を出したが、その前後から各県の教育委員会は闘争教師のレッドページを矢継早にやり、文学活動の担い手でもあった教師たちが、新しい職場を求めて都会へ流出する場面が次々と起きた。そうするうち朝鮮戦争が起こり、特審局は徳田球一ら共産党の9幹部に逮捕状を出し、共産党機関新聞『アカハタ』に、無期限の発行停止を指令した。

この急変の中で日本共産党は国際派と主流派に分裂。新日本文学会の中央の幹部も、共産党の中国地方委員会や広島県委員会もほとんどが、国際派だったから、広島県下の新日本文学会員も、分裂の当初はみんな国際派の指導の下に活動した。25年の8月6日は、国警本部からの集會やデモの全国的な禁止令のもとに、広島では非合法下の平和大会と平和行進が計画され、県下の新日文の会員の多くがこれに参加した。参加できない会員も、原爆禁止を提唱したストックホルム・アピール、または2月に発足した「平和を守る會」発足の趣意書の勉強会をするなど、集會やデモの禁止令を破って活動を展開している。そうすることが革命と平和を愛する文学活動だと思っていた。

朝鮮戦争の進むにつれ、レッドページは、造船、鉄鋼、繊維、民間企業へとひろがり、政府機関のレッドページだけでも千人を越す状況となり、重家豊も三菱三原車輛工場を追われた。しかし彼はひるまなかつた。彼は元來器用で多才で、大学時代に習字は天皇の前へ出て書かされるほどの達人だったし、油絵もデッサンもかなりの修練を積んでいたから、看板屋となって家族を養うことを考え、三原市の東町に看板屋(三陽社)の店を持った。彼が独立した場を持つとそこは、たちまち、平和活動家の屯の場となった。

朝鮮戦争が始まるとすぐにトルーマン大統領は米国の海軍や空軍に朝鮮出動を命令。在日米軍極東空軍は朝鮮の爆撃を開始。原爆投下を辞さない体制になっている。しかもこの戦争で日本には特需景気が起こり、朝鮮に投下されるボール爆弾は、中国地方の中小企業で製造されていると専らの評判である。ストックホルムのアピールによる原爆禁止の署名運動もやらねばならぬ仕事だったが、自白の強制によってでっち上げられた松川事件の被告たちの無実をかちとる署名運動もやらねばならなかつた。原爆禁止の署名運動のためには、被爆者の

実態を広く知らせる文学活動が必要である。これらも重家の店へ寄る平和活動家の談議の課題であったが、26年1月全面講和愛国運動全国協議会が結成されてからは、全面講和の署名運動も課題となった。7月の平和推進国民会議結成以後は、平和擁護の大集会を持つことも課題になった。こうした繁忙のうちに、対日講和条約の9月8日は到来。全面講和ではなく、日米安全保障条約をととなり、米国の軍事基地一杯の講和条約が調印された。

不本意でもともかく講和が調印され、原爆に関するプレスコードは解かれた。かくていち早く原爆の実態を詩集にして発表したのが、峠三吉のガリ版刷りの『原爆詩集』で、続いて出たのが長田新編の『原爆の子』であった。こうした中で、重家豊を中心とする、革命と平和を志向する備南(三原・尾道・福山・因島とその周辺)の文学活動者たちは、ようやく『沿岸地帯』と言う同人誌を発行するまでに結集することができた。

『沿岸地帯』創刊号は昭和27年5月1日を期して発行された。その扉の「創刊号をおくる」は重家豊の言葉である。この同人の主張でもある「文学の地方性について」堀川五郎。詩「瀬戸内海沿岸地帯」いえ・しげお。主張「もっと啄木を!! 啄木四十年祭を迎えて」Y・O。「詩集『癡狂院』を読んで」堀川五郎。以上はみな重家豊の書いたものである。それは次の通りである。



『沿岸地帯』創刊号

## 5 『沿岸地帯』の重家豊の足跡

### 創刊号をおくる

私達は人間の精神を愛し、そのまじめさを愛し、まじめさ故に湧き出でくる眞実えの渴望と情熱を愛し、それを貫こうとする眞剣な行為と勇氣を愛せずにはられません。それは人間のまじめな精神を嘲笑するもの、眞実えの情熱をゆがめるもの、人間の正しさをまもろうとする勇氣を削るものに対して、つまり非人間的な歪曲、偏向、脆弱、敗北、虚脱、逃走に対して心からあわれみ、警戒し、憎まずにはいられないとゆうことでもあります。

私達が文学を愛し、非文学的なものに抵抗を感じるのは、私達がこのような人間の精神を信じているからに他なりません。私たちの育つたこの余りに温和な風土には、人間性の尊厳さを自ら、権力者の前に供える奴隸的屈従がまだまだ根深くはびこっているようです。それは、文学的にも、人間の美しくのびようとする心を暗くおし包んでいるものに対して、ひそひそと話す声も余りに小さく、大声で発言する機会も殆んどない現実でもあります。瀬戸内海沿岸地帯! 私達地方生活者の周りには、最も非人間的なすがたをとりつゝある最近の日本の現実が具体的に、生々しく、根深くつまっていることを、おそろしく感じ、これに人間的=文学的抵抗を覚えないわけにゆかないのです。

この小さな雑誌は、この非文学的情勢の中にせめても人間的=文学的眞実さをまもるささやかなが

らの據り所をつくつて、この地帯に同じ愛を文学と人間に抱いている人々によびかけ、互いに肩を温め合いたいために、皆さんに捧げるものです。

いま集つている人々は、帝人、三原車輛をはじめ沿岸都市の各工場の労働者あり、学生あり、先生あり、失業者も商人も農民も事務員も、それぞれの職業に亘り、その生活や思想もそれぞれ異なつた人達ばかりです。しかしすべて人間的なものをまもろうとし生活の中の非人間的なものに対して大きく発言しようとする共通した意志をもつて、日本民族と自らの美しい姿を育てる限りない喜びを共有しています。そして、私達にいま面識はないが、もつともつと多くの善意の人々が、このよるこびをともにされるため参加してもらふことが、ゆうまでもなく何よりも望ましいことだと知つています。

この雑誌がこの附近によどむ一切の悪に対決する旗になつて人々の胸にいつもはためき立つように、私達は頑張ります。さあ、私達の出発です。

### 文学の地方性について

堀川五郎

終戦後、おびたよしい量で殺倒した所謂「中間小説」はもう飽きられ始めて、その逃げ口をさがしている<sup>〔マ〕</sup>とゆわれているが、その拠点であつた小説朝日、小説新潮等を代表とする戦後の肉体主義文学給供源が涸喝にあえぎ出したことは誰の目にも判り出すと、もう文壇的創作活動は生色を失つて、深刻な危機に見舞われている自覚をかくすわけにゆかなくなつたらしい。それは最近芥川賞に「広場の孤独」を選んだとゆうことにも現われている。この危機は、過去、従軍と非政治的ポーズの中を右往左往して保身の歴史を辿つて来た日本私小説の傳統の落ち行く先を示しているにしても、そのことを一面的に逆立ちさして、「広場の孤独」が芥川賞として現代日本文学の危機を救う代表選手にすることが出来るかとゆうことは全く疑問がある。いや、現代日本文学の血路は本質的には、あちら風なマネ事の危機意識を細工し、単に社会性えのまなざしを移らせることによつて、日本的私小説の運命を挽回させ、文壇の困惑を解消させると早合点することからは開けて来ないであろう。むしろ、一つの時代錯誤として文学に対する現実の要請をゆがめるそしりを受けるかも知れない。

このような所に居る現代日本文学にとつて、ある暗示的な試みが提出されて来た。綜合雑誌の沈滞は、最近になり「平和」「反ファシズム」の課題をとり上げるようになってから俄に生気を帯びつゝあるようだが、今まで中道的世界に遊んで魅力を失つていた「改造」「中央公論」等が「世界」を先頭に立て、再び、戦前日本インテリゲンチヤの良心と憂いを代弁しようと僅かに政治的感覚を鋭く（文壇より一先づさきに）表わして、努力の方向をさがしている試みが、地方に於ける諸問題に手をのばし出したことにも見られるとゆうわけである。

地方に於ける諸問題を取りあげるとゆうことは、唯目先きの変つた話題を拾いあげるとゆうことではない。太平洋戦争前、地方主義文学とゆう言葉が問題になつたことがあつたが、臨戦体制下に於ける政治的圧力の地方生活に及ぶ影響に無関心でいられなくなつた時、支配層は支配層で、知識層は知識層で、それぞれの侵入と防衛の立場から地方生活の問題が反省させられたのであつたが、今日の観点から見ても、世界的波紋の中にある日本の良心が、地方えの関心とゆう抵抗力をひそめての防衛的な探索を、「戦争と平和」の問題に対する一つの政治的対決の姿勢として押し出したと見てもよいのではないか。尤も、それが対決の姿勢から対決の行動に、はつきり移りうるか否かは、地方生活の諸問題を「平和と民族解放」の問題として、どのように地方人民の苦悩<sup>〔世〕</sup>を掘り下げてゆくかとゆう点にかゝつているのでその点を抜きにしては、早急な過大評価は出来ないが、一応の積極性と日本民族の当面する課題を内部から掘つてゆこうとする着実性が見られ、歴史的な契機として地方生活が人民の立場から見つめられるとゆうことを現在では特に大切にしなければならない。

現在に於ける日本文学の抵抗と血路も亦、同じようなことがいえると思う。即ちいま、日本文学の春を呼ぶ声は、地方生活に於ける人民の人間像にくいこむことによつて始めて、その季節を迎えるにふさわしい声となる事が出来るとゆうものである。

勿論、いま、日本の現実において地方生活の場所から出発している人間像のみが、人間の全部的問題を表現しているとは言えないし、描かれるべき現実が唯地方生活に偏在しているという極論は出来ない。しかし、現在或いは現在以後、わが国の地方生活は、いま全日本的に包囲されている「戦争と民族奴隷化の」最も犯され易い所として、それだけに最も深刻な被害個所として、そしてまた、最も肥えた土壌であり、深々と張りめぐらされる根であり、それを支えている小石である。この中に呼吸する国民の人間像は、全日本的な苦惱をより生々しく、より拡大された形で血と肉をもつて、それぞれの階級性を、それぞれの地方の條件に融合さしながら具現しているのである。この観点から進んでゆかなければ、最早、具体的人間像は現実把握出来ない所まで至っている。

このような地方生活の中の人間性の重圧感（それだけに抵抗の開眼もまた底深いものであろうから）——それは全日本的な暗さの最も鋭い、根元的な本質をたゞえている——に文学の眼が注がれることなしに、現代日本文学の課題の人間像を描き切ることが出来ないと言うのは言い過ぎであらうか。

方言や風俗を地方色にすることだけで、地方的性格を色づけようとする創作態度から一步で、全民族的な苦惱の底を支えている地方生活に息づく人間性を、それぞれの地方の生活の具体的危機現象の中で剔出する努力こそいま地方文学をとりあげるすべての文学者、特に地方文学雑誌に集る人々の関心事とならなければ、日本文学の前進を約束する地味な必要基礎はくずれてゆくのではあるまいか。

中央文壇の作家が、現地ルポルタージュと題して、原爆の広島に、横須賀、佐世保、立川に、農村に、工場に筆をとり始めたことは、それが、前に述べたような方向でなされているからには大いに意義があることだけれど、それが、さしみのつま程度に扱われている限り、地方に於ける文学的姿勢を前むきにすることは出来ない。

実際おびたしい地方在住の作家たちが、唯中央文壇に登龍することを目標に、文壇的な課題をそのまま、文学の今日の課題であるかの如く、營々として年期を入れている光景は、相も変わらず、日本文学の傳統的封建性をそのまま固定化している図であらう。やつと宗匠の眼鏡にかなつて隅の方に登録された時には、文学は彼を置き去りにし、現実を文学を置き去りにして、日本文学は永遠に小兒痲痺から脱却できない。

文学が地方えとゆうことは、文壇が地方雑誌え出張することではあるまい。広島から出ている「エスポール」誌が折角眞面目な意図で発刊されながら、文学活動に於ける中央と地方の関係を前時代的にとりあげ、行きづまつた文壇の地方雑誌進出とゆう、文壇保守主義の一環を担いだかの疑いを持たせる方針をとつたことは、地方文学の発展、日本文学の成長のために、ブレーキの役目をなすものではないだろうか。

現在の地方文学活動に於いて、中央と地方の眞の結合は、中央作家の原稿が地方雑誌にのり、地方作家の作品をどしどしとりあげるとゆう單に表面上のことではなく、地方の作家（勿論小学生をも含めて）が地方生活の現実を、その皮膚と骨肉にぢかに感じているまゝに、生々しく、具体的に、文学的にえぐつて提供し、中央は中央なりに（強いて中央作家とゆうものがあり、その役割があるとすれば）地方に現われた日本の典型的諸現実の文学的把握を整理統一し、之を全日本的諸問題のルールにのせるとともに、地方作家の現実分析——把握に隊伍と方向を与えて整理させ、協力して日本文学の前進的歩調を統一してゆく所にあるのでなければならない。

このことは日本に於ける文学統一戦線が、具体的には、その基礎的課題の一つとして地方文学の確立とゆう地方生活に対する作家的実践にあづかることが如何に大きいかを示すものでもある。

とまれ、地方生活における非人間的性格の益量、半封建的な桎梏、浮草のような植民地性と頑迷な奴隷性の同居、そして抜きがたく蔽う非文化性、地方政治の貧困に拍車をかけられている二重三重の経済的困窮、全日本的苦惱の原型とそれを耐えている力をふとこころに入れて、地方の人民は、明らかな文学の眼を待っているのである。

## 瀬戸内海沿岸地帯

いへ・しげお

狂う奏楽とテープのきづな  
甘い風一杯  
魔天楼のアメリカへの航跡は  
岸壁を離れると もう  
荒々しくしぶく民族の波打際をもつ  
こゝは、あの太平洋岸ではなく

こうびようと盡きぬ波頭  
凍りついた暗黒の扉  
シベリヤ・東北へ閉された平和の港が  
やがて解氷期をむかえる用意に余念のない  
こゝは、あの日本海岸でもなく

亜熱帯の情熱に遠く  
きびしい寒冷地帯の現実にとどかず  
さよなみがさよなみをなだめ  
はりめぐる防波堤の奥  
暖流のたゆたう  
こゝ、瀬戸内海沿岸地帯

風光明媚、観光国立公園、天然の箱庭、  
はやされ、ほめられ  
信仰心が篤い住民だとか  
海外雄飛の移民地だとか  
ここの兵隊はつよいとか

黒く肥えた赤土の岬々に  
松の多い丘すそ  
ベンガラの家をたて  
果物と魚が安いからよいと言われ  
こんな所に住みたいと言われる  
無風地帯!

副業を競う農民よ、一本釣りの漁夫たちよ  
それから出て来た紡績労働者よ  
子飼いの自動車通勤サラリーマンよ  
塩田の浜子よ、酒のうまさを誇る杜氏よ  
父祖の家を改造した小賣商人よ  
はだして歩く子供達よ

君たちの育つたふるさと瀬戸内海沿岸地帯は  
そのような姿で君たちを抱いているか

堤防工事は汚職の役人に食いちらされ  
軍用道路にせばめられた傳來の美田に  
暗灰色の濁流は流れ込み  
外国人と外国の武器をつくる工場のため  
毒液は魚類を遠く沖え追いやつて  
糸はくされ 船は朽ち  
糸くずを拂ひながら病身の姉は  
妹が売られたとゆう家の便りを読む

日傭人夫は安定所にひしめき  
京阪神にでていつた仲間がまた  
もどつて来た話  
街のバラックはまだ灯のないまゝ  
夜あけに あざりとる子供達に  
何とゆう海の冷さ

あゝ それでも瀬戸内海はもてはやされる  
ふるさとは自慢される  
山頂まで耕す勤勉さと  
領主にしたつて一揆を起した素直さと  
郷土から出た大臣の話が  
子供達に注ぎこまれる

静まりかえる ふるさと  
そのひっそりした駅に貼られた  
観光ポスターのように  
おさまっている  
水族館の神話  
ふるさとの眞空季節

君たちは人前で語られないか  
ふるさとの土は <sup>【う風】</sup>このように暖く  
ふるさとの空は このように静か  
眞実に愛するふるさどがここにあると

全身を貫ぬく大山陽本線の苦惱  
この血管に流れる異質の血液瘤  
西に弾丸をおくり  
白衣をのせて逆流する死の循環系統  
ここはあのふるさとでないと言い切れないか

祖国の波打際を見下して

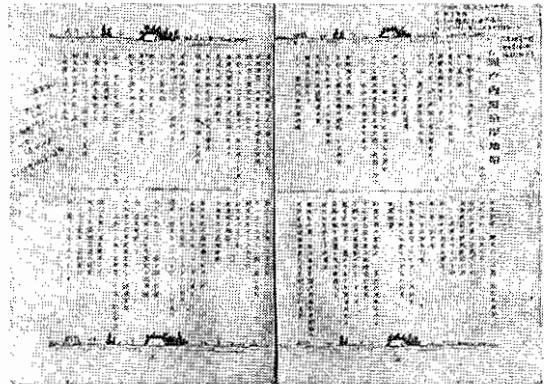
疾走する軍用道路の貨車  
三万台の番号の高級車は  
肩に重いと言いつ切れぬか

遠くインドビルマベトナム  
インドネシアフィリッピン  
の岸辺に  
熱く逆まいて流れ出る  
あの南からの抵抗の潮が入りかねている  
関門海峡のせまさを感ぜぬか

豊かに語り合うふるさとを聞いとつた  
中国の勤勉な人民にも  
ふるさとを荒されて激しい憤りにたぎる  
あの半島の姿にも  
白い手をあげ挨拶した波頭達  
もうここでは扱ぬいて知らぬ顔するのを  
君達は悲しいと言われぬか

君たちは海を抱いている  
太平洋にも 日本海にも 東支那海にも

そして熱帯を洗うあの海にもつながる  
ふるさとの海は絶えず流れている  
瀬戸内海沿岸地帯は  
流れる潮をもつている  
ふるさとは、□一九五二□  
絶えず渦となる君等の中にある



いへ・しげお(重家豊)の詩「瀬戸内海沿岸地帯」、『沿岸地帯』創刊号に掲載

もっと啄木を!! 啄木四十年祭を迎えて

Y. O.

啄木は常に古くて新しい。どんな時代でも、啄木は古いように利用されもしたし、新しい時代の要求をみたすために発掘が続けられもした。今からもそうだろう。啄木程親しまれ愛された詩人も少ないと同時に、啄木程、みんなから、まだ未発見の業績、未研究の余地を残している作家も少ないとゆわれる程、啄木は複雑で豊かだ。それは啄木が「生活」に直視を集め、「生活的現実」の中から溢れる感情を、具体的に、日常的に、表現したからに他ならない。

啄木がどんな文章の技巧に秀れていたとしても、啄木が田山花袋について「文学者とゆう職業を離れたる赤裸々な田山氏自身と人生の関係を不問に付して置くような傾きがないかと思う」と書いた、あの文学者と人生の生活態度についての確とした立場が啄木に欠けていたならば、啄木は今日の時代からとつとに葬り去られていたであろう。詩人の豊かさ、新鮮さは、現実社会の豊かさ、新鮮さを自分の中に濃い影を落しているから以外ではないのである。かくして啄木は今日尚生々と現実日本の新しさに呼応して止まないのである。

啄木が死んで今年でちょうど四十年になる。啄木を誦み、彼を愛する人は決して減ってはゆかなかつた。啄木は、パチンコとピストル騒ぎの現代青年男女の中でも、やはり、しつかりした地位を占めている。しかし、啄木を眞に愛する人々は、その愛すべき作品が、啄木が生き呼吸し、皮膚にふれ直面して苦しみ歌わずに居られなかつた明治末期の日本の現実と離れ難く結びついていること、そのことから四十年後の今日の日本の現実に照し合せてみて、どのような作品が啄木の眼であるかまでゆきその上で再び啄木を愛するのでなければ、愛のあかしとはならないであろう。

少年時代啄木が一部もつセンメンタルに陶酔した人は、啄木を愛すると大声で言うことにはづかしいがっている。しかし啄木を愛することは誇りである。啄木は絶えず前進した。成長すればする程、啄木は繰返して愛されるべき豊さと高さを持つているのである。

賃金労働者で詩をつくる人が大分増えて来た。それだけ労働者の闘争が精神的な舞台へ浸透しつつあることを思わせる。ぐつと黙つて居れない労働者の気持、言わねばならぬとゆう強い張りは、そのまま詩の精神につながつて来るものだ。戦時中その所を得ず片隅で腐つていた日本の詩人たちも戦後労働者と結びつくことで俄にその舞台と役柄をとりもどし詩を、今まで詩に親しむことのなかつた階級の中えどしどし持ち込むことにある程度成功した。労働者は今、自らの詩を育てるにやうやく眼を開いて来たようである。もはや詩は大学の教室や酒場や雑誌の月評で息をしていることから、日々汗にまみれてその日暮しの大衆に抱かれる場所を選んで来た様である。こうして労働者が詩を作るとゆうことはもう普通のこととなり、詩はハツラツたる精神を持つ者には、誰でも味いつくることが出来る、いやむしろ誰でもが身の周りの手を差し伸べて觸れられる所に類いてあることこそ詩の本領であることを証明しているのである。詩に対して所謂食わず嫌いで敬遠していた労働者階級の中から、勇敢で何もかも恐れず、すべてをいまから獲得してゆく労働者の精神がやはり、詩を掴え始めたことは、詩の歴史にとつて本筋であろうし、詩の成長はかくして約束づけられる。

この度、東洋繊維三原工場の一青年労働者である高畑宏とゆう人が一冊の詩集を自費で出版したとゆうことは詩と労働者とにとつて共に意義ある仕事だとゆうわねばならない。労働者の意欲にてらして、一人の文学青年が詩集を出したとゆう単純な軽い取扱いが出来ない程、労働者一万数千をかかえる三原市の詩活動は貧困だつたとでも言いたい。

詩を愛する労働者も二つのタイプを持つている。一つは、労働者の生活、考え方、生活感情、精神的表現を自嘲し従来詩壇的詩の一見華麗さに幻感され一種の生活的逃避感と優越感を満足させるため高踏的な夢や観念の世界に耽溺しようとするもの、一つは生活の現実から喚び覚されて、具体的な自分の周りに歌声を見出そうとするが、その深い底を探る労をはぶいて流動する感激抜きの單に表面上の叫び声に終つてしまう標語的な平凡性に墮しているものこれは、現在の労働者階級がその生活感情、精神生活の中に持つている非近代性、封建性、等の残滓の反映と見られ、多くの労働者、職場の詩人達がこゝに止まつていてどちらかの傾向に偏る詩をつくり易い。この詩集にもこの二つの傾向が明らかに雑居している。例えば

## 拳

それは虚しい街角に／自律し 空転する車輪  
己の卑小に腹をたて／鬱積の振る拳は宙を流れ／自虐の火花を散らします  
それは虚しい街角に／自律し 空転する車輪

等は前者の傾向を代表し

## 季節

赤旗／颯り／風埒る／節走

とか

## 一本道

約束された／一本の道／その道は／荊棘の道  
荊棘は踏躓られ／開かれる道

等は後者の傾向を語る一例である。

この詩集の殆んど詩が、まだ生の材料のままで或いは気まぐれに、思いつきに流れ、或いは無感動に書き並べられた跡があり、文字、ことばが一風変つていくとゆうことに遊んでいて、その素材に取込んで深く沈み切つた底から再び湧き上つて来る表現を見出し選択する努力を省いたかのように見える。作者と同じ様な生活をもつもの、同じような感情年令にある者に、ぢかに手で觸るような温かな働きかけが作品から流れて来ないとゆうのは、作者自身の、作者をとりまいてる周囲の生活の現実を具体的な姿でとりあげていないためではなからうか。

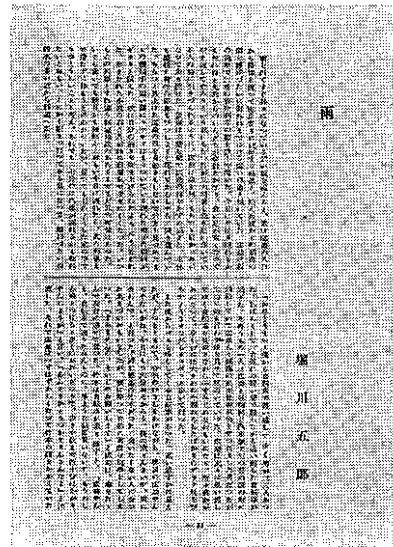


作者個人について私は知らない。しかし、この青年労働者は浮ついた詩人かぶれでなくて、素直な、病んでいない明るい心もち、常に考える真面目さを持つている人のようだ。このような心をもつ労働者が、自分の生活を眞すぐに見つめる努力を続ける限り、この詩集にも二三表はれているように、いい詩をどんどんつくりだすだろう。

## 6 『沿岸地帯』から『地方の会』へ

私は『沿岸地帯』の創刊号から、「トイ物語」と言うお伽話風の創作を載せた。それは自分の故里、栗柄村トロモ谷と言う共同体の歴史と、歴史が育てた個性を掘り下げる生涯の仕事の発端であった。城間功順は創刊号には創作「埋立地の朝」、2号には「二階の人たち」を乗せたが、城間功順はここから、彼が死ぬる直前まで続けた創作活動に入ったのである。

2号の巻頭言は重家豊の「石のつぶてをもちと——ルポルターージュについて——」である。そして坪田正夫の「手術室よりの報告——峠三吉の手術に立会して——」の記念すべきルポが載り、創作は城間功順と私のほかに、小川明人の「まき米」。堀川五郎の名による重家豊の「雨」が載っている。「まき米」は瀬戸内の島の暮しと取り組む小川明人の創作のスタートだった。「雨」は沿岸地帯の農家の二男坊、三男坊の運命。妻にはわずかの農業をやらせ、自分は40分も歩いて小駅に着き、汽車で車輛工場へ通勤する一機械工の内面をえぐる、60枚の小品だが、主人公の心の中にはレッドパーージ以後の職場の面白くないことがつまっている。しかし闘う意慾を失っている。農民側からは勤めがあつていいと羨望され、工場ではこのインフレに野菜だけでも買わずにすむ暮し方を羨ましがられる存在の、煮え切らない心や、かつては組合の活動家だった者が、パーージ以後の職場の闘いようのない壁にもだえる心などを掘り下げている。これは重家豊自身が、車輛工場の労働者となった体験をもとにした、現代の転向を描こうとする大作の発端でもあるのだ。



『沿岸地帯』創刊号掲載の「雨」、堀川五郎は重家豊のペンネーム

今読んでみても『沿岸地帯』の創刊号も2号も、意慾に満ちている。それが短命に終って、昭和31年5月1日の『地方』発行までしばらく雑誌発行を中止する。その最大の原因はレッドパーージのひろがり、共産党の分裂の深まりにある。広島市では「われらの詩の会」の有力な活動家且原純夫はパーージで広島での職場を奪われて、故郷の山口県へ帰っていた。広島在住の深川宗俊は『人民文学』（共産党の主流派）の活動家になっていた。増岡敏和も『人民文学』に移っていた。病弱な峠三吉は手足のない達磨のようだと自分を批評して助けを『沿

岸地帯』へ求めた。

26年の10月9日アメリカ統合参謀本部長は、トルーマン大統領に朝鮮での原爆使用許可を勧告。原爆投下の危機は迫っていて、被爆広島の声は日本全土はもちろん、世界にひろげなければならない時なのだ。その声は『原爆の子』や『原爆詩集』では足りない。もっと一般の生活者の声盛り上がらなくてはならない。その一般の声も、自主自発の自らの組織を持って、原爆禁止を訴えるものにならなくてはならない。それらが新日本文学会広島支部の緊急の最大の任務なのだ。そこから『沿岸地帯』の同人の間では、誰か一人広島に行き、そこにしばらく定住して、一般被爆者を訪問して、被爆者の手記集を作るとか、被爆者自らの組織を作るような仕事をしなくてはならないことが、論議された。

しかし実際問題になると、重家豊は三陽社と言う看板屋を開いて間がないのだから、店をほうり出すわけにいかない。城間功順は天鉄羅屋を開いて間がない。重家は2児の父であり、城間は1児の父である。彼らのそうした事情から、白羽の矢は私に立てられた。私としてもようやく母と2人の農業で生活できる見通しを立てたばかりである。ここまでの労苦を思うと農業は捨てがたい。広島へ出てからの生活の見通しもない。手許にあるのはその年の雑誌『世界』の12月号に載せた「或るとむらい」の原稿科だけ。見通しとしては『世界』へ創作を送れば使ってくれるかも知れない、使ってくれば少しは金が入り、細々は食えるであろうと言うもので、これは捕らぬ狸の皮算用だったのだ。それでも『沿岸地帯』同人の中では最も動きいい状態だったのだ。

昭和27年1月、峠三吉は国鉄全国大会で原爆展準備中咯血。私が広島に下宿を見つけに出た2月はまだ病床にいたが、彼の文学活動への使命感は燃えていて、3月中旬の新日本文学会第6回全国大会に出席をきめ、広島を発ったが、その上京の汽車の中で咯血。静岡の日赤病院に入院した。しかし広島は大学の所在地、ここには文学勉強の学生も沢山おり、学生の中には川手健や松野修輔のような新日本文学会を支持し、新日本文学会広島支部の当面の緊急課題を理解する者もいて、彼らは「峠三吉が静岡の日赤病院に入院」と知るや、学内でカンパを集めて送るとか、青木書店から峠のもとへ「子どもの詩集」を編纂するようにと、依頼して来ているのを知ると、その仕事に取り組んだ。広島大学内の「われらの詩の会」の活動家だった佐々木健郎たちのグループは、アルバイトにチンドン屋をやって、その金を活動費にして、市内の小学校めぐりをやり、教師の協力を得て児童に原爆の詩を綴らせるようにもした。それらがあったから、峠三吉は5月に退院して帰広するや直ちに原爆の詩編纂委員会を結成、8月には青木書店からの『原子雲の下より』の編纂を終ることが出来たのである。

当時は未知の被爆者の家へ、被爆の体験を書くようにとすすめるに行くことはやさしいことではなかった。私はあるときは城間功順が用意してくれた尾道の海産物を売る行商人として、あるときは市の失業対策の朝の仕事の振当を待つ行列の中に入るなどして、未知の被爆者に近づき、そこからのまた聞きで、また未知の被爆者を知り、聞き書きをし、かなり親しくなってから、原爆被爆者の組織化に情熱を燃やしている川手健を紹介すると言うような役割り

を担った。川手健は、当時すでに「原爆一号」と言われ、被爆者の自主自発の組織を作ろうとしていた吉川清や、後に「折鶴の会」を組織する上松時恵らを助けて、組織化をすすめ、その年の8月10日には「原爆被爆者の会」を発足させることが出来た。

この会は発足にいたるまでにも、被爆の実態を広い世間に知らせ、原爆禁止を訴えようとしていたから、被爆者の会が出来るとすぐに、その会の仕事として「原爆被爆者の手記編集委員会」を作り、会員に手記を書くことを奨励して、書けない人は私が協力することになった。多くの被爆者はかつて書くと言うこととは無縁に暮っていたから、先ずは話したいこと訴えたいことを、こちらが代筆して、それを本人が点検して足りないところは加え、発表したくないことは削り、本人の責任で発表すると言うやり方にしたが、28年3月までに27人の手記を編集して、その6月、三一書房から『原爆に生きて——原爆被害者の手記』として発刊することは難事業だった。こうして新日本文学会の文学的作業は、多様な思想をバックとする、ごく一般の生活者の、被爆による平和への目ざめと原爆禁止の訴えを記録することの道を開いた。

しかしこの突りのまだ見えない27年11月、峠三吉は又も咯血。「われらの詩の会」の再建会議を開き、『われらの詩』17号の編集にかかるが、病状は悪化。今日の広島の国民的課題に応えるための健康を求めて、28年2月西条療養所入院。3月10日肺葉摘出手術の途中で永眠した。これは新日本文学会広島支部の大打撃だった。つまり心棒を失ったのである。これは『沿岸地帯』がやがて「ひろしま・地方の会」に変容する一つの要因であった。「沿岸地帯」のもう一つの変容の理由は、この季節、広島県下全域の新日本文学会員の周辺には、創作、評論ともに、手頃な発表の場がなければ、その成長が止まってしまうような人々が育っていたことである。それが「ひろしま・地方の会」発足への胎動となっていたが、私はそれに協力できなかった。それは「被爆者の会」の発足に協力し、被爆者の手記編集にたづさわってみると、被爆者は広島に居住するだけではなく、県下全域の到るところに呻吟していることがわかったことと、救援のあり方に問題を感じたことにある。

被爆者の会が発足して、マスコミを通してそれが宣伝されると、山岳地帯の婦人会からも、正月ともなれば恒例のボランティア活動の一つとして、団体を作り餅を負うて、被爆者の慰問に来るようになったが、その場合、「もっとひどい所へ」「もっとひどい所へ」と、この世の地獄への案内を願うのがおきまりだった。被爆によって瞳には星が出来、乳は飛び、ケロイドはひどく、被爆後に生まれた幼な児を抱えて夫には家出され、失業対策事業の土方人夫となって幼な児三人を育てる人の、暮しの地獄を目撃すると、「やれやれ、わしも苦勞しとるが、あれよりはました。不足は言えん。来てよかった」と、人の悲惨によって自らの不幸を慰めるのが普通のことだった。これは見に来られる被爆者から「私は慰みものではない。人の不幸を見て慰めにするような救援はいらぬ」と言う反発を招くのは当然のことだった。これは「原爆被爆者の会」の産婆役を勤めた者の放任できないことだった。被爆の実態と、生きようとする被爆者の心とその歩み、原爆禁止の平和を求める心や訴えを、山村の奥深く

までの地域婦人会の大衆に知らせ、みんなで被爆者の救援とはどういうことかを考える行動、これが緊急な課題だと考えた私は、被爆者の手記集『原爆に生きて』の編纂を終えると、その方向に動き出した。

共産党は分裂抗争を続けており、平和運動にも文学運動にもその影を落としていて、私が「原爆被爆者の会」の結成や、手記編纂の仕事を通してぶつかった、被爆者救援はいかにあるべきかの問いに答えてくれるところはなかった。結局私は自分達が編纂した被爆者の手記集『原爆に生きて』や、『落のとう』にはじまる自分の作品を武器として、未知の婦人会やPTAの集りへ出かけた。そこでは常に、新憲法が精神が岩の上に落ちた松の実にひとしいのと同様、原爆禁止の平和の心も、岩の上に落ちる松の実だと思わせた。それは解放区の感を呈している重家豊の身辺から見ると、孤軍奮闘の遠征の地であった。

マーシャル群島のビキニ環礁でアメリカが水爆実験をはじめ、第五福竜丸が放射能の灰をかぶったと言うニュースを聞いたのは比婆郡高茂（現在は庄原市）であった。死の灰の恐怖も手伝い、加えて翌年8月の被爆10年を期して、原水爆禁止の世界平和大会を広島で開催させたいという気運が盛り上がり、広島県地域婦人会連合会の本部は、これを可能にするために、婦人会の手で100万の平和署名を集めて、国連のウタント事務総長に送ろうという方針を立てた。それは私に中国山地の村も町も虱つぶしに歩ける条件を作った。今日まで私の代表作のように言われている『荷車の歌』は、この行脚のうちに創られた。この作品は女たちが本音で語る場を持つために、本音を誘い出す呼び水として、この中国山地に生きた一人の女性の本音の世界を吐き出そうとする目的を持つもので、語るためのものであった。しかしそれは『平和婦人新聞』と言う全国的な配布網を持つ週刊紙に、昭和30年の1月から12月末まで連載されたため、全国に散らばる読者の声から、やがて全国農協婦人部の手により、一人10円のカンパによって映画化されることになったが、私にとっても、私に協力して自分の本音の世界を私に話した日野イシ（作中のセキ）にとっても、それは予期しないことであった。

三原に根拠地を持つ「地方の会」が「創作と評論研究のために」のサブタイトルを付けて『地方』創刊号を出したのは、31年5月1日。ここに集る有志たちにとって、当時の私は、何時、どこに居るのかも定かでない、作家活動をやっているのかいないのかも判らない、当てにならない存在だったのだ。

## 7 「地方の会」の成長と挫折

「創作と評論」のサブタイトル付の『地方』は、発行人は中野光也。31年5月から33年4月までに5号を出して休刊するが発行人となった中野光也はこの間に、「乾いた眠」「偽手練者」「雑木林」などのスケッチ風な小品から、農地改革に取材する600枚に及ぶ長篇の始まりを載せる。重家豊は東重の変名で「帰郷列車」、秋津進の変名で「金網の外から」を載せている。評論では、北見遼の「中野重治ノート」や中野光也の「地方文学の諸問題」「今日の風俗小説の問題点」などと肩を並べて重家豊が変名を用いながら「地方作家の出发点」

「戦争責任の根堀り」ほか3篇の裏のある評論を乗せている。彼らのほかに20人以上が創作・評論・随想・生活記録・ルポを載せている。これは『沿岸地帯』から見れば、質・量ともに格段の成長である。

この中の「帰郷列車」は、敗戦により武装解除されたかつての兵隊を乗せた東海道線下り列車の中を描く60枚ばかりの作品だ。主人公の大森は大学を出るとすぐ軍隊へ引っぱられた陸軍見習士官として、武装解除までをS市の工場へ配備されていたのだが、彼の心に浮かびでる軍隊生活の思い出には、重家豊の体験が重なっている。未完で終るこの作品は彼の戦争反省を描こうとする試みの始まりでもあった。

「金網の外から」は、沿岸地帯のある造船所の塗装工を主人公とする80枚ばかりの作品だ。前に『沿岸地帯』に載せた「雨」は広助という主人公を、主人公自身の内面から描いているが、「金網の外から」の主人公松さんは、松さんを第三者の目から描こうとしている。扱い方も違い舞台も違うが、共にレッドページまでは組合意識の濃厚だった労働者のページ以後の無気力を扱っている。どちらも重家豊が生涯のテーマとした転向にいとむ作品の糸口だったと言える。

評論の「地方作家の出発点」は、私の農村婦人の中での生活記録運動を認めるものでもあったし、後に「地方の会」が、『記録——地方』を発行する準備でもあった。

いずれにしても「地方の会」の発足と、創作と評論のための雑誌の刊行と、その内容の充実、東北の孤独の位置の私には、彗星のように見えた。それがどうして5号で中断するに至ったのか、近くにいなかった私にはくわしいことはわからないが、「地方の会」に集まる人はみんな若かったから、生活の変化が解散状態をもたらしたのではないかと思う。ちなみに、かつて尾道の萬亀ビルの新日本文学会に集っていた、梁山泊じみた仲間の巢は、この頃は跡形もなくなっていたことを思えば、三原の三陽社(重家の店)も似たような姿になったのではないかと思う。尾道の場合、坪田正夫は職を求めて大阪へ、鶴野博吉、山岡精一らは東京へ仕事場を求めて出て行き、城間功順は私を頼って三次へ来て、三次の日通の労働者となっていたのだから。

しかし「地方の会」に残った人々の活動は終わったのではなかった。備後一円の読書サークル協議会が、35年から刊行する年1回の機関誌『みちづれ』と『みちづれニュース』は、生活記録誌でもあるが、この力は、「地方の会」が評論と創作の『地方』を出せなくなった頃から、この地方に育って来た新しい力であるとも言える。これがあるため地方の会は、37年



重家豊が彼の軍隊生活の体験をもとに書いた「帰郷列車」、『地方』No. 3に掲載

10月から『記録——地方』を出すことになり、発行所は重家豊の看板の店三陽社を借り、私が編集人代表に担がれることになるが、実際の編集や発行は重家豊や中野光也が負っていた。この同じ時期に重家豊や金田正己（『地方』発行人中野光也）は、ラジオとテレビドラマのための『劇』の同人や『安芸文学』の同人らと、「雁木の会」を作り創作誌『雁木』を出すに至る。『雁木』は多才で、しかも一応はものの書ける地方作家の集まりである。その他に重家豊と金田正己が主軸となる『沿岸詩人』も発行した。

『雁木』へ重家豊は、秋津進の名で「R市誕生」を連載した。ここには池田勇人とおぼしき、この地が生んだ中央政界の人と地元ボスのつながり。そのボスにつながる戦後成り金も書かれている。名物の老舗の新旧交代の姿も出て来る。これがどうして中断したか、それは『雁木』が3号で中断するに至った為もあるが、ここでも重家豊の内省は、自分達と同世代の人間の戦争責任、自分の学生時代のマルクス主義への傾倒、反戦平和への行動が、大政翼賛会のもとになぎたおされて行き、軍隊へ投入されることによって、マッスとしての軍国主義に呑みこまれて行った転向をも、戦争責任として掘り下げねばならないことに突き当たった。これがこの作品を未完に終らせる最大の原因だったように私は思う。

『沿岸詩人』での重家豊は「いえ・しげお」の名で、4号にわたって長詩「わが愛する町にて」を載せている。そこには三原の住人の誰もが知っている、三原城跡が、帝人通りが、三原駅が、三原堀川が、旭町が、三原港が、風俗的にはなく、社会的な構造の見える深く鋭い視線で捉えられ、働く者の立場からのもたえる心で歌われている。彼はまたこの詩誌に「道具について」を載せている。ここでは身辺にある爪剪りに、歯ぶらしに、箸に、肩叩きに、目が向けられ、一人の平凡な人間の恥らいや悲しみで歌っている。

私をもっと早く、彼のこの平凡さに気づいていたら、「地方の会」は挫折することはなかったろうと、今にして思う。

私は重家豊の平凡な詩情に長い間気付かずだった。それは敗戦すぐ後に、三菱三原車輛工場の労働組合結成に乗り出し、共産党員として活動した、その論理性や組織力が、あまりにも強く印象づけられていた為もある。彼が地方文学のチャンピオンであることを知ったのは『働く人』創刊のころからであるが、創作に評論に、詩に短歌に、組織力に、彼は万能選手で、しかも会議での彼は群を抜いて頭の回転が早く、政治的センスが高かったから、岩の上に落ちた松の種のような伸び方をする私との歩幅は合わなかった。その合わなさば彼の政治性にリードされる形になって『沿岸地帯』の発行になって行った。ところが被爆者の手記集を出し、被爆者の会を組織する過程を通して、彼の政治性は一層強まり、行動の歩幅はひろくテンポは早まった。それに引きかえ私の方は、ここから県北の山岳地へ足を入れることで、前よりも一層、岩の上に落ちた松の種子に似て、目に見えない歩幅で、テンポは蝸牛のように遅々と動かねばならなかった。この歩幅のひらきはお互に疎縁にもさせた。

この時期、私は地域婦人会の中での原水爆禁止の100万署名を集める過程で、はからずも『荷車の歌』を生み出すが、重家豊たちの当時の政治性や行動の歩幅から見れば『荷車の歌』

は鬼子だったと言える。あれは書くこと以前の、語り部的な行為の中で生まれている子守歌である。

その鬼子の故に私は、『荷車の歌』が映画化されて一般化する時期には、前より一層固い岩に突き当たっていた。31年から33年にかけて私は100万署名に参加した地域婦人会を、出来るだけ広く歩こうとした。そして歩けば歩くほど、この平和行動が、砂に打たれた釘のようであることに気付いた。ここからの一步のために『民話を生む人々』(岩波新書)を書き、その印税を持って、甲奴郡上下町に、平和を目ざす自主自立のグループを育てる研究所のような家を持ち、地域婦人会だけでは伸びられないと感じている数人を誘って、自分たちが質問を出し、質問を掘り下げる勉強会を持った。時は34年1月、翌年は日米安全保障条約改訂の年を迎えようとしていたから、勉強は次第に安保条約に向って歩んだ。しかしその歩幅はせまく、テンポはのろく、思想的には成長しているのか、成長していないのかわからないほどのものだった。

35年6月、安保阻止の実力行使で、国会議事堂を取り巻くデモに加わり、デモ隊と警官隊との衝突を見て帰った私には、上下の町の閑かさ、国会周辺の興奮などには無縁な対話にぶつかると、絶望さえ感じた。やってもやらなくてもどれだけの開きがあるか。そう思いながらも、上下の家での地域婦人会育ちの女性たちの勉強会は、その8月広島大学の手島正毅教授の安全保障条約と日本の独占資本、独占資本と日本の農業のかかわりを聞くことになり、1泊2日の合宿の勉強会を持った。ちょうどその合宿の場へ、安保阻止のデモに参加した学生数人が、「我々は帰郷隊として、山村工作をやっているのだ」と言って、国会通用門前でデモ隊と警官隊の激突、激突の中で東大生の樺美智子が殺されたことなどの報告に来たが、彼らは警官隊への怒りに興奮しているが、我々農家の主婦はこれからどうしたらよいのかと言う質問には、全く答えられなかった。安保改訂が日本の零細農業を死滅に追いこむことについても、彼らはほとんど何も知らなかった。これは驚きであった。反体制の運動のこの体質は放っては置けないと私は思った。それは重家豊の中にもあった。そこから、「私と私のまわり」のサブタイトル付の『記録——地方』を発刊することになり、私が編集人となり、発行所を三原市東町、三陽社(重家豊の看板店)の「地方の会」に置いてスタートした。原爆被爆者の手集集編纂から、原水爆禁止の100万人署名。その後のグループ活動などで知り合った、少しでも自分と自分の身のまわりに書くことを持つと思える広い人々に呼びかけた。そこから37年12月の『記録——地方』の創刊号には被爆17年を生きる被爆者の生活記録、共同耕作や鶏飼いの記



「私と私のまわり」のサブタイトル付の『記録——地方』

録、婦人会の営む敬老会のこと、母の生活記録、女教師の職場の記録、等々、今まで「地方の会」とは縁のなかった多様な生活者からの投稿が集まった。2号は1号よりもっと幅の広いものになった、特に農村婦人の投稿が多かった。その中に「ある会議室」と題する、町役場での農民の集りの記録があった。これはプライベートにかかわることをも克明に書いたため、筆名を「堀川ナイロン子」として、全くどこの誰が書いたかわからないようにしていた。だが差出しの封筒へは、住所氏名を明らかに書いていたはずである。ところがそれは、編集人の私が見ないうちになくなった。誰がその責任を取るべきか。その責任の取り方についての論争の中で、私はとてもこの発行の編集の代表にはなれないことを感じて、雑誌の方は3号で、月報は6号で、編集人であることをことわった。

ちょうどその時期は、重家豊も私も、互の創作活動の上でかつてない試練に立たされていた。加えてお互が寄って立つ思想の場も、中ソの論争の深まり、新日本文学会の分裂、中国の文化大革命、日本共産党と中国共産党の決裂、等々、お互の思想がかつてない試練を受けることになり、お互の「地方の会」とのかかわりも息をひそめた。

## 8 蘇生への歩み

『記録——地方』を発行するころまでに、私の文学活動は、『落のとう』に始まる、戦前戦中の私自身の抵抗を主題とする流れと、私の生まれた村落共同体での、治安維持法に対決させられる私の家族の抵抗を主題とする流れと、戦後の「岩で出来た列島」以後の農村での活動を主題とする流れとの3つに大別することが出来る。

重家豊の場合は「帰郷列車」に始まる戦中の彼自身の抵抗を主題とする流れと、「雨」「金網の外から」等の職場の労働者を主題とする流れと、「R市誕生」に始まる町と言う共同体の運命を扱う流れと、雑誌『働く人』『沿岸地帯』『地方』に於ける評論と雑誌の運営、『沿岸詩人』に見るような作詩の領域など多岐にわたっていた。しかしその多岐なるものの根は、「帰郷列車」に始まる戦中の転向にかかわっていた。例えば「雨」の主人公も、「金網の外から」の主人公も、レッドページ前は組合の活動家であったが、レッドページ後は、氣力を失い、時の流れと集団の雰囲気<sup>じゆうき</sup>に呑みこまれると言う形の転向に流れて行く人々である。彼は戦中の自らの転向と、戦後の彼の体験した労働組合への弾圧と、そこから生まれる組合の体質変化、ひいては労働者一人一人の日々の志向の変化と言う転向の問題を重ねて、「転向」をテーマとする創作を試みようとしていた。一時期彼は、この作品を完成させることが第一で、これが出来なければ「地方の会」もそこでの評論活動も前進できないと、私にもらしていた。

私の『落のとう』は、最初の50枚を雑誌『大衆クラブ』に載せたあと、24年7月黎明社から150ページの本にして発行したが、私には不満で、これを改作することがその後の課題になった。上下<sup>じょうご</sup>にいるころ、自分の戦前・戦中を4部作にする計画で改作に取り組んだ。38年の9月1日から、39年の12月末まで共産党の機関新聞『アカハタ』に連載した「道くらけれ



ど」は、改作『落のとう』の第1部に相当する。第2部の「濁流を越えて」は第1部と同様『アカハタ』に、40年7月1日から42年3月21日まで連載した。この3年半の間に、中ソの論争は深まり、新日本文学会は分裂した。続いて中国に文化大革命が起り、日本共産党と中国共産党とが決裂する時代が来た。これは重家豊にとっても私にとっても思想の大試練の時となった。

「道くらけれど」「濁流を越えて」に続く第3部は、戦前の共産党が組織を失った昭和10年春から、私が検挙される15年5月までを扱おうとするものであった。私はこの作品のためと、もう一つは戦後の活動で始まった生活記録グループの壁を破るために、敗戦までの間に治安維持法によって体刑を受けた丹野セツ・田中ウタと、東京での生活記録運動の壁にぶつかっている牧瀬菊枝を誘って、戦前の党活動の研究会を持っていた。この中の田中ウタは、私の昭和13年から15年までを書く為には欠かせない重要な登場人物だった。13年から15年までの田中ウタは、獄中にある袴田里見を妻の立場から救援しており、私たちはそれを助けて来た。ところが彼女は17年の段階で袴田里見と離別した。この離別は組織にかかわることではなく、あくまで個人の生活上の困難から来ているのであるが、袴田里見からは裏切者と見られていた。従って私達の研究は、裏切者美化、転向者美化に通ずるものとの批判を受けた。研究会をやっている頃、田中ウタは中国派に傾倒した。そこから「田中ウタとの交友をやめよ」とか「党史にかかわることを党史の出来ないうちに書かれては困る」と言うようなことを、党の権威ある筋から忠告されることにもなった。これは私にとって大変な難題であった。結局、私は第3部を正直に、自らに忠実に書こうとすれば『アカハタ』連載はやめなければならなかった。ここで私は、戦前も戦中も心の支えとして来たし、戦後もまたその末端にいることに意義を感じていた共産党を離れることになった。43年夏であった。このころの私と重家豊とは、思想の上で全くわからない間柄になっていた。

私と重家豊との旧交を取り戻させたのは城間功順だった。重家豊と私との交友は最初から、政治をバックにするたてまえ上のものであったが、城間功順と私とはそれとは違っていた。彼と私とを近づけたのは中井正一先生で、県下の農民運動の5派が統一して、日本農民組合広島県連になる過程で、彼は私と共に事務担当者となり、9月から正式の書記となり、県下を飛び回るようになった。私も<sup>つぐも</sup>閩雲を五里霧中で歩いたが、彼もそうで、何かにつぶかったりころんだり、顔には出さないが心の中は、いつも額に瘤を出したり、膝をすりむいたり傷の絶え間のない有様で、その傷だらけの心をそのままぶっつけ合って成長したのである。これから何かやると言う場合も互に手のうちはまる見え、まる見えだから相手の足りなさを補う同志愛も生まれた。日本農民組合広島県連を追放される時も同罪を負わされた。再起の道の農村夏期大学の運動も2人で開拓した。その過程では、無一文の腹ペコで、甲奴郡上下町から神石郡牧村までを徒歩で越える冒険もやった。夜をこめてビラを書きポスターを描くようなこともした。私が母と共にする農業を助けるために、彼は田植にも稲刈りにも援農に来た。そうした汗水たらす労苦の中で私は、沖縄戦で父と母と3人の弟妹の命を奪われた

彼の中には、書かずにいられないものが喉までつまっていることを知った。彼も私の中に、敗戦までに夫を獄死させ、理解者を5人も失い、父の喪も獄中で迎えた悲しみが溜まっていることを知った。だから25年から30年までの5年に亘る共産党の分裂抗争の中で、城間功順は共産党を離れたが、私と彼との交友に変わりはなく、29年の春、彼は私を頼って三次に来た。三次での彼は日通に勤務しながらも妻子を養う義務感も持たず飲み歩くような脱線ぶりで、私と何度も絶交覚悟の喧嘩をした。しかし互は命ある限り平和の戦士になる以外に道のないことを知っており、互の欠点と欠点、ボロとボロを突き合わせて助け合って来たし、心の底で信じ合って来た。だから、中ソの論争の深化、新日本文学会の分裂の中でも、話し合えばわかる間柄と、互に信じていた。

重家豊の文学勉強は学生時代の文学勉強に根ざしており、戦前のプロレタリア文学を継承しようとするものであったが、城間功順の場合は、22年の春の県知事選挙の際、中井正一候補の応援に来られた大阪市大の栗原佑教授を案内して、山村を歩く間に、同教授の博学に感化を受け、それ以来同氏を個人教授のようにして勉強したものだ。だから中ソの論争の中で栗原氏がソ連派であれば、城間功順も当然ソ連派支持である筈だ。私は中国派として行動したことはない。けれども心の中では中国の文化大革命に期待をかけていたから、互のかつての同志愛が思想の立て前に止まるものであったら、胸襟は開けない筈だった。だがかつて、欠点も弱点もさらけ出して助け合い、相手の心の中に燃えている書かずにいられないもの、行動せずにいられないものを理解している互は、会うとすぐ会わなかった数年を飛び越えて、すぐに肝胆を抜くことができた。そのとき城間功順は、「いま僕は重家さんが政治的には何派に属しているか知らない。知ろうとも思わない。知る必要もない。しかし我々がやってきた『働く人』『沿岸地帯』『地方の会』と続く文学運動の心を、いまどうしたらいいかについては、立場を越えて話せる人です。会って下さい」と、私と重家豊とが旧交を戻すことをすすめた。

城間功順が三次の日通をやめて尾道に帰ったのは36年の秋だったと思う。一時は漁業組合の書記もしていたが、それでは生活の助けにはならないので、妻の多加子さんの営む小さなバーの手伝いをして、一尾道市民として生きる道を徐々に開拓していて、私が尋ねて行ったころには、浄土寺山の南面の眺望のよい家を持ち、昼はそこに休息して、夜はバーのマスターの位置にいた。しかし心は、父母と3人の弟妹と多くの故里人を奪った沖繩戦の悲惨に慟哭しているのか床にも柱にも机の上にも、古い砲弾の破片が飾ってあった。『記録——地方』の月報廃刊以来の重家豊と私とは、城間功順の、この山の家で会った。

既に重家豊は何度も此処に来て、城間功順と歓談を重ねていたらしく、会うと話題はすぐに、23年1月彼が編集兼発行人として発行した小雑誌『働く人』の投稿者のことに及んだ。あの頃はこの沿岸地帯にだけでも、書きたくてたまらないものを持って、鉛筆を握ることを喜びとした労働者が、数百人を下らなかつたのであろうが、いまその人々はどうしているだろうか、多くは工場から帰ればテレビの前に坐る人になっている。転向と言う場合、とかく

天皇制打倒の側から天皇制支持に回った日本共産党の転向者のことのように思われ勝ちだが、我々はいまそう言う高い次元の少数者の転向ではなく、レッドパージの嵐までは本音を吐き出して闘うことに意慾を燃やした多数者が、パージ以後は保身のために本音はかくし、無気力となり、暇があればテレビに向かうのを常習とする人になったことまでもふくめる、広い大衆の無意識の転向をも転向として問題にしようと言うところへ話は進んだ。

『沿岸地帯』発行の27年5月のころの心で、いままこの沿岸地帯の文化と文学に執念を持ち、その実行できる位置にいるのは、我々3人だけではなからうかと言う話になると、沿岸地帯と不可分な瀬戸内海はいま死の海に変わろうとしている、このことを置いて何が出来るかと言うことにもなった。『沿岸地帯』が『地方の会』へと変貌したのは、原爆被爆の問題は単に広島市の問題ではなく、全県民の問題であったからで、広島県全域の被爆者と被爆者の救援が課題となったことにある。そこから見ると、瀬戸内海が死の海と化すこともまた、広島県全域の問題である。被爆の問題と取り組んだように、今は死の海と化しつつある瀬戸内海と、海を汚す沿岸部の工業のあり方や、川を汚す住民のあり方と取り組む必要についても、重家豊は整然とした理論を展開した。

彼は自分がいま取り組む長編が、『地方』3号の「帰郷列車」に始まる、戦中の自分の転向から始まり、三菱三原車輜工場の労働組合の、平和と民主主義建設の志が、レッドパージによって、一人一人の労働者の上にどのように微妙に転向をうながしたかを描き、それがひいては、今日の死の海への無抵抗の人間像への根底になっていることを証明しようとする大望で書かれていることを話した。日本鋼管福山製鉄所の誘致に、県議会が賛成し調印したのは36年10月。1,000平方メートルの広大な埋め立て工事に着工したのは37年4月。38年11月、年間粗鋼生産量2,000万トンをめざす世界最大の鋭大型製鉄所の起工式を行い、40年2月から単一製鉄所としては世界最大の製鉄所として動き出した。この巨大企業は構内作業をはじめ、補修、輸送など、常に関係会社を30近くも抱えているが、関係会社はみな下請会社を幾つもかかえ、下請会社の下にはまた下請会社がある。この最下位の下請会社までふくめた従業員の日々の生活は、備後地方全域の住民の動向を左右する。だから、かつては勢いよく自己の本音を吐露しようとして鉛筆を握った多くの組合活動者が、職場では本音を吐かず、家に帰ればテレビの前に坐ることをあたり前とする、その転向は備後地方全域の思想問題であり、瀬戸内海を死から救うか否かにかかっている。重家豊の「転向」を主題とする創作の内容は、そうした政治性を持つものであった。

重家豊は私の創作活動について幾つか質問した。「党史にかかわることを、党史の出ない前に勝手に創作されるのは困る」と言う趣旨の助言から、『アカハタ』への連載を中断した私は、残りの第3部と第4部を、党とは無関係だった両親を主人公にして、古い村落共同体の拘束の中での治安維持法との闘いに代えて書こうとして、かつて『沿岸地帯』へ連載した「トイ物語」以来の、共同体ノートをもとに、「病める谷間」を書いていた。後にそれは雑誌『人間として』の5号から10号へ連載することになったが、重家豊も城間功順も、「それ

は困難を避けることで問題の解決にはならない。村落共同体と治安維持法とのかかわりを書くことは意義があるが、それによって、戦中の工場内で抵抗を試みた当事者を主人公とする体験や検挙や体刑を書く作業を中断するのは、これも一種の転向だ。党に関係のない人民の海の一滴になり切っても、その体験は書いてもらわねば困る」と言った。55年11月から出版を始めた私の『囚われの女たち』全10巻は、彼らのこの助言から、本腰取り組んだ作品である。

お互に酒も飲んだ。話は互の体のことに及び、城間功順はこの日当たりと眺望のよい家を住み家とした理由を、酒客相手の夜の商売で肝臓を痛めたため、昼間は日光を浴びて、土いじりをして、野菜作りもして、健康を取り戻したいためだと言っていた。重家豊は「自分はいまどこも悪くない。45年前に広島駅付近で、自動車を運転していて、後ろから来た自動車に追突されて、一時は後遺症を心配したが、いまのところ後遺症はなさそうだ」と言っていた。だが彼の命を奪った不治の難病は、後遺症がないかに思えた追突事故が原因だったように、私には思える。ともあれその夜、私達は「地方の会」を蘇らせるために力を合わせようと約束した。

## 9 模索と黎明

「地方の会」を蘇らせるための準備は、3人とも何処からも誰からも拘束されることなく、自分の意志ですすめた。

私の場合は『アカハタ』連載の「道くらけれど」と「濁流を越えて」に続く、昭和10年から20年の敗戦までを、「囚われの女たち」として書くことが何よりも大きい仕事だったが、そのかたわらで急がねばならない仕事が2つあった。その1つは重家豊も取り上げている瀬戸内海の生死にかかわる内閣企画室の新全国総合開発計画（田中角栄の列島改造論はこのあとに出る）による、広島県下の自然破壊、日本鋼管誘致に見られるような巨大企業の出現が、人々に自分が歴史のどこに立っているかも解らなくさせている現実を、かつて「原爆被爆者の手記集」を作ったように、誰にもわかるようなルポルタージュにすること（これは50年5月ちくま少年図書館から『君はいまどこにいるか』と題して出版）、もう1つは34年1月 上下の家で始めた婦人ばかりの勉強会タンポポグループを蘇らせることであった。ルポルタージュを作るためには、県北の山岳地帯から、日本鋼管誘致後の福山を深訪すれば、どうやら少年向けの1冊の本は出来るが、タンポポグループを蘇らせることは容易ではない。60年の安保闘争の前後、府中市の図書館に集まる読書サークルを中心に「みちづれ」と言うサークルの連合体が出来、タンポポグループはそれに入った。「みちづれ」は自分を確かなものにするために、生活記録をはじめ、35年12月から年1回の生活記録誌と、月1回のニュースを発行していたが、『みちづれ』8号から9号までの間には3年（44年5月～47年4月）たっている。ニュースも途だえがちになっている。その理由の第一は原稿が集まらないことである。原稿の集まらない理由を一口に言えば、高度経済成長に足を掬われたと言える。もう少し詳しく言うなら、

かつては原水爆禁止の100万署名を集め得た地域婦人会にも、意識しない転向が進んでいるのだ。少し詳しく言うなら、戦後の地域婦人会は、かつての大日本婦人会の地域性をそのまま受けついで、新憲法の守り手として育成されたもので、家の勤めとして1戸に1人の婦人が参加する仕組みで、最初に取り組んだ結婚改善運動では、県本部にある婦人会館に簡素化の模範的式場がもうけられ、誓いの言葉には、新憲法25条の「結婚は両性の合意のみによって成立……」が朗読され、すべて質素をモットーにして進められていた。ところが婦人会館の結婚式場が経済的に成り立たなくなった。それは各単位の婦人会の新憲法の取り組みが、意識的にか無意識的にか転向していたことの証拠なのだ。各単位の市町村の公民館で行われる結婚式は、高度経済成長の中で、簡素化とは反対に派手になる一方、女はうちかけ姿、ウェディングドレス、訪問着と着せかえ人形のように貸衣裳を着替え、男までお色なおしの着かえをする。神前結婚では祝詞が、洋式結婚では誓いの言葉が読まれ、どちらも指輪を交換するが、かつて読まれた新憲法の結婚の条などまるで忘れられている。結婚の条がそうなのだから、軍備を持たないと言う第9条が、どんな手痛い犠牲から生まれたかを考えるとところは少しもない。これらに何の矛盾も感じない婦人会活動の中で、平和憲法の精神をもって、自分の中の矛盾を見抜く目を持ち、自分を追い抜く知性を持つために、仲間と集まって記録すると言うような営みが育つわけがないのである。遂に『みちづれ』機関誌は47年4月の9号で廃刊になり、『みちづれニュース』は48年2月の100号で廃刊になった。ここからどうして蘇るか。『みちづれ』の中の、やる気の人たちは50年夏から、自分の足元の町に、自分達で編集する『地下水』と言う月報を出すようになった。またこの人々はいままで機関誌やニュースへ載せた記録をもとに、1人が1冊づつ本を出そうという呼びかけに答えて、1冊にするためには足りないところを書き足すことになった。これは52年4月から叢書『民話を生む人々』として、而立書房から刊行することになるが、ここに至るまでの間には、1人対1人の膝つき合わせた、どこで書けなくなっているかを掘り下げる討論の時間を、何度も積み重ねる作業が必要だった。この暗中模索にとって重家豊はよき相談柱であった。

城間功順の場合、彼はバーは妻にまかせて、自分は浮舟と言う小さい旅館を営むことになり、ここを根城にして、つづれない「地方の会」の土台を築こうとした。その築き方は彼独特のものだった。第1に彼はこの宿を、宿帳を書く必要のない宿にした。それはユーゴーの『レ・ミゼラブル』に出て来るミリエル司祭のように、宿を乞われたら、罪人であれ、何人であれその身元を聞かず泊めると言う思想からであった。又、泊めた部屋は完全に宿泊者の自由の領域で絶対に犯してはならぬと言う精神から、何かの不安があっても絶対に警察へとどけなかった。それは彼の自治の思想の闘いで、そこから彼の書きたいものは湧くように出て来た。

彼はまた一つの宿屋の主として、尾道の住民の様々な問題の解決に協力した。例えば今まではバスの通らなかった狭い商店街へ、大型の市バスが乗りこんで、商店の軒をかするとか、店先の商品をはねるとか、それらへの抗議やら対策やら、漁師の妻が釣れたばかりの鮮魚を

箱車に乗せて、街路で売るのは尾道の名物だったが、衛生を楯に保健所と警察がこれを圧迫した。売る側も買う側もこれに抵抗して、従来の売り方を守ったが、城間功順はこの抵抗にも加わった。そうしたことのほかに彼は、ある朝新聞を読んでいて、そこに朝鮮からの密入国の一群が、三原の沖で上陸してタクシーに乗り、タクシーの運転手の密告でつかまり尾道刑務所に収容されているのを知ると、早速救援運動を起こした。高校入試の定員削減に対しては、PTAの母親達と県教委に削減反対を陳情に出かけた。これら一旅館の経営主としての、自治のための市民活動は絶えることなく、これを書くのが彼の文学活動となった。

旅館の夜は、いつ客が来ても、泊った客がいつ呼んでもいいように、誰か1人は眠らないで待機していなければならない。城間功順はその不寝の番の間に、心の友へハガキを書いた。それはかたまった時間が取れないためであったが、その時間は彼の思想闘争であり、同時に書くことの訓練で、こんど「地方の会」を蘇生させたときには、原稿が集まらないから中断すると言うようなことが、絶対にないようにと言うのが、城間功順の念願であった。

重家豊は相変わらず看板屋を経営、その位置から三原の市民活動に参加していた。彼の母の住む安芸津の沖の海上には東邦亜鉛の無気味な煙が昇っており、山地には巨大な火力発電所の誘致が進んでいた。これらがもたらす公害に無関心でいられるわけがない。火力発電所は100メートルの煙突を200メートルの高さにすることで、地元の承諾を取りつけているが、高さ200メートルの煙突が3本もそびえることは三原市をもその汚染の圏内に入る広域な自然を汚染することになる。火力発電誘致に反対の重家豊は、いままでは関心のなかった健康と自然の関係を探る本、中でも食べものに関する本を、漁った。日本はいま水力発電、火力発電に頼るだけでは足りず、至るところに原子力発電所を建設している。それが危険であることは良識ある人の誰もが認めるところなのだ。一体日本の電力事情はどうなっているのか、電力事情の底にある今日の文化は一体どうなるのか。文化を今日に追いつけた幸福への希求はどう変わらねばならないのか。これを掘り下げるために本も、原始宗教にまでさかのぼって読んだ。ヨガや自律神経の訓練に関する本までも読んだ。

はたから見れば運動とはかかわりない、読書好きが流行を追う、手当たり次第の乱読にも見えたであろうが、重家豊の場合は、この地方の全域が取り組まねばならない、近代文化のもたらす公害と闘う文学活動のための、準備のためであった。彼は高度の知識をやさしく伝えるための文章の訓練として、小学生の孫へ美しい絵入りのハガキを送るようになった。こうして互が投げどころとする「地方の会」の蘇りは黎明を迎えていた。

私が県北の吉舎町の友人の家に、小さな仕事場を作ったのは52年の夏だった。その秋、重家豊と城間功順とが、いきのいい蛸を持って祝いに来た。このとき私が驚いたことの一つは、重家豊の歩行困難が、土間から床へ上がるのも、誰かに後から押ししてもらわねばならないところまで進んでいることだった。もう一つは転向と取り組む彼のライフワークが、相当に進んでいることだった。彼は「マスの中での孤独に耐えられなくて転向した、僕の戦中の転向は、戦後のレッドパージによる、労組大衆の第2組合への歩みに似たもので、この歩みに

歯止めをかけるには、その対象的な生き方との比較がいるんだ。それには、あなたの戦中活動が必要だ。あなたとの対比で、僕は僕の転向を結論づけて行きたいんだ。協力して下さい」と言った。「協力はしたいけど、どうすればいいの」と私が聞くと、「僕はいま『山代巴論』を書こうとしている。これを書くことで僕は僕の戦中の転向を今日的に踏み越えて行けるんだと思う」と彼は言った。そこからも私は『囚われの女たち』の発行を急がねばならなくなった。

2度めに重家豊は1人で私の仕事場を訪ねた。彼の歩行困難は、バスの乗り降りもあぶなっかしいほどに進んでいたのだから、その体で、世羅台地を越える長時間のバスに敢えて乗ろうとした彼の心中には、よほど思いつめるものがあつたのだと思う。彼はこのとき、いよいよ雑誌を出すとしたら、お互はどういうものを発表するかを相談に来たのである。かつての『沿岸地帯』や『地方』発行のころと違い、お互は書ける条件も用意していたし、書く訓練もかなり積んでいるから、話しているうちに、夜明けは近いと言う感じがひしひしと感じられた。しかし私には、重家豊の病状が前に来たときよりよほど進んでいるように思えた。それで吉舎の按摩へ案内した。この按摩は戦争のとき中国の風土病にかかって失明した人で、学問はないがヨガも勉強し、指先の感が鋭く、よく病根をあてる人だった。重家豊はこの人に按摩されながら、自分がときどき鉛筆が倒れるように倒れることを話していた。私は聞いていてこれは大変なことだ、もしかすると、自動車の追突事故のときに、背骨のどこかに異変が起きているのではないかと思った。治療を終えて按摩は、「脊髄の胸の後の方の骨が1つ、水落ちの方へへこんでおりますなあ。外には変わったところはない。あれがわざわざいしとるように思いますのう」と言った。もとより重家豊もこれまで信頼できる病院で、種々と検査もやり、医者のお言も聞いていることだから、治療について私が口出しする必要はないと思った。

3度目の重家の来訪は、いよいよ地方の会を再開するとしたら誰たちに呼びかけるかと言う具体的な相談と、「山代巴論」を書くについての打ち合わせのためだった。そのときは時間の余裕もないところから、按摩へも寄らず帰ったが、バス停へ送って行く私に彼は「くたびれて来ると、手足の先や唇がふるえてくるんです」と言った。「中風にならなきゃいいけど」「そうはならんと思う、とにかく早く創刊号を出すところへ槽ぎつきたい」。バスに乗った重家豊は、『沿岸地帯』創刊号を出したころの若さと情熱を取り戻したような顔を窓に近づけて手を振っていた。

## 10 折り重なる異変

吉舎への3度の来訪の後、しばらくたって重家豊から封書が来た。そこには「御無沙汰をお詫び致します。御覧のような恰好とれない字が遅々としてたどたどしく書かれるため、書字困難のせいで御無沙汰勝ちになるのをおゆるし下さい……」。

私は一目で、これが書に自信があるから看板屋になった重家豊の字であろうかと、涙がこみ上げて来た。字はたどたどしくても彼の精神活動は旺盛で、「山代巴論」を書くには私の年譜が必要だと、年譜の書き方を丁寧に指導していた。

生活記録のサークル誌『みちづれ』の行きづまりを打ち破るために始めた、私の暗中摸索は、1人が1冊ずつの生活記録書を出版することになり、而立書房と言う小さな出版社から、叢書『民話を生む人々』として52年4月から刊行を始めた。(1)は、かつての『記録——地方』に「原爆投下直後のこと」を載せた、内田千鶴子の「1945年8月からの出発」。(2)は、『記録——地方』に「母の生活記録」を載せた小野菊枝の「まちの選挙」。(3)は、『記録——地方』に「共同耕作まで」を載せた小林みさをの「主婦専従農業」。(4)は、『記録——地方』に「人工早産」を載せた永久直子の「平木屋三代の女たち」。いずれも私の解説をつけた、300ページを越す厚い本である。重家豊は、この人々の出発のころを知っているから、この成長に勇気づけられていることを私への手紙に書いたが、それはもう読めないような字になっていた。もはや彼は手紙の書けない、1人では外の歩けない人になっていたのである。だが私も城間功順も重家豊を最も必要とする時代に入っていた。

尾道では、54年10月、美ノ郷という山間の農業地帯で、絵画と写真を愛した1人の青年が、警官の凶弾に倒れる事件が起き、城間功順たちは時を移さず「尾道市民の命と人権を守る会」を発足させ、12月には射ち殺された森本直輝の遺作展を開き、警官の専横に反撃行動を起こした。このとき私も応援者の1人に加わったが、重家豊は応援に加われなかった。それから1年めの55年10月、城間功順は、釣を楽しむために糸崎海岸に出かけ、国道2号線ぞいの慣れ親しんだ釣場の近くで、暴走して来たトラックにはねられて、その日のうちに落命した。全く予期しない突発の異変である。この異変を第一番に知らせねばならぬのは重家豊であったが、重家豊の近況を心配する、城間の家族はこの悲しみを知らせることが出来なかった。

この悲しみの最中の11月30日、私の『囚われの女たち』の第1部「霧氷の花」が、径書房から出版され、続いて12月8日、城間功順がこの1年、尾道市立長江中学校の3年生、八ツ塚学級の学級記録へ、送り続けたハガキ通信が、八ツ塚学級の生徒たちの手によって、「257枚のハガキ」として出版された。それは朝日新聞、中国新聞などの大新聞にも紹介された。

「1人のおじさんが毎日、1枚ずつ、中学生たちにハガキで『愛と平和』について語りかけた。沖縄出身の自分の生いたち、友だちのこと、家族のこと、世の中のこと……。50枚、100枚と、ハガキは増え、“生きた教科書”として中学生の心を打った。そのおじさんがこの10月、車にひかれてなくなった。ハガキが257枚になった朝だった。中学生たちや先生は、このハガキを1冊の本にまとめた。12月8日、太平洋戦争開戦の日を前に、自費出版された本は、おじさんの親しかった人たちに配られる……」そんな紹介の前書きを添えてあった。

この出版のあり方は、故人城間功順の霊を慰める最も有効なものと思う。同時に、自分達のやろうとする文学活動の前途を占うものでもある。病床の重家豊が新聞の「257枚のハガ



キ」に関する紹介を読んで、どんなに感涙したか、想像にあまる。

城間功順の妻多加子と私とは、56年の春早く、安芸津の重家豊の病床を見舞った。老いた母も床についている重家の家には、神戸から重家豊の姉上が看病に来ておられた。もはや彼は自分の立ち居も、身の始末も思うにまかせなくなっていた。顔は童顔になっていた。言葉は遅々としていた。しかし内面の動きは鋭く旺盛であった。それが多加子さんをも私をも泣かせた。こんなことがあっていいものだろうか。だが私たち2人にはどうしてあげることも出来なかった。

家族は彼をはじめは呉の病院へ、次には草津の病院へ、最後には東京の王子にある生協病院に入院させた。そこで彼の病気の根源は、脊髄小脳変成症と言う現在までの近代医学ではなおせなかった難病であることがわかった。娘の奥地圭子からこの状態を知らされたときの私は、宿痾のリューマチの治療のため、伊豆の山地にいて、彼を見舞うことが出来なかった。57年4月、「257枚のハガキ」は、筑摩ぶっくすで『バクおじさんの来る教室』と題して出版された。このときの重家豊は、四肢の動かない、言葉も出ない病人としてベットに寝たきりの人になっていたのである。

私が死せる重家豊と対面したのは、彼の棺が安芸津の家に運ばれてからであった。棺の中の彼の顔は病苦を知らぬげな若い顔であった。彼の臓器と脳髄が生きている間、彼の脳裏からは自らの始めた文学運動の戦線と、その黎明のあかりとが、絶えず明滅していたであろうと思うと、涙がとめどなく私の頬を濡らした。私の知る限りで、彼ほど再びの転向を恐れた人は稀だ。敗戦後の第一歩からの平和と民主主義の文学運動をまっすぐに伸ばそうとした人も稀だ。彼の遺品となった蔵書の総ては、その文学運動のための背景である。

## 父重家豊の思い出

長女 奥地圭子

私の記憶にある、もっとも古い父の姿というのは、疎開先の岩手県三沢村に私達家族(母・弟・私)を迎えにきた軍服姿の父である。戦争が終り、父が満州から帰国したあとの、昭和20年秋のことだったそう。私の眼に、くっきりと今も残る一面の黄色い稲穂。その中の、松の木のある一軒家のたたみの部屋で、黒ぶちの眼鏡をかけて父はすわっていた。私は4歳だった。疎開先に、東京都が指定したという家は、お寺のお堂のように、ただ四角い建物で、畳何十畳だかだだ広い部屋が1つしかなく、そこに何十世帯も、かたまりを作って生活していた記憶からすると、父のいた一軒家は、父の宿泊先だったのだろうか。生まれて2年暮すか暮さないうちに兵隊にいらした父の顔を覚えていなかったのか、つたっていた私を、母が「お父さんですよ」と押し、「おいで」と手まねきした父の腕にだっこされたのだった。父、27歳の時である。

記憶はこれだけだから、その時の父の胸中は、わかるわけがない。しかし、疎開先から実家のある広島県安芸津町に戻ってきて、祖母共5人暮らしを始め、その3か月後の21年2月には、父は慶応大学出という肩書きを隠して、三菱重工三原車輦工場に、工員として就職している事を考えると、かなり、悩み、考え込んでいたのではないかと思える。何についてか。——それは、戦争責任についてであった。私が、大学生時代、安保闘争(60年安保)を経験するのだが、それ以後、なぜ、父が大学出の肩書きを隠してまで工員になったか、私にはよく理解できるようになった。父は、自分が学生時代、慶応大学の社研にいて、いっばしの反戦運動もやり、国家を批判した己が、最後には、あのおろかな、いまわしい戦争の協力者になっていたことに深い深い衝撃を覚えたのだった。そして、二度とこんなことがないようにするためには、最後には、戦争の遂行に兵隊として力を貸してしまった己の、つまり人民の弱さをえぐり見つめる必要と同時に戦後の人民の生きる道は、労働運動しかないこと、それもインテリの運動ではなく、工場労働者がその中心を担わなくては、新しい日本の建設はできない、と考えたのだった。妻も、母親も反対したのに、その頃差別的職階制がきつく残り、工員は人間とは思われない空気の中で、あえて、大学出を隠してまで工員になったのは、戦争責任の問題についての、重家豊における生き方を、言葉でなく実践で示したということだと思ふ。

戦後、そして今、ますます“平和”が風化し、戦争にかかわった人間が、己の戦争責任をごまかし、中には180度功利的に身をかえ、政治の方向が、軍拡へ向かっていとも鈍感にその政府を支持する層が減らない時だからこそ、この父、重家豊の、戦争へのこだわりを私は、

誇りに思うということを強調したい。

父のこの選択は、社会的には、ある道を切り開いていくのだが、家庭的には負を背負うことになる。そして、それは、その後一生、尾を引く事になるのだが、工員になる道を選択した時、父にとって、最も大事だったことに身を賭けたのだから、そのために生じた負を一生かかえこんでいくのは、仕方のないことだったと思う。

家庭的な「負」とは、離婚である。すでに、出征中、私の母と祖母(父の母)はうまくいかず、衝突をくり返しており、両者の間に入って解決する父はいなく、母は何度目かの家出をして、東京にいる所を疎開させられたのだった。幼い子をかかえ、苦労の日々、待ちわびた迎えは遅かった。そしてやっと家族がそろい、安定した生活ができるかと思えば、経済的にも、社会的にも最底辺に近かった工員になったので、母の失望も大きかったようだ。「私は、工員と結婚したのではない」と、就職3か月後ついに離婚に至ってしまうのである。

昭和21年の2月、三菱の工員になってからは、父は実家のある安芸津で暮さず、三菱の寮に入っていた。そして、1週間に1度、土曜日から日曜日に帰ってきて、1泊したらまた寮に帰るのだった。私と弟は、その実家のある安芸津町で、しばらくの間、祖母に育てられるのである。週に1度、父に会えるのがうれしくて、父が、奥で食事などしていると、遊んでいる途中で、何度も、玄関からのぞいたのを覚えている。父は、しだいに忙しくなり、帰ってこれない週や、帰っても、すぐまた次の上り列車で行ってしまうような時もあった。あとで知るのだが、就職6か月後には、共産党に入党しており、労組も結成、そのリーダーとして、はなばなしく活動していた時期であった。私達姉弟が大きくなってから、父と益暮れいっしょにゆっくり飲む時によく話に出たのが、この頃のことである。東の“東芝”、西の“三車”といわれるほど、日本一の共産党細胞をつくり、多い時は三百何十人もいたこと、2・1ストの時の伊井弥四郎の話を涙を飲んで聞いたこと、天皇が西日本における労働運動の拠点の一つをゆさぶる為、三車工場へくることになり、天皇の戦争責任、天皇の人間宣言の追求から、組合大会では万場一致で「会う必要なし」と決めた。ところが、当日、事務所で執務中、「バンザイ」というどよめきがきこえて、窓から見ると、何千人という組合員が日の丸の小旗を誰が用意したのか渡されて、手にふりながら沿道にならび、天皇を迎えて熱狂している。「これをみた時、わしゃ、負けたと思うたわい」。表面はいさましく、民主主義だ、なんだといっても、民衆の意識の底の部分は、何も変わらない、変えられなかったと痛感したという話である。第二組合が、このあと、どんどん広がったというが、この天皇の話は、よほど忘れられなかったとみえ、何度聞いても、その時の父の想いが伝わってくるような気が毎回したものである。

昭和24年に、父は、西田康子という同じ三原市内の東洋繊維工場の寮母さんと再婚した。私達の育ての母である。祖母が、もう自分では子供の面倒を見きれないからと再婚をせかした事情もあり、いっしょの活動仲間で大の仲よしだった小越さんの紹介が、きっかけだったらしい。私が小学2年の3学期であった。

結婚を境に、私達一家4人は、祖母の家を出て、父の工場のある三原市に転居した。堀川町といって、すぐ後はさくら山、すぐ前は、小川が流れていて、ザーザー、チョロチョロ、枕辺に水音が聞こえる所で、裏が小学校だった。父は、この堀川町の家を、いつも自転車で出、なだらかな坂道を下っていくのだった。もっとも、1年後の昭和25年には、レッドパーズで、何千人だかの従業員の首切り撤回とひきかえに、幹部が全部パーズをうけることになり、失業して、看板屋を始めているから、自転車の行き先も、違って来たわけだが、子供には、その変化はよくわからなかった。パーズ以後も、メーデーといえば、あの小さな地方都市に、こんなに人がいたかなあ、というほどの行進にいっしょに行ったし、父の肩車で歩いたこともある。他のおじさんがやってくれたこともある。小学校の校舎の窓から、父のいるメーデー行進に手をふったこともある。堀川町の家には、よく客があり、会議や相談を父のせまい部屋でやっていた。泊まりの客もちょくちょくあり、序文をかいて頂いた山代さんも、時々泊まっていかれた。私は、山代さんの話し声がすきだったし、一言、二言私に話しかけてくれることがとても新鮮だった。父の部屋は、四畳に変形の板間がついていて、本や書類でぎっしりという感じで、朝顔のつるですずしい窓ぎわに座卓がおいてあり、その机の上は、誰もいっさい、いじってはならない事になっていた。壁には、自分たちがつくったというD51の写真があり、あの頃はレーニンの写真もずっと貼ってあった。私は、よくその部屋に入っては、読めそうな本を読んだり、父の書きかけの原稿を見たりするのが好きだった。

看板屋をやりながら、労働運動、平和運動、生活記録運動や、文化運動をエネルギーに展開していた多忙さの中で、父は、私や弟にはよく眼を向けてくれていた。『原爆の子』や『峠三吉詩集』・『君たちはどう生きるか』・『山びこ学校』など、これはいい本が出たぞ、読んでみるか、とわたしてくれた。「白毛女」・「砂漠は生きている」・「チャップリン」などの映画はつれていってくれるか、母といけるよう手配してくれた。人形劇団「ブーク」とか「前進座」とか新劇の三原公演は全部観た。というより、父はそれらに対して新しい文化運動として三原公演ができるよう誘致し、積極的に上演協力をしていた。それだけでなく、父達大人のグループが、人形劇や紙芝居を作って子供達にみせるという時期もあり、私もいっしょになって、新聞紙をちぎり、くさいニカワをたいて、人形づくりをやった。父のつくる人形は、表情が大きく、子供心に魅せられたものである。図書館で行われるコンサート・考古学教室・演劇教室みたいな催しものも、教えてくれたし、父の友人達からの情報で、私はどんどん出かけていった。

父と遊んだ覚えは少ないが、うらのさくら山公園に母と弟と三人で行っていると、あとからきてくれたり、海水浴、瀬戸内に舟を出しての釣りなどは、毎年のように行った。一番の楽しみは、外食デーだった。月1回だか、季節1回だか、中華料理店で、ごちそうしてくれるのだった。今とちがって外食産業のはなやかな頃ではない。もう、その日がうれしくて、待ち遠しくて、ふだん質素な暮らしだけに忘れられない。そういう時に、夜もない日の多い父との会話をうんと補うのだった。

## 父重家豊の思い出

こう書いてくると、経済的に、ゆとりがあったように感じられるかもしれないが、ページ以後は、大変な貧しさが続く。一般的にも昭和20年代は貧しいが、弁当や洋服、持ち物をみても、他の子よりずっと貧しかったと思う。貧しかったけど、本人の心や頭の栄養になるものは、ずい分豊かに与えてもらったと思う。母のやりくりがとても大変だったことだろう。

父も母も「勉強しろ」とは、一度もいわなかった。本人が考えることだ、という一貫した態度だった。成績が下がることがあっても叱られたことはなかった。それだけでなく、私は、父におこられた記憶がない。どなったり、イライラしたりした父をみたこともない。もし、こちらがわからない時は、根気よく、言い方をかえて、考えさせるように言い続けるだけだ。父の前で、びくびくしたり、自分をつくろったりする必要も一度もなかった。実に、やさしく、大らかで、尊敬する父であった。私はあまり、父に甘えたりおしゃべりする子ではなかったようだが、父がいると、ほっとし、安らかな気になるのだった。小学生の頃、堀川町の家に、早朝、突然警官が4、5人来た。びっくりどころではなく、息をひそめて寝巻のまま見ている私達に、「心配するな。お父さんは、何もまちがったことをしていないのだから、すぐ帰ってくる」と静かな声で言った。それを聞いて、私は、全く案ずることはないような気がしたのだった。父は、それほど落ち着いて、堂々としており、むしろ警官の方が、ペコペコしているように見えた。「捜査令状を見せて下さい。こんな人がまだ寝ている時間にくるからには、はっきりした根拠があるのでしょうか」「寝巻を着替える間ぐらい、部屋から出て下さい」警官達は、全員玄関に降り、態度が丁重になった。ドンドンと玄関の戸をたたかれて、鍵をあげに出て、あわてた声で父を呼んだ母も、すぐ落ち着いて、黙って、着替えを手伝った。何の事で警察にひっぱられたのか、今はもう覚えていない。しかし、私には権力にへつらわず、毅然とした態度での、一人の人間の誇りと勇気を見て、子供心に、人間のありようを一瞬に学んだ気がする。言葉通り父はまもなく帰ってきた(その日だったか、1泊後だったかわすれたが)。

ずい分長い間うちの玄関には、いつも「国民救援会」という小さい板ぎれの看板がかかっていたし、父や母が、裁判の話や、さし入れの話、そのさし入れをしてあげる人がどんなすばらしい人かという話をしているのを耳にしていたので、「警官が正しく、つかまる人が悪」ではなく、その逆もたくさんあることを私は感じていた。

三原簡易裁判所や、尾道地裁で、裁判官の仕事や弁護士の仕事にあたることをたのまれてやってくる事もあった。

「むずかしからうねえ」というと「人間だからまちがう。まちがうから疑わしきは罰せず、それとわしの信念は、弱者、しいたげられている者の立場に立つ、という事よ」と言っていたが、その言葉通り、弱者の側にたつ生き方を、生涯、父は生き方として選んだ人生だったと思う。

選挙にたったこともある。三原市議会議員選挙であった。中学生だったか、高校生だったか、制服を着て、カバンをもったまま、学校帰りに聞いた父の演説は、とてもうまく、説得

力があるように思った。しかし、保守の地盤をくずすことなどはるかに及ばず、当選しなかった。私の記憶では、最下位だったと思う。最下位でも「働く人のための政治を」という姿勢が一番すばらしいと思った。

そういえば、中学の時、私は、自治会の役員選挙に立候補したことがある。今の、管理の中の生徒会活動とはちがって、戦後のある時期まで、本気で民主主義を実践化しようとした教師が、地方都市にはまだまだいて、いっさいを生徒の手で決定し、運営させていた。その役選の草稿を夜、ぶつぶつと唱えながら覚えていたら、帰宅した父が、「どれ、やってみろ！」とみてくれて、自治とは何かということの本気で話し込んだのを覚えている。私は、副会長に当選し、親友が会長で、学校生活のすごし方は、生徒達の手で、と生徒手帳の会則いっさい、私たち子供で作ったのだった。

ここで、私の継母、父の二度目の奥さんにふれなくてはならない。

母は、台湾にあった大きい商家の末娘で、父母、兄達にかわいがられ、お茶、お花、お琴を身につけ、ほっそりしたスタイルのいい美人で、和服姿も洋服姿も似合って、子供ながら得意であった。教養もあり、よく本を読み、日記を書き、結婚後も、洋裁学校へ通って、たちまち師範の免状をとり、その他和裁、編物も教えられるという人であった。台湾からの引き揚げ後、両親もすでに亡く、三原で女工の寮母として働いていた時、共産党員でもあったという。似合いの夫婦であった。

しかし、結婚後1年で父はパージに会い、生活は困窮をきわめ、今思い返しても、この母がしっかりと生活をやりくりしていなかったら、とうてい暮せるものではなかったと思える。今、主婦として生きる私から見て、よくやれたなあ、と。だが、経済的大変さは、まだ耐えられたであろうが、精神的な問題は、耐え難い悩みであったにちがいない。

というのは母と私たち(私と弟)は、しっくりいかなかったのである。今、亡き母に私は何とも返す言葉がないのだが、まわりから「後妻」といわれ、子どものことも、たえずその目で見られ、つらい日々であった。素直にならない私たち(特に長女の私は、弟よりもずっと母に反発していた)にイライラする母、そんな母にますます反抗する私、家庭の中は、とげとげしくなっていた。表面的な夫婦げんかはみたことがなかったが、父も母も、お互いに、子供のことで、亀裂が生じているのを私たちは知っていた。どちらも、家庭のことでは、悶々とする時期を何度もかかえたにちがいない。私は、高校生になった時、2度家出を決行した。1度は、母が机の走り書きから見つけたとかで父に連絡し、授業が終っていよいよ、という時、父が学校の玄関に迎えにきていて、未遂に終わった。父は何もいわず、私を自転車にのせ、沼田川の大橋の上までいって、二人で河口の波のうねりをじっと見たのだった。「すまないと思っている、お前たちには」と父はいった。もう1度の家出は、家からどんどん西へ歩き続け、日が沈んでも、夜になっても歩き続け、どこにきたのかもわからなく、犬の遠吠えの中、小さなお堂のすみで一晩をすごした。みんなが心配していることが気になり出し、夜があげると、東へ東への道をたどって、やっと家についた。親戚中へ問い合わせがいったらしく、

## 父重家豊の思い出

祖母たちが汽車でかけつけていた。母の立場はどんなにつらかったであろう。しかし、父も母も何もいわず、すぐ、布団を敷いて寝かしてくれた。ふとねむりからさめると、母が障子の前で泣いていた。

こんなぐあいだったから、父は、自分がふがいないために、子供も妻も幸せにしてやれない、という事を、わが罪として背負い、自責の念をもち続けて重い日々を暮らした。

この関係が好転したのは、私が横浜国立大学に入学し、家から離れて、鎌倉の寮で生活するようになってからである。ちょうど60年安保闘争の高揚期で、私も、自治会の書記として、忙しくかけまわっていたが、共に活動していた自治会の委員長に、私が失恋をする。その時、父に手紙を書く。父とは、自己の内面を語る手紙のやりとりができていたから。父の長い返書と共に、思いがけず、無言の母からはんてんが小包みで届いた。母の大事にしていた着物をつぶして、つくられた、あたたかい綿入れのはんてんであった。ガラスも破れ、暖房も何もないオンボロ大学寮で、私は、友人達のはんてんをみては、ほしくて仕方がなかったが、帰省しても、ねだることができなかったものだ。どうして通じたのだろうか。私は手紙とはんてんの前で泣けて泣けて仕方なかった。そのあとの帰省から、すっかりこだわりがとれ、自然な親子関係にもどるのである。日本は高度成長期に入り、看板屋の「三陽社」は順調にのび、経済的にも安定して、わが家に、春が訪れる。弟が上京してきて、美大に入るための予備校に通う。晩年、父が時々「わが家の一番いい時期は、あの頃だったなあ」といつていた。

私が大学時代、父は、よく上京しては、寮や下宿先を見たり、友人に会ってくれたり、レストランでごちそうしたりして

くれた。そして、いつも「これなら安心だ。娘も息子もわが道を歩いているなあ」といつて広島へ帰っていくのだった。その時の、父親としてのたのもしさもさながら、私にとっては、世界観や人間観、自分の生き方や考え方をつかむ上で、父との往復書簡や、帰省の時の食卓での会話は意味が大きかった。社会主義・大衆運動・社会の矛盾・組織・教育・人生等々、私の疑問やぶつかっている問題を真正面にぶつけられる対象であった。安保闘争で、連日30万人が、国会をとり囲んだ、という時、私



60年安保当時国会議事堂前に集まったデモ隊  
中央が重家豊

は、学生として、父は、広島から上京して、その輪の中にいた。そして、有楽町で寸暇の対面をした時の感激は忘れがたい。父からの手紙は、私だけではなく、友人から友人へ読まれ、いつかぐるぐるまわし読みされるようになった。父の『地方』・『雁木』等の生活記録運動にも、大学の友人たちが興味をもち、父と交流が始まった。

私は、初心をつらぬいて、望み通り、教師になった。子供たちと私のさまざまな話を、一番楽しそうに聞いてくれたのは、父と母だった。私は、帰省のたびに、何時間でも、学校や教室や自分の実践についてしゃべり続けた。

そんないい時代もまもなく終りをつげる。

私が結婚して、二人目の子を身ごもっている時、母は突然倒れ、逝ってしまう。昭和46年春のことだ。それも、もうけ主義の救急病院で、誤った処置のもとに死んだとしか思えない疑問だらけの死だった。父の嘆きはひとしおだった。もっと、手を打てたのではないか、少しも幸せにしないままあの世へ旅立たせてしまった、という悔恨は、ぬぐいがたく、うすぐらくなった実家で、一人ポツンとすわって考えこんでいる時間が多くなった。この時をさかいに、父は、医療問題・健康問題を真剣に研究し始める。それに関する本がたちまち、つみあげられる。一人暮らしの中で、玄米食、菜食の生活になる。健康食品を色々ためす、自己の体を、自力で守り、蘇生させていくいくつもの東洋的健康法を身につける、……こんなに注意していたのに、その父が、あんな難病で亡くなるとは思ひもかけなかった。前向きの姿勢を実践し、私達にもよく教えてくれた。そして、父は「公害から三原市民を守る会」の活動にエネルギーを傾けていく。このあたりの変化は、私には、実によくわかる。

母が亡くなってから11年後に、父が他界するのであるが、母亡きあとの父の人生は、あまりいいものではなかった。弟と父の対立、商売上の失敗、祖母(父の母)の入院と老衰……最も気になったのは、社会的にやりたい仕事ができるのかという悩みだったろう、しかし、いつも、父は大変やさしかった。がんとして、すじは通すが、家族には、自分ができるだけのことをしようとした。

祖母が、小さな田舎町で、一人暮らしもおぼつかなくなったのを見て、父は、祖母の面倒をみるために、三原中之町の家をひき払い祖母の家で暮らす事を決意する。ところが皮肉なことに、自分の体の方がいうことをきかなくなり、ひっこして1年位で、もはや、1時間汽車に乗っての三原までの通勤は無理となった。

すでに53年頃から、足のよろけが出はじめていて、階段で倒れたり、よけようと思う電柱にぶつかり、後へ棒のように倒れ、コンクリートで後頭部を打ったりしていた。2年間位、三原市内の病院、日赤、広大、広島市民病院等病院まわりを続けたが、病名も治療もはっきりしないまま、病状だけが進行し、帰省のたびに、ぐっと悪化している父を見るのが本当につらかった。足は、自分でくつがはけなくなり、5分程度の所まで買物に行くのがやっと、ベッドへの寝起きもやっと、というようになり、正月、よろけてガラスに頭をつっこんだまま、起きることもできないぞっとする事故もあった。口も、ろれつがまわらなくなり、家族



以外は、発音がきぎとりにくくなった。腕や手を自由に動かすことができなくなり、あれほどの達筆だった父が、米つぶほどの、しかもふるえる字しか書けなく、年賀状も、頂いたものの返事だけ、私が代筆するようになった。当然、しばらくするうち、口もとにうまく食物を運べなくなり、また、口の中であんだり、飲みこんだりするのもうまくできなくなった。排泄器官がだめになり、尿はパイプでとるようになった。

医者のすすめで、呉の労済病院にしばらく入院し、リハビリを受けていたが、本当は、そのような病気ではなかったのである。なるべく自分でやらないと動けなくなるという事で、きびしい訓練が続き、それは父にとっては大変な苦痛だったらしく「もう死んでもよいから家に帰りたい」といったらしい。私には、あとで「毎日が悲鳴をあげるほどで、力を使いはたし、もう食べる気力もなくなった」といっていた。食欲がなく、病状も進み、結局入院している意味がないということで、自宅に帰されて、なすすべもなく、ベッドの上に一日中ゴロンとしはじめたのが、56年の7月。

夏休み早々に帰省して、一見しておどろいた。目が光を失って、別人のようである。どうしても何とかしなくてはと、東京関係の病院をさがし始めた。その時、父が、もう長くみなかった健康雑誌で、草津に、難病を直す東洋式療法の温泉療養館を見つけ、そこに行ってみると言い始めた。電話で直接話すだけでなく、私の夫に現地にいってもらい、信頼できそうなので、意を決して父を広島から草津まで慎重に運んだ。祖母とは、これが今生の別れとなってしまった。父は、途中で一泊した方々の宿で、心の中でおばあちゃんとは別れをつけてきた、と語った。もちろん車椅子であり、新幹線ひかり号の身障者室を予約し、名古屋から私が車でつれていったのだった。

草津では、はじめ効を奏し、ふつうにしゃべれるようになったりしたが、2週間後、尿感染のための高熱でたおれ、群馬大学医学部附属病院にその後2週間入院する。やはり、全身症状が、すでにこういう療養館では、ムリな所にきているという医者の判断で、東京の王子生協病院に入院した。新聞記者で、医療情報のくわしい知人の紹介で、やっこの病気の専門家をみつけたのである。

はじめ小脳失調症らしい、それなら今はよい治療薬もあり、かんまんに進む病気だから生活もある程度できるようになるかと希望がもてたが、1週間後、くわしい検査の結果、もっと大変な病気であることが判明した。

体の神経の中枢部をつかさどる小脳と背髄のつけ根から脳が縮んでいって、その侵された部分から体がだめになっていく病気で、だいたい発病して4年位で死に至り、原因も治療法もわからない、ということであった。「背髄小脳変成症」とか。すでに、発病して4年近くたった。入院して1週間後、全く口がきけなくなった。また、それまで飲みこめていた食物が、1か月後には全く飲めなくなり、鼻からパイプを通して栄養剤をおくるようになり、8か月後には、点滴だけになった。手足はちぢまり、硬直し、ベッドの上で、むきをかえることもできなく、すでに、たんを出せなくなって、気管支切開もしていた。はじめ、首がう

なずけるうちは、文字板で会話もどうやら可能だったが、首をうごかすこともできなくなって、意思疎通は全くできなかった。痛みすら訴えられなくなった。

その状態で、じっと耐え、たえず目で何か訴えながら9か月も日を送り、ついに体力つきて、昭和57年7月10日王子生協病院にて、永眠したのである。64歳であった。

父の顔は、大変安らかで、葬儀のため遺体を広島まで運んだが、対面した祖母達に、まるでうそみたいと涙を流させた。父の心境も安らかなものであったとそばにいた私には感じられた。

やり残した仕事をそのまま、もっともって生きたかったにちがいない。しかし、こうして、渡辺悦次さん、鈴木裕子さんの献身的なお力で、父の残した資料が整理され、労働運動史や地域運動史の研究に役立つ形にして頂けて、父もどんなにか喜んでいることと思う。遺族として、心から感謝し、この出版に際し、お世話になった山代巴さん、松林俊一さん、佐藤光雄さんにもあわせて心よりお礼申し上げます。

1983年7月20日

# 解 説

渡 辺 悦 次  
鈴 木 裕 子

## 1 重家豊氏の経歴とその資料

まず、本書刊行のもととなった故重家豊氏(1918年～1982年)の経歴とその資料について簡単に述べる。

重家氏は、1918(大正7)年5月27日、神戸市にて出生。呉中学(現三津田高校)、慶応大学予科を経て、1942(昭和17)年9月、慶応大学独文科を卒業された(同期生に作家の堀田善衛氏などがある)。

慶応大学在学中の1940年1月、「中日戦争反対」を叫び、東京・雪谷警察署に留置されるなどのこともあった。

慶応卒業と同時に、福山連隊へ入隊、即日帰郷を命ぜられ、東京へ舞い戻り、同年11月、大日本産業報国会(産報)本部企画局に入った。当時の局長は三輪寿壮氏(戦後、社会党代議士)で他に、当時の上司、同僚に穂積七郎(戦後社会党代議士)、中林貞男(現、日本生活協同組合連合会々長)、畑中繁春、並木正吉氏ら、戦後、各方面で活躍した人たちがいる。

翌43年11月、軍隊入隊で産報を休職、野砲兵24連隊に入営、さらに西部軍教育隊を経て、第9航空教育隊に転属され、1945年8月の敗戦を静岡で迎えた。

将校として静岡での悲惨な戦災状況を目のあたりで見たこと、学生時代の反戦・左翼活動から転じて産報に入り、心ならずも戦争協力したこと、こうした経験が重家氏の戦後を決めた。

敗戦の年の秋、広島県安芸津に帰郷し、翌46年2月、三菱重工業三原車輛製作所(三車)に学歴を偽って、鋳型工として入所。同年8月、日本共産党に入党。

1947年、樋口利夫氏のあとを受けて、三車従組組合長に就任(のち組合長には樋口氏が返り咲いて、副組合長となる)。以後、1949年11月に解雇されるまで三車従組の幹部として終始、指導的立場にあった。

その間、敗戦直後に『文学城』(1946年6月創刊。三原市の若い文学なかが集まって発刊。同人に松江澄前広島県会議員、村上菊一郎早大教授らがいる)の創刊に加わったのをはじめ、47年12月には、三車を中心に勤労者文学会議(機関誌『働く人』発行)を組織、48年12月には新日本文学会三原支部を結成して、働くものの文学活動を展開した。

重家氏のこうした労働運動、文学活動への挺身は、重家氏長女の奥地圭子氏の回想にもあ

るように家庭的な不幸を生み、前夫人との離婚に至った。離婚後、東洋繊維三原工場従組の婦人部長であった西田康子氏(1971年病死)と再婚。

最盛時300人の共産党員を誇った三車細胞も、48年の組合分裂で激減、49年から50年にかけての大首切り攻勢がそれに拍車をかけ、三車従組の運動は大きく後退した。49年11月の第1次解雇で蹴首された重家氏らは、三車再建同盟を組織(1950年)し、不当解雇反対の闘争を組むが、ほとんど成果をみぬうちに終息した。

解雇後、重家氏は同じ首切りなかまの同志たちと三陽社(看板製作等の請負)を創立、かたわら新日本文学会、労農救援会(のち国民救援会)、平和運動等に従事。さらに49年の広島県議補選(解雇前)、50年の三原市議選に共産党より立候補(いずれも落選)するなど共産党の活動にも積極的にかかわられた。

晩年においては、健康問題、安全問題(食品の安全問題など)に大きな関心を持ち、公害反対運動の先頭にたたれた。

こうした活動に加え、とりわけ目を眩るものに重家氏の文学活動がある。くわしくは別稿、山代巴氏の「重家豊と文学運動」をみられたいが、敗戦直後の『文学城』・『働く人』の発刊から始まって、氏が深く関与した文学サークル機関誌だけでも以下のようなものがある。

沿岸地帯 1952年5月創刊

沿岸詩人 1954年7月創刊

地 方 1956年5月創刊

雁 木 1964年4月創刊

これらの諸雑誌に重家氏は多くの作品を発表(ペンネーム堀川五郎、秋津進、三田文平、いえ・しげお、おもや・ゆたかなど)し、生涯のテーマである戦争と「転向」の問題を追求されようとした。同時に「地方文化」・「地方文学」の可能性を自らの文学的営為を通じてさぐろうとされた。その志は、不幸、病魔のおかすところとなり、挫折したが、とはいえ、氏の“種蒔く人”としての功績は長く記憶されてよい。

本資料目録は、冒頭に掲げた目次からもうかがいしれるように、重家氏の経歴を反映し、氏が深くかかわった活動分野のものが中心となっている。

もとより個人所蔵にかかるものであり、かつレッドパージ、共産党の50年分裂問題といった諸事情が重なって、保存状況に精粗はある。が、特に戦後初期の三車労働運動史や三原を中心とした労働者文学運動の歴史などを理解するうえで必要不可欠な資料が多く含まれている。また広島が生んだ作家の故峠三吉氏や山代巴氏の書簡など興味深いものもある。さらに全国的レベルでは、三鷹事件(1949年)の被告、故竹内景助氏が山代巴氏に宛てた獄中書簡類など、三鷹事件の真実を知るうえで意味深長な貴重なものも含まれている。この他、各地で発行された戦後初期のサークル雑誌、労働組合関係のパンフレットなど枚挙にいとまがない。

これらについてくわしくは直接、現物にあたっていただくことにして、以下、本資料目録

の主体をなす戦後初期の三車労働運動について叙述することで、解説にかきたい。

## 2 戦後初期の三車労働運動小史

### 三車従組の結成

三車(三菱三原車輛製作所)は、1943年4月の開所以来、三原地方の一工場というローカル的なものではなく、日本の大工場として位置していた。職員272名、工員2,013名、合計2,285名(内、女子160名)の従業員を擁し、「本格的な車輛専門工場」として発足した三車は、43年末には3,000名を突破、翌44年末には約6,000名(勤労働員による学徒、女子挺身隊、徴用工を含む)となり、戦時体制の進展とともに従業員数はふくれあがっていった(『三原製作所20年史』、1966年刊)。

三車は敗戦後も戦災をまぬがれ、また三菱重工業唯一の非賠償工場として、生産設備も全面的に確保でき、引き続き車輛生産に励むことができた。鉄道の復旧・整備は焦眉の急をようしたので、需要は増すばかりであったという(前掲『三原製作所20年史』)。

とはいえ、敗戦後のとどまることを知らないインフレーションは、三車に働く労働者の生活をも極度におびやかし、「三菱一家」を誇っていた従業員の間にも、団結・組合結成の気運を生じさせた。

こうして1945年12月12日、三車従業員組合が結成された。このときの綱領・宣言を掲げておこう(なお、発足時の組合員数は2,728名〔内、女子228名〕で組合長は伊勢本鹿市)。

### 三車従業員組合

#### 綱 領

- 一、封建的支配及帝国主義的思想ヲ排除シ、民主主義的団結ト自己訓練トニヨリ我等ノ経済的生活ノ安定ヲ確保シ且之ガ向上ヲ期ス
- 一、我等ハ我等ガ従事スル三車ノ生産ヲ通ジ、世界ノ承認シ得ル新日本ノ建設ニ貢献センコトヲ期ス

#### 宣 言

吾等勤勞生産人ハ皇國有史以来未曾有ノ民族的悲運ニ逢着シ今ヤ敗戦の冷徹ナル事実ノ代償トシテ露呈セラレタル深刻苛烈ナル世局ト事象ノ為国民否全勤勞生産人ノ生活ニ重大深刻ナル不安ト脅威ヲ招来シ明日ノ生活最低線ノ確保モ難キニ至レリサレバ斯ノ如キ事態ノママ推移放任センカ直ニ急速ナル生産力ノ低下勤勞意欲ノ減退トナリ再建日本ノ前途憂フベク全産業ヲシテ恐ルベキ危殆ニ瀕セシムルヤ必セリ今ヤ帝国主義的封建的支配力ハ厳正ナル輿論看視ノ下一途ニ没落崩潰ノ過程ヲ辿リツ、アル一方再建新日本ノ産業ハ新ナル理念ト構想ノ下ニ勤勞生産人ノ手ニ依ル真ノ民主主義的産業トシテ久シキニ

亘レル飽クナキ搾取ト不当ナル権力ノ羈絆鉄鎖ヨリ解放セラレ健全ナル新発足漸ク其ノ緒ニ就キ之ガ維新ノ黎明期ヲ迎ヘントス是ニ於テカ吾等勤勞生産人ハ真ニ生産人タルノ自覚ト使命ニ基キ全従業員個々ノ盛り揚ル総力ト熱意アル要望トニ依リ茲ニ鞏固ナル團結ノ下吾等勤勞生産人ノミノ手ニ依ル健全ナル組合ヲ組織シ組合綱領ニ明示セラレタル組合ノ基本精神ヲ遵奉シ規約ヲ厳守シ以テ内組合員相互ノ勤勞精神ノ昂揚育成ニ努メ且組合員及其ノ家族ノ生活ヲ擁護確保シ並ニ共済福利ノ向上発展ヲ図リ外組合員ノ健全真摯ナル総力ヲ傾注シテ勤勞生産ニ邁進シ再建新日本産業ノ急速ナル復興ニ貢献センコトヲ期ス

右宣言ス

昭和二十年十二月十二日

三車従業員組合組合員一同

〔以下規約が続くが省略〕

〔資料目録登録番号1〕

片かなまじりのこの綱領・宣言は重家豊によれば、戦前、神戸塗装工組合で活動した全協（日本労働組合全国協議会、左派・半非合法の労働組合）系の活動家松本によって起草されたものという。「民主主義的團結」、「新日本」などの言葉にまじって「皇国」、「勤勞精神ノ昂揚」など、新旧の言葉・思想が入りまじった転換期・激動期ならではの産物といえよう。なお「規約」第12条にある組合役員の「職場常会長」、「工場委員」制は、戦前の産報組織にならったものだった（重家氏談）。

広島県下では日立造船因島労働組合（1945年11月23日結成）に次いでいち早い組合結成であったが、そのウラには、次のような事情もあった。すなわち「基幹産業、金属・機械工場の強力な労働組合、党組織の結成が革命のカギをにぎると認識したうえで三車にオルグ活動を展開した」（当時、三原地方で共産党の再建に従事した小見山富恵氏談）という共産党サイドの働きかけである。敗戦時においても従業員3,300名を抱えていた（なお46年末には4,100名、48年末には4,260名の従業員がいた）県下有数の民間企業である三車を制することは、三原地方のみならず、県下労働運動の帰趨に甚大な影響を与えるものと意識されたのは当然であった。まもなく西日本最大の共産党経営細胞の基盤となる三車従組の結成に、共産党が猛烈に働きかけたのは先に述べたような三車の占める位置の大きさであった。

なお、三車従組の結成に続いて12月20日、三車職員組合が社会党系の戸田勝巳（のち三原市長）らの働きかけで結成をみた。

#### 「団体協定」締結と三車細胞の発展

1946年2月20日、三原車輛製作所は、三車職員組合の組合長林哲夫ほか組合幹部119名に一方的な解雇通告を行なった。これは三菱本社の指示によるもので、三車従組と比較して力の弱い職組に攻撃の矢が向けられたのであった。争議は4月20日まで続けられたが、その過程で職組から分れた第2組合がつくられ（4月7日）、会社側と独自の交渉を始めた。一方、三車従組は組織をあげて職組支援に乗り出し、①賃金値上げ、②1時間の休憩を含む8時間

労働制、③団体協約締結、などの要求を掲げて3月15日から22日まで争議に入った。

4月13日、職組は労働組合法第11条違反として県地方労働委員会に提訴、県下初の不当労働行為提訴を行なった。これに対し、会社側は、労組法の施行は46年3月1日であるから、雇傭契約の解除にすぎないと反論した。地労委は4月18日、第3回臨時総会を開いて、調停小委員会を構成、4月21日、5月4日の2回にわたって斡旋を行なった結果、119名中8名の解雇で妥結、組合側有利のうちに解決した。

三車従組も、要求をほとんど獲得したうえ、団交権の追認、所内機構の民主化などを含む次の「団体協定」・「覚書」を締結し、会社側の大幅な譲歩をかちとった。なお、この「団体協定」は49年7月の会社側からの「失効通達」まで有効だった(前掲『三原製作所20年史』)。

### 団体協定

三菱重工業株式会社三原車輛製作所ハ三車従業員組合ヲ善認<sup>[ママ]</sup>シ爾後組合ヲ通シテ一切ノ交渉ヲ行フモノトシ三車従業員組合ハ誠意ヲ以テ組合員ノ勤務ヲ統制スルモノトス

- 一、組合幹部(副部長以上)ハ必要ニ応ジ組合事務ニ従事スルコトヲ承認スルコト
- 一、組合員ノ人事異動ハ組合ト合意ノ上行フコト
- 一、職制改廃ハ組合ト合意ノ上行フコト
- 一、就業勤務に関スル制度及規定ノ改廃ハ組合ト合意ノ上行フコト
- 一、生活費ニ適応スル様給与ヲ調節シ生活ノ保証ヲナスコト
- 一、賃金給与制度ノ変更ハ組合ト合意ノ上行フコト
- 一、従業員ノ福利厚生施設ノ運営ニ組合ヲ参加セシムルコト
- 一、従業員ノ賞罰ハ組合ト合意ノ上行フコト
- 一、会社側代表ト組合員ノ総意ニヨリ成ル事業経営協議会ノ決定事項ハ責任ヲ以テ実行スルコト、但シ協議会ノ内容ハ別ニ之ヲ定ム

万一会社側ニ此ノ協約違反アリタル場合ハ三車従業員組合ハ三菱重工業株式会社三原車輛製作所ニ対シ三車従業員組合ノ生活擁護向上ノタメニ一切ノ行動ノ自由ヲ保留スルコト、但シ本契約ノ期限ハ六ヶ月トス、但シ一方ニ於テ期限満了一ヶ月前ニ本契約ノ破棄ヲ一方ニ通知セザルトキハ引続キ本契約ヲ有効トス

昭和二十一年四月二十日

三菱重工業株式会社 長田清次郎  
三原車輛製作所  
三車従業員組合長 樋口 利夫

## 覚 書

三菱重工業株式会社三原車輛製作所ハ三車従業員組合ノ健全ナル発達ヲ図ル為メ本組合ヲ全面的ニ支持スルモノトス

昭和二十一年四月二十日

三菱重工業株式会社 長田清次郎  
三原車輛製作所  
三車従業員組合長 樋口 利夫

[資料目録登録番号2]

この争議の解決を機に「職組は第1、第2組合の合同を行ない、産別(注・全日本産業別労働組合会議)加盟を決定、従組、職組の合同さえ話し合いが進められるようになった。こうした闘争の勝利は益々組合員の意識を高め、遂に一時共産党450名を擁し、産別の牙城を誇って、全国及び県下にその存在をクローズアップさせたのである」(広島県立労働科学研究所『広島県に於ける戦後労働運動の概要』、1950年刊)と概括されるほど、活発な組織活動を展開した。同年8月ごろまでには約10人の共産党員を数えるにすぎなかった(重家豊氏談)のが、「西のレングラード・プチロフ工場、東の三菱三原車輛」、あるいは産別会議で強かった東芝の堀川とともに「東の東芝・堀川町、西の三菱・三原車輛」と並び称されるほどの大細胞組織をつくりあげていった。

その模様は『労働者』1947年6月号(日本共産党出版部発行)掲載の次の「細胞便り」からもうかがえよう。

広島県三原市の三原車輛工場は東京機器下丸子工場とともに、三菱重工株式会社のなかでも、もっとも統制のある組織の強い組合として知られている。それもその筈、この工場には労働者の利益のためならいつでも火のなか、水の中でもとびこもうという共産党員が、従業員三千三百名のうち一割以上をしめていて、工場細胞は職場のすみずみまで組織され、組合のため先頭に立って闘うからである。

石炭キキンで町の風呂屋が休みがちになれば、細胞はすぐこれを取上げて、工場に風呂場をつくるように職場常会にもちこむ。職場常会が決議すればすぐ工場長に交渉する。口八丁の会社側はこんなときいつも

「材料がない」「レンガが一枚何円する」「石炭がない」

と労働者の要求をふみにぢろうとする。共産党員が先頭にたっているこの組合では、「ああそうですか」とは引きさがらない。

「会社がやらねば組合員が材料をさがしてみせる、職人がなければ組合員の手でもつくってみせる」

とキビキビ仕事をすすめてゆくので、さすがの会社も逃げる口実がなくなって承認して



しまう仕末である。

大和寮と敷島寮の寮細胞が、火鉢かくとく闘争をとりあげたときも、寮生大会は「各室に一個ずつ火鉢を支給せよ」と決議したが、寮舎係長は「練炭がない」「火鉢が手にはいらぬ」と逃げた。そこで決議促進委員会は火鉢の買入れさきから練炭の入手先まで調査して、会社側と交渉したのでついに要求を貫徹した。

部屋に一個の火鉢といえばなんでもないようだけれど、山中街道を西に吹きまくる寒風にふるえあがっていた寮生のみじめな生活にとってはどんなに大きな収穫だったろう。楽しいはずの休日を、寒さのため一日床にもぐりこんでいた青年達が、火鉢をかこんでなつかしい故郷の思い出や楽しい座談にときのたつのも忘れ、朗かな笑いが火鉢を中心にうずまく有様をみれば、一つの火鉢が寮生の生活をどんなに豊かななごやかなものにしたかを知るであろう。

そういうこまかい人使いをする共産党員だけにこの細胞には幾つかの美談がある。

工場から約2里ほど離れた登町沖浦町は源平盛衰記に出てくるあの平家の落人の末孫が住んでいる部落として有名であるが、市内とは名のみで、切りたつ山にさえぎられ、今でも電灯一つないランプ生活をしている。ところがこの部落の青年達にも時代の波がおしよせて、二百名の青年団が先頭にたつて「納税と供出を強いながら、市制がひかれて十年になるのに、電灯一つ引こうとしない」。

市当局の無能ぶりに憤慨して闘争にたち上った。そこで党細胞は遠藤、宮原、板垣の三同志を応援のため派遣し、夜を徹して青年達と懇談する一方、他方ではこの実情を職場の工場委員会に持ちだしたところ、

「よし、労働者の手で電灯を引こう」

と決議した。さらに一月廿八日の吉田内閣打倒国民大会の席上で市民に訴えたら、ここでも同様の決議がなされたので市当局に交渉を開始し、電産の組合員の応援を得て架線工事の測量に着手し、ついに新年度予算にこれを計上させることに成功した。自由党の地方ボスが選挙のたびに約束しながら今日まで実行できなかった仕事を、ここの細胞はまたたく間に実行した。この水際だった活動ぶりに部落の老人までが共産党に対する今までの偏見をすてた。

また、同志大原の住んでいる沼田西村は戸数が四百戸、人口千五百名のきわめて封建的な農村で、今までも幾度か農民組合をつくろうと働きかけたが、そのたびに失敗してきた。そこで党細胞は同志大原を中心に、まづこの村の青年に呼びかけ、さらに一軒一軒説きまわって苦心惨たんした結果、とうとう農民組合の組織に成功した。ところが地主等は県の奥農業会長をつれてきて、天下り式に農業同盟というものをつくり、村民達にめくら判をおささせて古い顔役を役員にまつり上げ、農民組合の切りくずしをはじめた。だが新しい農民組合は十二カ条のスローガンを押したて自主的供出、空俵の無償返却、農地委員不正選挙責任追及、配給機構の改正、吏員の怠慢追及、等の要求をつぎつぎに

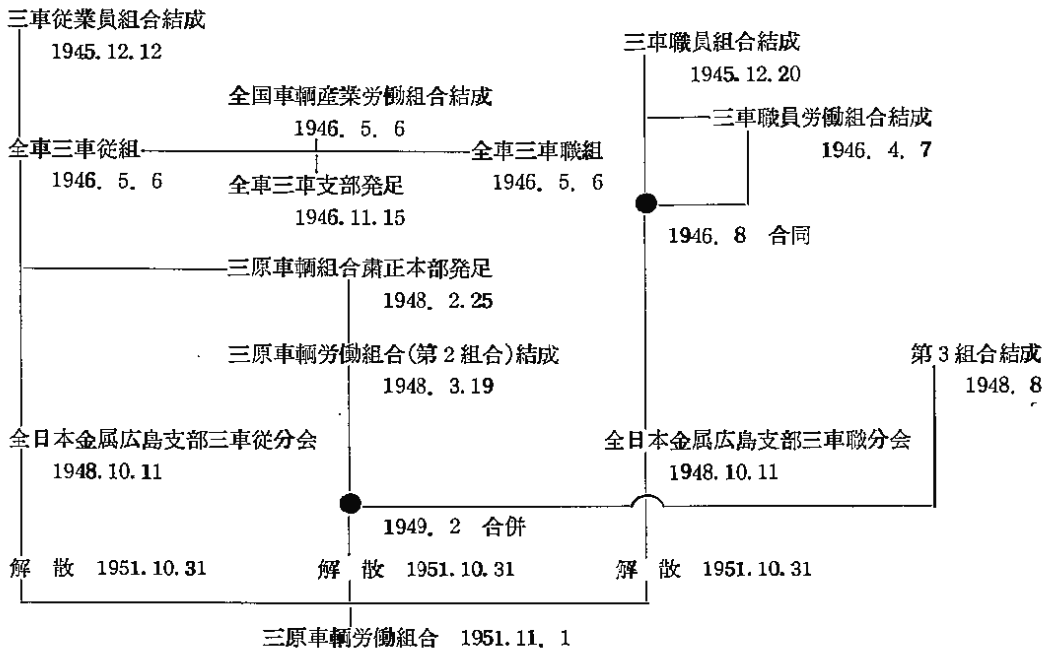
獲得した。この闘争の先頭には党細胞だけでなく同村から三原車輛工場に働きにきている労働者が一斉に立った。そればかりでなく一鉄工場では職場全体が闘争資金カンパをして農民を激励した。農民組合はまたこれに答えて農産物を労働組合にすすんで持ってきて労働者と農民は文字通り固い握手をした。

こうした量的成長・拡大とはウラハラに、三車の従業員の意識の中には「三菱を飯ビツ」と考える(重家豊氏談)意識がなお色濃く残っていた。また1947年12月の天皇の工場行幸の際、整列し、天皇の到着を待っていた従業員の間から期せずして「天皇陛下万歳」の声が一斉にあがるなど、戦闘的といわれた組合の、その基盤は意外に古い意識のうえに築かれていたのである。なお余談だが、このとき天皇行幸に抗議して組合事務所に待機していた重家豊は「天皇陛下万歳」の声を聞き、「これで敗けた」と思った、という。

西日本最大の経営細胞を誇った三車従組にして、かくたる有様であったが、この“脆弱さ”は、後述する分裂問題の際、はっきりと顕現したのである。まさに300人からの細胞が「一夜にしていなくなった」(重家氏談)といわれる状況が生まれたのであった。

なお、三車従組結成時より1951年11月、従組、職組とも解散のうえ、1本化し、三原車輛労働組合として発足するまでの系統図を次に掲げておく。

### 三車従組(従分会)系統図



\* 1948.10.11~14 全日本金属労働組合結成大会(機器・鉄鋼・車輛の合同)

\* 1948.12.10~11 全日本金属産業労働組合(大金属)協議会結成大会

\* 1949.10.27~30 大金属結成大会(金属・電工の合同)

### 相次ぐ組織分裂と三車従組・三車従分会の後退

1948年に入り、三車従組は激しい分裂の時代に入った。そして翌49年にはドッジ・プランによる企業整備が始まり、車輛産業はとくにその影響を集中的に受けた。三原製作所では臨時工の解雇のあと10月に本工の解雇発表が行なわれた。解雇に先立って7月5日に第1次懲戒解雇(川上問題)、8月31日第2次懲戒解雇(15名)、9月16日第3次懲戒解雇(5名)が出た。これは第2、第3組合と組織の分裂下で会社側が産別、全日本金属に所属する三車従分会に対する執拗な攻撃を行なったもので、大きな打撃となり、財政的にも苦境におちいった。

翌1950年は6月25日に朝鮮戦争が勃発、新聞、通信放送に始まるレッドページが全国的に広がったが、三車従分会でも樋口利夫ら14名が共産黨員および同調者としてページされた。

このページによって三車従分会は事実上組織力が解体され、翌51年11月1日に結成の三原車輛労働組合に吸収されてしまうのである。

以下、1948年の組織分裂以後の三車の運動を簡単に述べる。

### 肅正本部の発足と第二組合の結成

産別会議の西の牙城といわれた全国車輛三原支部で1948年に入り、組織分裂問題が起った。この分裂は、いわゆる産別民主化運動としてではなく、同年1月に日本労働組合総同盟(総同盟)中央委員会が提唱した労働組合民主化運動に沿うものであった。

三原支部を離れ、新たに3月19日に結成された第2組合は三原車輛労働組合(三車労組)を名乗った。同組合は5月10日に総同盟に加盟した。

全国車輛三原支部は、三車職員組合と三車従業員組合の職員、工員の2つの組合から成っていた。同年10月、全国車輛、機器などが合同し全日本金属労働組合(全金属)が結成されるや三車従業員組合は全金属広島支部の中核として三原車輛従業員分会となった。

さらに三車従組と三車労組の分裂に対して、その統一を計ることを目的として8月には第3組合が結成された。

翌1949年2月、三車労組と第3組合は合同、三車労組となった。

さて、これより前の1948年2月、全国車輛三車従組の動きに反対するグループは同月20日に執行部に対し、「壮年部の結成」を申し入れてきた。その理由は

- ① 壮年部結成申込は一般の意識水準が低いからこれを自成一派のために作りたい
- ② 青年部と同一の部活動をやりたい

であった。23日の幹部会、翌24日の工場委員会は①青年部との対立、②組合の存在がぼやける、③これが大きく浮かびあがると支部統一に支障がある、などを挙げて反対した。

この反対を待っていたかのように、25日に壮年部結成が一方的に否決されたとの理由で工場内のみならず三原市内に「三車組合肅正本部」の名でビラが貼りめぐらされた。

こうして反対派は肅正本部として公然と活動を始めた。

翌26日から組合幹部と肅正本部代表との会見が行なわれ、肅正本部から

- ① 現組合を全面的に解散すること

- ② 再出発の際政党色をもつものは、一切の組合の役員には就かせない
- ③ 工場委員会にて上記主旨が採択されれば可、採択されないときは行動の自由を留保する

を提案、27日の拡大工場委員会で検討となった。

3月3日に肅正本部の見解、執行部の見解がプリントして提出され、審議となったが、双方の意見が対立するばかりで、4日の幹部会は肅正本部の解散を決定した。だが翌5日の工場委員会は大衆討議の結果、21対22、保留3で解散しない事に決定した。

次いで3月8日に三車従組臨時大会が開催され、肅正本部側は産別脱退、組合解散、全車脱退、新組合には政党色を注入する人を役員としない、を主張、結局、組合解散について翌日に無記名投票実施となった。

3月9日の投票の結果は、組合解散賛成とする者1,149票、解散反対とする者1,724票となった。解散せず、とはなったものの事態は深刻で、執行部は総辞職した。

これは肅正本部にとっては予想外の得票数でこれに勢いを得て、3月11日に三原車輛労働組合創立準備会を発足させ、声明を発表、19日には結成大会を開いた。

三車従組は準備会の発足に対して16日にその中心人物5名を団体協約(クローズドショップ)により除名を決定、会社側に解雇を申し出た。この労働協約の適用、第2組合の三車労組の承認をめぐり、紛糾した。だが、3月24日の地労委に対しての三車労組と会社側との団体協約権承認申請に対し、地労委は、団体協約は第三者(第2組合)に及ばず、しかし、第2組合(三車労組)が組合法上正式に認められれば、団体交渉権は会社側との間で当然ある、との解釈をし、三車労組に労働協約権の確認ではなく組合資格の申請をさせ、これを承認したのであった。

こうして産別系の三車従組と民同派の三車労組の2つの対立した組織が工具層の間にできてしまったのである。

肅正本部・三車労組と三車従組の対立点は、三車労組が地労委に提出した次の「三原車輛労働組合結成経過」が端的に示している(3月3日のプリントの肅正本部の見解とはほぼ同一趣旨)ので紹介する。

#### 三原車輛労働組合結成経過

〔三車従組員組合〕

三車従組員労働組合は過去二年有半に亘り完全に政党员(共産党)のフラク活動に依り労働組合たるの自主性を失い、完全なる政党の支配下に置かれている。例をあげれば、執行部役員中、二、三を除く総ては党员か、シンパを以て構成し且つ唯一の決議機関たる工場委員会の構成も之等の分子であり、執行部提出の議案も事前に細胞合議にかけ、結論を出して置き、後始めて是を決議機関の工場委員会にかける、すぐ様得たりと細胞は結論に基き、賛成意見を述べた。分子は是に応じて一勢に挙手声を大にして賛意を表し、是等分子以外の委員発言を求め、反対意見を述べれば、組合意識低調なり、レベルが低

い等と嘲罵、又は弥次を飛ばし其の発言を妨害し一挙に採決にもって行き、之を決定する非民主的な其の独裁ぶり、一、二の例は本年三月中旬、組合闘争資金二十万円(一人六十円宛積立して絶対に他に流用しないと確約あるもの)を組合長、財政部長、共済部長之等三名が秘密裡に引出し闇物資の取引に流用費消した事件、調査に名を借り採消運動に狂奔した。二、三の者も皆之共産党員であり、組合員の受けたる損害は甚大である。又、一組合員が不幸にして八カ月に及ぶ入院加療のため、経済的に行詰り、餓死一步前に正当なる組織を通じ、此の救済方法を嘆願した時、一紙半銭の抛出もせず、其の儘時日は経過した。然るに同じ党員が一度病気になるばすぐさま五千数百円の大金を見舞金として贈り、之を全組合員に一人二円宛の頭割りとして徴集した事実、又、同時に他の党員が盗難にあった時、是も又全組合員に資金カンパの名のもとに金を集め党員に贈る等々、一々あげれば限りのないほど党第一主義であり、特に青年部の役員になるには共産党員か、シンパ以外はなれない規約があるが如き有様である。此の青年部役員は終日会議だ、研究だと殆んど作業に従事していない。斯る状態では生産は阻害され、基本的人権すらじゅうりんされ、自主性もなく民主的労働組合が一つの政党に依って支配されるので労働者の立場から此の鉄の鎖を切り明朗なる真の民主的自主性ある組合となさん為、同業の組合員数拾名相寄り組合肅正運動を展開した。之を組合肅正本部と言う。運動方針として第一に壮年部結成(組織を通じて要求した)、内容と結果省略、第二段階、豪末の反省の色なく遂に弾圧を加ふるに至りし為、是非なく組合を一応白紙に置き再出発(組合を政党支配下に置かんとする危険あるものは何党に依らず組合役員につけぬ事を第一条件とす)し、真の組合統一化、以上の方針にて実現に努力せしも彼等のあらゆる脅迫と暴圧デマ宣伝個人攻勢言語に絶するものあり、特に労働者とし尊重すべき臨時大会すら議長の独裁と細胞分子の謀略に依り流会に終り、又其の二日目の大会も同様混乱となり肅正本部員は退場の止むなきに至り、一方的に大会の決議をなせり、此の有様を目撃せる組合員多数は激怒し彼等の野望と其の独裁振りに見切りをつけ遂には新組合設立に飛躍したのでありまして設立準備会発足となり是等一般組合員多数の盛り上った意志のもとに三原車輛労働組合は三月十九日結成となり、本日に至りました。〔以下略〕

一九四七年三月二十九日

三原車輛労働組合

〔資料目録登録番号118〕

三車労組結成時の三原工場内の組織別現勢を地労委の資料では次のようにみていた。

現在の勢力関係は職組約五〇〇名、従組約一、四〇〇名で、全車の三原支部を構成し、第二組合の三車労組は職員を含まず従組の脱退者約一、八〇〇名を結集して居る。労政事務所の話では同工場の共産党員は約一四〇名シンパー一五〇名前後と言う。第一組

合の話では正式な共産党員は十名足らずと言う。

[資料目録登録番号118]

この三車労組の結成は当然のことながら三車従組にとって大きな痛手であった。三車従組はこの動きの背景には反共民同運動の全国的な流れ、総同盟、社会党の指導によるものと次のように見ていた。

昭和二十三年二月、社会党代議士高津正道、総同盟高野実、鍋山貞親らは相次いで三原市に來り、三原地方に於ける民同的勢力を育成、広島県に於ける革命的拠点であった三原地方労働戦線の分裂、弱化を図る計画が着々なされていた。三原地方労働組合連盟は帝人(六〇〇〇)、東洋繊維(二五〇〇)、三菱三原車輛(四〇〇〇)を主体にしその戦闘的性格を維持して来ていたが、その支柱をなしていたものは全国車輛産業労働組合三原車輛支部であった。

民主戦線候補として市長に当選した社会党戸田勝巳は間もなく労働者を裏切り始め三原車輛を中心とした労働者から漸く糾弾の声が昂っていたが、帝人東織に於ける社会民主々義分子は除々に勢力を拡大すると共にその闘争力は極度に御用化し三原車輛支部は(孤か)派立的立場に置かれつつあった。

その時機に日本社会党三原車輛班を中心として三車労働組合分裂が画策され職制の圧力、会社幹部の隠然たる援助のもとに二十三年三月下旬、第二組合を結成、公然と反共反産別のスローガンを掲げて狂奔しまもなく約六〇〇名の組合員を獲得。三原車輛総ム部長を使用者側委員の筆頭とする広島地方労働委員会も亦クローズショップ協約に於ける第二組合結成を認可し、全車労組の抗議的再審査要求も却下した。

かくして会社のヒ護のもとに職制の圧迫による第二組合拡大は功を奏し、組合員の日和見は助長され脱退が相次いで組合も亦その闘争力を漸減し、全国車輛労組が合同して全日本金属労働組合に発展するや、職員組合は戦線を一応離脱して別個に分会を結成し、三原車輛製作所内には、全金属広島支部三車従業員分会、同職員分会、及び総同盟三原車輛労働組合(第二組合)の三組合は鼎立、相互に牽制し合った。

[資料目録登録番号271]

この組織分裂への三車従分会の対処は、当初幅広い統一ということでの活動であったが、ますます組織的に後退を重ね、1948年年末近くでは800名にまで落ち込んだ。一方三車労組はその頃2,300名の組合員を擁するほどになった。

一方三車従分会はその年の越年資金闘争で自信をもち、従来の運動のやり方を日和見と自己批判し、「闘う中のみ統一戦線はあり得る」との方針に転換、金属の方針を忠実に守るとの方針を出した。

### ドッジプランと大量解雇

翌1949年は、前年12月の経済安定9原則発表に続いて、超均衡予算、竹馬経済脱却のドッジ・プランの実施となった。

政府受注のウエイトの大きい車輛産業にとってドッジ・プランの打撃・受注量の大幅削減は大打撃であった。その状況を前掲『三原製作所20年史』よりみてみよう。

ドッジ旋風によって倒産するものも続出したが、「三原車輛製作所」としてもまたそうした影響をうけないわけにはいかなかった。それはまずドッジ・ラインの実施によって国鉄の予算が大幅にけずられたことである。主要な受注先である国鉄の大幅な予算減少によって、車両新製および修繕工事の需要は次の表にみられるように激減し、しばらくは苦難の時代をすごさねばならなかった。

昭和23～26年車両生産実績

	23年	24年	25年	26年
修繕工事	250両	45両	21両	55両
貨車	124	94	89	114
蒸気機関車	10	25	16	5
電気機関車	8	5	4	2

〔『三原製作所20年史』より〕

三原工場では最初に①臨時工の解雇、②給食施設の縮小、厚生費の節約、③定時間内の生産量の増加、として3月中旬に組合への申入れが工場側からなされた。

臨時工は、第2組合の三車労組の影響の下に「三友会」という組織を結成していた。三車労組は、ドッジ・プランの前に臨時工の就業保障は他企業への転職についての援助のみで首切り反対は打ち出せなかった。このため臨時工は第1組合の三車従分会に支援を求めたが、三車従分会も首切りを撤回させるだけの力はなかった。

こうして臨時工の首切りのあとに10月7日に第1次首切りが出された。これについては退職金の増額などの要求で結果的には落ち着き、解雇撤回は出来なかった。

重家はこの解雇の際に該当者とされ、11月7日に解雇された。

翌50年6月の朝鮮戦争後のレッドパージによる解雇を含め、1943年末に4,260名に達した従業員のうち約1,100名が解雇された。

こうして重家が最後まで頑張った三車従分会も事実上解体に追込まれたのであった。

この三車従分会の解体のあとの三原地方の労働運動は民同運動路線による組合がヘゲモニーを握り、左翼労働運動は完全に後退していったのであった。

故重家豊氏はこの敗北の歴史の教訓として“階級意識の変革こそ大切である”とっておられたが、その教訓は今なお重要な実践課題として残されているのではなからうか。



# 社会労働運動資料

1945—1951年

I 労働運動

1 三車従組・全車三原支部・全日本金属広島支部三車従分会・三車再建同盟

1	三車従業員組合	三車従業員組合綱領・宣言・規約	1945年12月12日	活—19cm×42.5cm
2	〔三車従業員組合〕	団体協定 *三原車輛製作所と三車従組とで	1946年4月	ト—B 4
3	三車従業員組合組合長 樋口利夫・教育出版部 長岩田誠一・幹部一同	陳謝状 *川崎車輛支部労働組合長川上種作宛、機関紙『轟進ニュース』第1号での川崎車輛争議についての誤報のため	1946年6月13日	肉—A 5—2枚
4	〔重家豊〕	陳情書〔起案〕 *飢餓突破資金1人500円、中食給与の要求	〔1946年〕	肉—便箋—6枚
5	全車三原支部	メッセージ〔重家起案〕 *1946年9月の広島鉄道局組合員と海員の合同大会宛	1946年9月	肉—便箋—4枚
6	三車従業員組合組合長 樋口利夫	祝詞〔重家起案〕 *私立三菱糸崎青年学校卒業式	1946年9月7日	肉—便箋—8枚
7	三車従業員組合	組合長談話〔重家起案〕 *三車従組の増産運動について談話 末尾欠	1946年9月	肉—便箋—4枚
8	三車従業員組合	電力潤濁に関し組合員諸君に訴う	1946年11月4日	ト—B 4
9	〔全車三原支部〕	全国車輛産業労働組合三原支部規約	1946年11月15日	ト—B 4
10	〔全車三原〕支部長樋口 利夫	如何に関ふべきか—組合員諸君に訴ふ〔重家起案〕	1946年12月19日	肉—B 4—3枚
11	〔三車従組〕	三車従業員組合規約	1946年	ト—B 4
12	〔重家豊〕	執行部運営方針〔起案草稿〕	1946年12月	肉—B 6—3枚
13	〔重家豊〕	事務の能率化〔起案草稿〕		肉—B 6
14	〔重家豊〕	会議の能率化〔起案草稿〕		肉—B 6
15	〔重家豊〕	〔三車の寮問題についてのメモ〕	〔1946年〕	肉—B 4—2枚
16	三車従組教育出版部	『ばくしん』第3号 *「自主的生産増強運動展開、資本攻勢への反撃だ！」ほか	1946年8月25日	活—タブ—2p
17	三車従組教育出版部	『ばくしん』第4号 *「われらの生活権を守れ、キガ突破資金要求!!」ほか	1946年9月25日	活—タブ—2p
18	三車従組教育出版部	『ばくしん』臨時特輯号 *民主主義革命へ怒濤となるゼネスト、吉田内閣をこのままにしておいていいか	1946年10月18日	活—タブ—2p

19	三車従組教育出版部	『ぼくしん』第5号 *「ぼくしん座談会—新段階に立つ 労働組合運動」ほか	1946年12月20日	活—タブ—2p
20	三車従組	労働協約書 * 車輛連盟と全車労との	1946年12月22日	ト—B 4
21	「全車労」三原支部情報部	勝利への檄	[1947年2月]	ト—B 4—2枚
22	〔三車従組〕	工員昇格登用規程 * 1947年2月1日より実施	[1947年]	ト—B 4—2枚
23	三車従組	〔秘〕 工員成績査定基準表（昭和22年 2月11日附）	1947年	肉—B 5
24	三車従組組織部	本年度三車労組運動一般方針大綱 〔草案〕	1947年	ト—B 4—2枚
25	〔重家豊〕	本年度三車労組運動方針大綱〔草稿〕	1947年	肉—B 4—2枚
26	〔重家豊〕	支部統一は如何にして進めるか 〔草稿〕 * 三車従組・職組の統一問題で	[1947年2月18日]	肉—B 4
27	三車従業員組合教育出版部	『ぼくしん』第6号 *「〔解説〕革命団結復興 本年度三 車労組運動一般方針決る」ほか	[1947年2月]	活—タブ—2p
28	〔三車従組〕教育出版部	教育調査〔表〕(1947.1.20現在)	1947年2月	ト—B 5
29	〔三車従組〕教育出版部	教育調査集計(1947.1.20)	1947年	肉—B 4
30	〔三車従組〕	社会党ハ果シテワレワレノ味方カ？ * 末尾欠	[1947年2月]	ト—B 4
31	「全車労」三原支部情報部	選挙闘争を開始せよ！！	[1947年3月]	ト—B 4・B 5各1枚
32	〔三車従組〕教育出版部	『教育指針』第3号	1947年4月4日	ト—B 4
33	〔三車従組〕教育出版部	『ぼくしん選挙ニュース』	1947年4月18日	ト—B 5—2枚
34	〔三車従組〕教育出版部	メーデーに就いて	[1947年4月]	ト—B 4
35	〔三車従組〕教育出版部	常会長座談会開催の件	1947年5月12日	ト—B 4
36	〔三車従組〕教育出版部	『教育指針』No.4 いま行われている 物価値下運動とはどんなものか	1947年5月18日	ト—B 4
37	〔三車従組〕	三車従業員組合青年部々則・青年部 事業内容	1947年5月15日	ト—B 4
38	〔三車従組〕	三車従業員組合婦人部々則・三車従 業員組合婦人部々則案	1947年6月13日	ト—B 4
39	〔三菱重工業三原車輛製作所〕厚生課長	三車体育文化委員会設置について 「写」 * 従業員組合長宛	1947年7月22日	ト—B 4
40	三車従業員組合組合長樋口利夫	声明書・社会党機関紙「社会新聞」61 号〔7月21日〕所載本組合に関する記 事に就いて反駁す	1947年8月	ト—B 4

労働運動

41	〔三車従組〕組合幹部一同	声 明 書 ・ 組 合 員 諸 君 へ * 幹 部 会 報 告 一 組 合 へ の 非 難 ・ 中 傷 に 対 処	1947年 8 月	ト一B 4
42	三車従業員組合書記部	組合役員名簿 昭和22年10月3日現在	〔1947年10月〕	ト一B 4
43	〔三車従組〕	闘争に関する状況報告(10月3日正午現在)	〔1947年10月〕	ト一B 4
44	〔三車従組〕	工員賃金(専門委員会案)	1947年10月 9 日	ト一B 4
45		奨励金(専門委員会案)	1947年10月 9 日	ト一B 5
46	〔三車従組〕	最近ニ於ケル各社賃上ヲ要求経過一覽表 昭和22.10.6 現在調・神戸地区主要会社給与比較表(昭和22年9月分)	1947年10月	ト一B 5
47		生活資金要求案No.1		ト一B 4一2枚
48	〔三車従組〕	〔カロリー計算表〕		ト一12cm×33.5cm
49		〔カロリー計算表〕1947年9月15日現在		ト一12cm×33.5cm
50		自由市場物価調査表		ト一B 4
51	〔全車三原支部〕	支部案〔新賃金案〕	1947年10月	ト一B 5
52	〔三車従組〕	〔賃金表〕	〔1947年〕	ト一B 4
53	〔三車従組〕教育出版部	『壁新聞』第1号 さあゆこう闘いの秋! 我々はどう闘うか賃金値上を	1947年10月 9 日	ト一B 4一2枚
54	〔三車従組〕教育出版部	『壁新聞』第2号 新しい労働者	1947年10月13日	ト一B 4一3枚
55	〔全車労〕三車支部情報宣伝部	『ニュース』No.2 「全車労」各支部続々起ツ 俄然! 全面的闘争へ!	1947年10月16日	ト一B 5
56	〔全車労〕三車支部情報宣伝部	『ニュース』No.3 誰が此の悪税を作ったのだ!	1947年10月17日	ト一B 4
57	〔三車従組〕教育出版部	『壁新聞』第3号 闘ひの火は遂につけられた	1947年10月17日	ト一B 4
58	〔全車労〕三車支部情報宣伝部	『ニュース』No.4 “特ダネ”会社の台所を探せば有るぞ、有るぞ金のいもづる!!	1947年10月19日	ト一B 4
59	全国車輛産業労働組合三原支部	闘争方針!!	1947年10月31日	ト一B 5一3枚, B 4一5枚
60	三車従組財政部	会計収支報告(1947.4一9)	〔1947年10月〕	ト一B 5一8p
61	〔三車従組〕	原価調(22.9.17調)	1947年10月	ト一B 4
62	〔三車従組〕	損益予想(1ヵ月平均)	1947年10月	ト一B 4
63	〔三車従組〕	資金収支予算表	1947年10月	ト一B 4
64	全車労組三車支部情報宣伝部	『ニュース』No.6 経営者の争議対策 “虎ノ巻”	〔1947年10月〕	ト一B 4
65	三車従組	〔松本財政部長らの処分について理由開示〕	〔1947年10月〕	ト一B 4

66	〔三車従組〕	〔松本財政部長らの組合裁判・処分について〕	〔1947年10月〕	肉—B 5
67	〔三車従組〕	〔全車労本部宛財政部・共済部不祥問題についての書簡〕 * 松本財政部長除名問題 1 ページ目 欠	〔1947年10月〕	肉—便箋—4 枚
68	〔三車従組〕教育出版部	『壁新聞』第 6 号 労働基準法について(其の三)	1947年11月 3 日	ト—B 4
69	〔三車従組〕教育出版部	『壁新聞』第 7 号 労働基準法について(其の四)	1947年11月 4 日	ト—B 4
70	全国車輛産業労働組合 三原支部支部長重家豊	最近の情勢にあたり全組合員諸君に訴ふ	1947年11月16日	ト—B 4
71	〔全車労〕三車労組情報 宣伝部	『ニュース』№ 7 税金は如何消費されているか?	1947年11月	ト—B 4
72	〔三車従組〕食費値上 対策委員会	食費値上げに就て	1947年11月13日	ト—B 5—3 枚
73	〔三車従組〕教育出版部	『壁新聞』第10号 改正刑法の要点	1947年11月29日	ト—B 4
74	全車労三原支部情報宣 伝部	『ニュース』№ 9 産別会議は如何に動くか? 産別第 2 回大会結論	1947年11月30日	ト—B 4・B 5各 1 枚
75	全車労三原支部情報宣 伝部	『ニュース』№ 10 越年資金要求の意義!!	1947年12月 2 日	ト—B 4
76	〔三車従組〕	支度料荷造費等改正ノ件(労連第87号写)	1947年12月 9 日	ト—B 4
77	三原車輛支部田島河城	企業整備打開策私案	1947年12月10日	肉—A 4—3 枚
78		従業員就業規則(会社案)	〔1947年〕	ト—B 4—3 枚

### 三車従組第 3 回定期大会

79	〔三車従組〕	第 3 回定期大会〔次第〕	1947年12月12日	肉—便箋
80	〔重家豊〕	一般報告〔草稿〕	1947年	肉—14cm×24cm
81	〔重家豊〕	一般報告(草稿)	〔1947年12月〕	肉—B 4—3 枚
82	〔重家豊〕	教育出版部部員活動方針〔起案草稿〕	〔1947年12月〕	肉—B 4—2 枚
83	〔三車従組〕	三車従業員組合規約	〔1947年〕	ト—B 4
84	三車従業員組合財政部	昭和22年度会計報告(自昭和21年12月1日至昭和22年11月30日)	〔1947年12月〕	ト—B 5—14p
85	〔全車労三原支部〕	1948年度全国車輛産業労働組合三原支部従業員部運動方針大綱	1947年10月	ト—B 4
86	〔全車労〕三原支部財政 部	支部闘争資金支出内訳		ト—B 5
87	〔全車労〕三原支部財政 部	支部闘争〔資〕金決算内訳(昭和22年11月19日)	〔1947年12月〕	ト—B 4
88	〔全車労〕三原支部財政 部	支部闘争〔資〕金決算内訳(昭和22年11月19日)	1947年12月	ト—B 4

労働運動

89	〔三車従組〕教育出版部	『壁新聞』第15号 生産復興闘争とは	1947年12月26日	ト一B 4
90	〔重家豊〕	〔メモ・生産復興闘争について 草稿〕	〔1947年12月〕	肉一B 4—2 枚
91		生産復興闘争〔メモ〕	〔1947年12月〕	肉一B 4
92	〔重家豊〕	生復闘争指針〔起案草稿〕	〔1947年12月〕	肉一B 4
93	〔重家豊〕	生産復興闘争にどんな組織が必要か〔草稿〕	〔1947年12月〕	肉一B 4
94	〔重家豊〕	支部統一組織案〔草稿〕	〔1947年12月〕	肉一B 4
95	〔重家豊〕	企業整備対策委員会行動計画(青年部)〔草稿〕	〔1947年12月〕	肉一B 4
96	〔重家豊〕	企業整備教育指針(続き)	〔1947年〕	肉一B 4
97	三車従組	購売関係 昭和21年12月～昭和22年11月		ト一B 4
98	三車従組共済部	22年度共済関係		ト一B 4
99	〔三車従組〕調査部	1・2・3月生活補助金一案	1947年12月29日	ト一B 5
100	〔三車従組〕調査部	手取各ベースを示す	1947年12月29日	ト一B 4
101	〔重家豊〕	〔労働講座講座案〕	〔1947年〕	肉一B 4
102	三車調査部	給与形態説明	1948年1月11日	ト一B 5
103	〔三車従組〕文化部	文化活動のやり方	1948年1月	ト一B 4
104	三車従組財政部	各種寄附金(内訳)	1948年2月	ト一B 5
105	〔三車従組〕	〔収支決算〕自22年10月至23年1月		ト一B 4・B 5各1枚
106	田村久子	書簡〔重家豊宛・全電工青婦対策について〕	〔1948年3月6日〕	肉一B 4—2 枚

全車三原支部分裂問題

107	〔重家豊〕	三原支部事件本部対策活動の報告	〔1948年〕	肉一B 4—2 枚
108	〔三車従組〕	声明書	〔1948年〕	ト一B 4
109	三車従業員組合長樋口利夫	要求書〔重家起案草稿〕 * 除名組員5名の讞首要求, 三車長田所長宛	1948年3月16日	肉一B 4
110	全車三原支部事件対策本部	三原支部の分裂について	〔1948年3月〕	ト一B 4・B 5各1枚
111		第二組合結成迄の経過	〔1948年4月〕	ト一B 4
112	〔重家豊〕	三原支部分裂闘争方針〔起案草稿〕	〔1948年〕	肉一B 5—3 枚
113	〔重家豊〕	〔全車本部宛第二組合問題での問合せ・起案メモ〕	〔1948年〕	肉一B 4
114	全車本部	三車事件全車対策部編成計画	1948年3月	ト一B 4
115	全車対策部	情報日誌(3月22日～25日)	〔1948年〕	ト一B 4—4 枚
116	〔重家豊〕	三原支部事件について	〔1948年3月29日〕	肉一B 5

117	〔重家豊〕	三原支部分裂事件について 〔起案メモ〕	〔1948年〕	肉—B 4
118	〔三車従組〕	〔写〕 広島県地方労働委員会・三原第二組合問題調査表	〔1948年4月〕	ト—B 5—11p
119	〔三車従組〕	三車従業員組合規約	1948年	ト—B 4
120	〔重家豊〕	三車労働組合認可再審議申立〔起案草稿〕	〔1948年〕	肉—B 5
121	全国車輛産業労働組合 三原支部従業員部三車 従業員組合組合長松村 正文	異議申出書〔4月8日に地労委が三原車輛労働組合設立を認可したことに対し〕	〔1948年4月13日〕	ト—B 4—2枚
122	全国車輛産業労働組合	全国車輛三原車輛支部分裂の真相 〔重家起案草稿〕	1948年4月10日	肉—B 5—6枚
123	全国車輛産業労働組合	車輛特報 分裂をおこすものは何か 全国車輛三原支部第二組合問題の真相	〔1948年〕	活—B 5
124	全国車輛産業労働組合 三原支部従業員部三車 従業員組合	第二組合関係調査	1948年4月	ト—B 5—53p
125	〔重家豊〕	三車問題について	〔1948年〕	肉—B 5—4枚
126	全国車輛産業労働組合 本部組織部	三原支部分裂闘争応援の件	1948年4月29日	ト—B 4—1枚, B 5—2枚
127	〔三車従業員組合〕	“反証の数々”	〔1948年〕	ト—B 5—6p
128	〔三車従組〕	だんだん怪しくなって慌て出した仮組合のお偉方!!	1948年	ト—B 5
129	〔全車〕三原対策部	三原分裂問題対策具体案	1948年6月16日	ト—B 4
130	〔三車従組〕	〔写〕労働協約案 〔三原車輛労働組合と三原車輛製作所との〕	〔1948年〕	ト—B 4
131	三原車輛労働組合	労働協約 昭和23年6月22日調印 〔三原車輛労働組合と製作所との〕	〔1948年6月〕	ト—B 4・B 5各1枚
132	〔重家豊〕	労組と従組との協約の相違について 〔メモ〕	1948年	肉—B 4
133	三車従組	労働協約 *第3組合と製作所・昭和23年10月28日調印	1948年	ト—B 4
134	〔三車従組〕	〔労働協約覚書・1948年10月28日第3組合と製作所との〕	〔1948年〕	肉—便箋—2枚
135	日本放送協会労働組合	〔放送支部分裂問題〕	1948年3月22日	ト—B 4
136	日本放送協会労働組合	放送支部分裂の真相—放送しんぶん特別号—	1948年4月1日	活—B 5
137		支部別計算賃金定期調査表〔全車三原支部〕	〔1948年〕	肉—B 4—3枚, B 5—1枚



労働運動

138	〔重家豊〕	声明書〔草稿〕 * 7月23日付会社掲示に抗議	〔1948年7月〕	肉一B 4
139	〔重家豊〕	〔国際青年デー・講演メモ〕	1948年8月	肉一B 4
140	〔重家豊〕	常任委員会議題〔起案メモ〕	1948年8月18日	肉一B 4
141	〔三車従組〕	三菱三原車輛健康保険組合規約 * 昭和23年7月1日改正	〔1948年〕	ト一B 4—4枚
142	〔三車従組〕背	規約改正の件〔メモ〕 * 三菱重工労連の規約(6月27日大会決定)	〔1948年〕	肉一B 4
143	〔全日本 金属 労働組合 広島支部三原車輛分会〕	全日本金属労働組合広島支部三原車輛分会規約 * 1948年11月4日施行	〔1948年〕	ト一B 4
144	〔全日本金属労働組合 広島支部〕三車従業員分会	協定書案〔組合員の範囲・組合活動で〕	〔1948年〕	ト一B 4
145	〔重家豊〕	当面の情勢と組合運営確立の急務 〔起案草稿〕	1948年	肉一B 4—3枚
146	〔重家豊〕	教宣部への提案・文化部への提案 〔起案草稿〕		肉一B 4
147	〔重家豊〕	生産調査部への提案〔重家起案草稿〕		肉一B 4
148	〔重家豊〕	〔税金の話・講演メモ〕	〔1948年〕	肉一ノ一ト一3p
149		声明書 * 汚職告発	〔1948年〕	ト一B 4—4枚
150	〔重家豊〕	司会原稿〔メモ〕	1948年	肉一B 5
151		〔賃金表〕		ト一B 4
152		賃金改正案		ト一B 5
153		従業員賞罰規程		ト一B 4
154		組合用務出張手当支給規定		ト一B 5
155	〔重家豊〕	三車従業員組合教育委員会要綱 (草案)〔起案〕	1948年	肉一B 4
156	〔重家豊〕	三車従業員組合教育委員会構成草案 〔起案〕	〔1948年〕	肉一B 4
157	〔三車従分会〕	結婚資金貸金制度慶弔規則休暇(実施1949年3月1日)		ト一B 4
158	三車従分会	支払給与調 23年10月分	1949年3月10日	ト一B 4
159	三車従業員分会	支払給与調(23年12月分)	1949年3月10日	ト一B 4
160	〔重家豊〕	〔賃金査定メモ〕	〔1949年〕	肉一B 4
161	〔三車〕従組キカソ車青年部	懇談会招請状〔製作所生産計画批判・自主的生産計画・生産復興のため〕	〔1949年3月28日〕	ト一B 5
162	三車従組常任・大金属中央委員竹田太一	〔3月29日大金執行委員会の内容・重家委員長宛〕	1949年3月29日	肉一B 5
163	〔重家豊〕	われわれは如何に闘うか 三車従業員分会当面の闘争方針草案	〔1949年3月〕	肉一B 4—2枚

164	〔重家豊〕	分会役員構成(案)	1949年3月19日	肉—B 4
165	全日本金属広島支部三車従分会	一般経過報告	1949年3月31日	ト—B 4・B 6各1枚
166	全日本金属労働組合広島支部三車従業員分会	組合役員名簿	1949年4月1日	ト—B 4
167	〔三車従分会〕調生部	昭和24年3月定期昇給の月額換算系数表〔従組案〕	〔1949年〕	ト—B 4—4枚
168	〔三車従分会青婦部〕	当面の闘争方針(案)	〔1949年〕	ト—B 5
169	〔三車〕従業員分会	指示第2号	〔1949年〕4月2日	ト—B 5
170		薪炭組合の件	1949年	肉—B 5—2枚
171	全金属労組三原車輛従業員分会	組織部調査報告ノ件〔三菱重工労連組織部の3月17日依頼・重家起案草稿〕	1949年4月12日	肉—B 4—2枚
172	〔重家豊〕	市民問題・農民問題対策委員会設置案 49.4.12〔起案草稿〕	1949年4月	肉—B 4
173	〔重家豊〕	職場闘争研究会〔起案草稿〕	〔1949年4月〕	肉—B 4
174		公安委員会声明書に関し市民労働者諸君に訴える	〔1949年4月〕	肉—A 5—2枚
175	金属広島支部三車従業員分会	全日本金属産業労働組合(大金属)協議会第2回定期全国大会提出資料	1949年5月	ト—B 4
176	全金三車青婦部	『部報』№1	1949年6月	ト—B 4
177	〔重家豊〕	声明書〔起案〕 * 都公安条例反対闘争で東交労働者が虚殺されたことに対する	〔1949年6月〕	肉—B 4
178	全金属広島支部三車従分会	組合専従者の給与について	1949年6月2日	ト—B 4
179	三車従業員分会教育宣伝部	組合専従者給与と労働賃金について	〔1949年6月〕	ト—B 4
180	三車職員組合組織部	組織部公報 第1報	1949年6月29日	ト—B 4
181	〔重家豊〕	組合法改悪にともなう組合の方針〔起案草稿〕	1949年6月	肉—B 4
182	〔重家豊〕	労働組合法改悪にともなう闘争方針〔起案草稿〕	1949年	肉—B 5
183	〔重家豊〕	挑発にのるな アウトサイダー組合に対立する正しい考え方〔起案草稿〕	〔1949年〕	肉—B 4
184		アウトサイダー組合と労働関係法に就て	〔1949年〕	ト—B 4
185		労働組合形態別各条文適用有無一覧表	1949年	肉—25.5cm×52cm
186	組織部〔竹田太一〕	組合規約及び分会規約について〔労組法改正にともなう〕	1949年6月	肉—B 4
187	〔重家豊〕	全日本金属労働組合広島支部三車従業員分会規約〔案〕	1949年	肉—B 4

労働運動

188	〔三車従分会〕	全日本金属労働組合広島支部三原従 業員分会規約	1949年6月	ト一B 4
189	〔三車従分会〕	全日本金属労働組合広島支部三車従 業員分会規約 *1949年6月10日改正	1949年6月	ト一B 4—2枚
190	〔重家豊〕	労働協約についての労組のウソはこ うだ〔起案草稿〕	〔1949年〕	肉一B 4
191	〔重家豊〕	労働協約案〔草稿〕 *三菱三原車輛製作所と全日本金属 広島支部三車従業員分会との	〔1949年〕	肉一B 4—7枚
192	〔三車従分会〕組織部	協定書案	1949年6月	ト一B 5
193	〔三車従分会〕	協定書(案) *三車職分会・従分会・三車労組と 製作所との	1949年6月10日	ト一B 4—5枚
194	三車従分会	協定書 *三菱三原車輛製作所と全金属広島 支部三車従業員分会とで 昭和24 年6月10日調印	〔1949年〕	ト一B 4
195	〔三車従分会〕	協定書案(全金属広島支部三原車輛 職員分会)	1949年6月	ト一B 4
196	〔三車〕従業員分会情宣 部	「教宣指針」No. 2 応援工問題を如何 に闘うか	1949年6月29日	ト一B 4
197	三車東京出張所連絡委 員	金・電合同指令第13号の件	1949年6月30日	ト一B 5—2枚
198	〔三車従分会〕	三菱重工業㈱三原車輛製作所衛生委 員会規則 昭和24年7月1日施行	1949年	ト一B 4—2枚
199	三車従業員分会	不当弾圧に対する決議案〔重家起案 草稿〕	1949年7月7日	肉一B 5・B 6各1枚
200	全金属三車従業員分会	『三車情報』No. 1 会社不当労働行為 ひんびん	1949年7月16日	ト一B 4
201	全日本金属労働組合広 島支部三車従業員分会	依頼状 *労連宛会社登録抄本送付で	1949年7月20日	肉一便箋
202	全金属労働組合広島支 部三車従業員分会	『三車情報』No. 2	1949年7月20日	ト一B 4
203	〔重家豊〕	何故組合は沈滞するか〔草稿〕 *8月5日の大会準備のメモ・大会 議題・解雇反対闘争スケジュール など	〔1949年7月〕	肉一B 4—9枚
204	〔重家豊〕	◎川上盛夫誠首反対闘争についての 報告〔起案草稿〕	〔1949年〕	肉一B 4—2枚
205	重家豊	川上問題闘争スケジュール〔起案メ モ〕	1949年7月	肉一B 4—2枚

206	〔重家豊〕	ブラカード原稿 *川上盛夫解雇反対	1949年	肉—B 5
207	〔重家豊〕	街頭ビラ〔メモ〕 *川上解雇問題	1949年7月	肉—B 6
208	三車従業員分会組立常 会	“川上は権力闘争の犠牲者ではない ぞ”	〔1949年〕	ト—B 4
209	〔重家豊〕	会社側不当労働行為の数々〔起案〕	〔1949年〕	肉—B 4
210	従組	暴露する会社のファッション狂人振り 正体 *川上盛夫懲戒解雇で	〔1949年7月〕	肉—B 4
211	〔三車従分会執行委員 長樋口利夫〕	資料 川上盛夫不当懲戒解雇問題に 関する基準監督署長の証明書〔写〕 〔7月25日〕	1949年7月25日	ト—B 4
212	全金属労組広島支部三 車従業員分会	非常事態闘争体勢の確立—われわれ は当面いかに闘うか— 当面の闘争 方針	1949年7月	ト—B 5—7p
213	〔重家豊〕	“日本民族の動脈・国鉄をまもれ日本 の汽車・電車をつくらせろ”運動要領 〔起案〕 *8月5日大会運動方針骨子	〔1949年〕	肉—B 4
214	〔三車従分会〕	われわれは次の如く当面の闘争を進 める!!	〔1949年8月〕	ト—B 4
215	〔重家豊〕	要求書〔起案草稿〕 *人員整理反対ほか14項目	〔1949年〕	肉—25cm×12.5cm
216	〔重家豊〕	要求書〔案〕〔起案草稿〕		肉—B 5
217	〔三車従分会〕	従業員退職手当規程〔案〕	〔1949年〕	ト—B 4
218	〔三車従分会〕	退職金要求闘争の基本的態度につい て	〔1949年〕	ト—B 4
219	〔三車従分会〕生調部	退職金及退職給表	1949年8月7日	ト—B 4
220		配置転換希望者名簿	1949年	ト—B 5
221	〔重家豊〕	〔休業手当額計算メモ〕	1949年	肉—B 4
222	〔三車従分会〕	残業料早見表	1949年	ト—B 4
223		〔生産量と人員配置の関係〕	1949年10月24日	ト—B 5
224	全日本金属労働組合広 島支部三車従業員分会	願ひ(証明書に代へて)〔解雇者救 援財政活動のための行商に関し〕	1949年9月1日	ト—B 5
225	〔三車従分会〕	事件の概要〔応援工問題〕	〔1949年9月〕	ト—B 5—29p
226	金属・三車従業員分会	『三車情報』No.5 不当誹首にたいし 反撃はいかに進みつつあるか	1949年10月5日	ト—B 5
227	〔重家豊〕	当面の闘争方針〔起案草稿〕	〔1949年10月〕	肉—B 4
228	全日本金属労働組合広 島支部三車従業員分会 臨時大会	大会宣言〔重家起案〕	1949年10月	肉—B 4—2枚

労働運動

229	[重家豊]	会社提案の整理計画の本質〔起案草稿〕	1949年11月6日	肉一B 4
230	[三車従分会]	三菱重工業機三原車輛製作所経営協議会規程案 *1947年制定	1949年	ト一B 4—3枚
231	全属労組広島支部三車従業員分会	『三車情報』No.7 中経協の協定を無視・歪曲した三車の不当首切り意図が暴露された一団体交渉経過報告一	[1949年11月10日]	ト一B 4—3p
232	[三車従分会]	中経協の協定による整理基準(組合案)	[1949年11月]	ト一B 6
233	[三車従分会]	極秘〔会社解雇基準〕	[1949年]	ト一B 5
234	[三車従分会]	考課基準表〔労働組合〕	[1949年11月]	ト一B 5
235	[三車従分会]	極秘 5項用考課表の採点基準	[1949年]	ト一B 4
236	[三車従分会]	考課基準表	[1949年]	ト一B 4
237	[三車従分会]	〔解雇についての主要基準〕	[1949年11月]	ト一B 5
238	三車従業員分会組織統制部	基準案訂正案〔重家起案〕	[1949年11月]	肉一B 4
239	[三車従分会]	〔職制による考課・賞罰についてのアンケート〕	[1949年10月]	ト一B 6
240	長田清治郎(三菱三原車輛製作所所長)	解雇通知に係る件〔重家豊宛〕	1949年11月17日	ト一便箋
241	三車従業員分会教宣部	『三車情報』No.8 中経協協定を破棄した一方的団交打ち切り 17日附解雇状一斉返上して闘争に起つ	1949年11月19日	ト一B 4—2p
242	全日本金属広島支部三車従業員分会闘争本部	産別会議に結集する全労働者及び闘ふ第5回産別大会代議員諸君に訴ふ	1949年11月26日	ト一B 4—2p
243	[重家豊]	分配案〔被解雇者救援カンパ等起案草稿〕	[1949年]	肉一B 4
244	[重家豊]	〔被解雇者の闘争のやり方に就てのメモ・起案草稿〕	[1949年]	肉一B 4
245	[重家豊]	〔首切り撤回闘争についてのメモ・起案草稿〕	1949年	肉一B 5
246		〔不当労働行為・首切り裁判順序メモ〕	[1949年]	肉一便箋
247	三原車輛首切ギセイ者同盟準備会	首を切られた者はかく要求する	[1949年11月]	ト一B 6
248	[三車従分会]村田吉太郎外百名	仮処分申請	1949年11月24日	ト一B 4・B 5各1枚
249	[三車従分会]村田吉太郎他壱百名	答弁書	1949年12月12日	ト一B 4—3枚
250		23.12月末現在員(工員のみ)・24.1月以降の退職者〔数〕	[1949年11月]	肉一B 5

251	会計報告 *解雇闘争	[1949年11月]	ト一B 4
252	河野	[重家宛闘争経過プリント依頼]	1949年12月 肉一B 6
253	全日本金属労働組合広島支部三車従業員分会	申立書	1950年1月27日 ト一B 4—4枚
254	全金属労働組合広島支部三車従業員分会	声明書	1950年6月10日 ト一B 5
255	[重家豊]	三車再建同盟結成趣意[起案]	[1950年] 肉一A 4
256	[重家豊]	三車再建同盟組織案[起案草稿]	[1950年] 肉一A 4
257	ギセイ者大会	三車再建同盟結成趣旨一宣言にかえて一[重家起案草稿]	1950年6月12日 肉一A 4—2枚
258	[重家豊]	三車再建同盟綱領・三車再建同盟規約案[起案草稿]	[1950年] 肉一A 4—2枚
259	三車再建同盟	ある退職者の手紙	1950年6月24日 ト一B 5
260	全金属広島支部三車従業員分会	退職金要求案	1950年7月5日 ト一B 4—2枚
261	全日本金属労働組合広島支部三車従業員分会	労働協約(会社草案)	1950年7月 ト一B 5—7p
262	全日本金属労働組合広島支部三車従業員分会	労働協約(案)	1950年7月 ト一B 5—12p
263	[三車従分会]	財政部会計報告(1950年7月31日現在)	1950年8月 肉一A 4
264	三車再建同盟宣伝部	首切防衛対策No 1—家族のために	[1950年] ト一B 6
265	[重家豊]	重家豊訊問事項[メモ]	[1950年] 肉一B 5
266	[重家豊]	人員整理に対する闘い[草稿]	[1950年] 肉一B 4—2枚
267	三原車輻従業員組合	赤追放事件法廷闘争資料	1950年12月 ト一B 4—55p
268	三原車輻従業員組合	申立書[中央労働委員会宛]	1950年12月17日 ト一B 5—21p
269	[三車再建同盟]	プリント目録表 *次の資料270—285を含む	[1951年] ト一B 5
270		全日本金属労働組合三車従業員分会 御挨拶	1950年6月30日 ト一B 4
271		全日本金属労働組合広島支部三車従業員分会 首切反対闘争経過報告 —成果と自己批判—	1950年7月 ト一B 5—42p
272		懲戒解雇事件顛末要旨	ト一B 4
273		再審査申立書(写)	1949年12月16日 ト一B 4—5枚, B 5—1枚
274		判決(写)	1949年12月20日 ト一B 5—5枚
275		判決(写)	1949年12月23日 ト一B 5
276		第三次懲戒解雇(応援工問題) 地労委に於ける組合側最終陳述の要旨	ト一B 5—5p

労働運動

277	申立書(写)	1949年9月15日	ト一B 4
278	仮処分命令申請書(写)	1950年10月28日	ト一B 5—34p
279	答弁書(写)	1951年1月20日	ト一B 5—52p
280	地裁尾道支部ニ於ル身分保全仮処分申請事件準備書面(写)	1950年2月27日	ト一B 4
281	[人員整理基準表]		ト一B 5
282	5項目考課表の採点基準・6項目考課表の採点基準(極秘)[会社側]		ト一B 4
283	考課基準表(第二組合)		ト一B 4・B5各1枚
284	和解協定書[「経過報告」の中にあり]		ト一B 5
285	三車再建同盟結成趣意書・綱領・規約抄	1950年6月12日	ト一B 4
286	三原車輛従業員組合外14名 反駁書	1951年2月15日	ト一B 5—34p

2 三菱重工業労働組合連合会・中日本重工業労働組合

287	[三菱重工労連]	三菱重工業労働組合連合会規約 * 1946年制定		ト一B 4
288	[三菱重工労連]	労働協約 * 1946年 三菱重工と三菱重工労連との		ト一B 4
289	[三菱重工労連]	三菱重工業労働組合連合会規約	[1947年]	ト一B 4
290	[三菱重工労連]	[賃上げ闘争メモ 9月7日~10月25日]	[1948年] 10月	肉一A 5
291	[三菱重工労連]	三菱重工業労働組合連合会規約 (1949年2月15日実施)		活一B 5
292	[三菱重工労連]組織部	組織部調査依頼の件	1949年3月17日	ト一B 4
293	三菱重工業労働組合連合会	『三菱重工業労組連合会』第4号	1949年4月10日	活一タブ
294	三菱重工業労働組合 委員長基政七	従業員合宿規則 1949年4月1日実施	[1949年]	ト一B 4
295	[三菱重工労連]	重工連合会臨時大会報告 * 1949年5月14・15日於神戸造船所三石倶楽部	[1949年5月]	ト一B 4
296	三菱重工業労働組合連合会	『50,000人』第10号 総力を再建整備闘争へ結集せよ * 機関紙	1949年8月3日	活一全紙—2p
297	[三菱重工労連]	重工中部ブロック組合運営状況	1949年8月17日	ト一B 4
298	三菱重工業労働組合連合会	第九回及第十回中央経営協定書 * 企業整備・解雇手当について	1949年8月20日	ト一B 4—3枚

299	〔三菱重工労連〕組織部	三菱重工中部ブロック労働組合組織案	1949年11月19日	ト—B 4—6枚
300	中日本重工業労働組合書記局	第1回中央経営協議会経過報告(中労通第70号・第2報)	〔1950年7月〕	活—A 5—8p
301	〔中日本重工労組〕	企業再建に係る合同経協経過	〔1950年8月〕	ト—B 4—2枚
302	〔中日本重工労組〕	中日本重工業株式会社経営再建案	〔1950年〕	ト—B 4
303	〔中日本重工労組〕	第一報 企業合理化中央説明会(7月3日)	〔1950年〕	ト—B 4—4枚
304	中重労組労働部	退職金の件(中重労組労働部)	1950年7月27日	ト—B 4—2枚

### 3 全国車輛産業労働組合

305	全車労	労働協約(案)〔全車労と連盟との〕	〔1946年〕	ト—B 5—4枚
306	〔全車労〕組織部	全国車輛産業労働組合本年度一般運動方針大綱草案	〔1947年〕	ト—B 4
307	全車労	改正労働協約(案)〔全車労と連盟との〕	〔1947年12月〕	ト—B 4・B 5各1枚
308	全国車輛産業労働組合	『しゃりょう』創刊号	1947年12月25日	活—タブ—2p
309	全車本部調査部	労働者災害補償保険に就いて	1948年2月17日	ト—B 4
310	全車調査部	労働安全衛生規則(基準法施行令抜粋)	〔1948年2月〕	ト—B 4
311	全車調査部	保健衛生闘争に就いて	〔1948年2月〕	ト—B 4・B 5各1枚
312	全国車輛産業労働組合青年婦人対策部	『青年婦人対策部報』(1号)	1948年2月19日	ト—B 4
313	全国車輛産業労働組合調査部	汽車・電車をつくらせろ!! 生産復興闘争資料	1948年2月29日	ト—B 4—3枚, B 5—8枚
314	全車青年婦人対策部	国際婦人デーについて	1948年	ト—B 4
315	全国車輛産業労働組合	祖国再建のために汽車電車をつくらせろ 一千万署名運動に御参加下さい	1948年3月	活—B 4
316	全国車輛産業労働組合本部組織部	三原支部分裂闘争応援の件〔各支部長宛〕	〔1948年〕	ト—B 4
317	全国車輛産業労働組合組織部	弾圧の実例 日本タイプライター事件・東宝映画事件・愛光堂印刷事件	1948年4月29日	ト—B 4—2枚, B 5—1枚
318	全日本機器労働組合・全日本鉄鋼産業労働組合	徹!!〔車輛・全鉄労・機器の戦線統一について全車労組合員へ〕	1948年5月	ト—B 4

#### 全国車輛1948年度定期大会議案集

319	全車	『しゃりょう』№8 1948年度大会号 *1948年度大会 5月5日～8日 於山口県日立笠戸支部	1948年4月11日	活—タブ—8p, 半載—1p
-----	----	--	------------	-------------------



労働運動

320	〔全車〕	1948年度全国車輛産業労働組合定期 大会日程・大会スローガン	1948年5月	ト一B 4
321	全国車輛産業労働組合	綱領(案)・全国車輛産業労働組合改 正規約案・役員選出細則一部改正案・ 会計細則改正案	〔1948年5月〕	ト一B 4—5枚
322	〔全車〕	一般報告		ト一B 4—2枚
323	〔全車〕	労働者の基本的権利確保のための闘 争		ト一B 4—3枚
324	〔全車〕	鉄道車輛振興会議運営方針対策(案)		ト一B 4—2枚
325	〔全車〕	“車輛つくらせろ”運動に就いて		ト一B 4
326	〔全車〕	具体的闘争方法について(全車教育 資料)	1948年4月1日	ト一B 4
327	〔全車〕	車輛振興会議の議題		ト一B 4
328	〔全車〕	青年婦人の活動について	1948年4月10日	ト一B 4
329	〔全車〕	調査について・調査の方針		ト一B 4
330	〔全車〕	生産復興対策について		ト一B 4—2枚
331	全国車輛産業労働組合 定期大会	大会宣言	1948年5月5日	ト一B 4
332	〔重家豊〕	大会議案説明草稿 企業整備闘争に ついて	〔1948年5月〕	肉一B 4
333	〔重家豊〕	企業整備闘争について大会議案説明 〔草稿〕	〔1948年5月〕	肉一B 4
334	〔全車〕	大会議案Ⅲ 企業整備闘争について	〔1948年5月〕	肉一B 4
335	〔重家豊〕	青年婦人部予算申請1948年度〔メモ〕	〔1948年5月〕	肉一B 4
336	〔重家豊〕	〔全車青年婦人統一組織の確立につ いての草稿 1枚欠〕	〔1948年5月〕	肉一B 4—3枚
337	〔全車組織部〕	産別傘下金属4単産合同について (全車組織部案)	〔1948年5月〕	ト一B 4
338	全国車輛産業労働組合 全国大会	宣言(案)・綱領(案)	1948年5月	ト一B 4
339	〔全車〕	過去の活動の批判	〔1948年5月〕	ト一B 4
340	〔全車〕	一般報告	1948年5月	ト一B 4・B5各1枚
341	〔全車〕	当面の任務と闘争方針	〔1948年5月〕	ト一B 4—2枚
342	全車	農民市民との共同闘争	1948年5月	ト一B 5
343	〔全車〕	生産復興闘争	1948年	ト一B 4
344	〔全車〕	汽車・電車つくらせろ闘争実質賃金 獲得のための闘争	〔1948年5月〕	ト一B 4—2枚
345	〔全車〕	最低賃金闘争(案)	〔1948年5月〕	ト一B 4
346	〔全車〕	企業整備闘争について	1948年5月	ト一B 4
347	〔全車〕	労働関係諸法規改悪反対闘争につい て	〔1948年5月〕	ト一B 4

348	〔全車〕	協約改正闘争に就いて	1948年5月	ト一B 4
349	〔全車〕組織部	組織活動について	〔1948年5月〕	ト一B 4
350	〔全車〕	政治活動のやり方	1948年5月	ト一B 4
351	〔全車〕調査部	調査に就いて	1948年5月	ト一B 4
352	〔全車〕	文化活動の方針・財政活動の強化・ 教育活動の方針	1948年5月	ト一B 4
353	〔全車〕	機関紙活動の方針	1948年5月	ト一B 4—2枚
354	〔全車〕	青年婦人の活動について	1948年4月10日	ト一B 4
355	〔全車〕	全車青年婦人統一組織の確立につい て	〔1948年5月〕	ト一B 4—2枚
356	〔全車〕	実質賃金獲得のための闘争(案)	1948年5月	ト一B 4
357	〔全車〕	規約改正 提案理由	1948年5月	ト一B 4
358	〔全車〕	全国車輛産業労働組合格約	1948年5月	ト一B 4—2枚
359	〔全車〕	全国車輛産業労働組合役員選出細則 一部改正(案)	1948年5月	ト一B 4
360	〔全車〕	組合運動犠牲者扶助規定案・組合運 動犠牲者扶助規定提案理由(書記局)	1948年5月	ト一B 4
361	〔全車〕書記局	会計細則改正案・旅費規定改正案		ト一B 4
362	〔全車〕	全国車輛産業労働組合改正規約案	1948年5月	ト一B 4—7枚
363	〔全車〕	生産復興対策について		ト一B 4—2枚
364	全国車輛産業労働組合 定期大会	大会宣言	1948年5月8日	ト一B 4
365	日本共産党第7回中央 委員会総会	平和と民主主義 民族独立のための 宣言 *大会配布資料	1948年3月26日	活一B 5
366	〔全車〕	青年部長会議議事録第1日目 *1948年3月21日 於本部		ト一B 4—2枚
367	〔全車〕	〔青婦〕部長会議 第2日目 *1948年3月22日 於本部		ト一B 4—2枚
368	〔全車〕	運動方針(青年婦人対策部)		ト一B 4

全車輛労働生産・調査資料(附)企業整備

369	全車調査部	支部別総平均月収調査表	〔1948年〕	ト一B 4—4枚
370	産業復興会議企業整備 対策委員会	企業整備対策委員会議事録〔1948年 3月15日〕	〔1948年〕	ト一B 4—2枚
371	〔全車〕	現行退職手当金規定〔日本車輛支部・ 新鴻支部・帝国車輛支部・立山 支部・東芝車輛支部・川崎車輛支部 日立笠戸支部〕	〔1948年〕	ト一B 4—3枚
372	産業復興会議企業整備 対策委員会	集中排除対策資料「再編成計画」につ いて	1948年3月13日	ト一B 4—3枚

労働運動

373	産業復興会議	企業整備対策委員会議事録〔1948年 3月23日〕	〔1948年〕	ト一B 4
374	〔全車〕	議案説明書〔生産復興運動〕	〔1948年〕	タ一B 4
375	〔全車〕	生産復興会議具体的運動方針	〔1948年〕	ト一B 4
376	〔全車〕	23年度生産計画について	〔1948年〕	ト一B 5—5p
377	〔全車〕	23年度新造車輛生産計画	〔1948年〕	ト一B 4—4枚
378	経済復興会議・生産復興運動本部	生産実績調査表〔未記入〕	〔1948年〕	活一B 4
379	〔全車〕	労務者用諸物資の配給に就いて	〔1948年〕	ト一B 4—3枚
380	〔全車〕青婦対策部	青年部長会議参考資料 結婚資金について	1948年3月20日	ト一B 4
381	〔全車青婦対策部〕	『全国車輛産業労働組合青年婦人対策部々報』第2号	1948年3月9日	ト一B 4
382	全国車輛産業労働組合	〔生産管理について〕	1948年3月27日	ト一B 4—2枚
383	全車調査部	11月分平均実収賃金集計表	〔1948年〕	ト一B 4—4枚
384	全国車輛産業労働組合本部	過度経済力集中排除法の手続と基準の解説	〔1948年〕	ト一B 5—8p
385	企業整備対策専門委員会	企業整備相談所の開設に就いて	〔1948年〕	ト一B 4
386	産業復興会議	企業整備対策委員会議事録	1948年2月3日	ト一B 4
387	三車従業員組合企業整備対策委員会	企業整備指針	〔1948年〕	ト一B 5—33p
388	〔全車〕	集中排除指針	〔1948年〕	ト一B 4—12枚
389	全国車輛産業労働組合本部書記局	全車指示第17号集中排除指定労組は手続当事者となったか	1948年2月18日	ト一B 4
390	〔全車〕調査部	調査資料	1948年2月15日	ト一B 5—13p
391	〔全車〕	会社別社用出張旅費調査表（宿泊出張ノ分）・同（日帰り出張ノ場合）、全車支部別4月分総平均賃金調査表		ト一B 4・B 5各1枚
392	〔全車〕調査部	東京都自由及ヤミ物価資料（3月第3週）（国際統計社調）		ト一B 4
393	〔全車〕生産復興部	23年度貨車新造計画・23年度補修計画表（国鉄）		ト一B 4
394	〔全車〕調査部	生活必需品価格調査表—2月分—		ト一B 4
395	〔全車〕調査部	23年度修繕車輛各社割当表 23.4.1決定		ト一B 4
396	〔全車〕	失業保険保険料額表・失業手当金額表・失業保険金額表		ト一B 4
397	〔全車〕調査部	失業保険		ト一B 4
398	〔全車〕調査部	鉄道車輛2月分生産実績一覧表		ト一B 4
399	全車調査部	一般職種別賃金に就いて		ト一B 4

400	調査部	全官公庁2,920円の内容			ト一B 4—2枚
401	全車調査部	支部別総平均月収調査表(2月分)			ト一B 4
402	全車調査部	昭和23年度鉄道車輛各社生産割当表(第2回) 23.4.7決定			ト一B 4
403	全車企業整備対策委員会	企整発第3号 企業整備闘争指針(1)再編成計画書に対する闘争を集中せよ			ト一B 4
404	全国車輛産業労働組合調査部	汽車・電車つくらせろ!!(生産復興闘争資料)	1948年3月27日		ト一B 4—8枚、 B 5—5枚
405	日本電気産業労働組合	過度経済力集中排除法適用による電気事業再建計画	1948年3月9日		活一B 4
406	全国車輛産業労働組合情報宣伝部	企業整備闘争			ト一B 5—10p
407	全車労三車支部情報宣伝部	『ニュース』No.3(勤労所得税一覽表)	1947年10月17日		ト一B 4
408	[全車]	鉄道車輛生産振興会議規約			ト一B 4
409		運動方針[鉄道車輛生産振興会議]			ト一B 4
410	運輸省鉄道総局資材局長	鉄資監 第287号 新年度労務加配制度改訂に関する意見〔安本生活物資局長宛〕	1947年9月15日		ト一B 4
411		別紙1 鉄道車輛工業労務者用諸物資配給事情			ト一B 5—2枚
412		別紙2 陳情書〔鉄道車輛工業協会会長, 12会社16工場連署〕			ト一B 4
413		別紙3 鉄道車輛工業労務加配米基準量改訂陳情に関する件〔鉄道車輛工業協会〕	1947年10月9日		ト一B 4
414		別紙4 鉄道車輛製造工場の労務厚生対策につき特段の御配慮懇請に関する件〔鉄道車輛工業協会会長下田文吾〕	1947年9月20日		ト一B 4
415		鉄道車輛生産振興会議規約・運動方針			ト一B 5—4p
416		工場経営協議会規程			ト一B 5—4p
417	鉄道車輛工業経営者連盟	労働協約改訂案			ト一B 5—8p
418	全国車輛産業労働組合情報宣伝部	Z.S.R NEWS No.69〔昭和23年度国鉄車輛修繕計画内定車輛数工作局長決済にて決定す〕	1948年1月9日		ト一B 4
419	全国車輛産業労働組合	堀問題(1947年10月第9回中央委員会)[組合費横領事件]			ト一B 5—8p
420	[全車]	運動方針(案)[車輛会議]			ト一B 4
421	[日立笠戸工場労組]	笠戸工場給与制度(案)			ト一B 5—4枚

労働運動

422	〔全車〕	車輛会議常任委員会報告(1947年12月19日)	ト一B 4
423	〔全車〕	中央経済再建整備委員会構成・同労働者委員・産別選出経済再建整備委員会準備会(1981.1.29~30)	ト一B 4
424	産別選出経済再建整備委員全国会議	経済再建整備委員会議事規則(案)(22年2月8日)	ト一B 4
425	〔産別会議〕	産別選出経済再建整備委員全国会議資料 経済再建整備委員会官制〔写〕(昭和22.2.5発令 同7.7改正)	ト一B 4
426		産別選出経済再建委員全国会議資料, 地方及都市府県経済再建整備委員会の組織及び権限に関する件(案)	ト一B 4—4枚
427		第6回企業整備対策委員会議事録(1948年1月16日)	ト一B 4
428		企業整備闘争指針第5号(闘争指針の補遺)	ト一B 4
429	全電工生産復興委員会	生産復興闘争指針第2号 企業整備事業計画の立案に就いて	ト一B 4—3枚
430		企業再建整備法の整備計画についての経理に関する認可基準(昭和22年10月7日付理秘第2946号 大蔵省理財局長発各財務局長宛通牒)	ト一B 4
431		生産能力調査表(昭和22年10月現在)	ト一B 4—2枚
432	全車調査部	生活必需品自由価格地区別対照表(昭和22年12月中)	ト一B 4
433	〔全車〕	鉄道車輛振興会議対策(案)	ト一B 4・B 5各1枚
434		21・22年度東京都食糧配給状況及チ配状況	ト一B 5
435	〔全車〕	12月分支部別平均実収比較表(除越冬年資金)	ト一B 4
436	全車調査部	10月分総平均月収調査表	ト一B 5
437	全車調査部	支部別11・12月平均月収一覧表 [1947年]	ト一B 4
438	〔全車〕	10月分平均実収賃金集計表 [1947年]	ト一B 4—2枚
439	〔全車〕	鉄道車輛生産振興会議具体的運動方針(案)	ト一B 5
440	全車調査部	鉄道車輛生産能力調査(昭和22年10月現在)	ト一B 5
441	〔全車〕	最低賃金算定基準調査表説明書(第3号調査表)	ト一B 4—2枚
442	産業復興会議・企業整備対策委員会	過度経済力集中排除法の手続と基準の解説	ト一B 5—12p
443	生産復興対策部	省機関車外註修繕計画表	ト一B 4

444	全車調査部	11月分平均実収賃金集計表・12月分平均実収賃金集計表・1月分総平均月収調査表・1月分平均実収賃金集計表・各支部12月分総平均月収調査表			ト一B 4—3枚、 B 5—1枚
445		大金属労働者大会の決議に対する回答(22年12月12日)			ト一B 4
446	企業整備対策専門委員会	企業整備相談所の開設に就いて(1948年2月3日)・企業整備対策会議議事録(1948年2月3日)			ト一B 4—2枚
447	[全車]	全国車輛産業労働組合退職手当規定(基準案)			ト一B 4
448		D51型価格変遷表23—7調	1948年		肉一A 4—10枚
449	産業復興会議賃金専門委員会	職階制及び物価改訂について	1948年4月8日		ト一B 5—11p
450	産業復興会議企業整備対策委員会	企業整備・集中排除法闘争の経過と現況に関する報告	1948年4月7日		ト一B 5—35p
451	鉄道車輛工業協会	『資料月報』	第13号 1947年12月15日		ト一B 5—52p
452			第15号 1948年2月25日		ト一B 5—43p
453	[全車]	[労働協約資料]	[1948年]		ト一B 5—36p

#### 4 全日本金属労働組合・全日本金属産業労働組合協議会

454	[全日本金属労働組合]	全日本金属労働組合同規約・諸規定	1948年11月		活一B 6—39p
455	全日本金属労働組合	『金属労働者は如何に闘うか』1948年10月の結成大会でできた運動方針	1948年11月		活一B 6—74p
456	全日本金属労働組合中央執行委員会	金属指令第3号 敵階級に対する反撃闘争組織化の件	1948年11月29日		ト一B 4—4枚
457	[重家豊]	大金属産別中国ブロック組織方針〔起案〕	[1948年]		肉一B 4
458	全日本金属労働組合常任執行委員会	政治戦線統一への要望	1949年1月10日		ト一B 5
459	全日本金属労働組合本部	金属指示第11号 世界労連第2回大会日本代表派遣に関する指示	1949年1月12日		ト一B 5
460	全日本金属労働組合	金属指令第4号 資本案階級に対する反撃闘争を強化せよ	1949年1月13日		ト一B 4—3枚
461	全日本金属労働組合青年対策部・婦人対策部	金属本部指令第4号に基く青婦対指示第7号	1949年1月26日		ト一B 5
462	全日本金属労働組合常任中央執行委員会	鉄鋼対策資料	1949年2月5日		ト一B 4
463	全日本金属労働組合常任中央執行委員会	第3回中央執行委員会議案	[1949年2月]		ト一B 4・B 5各1枚

労働運動

464	〔全金属〕	調査部活動報告1948.11—1949.2	〔1949年3月〕	ト一B4	
465	〔全金属〕	第2回中央執行委員会以後の組織状況(現勢)	〔1949年〕	ト一B4	
466	〔全日本金属労働組合愛岐支部〕	全日本金属労働組合第三回中央執行委員会愛岐支部提出資料	〔1949年3月〕	ト一B5—4p	
467	〔全日本金属労働組神奈川支部〕	金属神奈川支部報告	1949年	ト一B5—14p	
468	全金属労組山口支部	全金属労組山口支部情況報告及情勢分析	〔1949年〕	ト一B4—5枚	
469	〔全日本金属労働組合〕	機関紙部報告	1949年2月	ト一B4	
470	〔全日本金属労働組合〕	越冬闘争(越冬資金)	〔1949年〕	ト一B4	
471	〔全日本金属労働組合〕	業種別対策部「報告」	〔1949年2月〕	ト一B4	
472	〔全日本金属労働組合〕	(協約闘争)	〔1949年〕	ト一B4	
473	〔全日本金属〕	金属財政部活動報告	〔1949年2月〕	ト一B4	
474	〔全日本金属労働組合〕	第2回中央執行委員会以後に於ける行動日誌	〔1949年1月〕	ト一B4—3枚	
475	全日本金属労働組合青年婦人対策部	青年婦人対策部活動報告 第2回中央執行委員会後に於ける青年活動の状況	〔1949年3月〕	ト一B4	
476	〔全日本金属労働組合〕	組織争議部活動報告	1949年	ト一B4—3枚	
477	〔全日本金属労働組合〕	第1回金属電工合同常任中央執行委員会議事録(1949年3月16日)		ト一B4・B5各1枚	
478	全日本金属労働組合中央執行委員長和田次郎	金属中執委員長通達第2号 第4回中央執行委員会招集に関する件	1949年3月30日	ト一B4	
479	全日本金属労働組兵庫支部	第4回中央執行委員会会場案内	〔1949年4月〕	ト一B4	
480	〔全日本金属労働組合〕	国内情勢		ト一B5—14p	
481	全日本金属労働組合婦人対策部・全日本電気工業労働組合青婦対策部	家庭婦人の生活調査表 調査[アンケート調査]	1949.4.1	ト一B4	
482	大金属教宣部	『大金属情報』	No.4	1949年4月4日	活一B5—2p
483			No.6	1949年4月22日	活一B5—2p
484	〔全日本金属産業労働組合協議会〕	『資料速報』第1号	〔1949年4月〕	ト一B5	
485	全日本金属労働組合調査業対部	輸送防衛資料	〔1949年4月〕	ト一B4	
486	全日本金属労働組合調査業対部	鉄道車輛工業の現状分析と其の対策	〔1949年4月〕	ト一B4	
487	全金属・全電工青年婦人対策部	金属電工青年婦人対策部指示第2号 青年部婦人部活動についての指示 [各支部青年部婦人部宛]	1949年5月23日	ト一B4・B5各1枚	

488	全日本金属産業労働組合協議会	第2回大会資料(1949年5月30・31日実施)		活一B4—8p
489	〔全日本金属労働組合〕	金属第2回大会に提出する議案と報告書作製に関する要綱・闘争の経過と批判	[1949年5月]	ト一B4—10枚, B5—1枚
490	〔全日本金属労働組合〕	経過報告	[1949年5月]	ト一B4—3枚, B5—1枚
491	〔全日本金属労働組合〕	全日本金属労働組合中央執行委員名簿・全電工役員及び中央委員名簿(第4回中執以後)	[1949年]	ト一B5—13p
492	大金属教宣部	『大金属情報』No.7	1949年5月30日	活一B5—4p
493	全日本金属労働組合組織部	金属労働者組織表	1949年6月12日	ト一B4
494	全日本金属産業労働組合(大金属)協議会	大金属府県別分会名簿(1949年5月1日現在)	1949年5月30日	活一B5—62p
495	全日本金属産業労働組合(大金属)協議会	大金属府県別分会名簿正誤表(金属と電工)	1949年5月30日	ト一B5—7p
496	全日本金属労働組合・全日本電気工業労働組合	全電指示61号 民権同の地方組織を強化発展促進せしめよ	1949年6月6日	ト一B5—4p
497	全日本金属労働組合	『金属戦線』国鉄防衛共同闘争特集号外	1949年6月14日	活一タブー2p
498	〔全日本金属・全電工〕	金属第5回中央執行委員会・全電工第5回中央委員会合同会議召集の件	1949年6月22日	ト一B4
499	全日本金属労働組合協議会	要求書	1949年6月30日	ト一B4
500	全日本金属労働組合・全日本電気工業労働組合	声明	1949年6月30日	ト一B5
501	〔全日本金属・電工〕	第五回金属中央執行委員会・電工中央委員会合同会議議事次第	1949年7月5日 ～6日	ト一B5
502	全日本金属労働組合・全日本電気工業労働組合	速報 臨時	1949年7月5日	ト一B4
503	全日本金属労働組合	行動日誌〔4月14日～7月5日〕	1949年7月	ト一B4・B5各1枚
504	全日本金属労働組合文化部	文化サークル協議会の紹介		ト一B4
505	全日本金属労働組合教育宣伝部	教宣活動方針について	[1949年]	ト一B4
506	〔全日本〕金属	中央執行委員会提出議案(機関紙部提案)		ト一B4
507	〔全日本金属労働組合〕	中央執行委員会教宣部報告	1949年	ト一B4—2枚



労働運動

508	〔大金属〕	組織争議部活動報告資料 分会規約 について	〔1949年1月〕	ト一B 4
509	〔全日本金属労働組合〕	全日本金属労働組合労働協約基準案	〔1949年〕	ト一B 4—2枚
510	全日本金属労働組合	『金属戦線』No.43	1949年8月17日	活一B 5—20p
511	〔全日本金属労働組合〕	機関紙活動について		ト一B 4
512	金属・電工財政部	1949年度予算一覧表 現在	1949. 8. 31 〔1949年〕	ト一B 4
513	〔全日本金属労働組合〕	全日本金属労働組合規約 *『金属戦線』No.54(11月15日)と同時 配布	1949年11月	活一B 6—8p
514	全日本金属労働組合	『金属戦線』No.54	1949年11月15日	活一B 5—6p
515	全日本金属労働組合調査部	経営者団体の越冬資金対策に関する 基本的態度(越冬資金闘争資料)	〔1949年11月〕	ト一B 4
516	全日本金属労働組合	指示第4号 財政確立に関する件	1949年11月24日	ト一B 5
517	全日本金属労働組合青 婦人対策部	生活を良くするために青年・婦人部 を確立しよう	1949年12月12日	ト一B 4
518	全日本金属労働組	『金属戦線』	No.56 1949年12月6日	活一B 5—8p
519			No.57 〔1949年〕12月13日	活一B 5—2p
520	大金属	『大金属新聞』No.40	1949年12月24日	活一全紙—4p
521	全日本金属労働組合	首切り反対闘争状況	〔1949年〕	ト一B 4
522	〔全日本金属労働組合〕	11月30日現在調 組織状況一覧表	〔1949年〕	ト一B 4
523	〔全日本金属労働組合〕	〔加入・脱退表〕	〔1949年〕	ト一B4・B5各1枚
524	全日本金属労働組合文 化部	(中執委資料)今後・文化活動はこう いう方針ですすめていきたい	〔1949年12月〕	ト一B 4
<b>金属広島(県)支部</b>				
525	全日本金属広島支部青 婦部書記局	『金属青年』No.2	1949年4月10日	ト一B 5—8p
526	大金属広島県支部	法規闘争について 指令第2号	〔1949年〕	ト一B 4
527	全日本金属広島支部教 育宣伝部	『支部 = ユース』	1949年5月23日	ト一B 4
528	大金属広島県支部	大金属県支部指示4号(写)・1949年 6月10日	〔1949年6月〕	ト一B 4
529	〔大金属広島県支部〕	支部大会運動方針草案	〔1949年〕	ト一B 4—2枚
<b>金属、広島以外の支部・分会</b>				
530	全日本金属労働組合□ □支部九州機工分会	闘争経過記録	〔1949年〕	ト一B 4—2枚

531	〔全日本金属労働組合〕	山口支部東洋鋼板争議における不当弾圧の抗議並びに犠牲者救援資金カンパの件	〔1949年〕	ト一B 4
532	全日本金属労組神奈川支部調査部	資料 付表4 越年資金獲得状況1949年1月31日現在	〔1949年1月〕	ト一B 4
533	全金属神奈川支部教育宣伝部	金属労働者を狙いうちの弾圧 特殊製鋼分会幹部の検束は教える	1949年10月	活一B 6—17P
534	〔全日本金属愛岐支部〕	愛岐支部分会実情調査集録(但25分のみ)1949. 2. 5 調	〔1949年〕	ト一B 5
535	〔全日本金属労働組合神奈川支部〕	労働組合同規約・労働協約に関する県労働部との懇談会	〔1949年2月〕	ト一B 4—5 枚
536	全日本金属労組富山支部立山重工分会情宣部	『組合しんぶん』№. 3	1949年2月5日	ト一B 5
537	全日本金属労働組合東京支部	業種別対策部強化の件	〔1949年〕	ト一B 5
538	全日本金属労組京滋支部志賀工業分会	ばね座金値段表	1949年	ト一B 5
539	全日本金属労働組合茨城支部	鬼畜の資本家と闘った吉田分会の実相		ト一B 5—8 p
540	全日本金属労働組合千葉支部	要請 地労委の反動露骨化す	〔1949年〕	ト一B 5
541	全日本金属労働組合神奈川支部月島機械鶴見工場分会	闘争情況報告 延長6ヶ月、年を越えての闘争いよいよ重大段階に到達す	〔1949年〕	ト一B 4—2 枚
542	全日本金属労働組合神奈川支部	月島機械鶴見工場分会仮処分法廷闘争経過	1949年2月11日	ト一B 4
543	全日本金属労働組合兵庫支部	争議部資料最近の資本攻勢に現れた協約改悪	〔1949年2月3日〕	ト一B 4
544	全日本金属労組	『金属戦線』№70	1950年4月11日	活一B 5—4 p
545	金属常任中央執行委員会	通達 指令第三号の実施状況について	1950年7月5日	ト一B 5
546	全日本金属労働組合	『金属マメ日報』№13	1950年7月10日	ト一ハガキ
547	金属常任中央執行委員会	通達 次期(第5回)中央執行委員会について	1950年7月13日	ト一B 5
548	全日本金属労働組合教育部	〔争議記録』日立物語』購読依頼〕	1950年8月15日	ト一B 5
549	全日本金属労働組合第2回全国大会	大会宣言(案)	1950年10月18日	ト一B 4
550	〔全日本金属労働組合〕	綱領(現)	〔1950年〕	ト一B 4
551	全日本金属労組新潟支部	『金属新潟』№24	〔1950年7月7日〕	ト一B 5—2 p
552	全日本金属労働組合青森支部東北農機弘前工場分会	真相を訴える	〔1950年〕	ト一B 6

労働運動

- |            |                          |  |             |           |
|------------|--------------------------|--|-------------|-----------|
| 553        | 全日本金属労働組合茨城支部日立闘争対策部     | 『日立闘争ニュース』No.6   | 1950年7月10日  | 活一B5      |
| 554        | 全労連・金属山口支部               | 尻ッポは出[か]かっている!   | 1950年7月18日  | ト一B5      |
| 5 産別会議・全労連 |                          |  |             |           |
| 555        | 全日本産業別労働組合会議文化部          | 『ソ連労働組合の文化活動』  | 1946年11月    | ト一B6—40p  |
| 556        | 全日本機器東京支部三菱重工東京機器分会      | 都民の皆様へ   | 1946年8月     | ト一B5      |
| 557        | 全日本機器東京支部三菱重工東京機器分会      | 『闘争ニュース』   | 1946年8月27日  | ト一B5—2p   |
| 558        | 全日本機器労働組合東京支部東京機器分会      | 御家族の皆様へ<br>*三菱重工東京機器製作所ストライキについて                                     | 1946年8月28日  | ト一B5      |
| 559        | 全日本機器東京支部三菱重工東京機器分会      | 『闘争文芸』No.4   | 1946年8月29日  | ト一B5      |
| 560        | 全日本産業別労働組合会議法律部          | 『生産管理の合法性と戦術』  | 1947年1月     | ト一B6—31p  |
| 561        | 全日本産業別労働組合会議             | マーケット代将及びコーエン労働科学課長による G.H.Q 労務課の日本労働組合に対する勧告(非公式メモランダム)(1947年1月25日) | 1947年1月     | ト一B4      |
| 562        | 全日本産業別労働組合会議             | 全国拡大執行委員会提出議案  | 1947年3月     | ト一A4—2p   |
| 563        | 重家豊                      | 産別会議拡大執行委員会議記録<br>*1947年3月12~13日, 早大大隈講堂                             | 1947年3月     | 肉一B5—27p  |
| 564        | 全日本産業別労働組合会議選挙対策委員会      | 『労働組合と選挙』  | 1947年3月     | ト一B6—20p  |
| 565        | 全日本産業別労働組合会議調査部          | 『労働組合法と労働者』  | 1947年10月    | 活一B6—100p |
| 566        | 全日本産業別労働組合会議             | 『週刊情報』No.33  | 1947年12月13日 | 活一B5—16p  |
| 567        | 全電工青年婦人対策部               | 産別青年婦人運動方針について   | 1947年12月24日 | ト一B4      |
| 568        | 全日本電気工業労働組合神奈川支部闘争委員会書記局 | 『労働者の立場から見た企業整備早わかり』   | 1947年       | 活一B6—31p  |
| 569        | 全日本機器労働組合出版部             | 機器パンフレット第1集『“企業再建整備”と労働組合』   | 1947年7月     | 活一B6—29p  |
| 570        | 日本新聞通信放送労働組合教育宣伝部        | 『トウシャ印刷の知識と実技』   | 1947年2月     | ト一B6—79p  |

571	全日本産業別労働組合 会議	『産別会議はどう闘うか—1947年11 月第2回定期大会でできた運動方 針—』	1948年1月	活一B 6—87p
572	全日本産業別労働組合 会議調査部	『企業整備と如何に闘うか—その具 体的活動方針—』	1948年1月	ト一B 6—58p
573	全電工企業整備対策委 員会	『集中排除法を如何に闘うか』	1948年1月	ト一B 6—9p
574	全日本産業別労働組合 会議	『週刊情報』No.42 * 企業整備はどう進んでいるか?	1948年2月7日	活一B 5—16p
575	全日本産業別労働組合 会議	『週刊情報』No.50 * 企業整備と大衆闘争	1948年4月3日	活一B 5—20p
576	産別会議調査部	団体協約基準案	[1948年4月14日]	ト一B 5—12p
577	全日本産業別労働組合 会議出版部	産別シリーズ1『俳伊最近の労働情 勢』こんの・じゅん著	1948年4月	活一B 6—39p
578	全日本産業別労働組合 会議出版部	産別シリーズ2『生産管理の合法性』 森長英三郎著	1948年5月	活一B 6—61p
579	産別会議	『産別特報』No.36	1948年5月11日	活一B 5—2p
580	全日本産業別労働組合 会議情報宣伝部	『産別特報』No.37 * 生管弾圧に反撃せよ—仮処分攻勢 とどう闘うか—	1948年5月15日	活一B 5—2p
581	産別会議	『産別特報』No.38	1948年5月18日	活一B 5—2p
582	産別会議教育部	漫画パンフレット第2集『われらの 生産復興闘争』労働戦線編集局	1948年6月	活一B 6—14p
583	全日本産業別労働組合 会議出版部	産別シリーズ3『外資導入と国内態 勢』小椋廣勝著	1948年6月	活一B 6—45p
584	全日本産業別労働組合 会議	声明書・全通非常宣言 * マ書簡について 産別会議・全通	1948年7月	ト一B 4
585	全日本産業別労働組合 会議出版部	産別シリーズ5『インフレはどうな るか』川崎巳三郎著	1948年8月	活一B 6—49p
586	〔産別会議〕	第4回全日本産業別労働組合会議大 会報告	1948年11月	ト一B 4—2枚
587	全日本機器労働組合常 任中央執行委員会	産別民主化同盟は解散すべし! 1948.2.29全日本機器労働組合常任 執行委員会の決定	1948年3月10日	活一タブ—2p
588	全電工調査部・青婦対 策部	結婚資金資料 第2輯	1948年2月10日	ト一B 4—2枚
589	全電工青年婦人対策部	国際婦人デーを迎えて〔各支部分会 宛〕	1948年3月1日	ト一B 4
590	全電工青年婦人対策部	青年婦人対策要綱	[1948年]	ト一B 4
591	全電工神奈川支部青婦 対策部	全電工全国青年婦人協議会細則(案)	[1948年]	ト一B 5

労働運動

592	全電工青婦対策部	第3回3支部青婦協議会議事録 〔1948年1月12日開催〕		ト一B5
593	全電工書記局	国鉄労働組合非常時態宣言〔写〕	1948年8月1日	ト一B4
594	全日本電気工業労働組合調査部	物価改訂の会社経理に及ぼす影響	〔1948年〕	ト一B4—6枚
595	全電工書記局	声明書 *1948年7月28日 生活権確立共闘 委員会の国家公務法反対声明書の 写	1948年8月1日	ト一B4
596	日本新聞通信放送労働組合教育宣伝部	『労働組合の文化活動』	1948年3月	活一B6—55p
597	全日本造船労働組合幸崎分会	『鉄槌』第3号	1948年7月15日	ト一B5—4p
598	全通信従業員組合中央闘争委員会	『宣伝指針』No.48	1948年5月14日	活一B5—2p
599	電産中央本部婦人対策部	婦人戦線の統一と国際婦人デー	〔1948年3月〕	ト一B4
600	全国財務労働組合	『重い税金をどうするか—更正決定に備えて—』	〔1948年11月〕	活一B6—39p
601	東北地方労働組合連絡会議準備会	『われわれは企業整備に対していかに闘うか』		活一B6—31p
602	大金属神奈川地協準備会	〔ピラ〕ゼネストかけて労働法改悪と闘えノ	1948年3月	活一B6
603	全日本産業別労働組合会議	賃金白書	1949年4月2日	ト一B5—9p
604	労働戦線編集局通信部	『労働通信』	1949年4月24日	活一B5—2p
605	全日本産業別労働組合会議教宣部	参考資料・労働組合法解釈例規 〔厚生省労政局編の写〕	〔1949年〕	ト一B4—5枚
606	全日本産業別労働組合会議	指示第81号健康保険改悪特に健康保険組合解散に関する闘争〔各単産・地方組織宛〕	1949年6月11日	ト一B4—3枚
607	全日本産業別労働組合会議出版部	産別シリーズ7『労働者階級とあたらしい文化』中野重治著	1949年6月	活一B6—47p
608	産別会議	『労働戦線』No.235	1949年12月22日	活一全紙—2p
609	〔全法協〕	全法協資料・組合専従者の有給制について	1949年5月14日	ト一B4—4枚
610	全国労働組合法規対策協議会編	『新労働法の問題点とその対策』	1949年8月	活一B6—136p
611		全法協資料 判例批評第8例	1949年8月30日	ト一B4—4p
612		全法協判例批評第1集—最近に於ける法廷闘争の成果—	1949年8月3日	ト一B5—80p
613	国鉄労働組合情報宣伝部	『国鉄新聞』号外 *国電ストの真相	1949年6月16日	活一B4

614	全労働省労働組合総連合	『失業白書』	1949年7月	活一B 6—16p
615	国鉄労組岡山支部宣伝部	『国鉄新聞』号外No.2	1949年7月3日	活—19.5cm×33.5cm
616	国鉄労働組合情報宣伝部	『国鉄新聞』号外	1949年7月6日	活一B 4
617	国鉄労組岡山支部宣伝部	『国鉄新聞』号外No.3	1949年7月7日	活—19.5cm×35.5cm
618	国鉄労働組合岡山支部	吉田百鬼夜行内閣打倒	1949年7月	活—13cm×18.5cm
619	東芝労働組合連合会・国鉄労働組合統一委員会	正義と自由を愛する人々に 松川事件の真相を訴える	[1949年]	活一B 6—4p
620	産別会議	『労働戦線』No.237	1950年1月1日	活—全紙—4p
621	全国労働組合連絡協議会第57回委員会	全労連要請第156号 当面する闘争の急速な拡大について	1950年7月6日	ト—B 4
622	全国労働組合連絡協議会	『全労連情報』No.26 生活擁護と戦争反対・民族独立の統一闘争方針	1950年7月7日	ト—B 4
623	全国労働組合連絡協議会	『全労連情報』No.27 反戦の大衆行動を組織	1950年7月10日	ト—B 4
624	全国労働組合連絡協議会	『全労連情報』No.28 日本船を戦争に参加させるな	1950年7月11日	ト—B 4
625	全国労働組合連絡協議会	要請第159号 要請 電産闘争の重要性と分裂策動の粉砕について	1950年7月13日	ト—B 4
626	全国労働組合連絡協議会	『全労連情報』No.31 労働新聞三倍化で不当弾圧にこたえん！	1950年7月15日	ト—B 4
627	全国労働組合連絡協議会	『全労連統一闘争ニュース』No.7	1950年8月14日	ト—B 5
628	全国労働組合連絡協議会	『ソ連の見た日本労働組合運動の現状』M・ラザーレフ著	[1950年]	ト—B 5—10p
629	全国労働組合連絡協議会	フランス経済復興闘争と外資導入の諸問題	[1950年]	ト—B 5—20p
630		『平和擁護 闘争における世界労働の任務と活動』『世界に於る統一運動の現状とそのあり方に就て』ルイ・サイアン、ブノア・フラシヨン著	[1950年]	ト—B 6—108p
631	全労連関東地協準備会	要請〔犠牲者救援活動に関する要請〕	1950年6月19日	ト—B 4
632	日本セメント労働組合	『セメント戦線』第10号	1950年1月1日	活—タブ
633	大金属労働組合協議会・全労連全日本金属労働組合・大金属関西地方協議会・全労連全日本金属労組福岡支部	戦争準備・奴隷への道 低賃金・労働強化を打破れ！	[1950年]6月22日	活—15cm×26.5cm
634	全労連金属大阪支部淀川製鋼所分会	『淀報』67号	1950年6月30日	ト—B 4

労働運動

635	日立製作所亀戸工場労働組合執行委員長御宿良治	労働者と都民の皆様に訴える!!		1950年7月1日	活—B 4
636	弘前地区東北農機織物共同闘争委員会	声明書		1950年7月1日	ト—B 4
637	日映演東宝支部	『全国情報』No.15		1950年7月5日	ト—B 4
638	全労連・全印刷労組・日本機関紙印刷分会・あかつき印刷分会	職場の労働者諸君に訴える!		[1950年7月]	ト—B 5
639	全労連東海地協準備会	『全労連東海地協速報』No.10		1950年8月7日	ト—B 4
640	大同星崎教宣部・調査部	『週間情報』No.15			ト—B 4
641	全自動車水島分会	水島再建案		[1950年]	ト—B 4—2枚
642	全法協	『全法協タイムズ』No. 8		1950年12月11日	活—全紙—2p
643	世界労働運動研究協議会	『世界労働旬報』No. 8		1950年12月15日	活—B 5—16p
644	産別会議調査資料室	『調査旬報』No.24 * 日立総連の新労働協約は何を意味するか—協約闘争の正しい前進のために—		1951年5月11日	活—B 5—16p
645	全国労働組合生活対策協議会	『生活対策ニュース』	No.94	1951年1月15日	ト—B 5—21p
646			No.101	5月1日	ト—B 5—15p
647			No.102	5月15日	ト—B 5—21p
648	全国労組生活対策協議会	『大衆生活を無視した強制医薬分業』		1951年5月	活—四六—11p

6 県下地域組織

649	中国労働組合協議会	『信号旗』	創刊号	1946年8月1日	ト—B 5—8p
650			第2号	11月1日	ト—B 4—6p
651			第2号付録	11月1日	ト—B 5—2p
652	三原地方労働組合連盟	決議文〔重家豊起案草稿〕		1946年12月17日	肉—B 4
653	〔重家豊〕	宣言〔起案草稿〕		1946年12月24日	肉—B 4
654	〔三原地方労働組合連盟〕	有限責任三原労働連購買組合定款(案)		[1946年]	ト—B 4—5枚
655	〔三原地方労働組合連盟青年部〕	三原地方労働組合連盟青年部結成大会提出議案		[1947年]	ト—B 4—2枚
656	〔三原地方労働組合連盟〕	〔三原地方労働組合連盟〕大会(議事解説)議案要綱		[1947年]	ト—B 5—2枚
657	三原地区共闘委員会	情報 市長・市会議長・公安委員長 団交ノ成果		1948年4月	ト—B 4
658	〔三原地方労働組合連盟〕	三原地区労働組合連盟名簿		[1948年]	肉—B 4

659		判決〔日本セメント労組糸崎支部地位保全仮処分申請事件・首切り〕	〔1949年4月22日〕	ト一B 5—14p
660	日本セメント労働組合糸崎支部	日本セメント紛争経過概要	〔1949年4月〕	ト一B 4—7枚
661	〔三原地方労働組合連盟〕	議事報告〔三原地方労働組合連盟大会〕	〔1949年5月〕	ト一B 4—6枚
662	三原地方労働組合連盟	自1948.12至1949.5 半期決算報告〔大会報告〕	〔1949年5月〕	ト一B 5
663	〔三原地方労働組合連盟〕	労働会館建設資金収納状況報告書(1949.5.16現在), 第20回メーデー会計報告(中間報告・5.18現在)〔大会報告〕	〔1949年5月〕	ト一B 4
664	〔三原地方労働組合連盟〕	運動方針	〔1949年5月〕	ト一B 4
665	全金属三車従業員分会	地連定期大会議案修正案	1949年5月26日	ト一B 4
666	三車従分代議員・幸田武士	委任状〔三原地連大会退場で〕	〔1949年5月〕	肉—17.5cm×12.5cm
667	三原地方労連書記局	資本家のイトせる労働関係法規改悪を我々は如何に粉碎すべきか	〔1949年〕	ト一B 4
668	総同盟三原地区共同闘争委員会	撤!! 〔労働法規改悪絶対反対〕	〔1949年〕	ト一A 6
669		日鋼闘争日誌	〔1949年6月〕	ト一B 4
670		日鋼闘争記録	〔1949年6月〕	ト一B 4
671		情報〔日鋼闘争〕	〔1949年6月〕	ト一B 4
672	広島県産業防衛会議準備会・日鋼防衛共同闘争委員会	全人民諸君に訴える!	1949年6月17日	ト一B 4
673	国鉄労組糸崎分会執行委員長	〔産業防衛会議準備会結成懇談会招請状・各労組宛〕	〔1949年6月〕	ト一B 5
674	全通信労働組合三原支部	三車の労働者諸君に訴える	〔1949年11月〕	ト一B 6
675	三原地方首切反対共同闘争委員会	共同闘争宣言 *資料年月日の1946年は誤り	1949年6月24日	ト一B 5
676	三原鈴鹿労働組合	提訴状	1949年9月	ト一B 5
677		異議申立書〔会社側の企業再建整備計画に対する東洋繊維労働組合協議会代表 委員長佐藤義雄の異議申立書〕	〔1949年〕	ト一B 4—4枚
678	重家豊	企業整備〔ノート〕	1949年	A 5ノ一ト 1冊
679	尾道地方労働組合連合会副委員長寺本利徳	請願書〔地方税法反対〕	1950年8月31日	ト一B 4
680	東畿三原工場従業員組合	第4回定期大会議案書	〔1950年〕	ト一B 5—8p



- |     |          |                     |            |      |
|-----|----------|---------------------|------------|------|
| 681 | 尾道自由労働組合 | “自由労組幹部20数名不法検挙さる”  | 1951年4月    | トーB6 |
| 682 | 沖敏行      | [帝人]研究所三原分室存置に就ての御願 | 1951年12月8日 | タータブ |

## Ⅱ 共産党関係

### 1 本 部

- |     |                     |                                   |             |         |
|-----|---------------------|-----------------------------------|-------------|---------|
| 683 | 日本共産党               | 『党報』<br>* 土地改革早わかり                | 1946年12月1日  | 活一タブー4p |
| 684 | 日本共産党中央委員会<br>宣伝教育部 | 『宣伝教育指針』No.10<br>* 初等党学校・政治学校のやり方 | 1946年12月10日 | トーB4ー2枚 |
| 685 | 日本共産党               | 『党報』<br>* 第2回全国協議会経過              | 1947年2月1日   | 活一全紙    |
| 686 | 日本共産党               | 日本共産党早わかり                         | 1947年2月28日  | 活一タブー4p |
| 687 |                     |                                   | 1947年4月21日  | 活一タブー4p |
| 688 | 日本共産党中央委員会          | 第4回中央委員会総会報告及び決定集(5月18日~20日)      | 1947年6月5日   | 活一タブー6p |
| 689 | 日本共産党中央委員会          | 『宣伝指針』                            | 1947年3月15日  | 活一B5ー4p |
| 703 | 宣伝教育部               |                                   | 3月22日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 3月22日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 3月27日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 3月29日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 4月13日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 4月18日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 6月15日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 7月15日       | 活一B5ー8p |
|     |                     |                                   | 7月15日       | 活一B5ー8p |
|     |                     |                                   | 8月1日        | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 8月1日        | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 9月1日        | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 10月15日      | 活一B5ー8p |
|     |                     |                                   | 10月15日      | 活一B5ー4p |
| 704 | 日本共産党組織指導部          | 『組織宣伝指針』                          | 1947年12月20日 | 活一B5ー6p |
| 725 | ・宣伝教育部              |                                   | 12月20日      | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 1948年1月26日  | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 1月31日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 2月23日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 2月27日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 3月8日        | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 5月20日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 5月27日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 6月12日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 6月19日       | 活一B5ー4p |
|     |                     |                                   | 6月30日       | 活一B5ー4p |

			1948年7月10日	活—B 5—4 p
			7月17日	活—B 5—4 p
		No.24	7月24日	活—B 5—4 p
		No.25	7月31日	活—B 5—8 p
		[ママ] No.25	8月13日	活—B 5—4 p
		No.26	8月22日	活—B 5—4 p
		No.27	9月6日	活—B 5—4 p
		No.28	9月19日	活—B 5—4 p
		No.29	10月14日	活—B 5—4 p
		No.32	11月4日	活—B 5—4 p
726	日本共産党関東地方委員会	『関東週報』 国際婦人デー特集号	1948年3月8日	活—B 5—4 p
727	日本共産党中央委員会書記局	第6回大会第1回中央委員会における徳田書記長の報告要旨	1948年3月10日	活—タブ
728	日本共産党中央委員会書記局	第2回中央委員会報告決定集 (5.30～31)	1948年6月14日	活—タブ—4 p
729	日本共産党中央委員会書記局	徳田球一 組織活動について 1948年6月27日全国オルグ会議における報告要旨	1948年7月19日	活—B 5—6 p
730	日本共産党中央委員会書記局	新しい段階とわが党の任務 第3回中央委員会総会における徳田書記長の一般報告要旨	1948年9月10日	活—B 5—6 p
731	日本共産党中央委員会書記局	日本共産党第6回大会報告集 * 1947年12月21日～23日	1948年	活—B 5—24p
732	日本共産党中央委員会	『党活動指針』	No. 1 1948年11月10日	活—B 5—6 p
750			No. 2 11月27日	活—B 5—4 p
			No. 5 1949年2月22日	活—B 5—4 p
			No. 6 3月12日	活—B 5—4 p
			No. 7 3月25日	活—B 5—4 p
			No. 8 4月14日	活—B 5—4 p
			No. 9 4月29日	活—B 5—4 p
			No.10 5月5日	活—B 5—4 p
			No.11 5月9日	活—B 5—4 p
			No.12 5月14日	活—B 5—4 p
			No.13 5月21日	活—B 5—4 p
			No.14 6月30日	活—B 5—4 p
			No.16 7月18日	活—B 5—4 p
			No.17 7月25日	活—B 5—4 p
			No.18 8月13日	活—B 5—4 p
			No.19 10月8日	活—B 5—4 p
			No.20 10月20日	活—B 5—4 p
			No.23 11月21日	活—B 5—4 p
			No.25 12月20日	活—B 5—4 p
751	日本共産党中央委員会	『党内資料』 * 民自党と山林問題反動の巢林友会とは	[1949年]	活—B 5—8 p

共産党関係

752	日本共産党中央委員会 調査部・科学技術部	『党内資料』 * 崩かいをたどる国際独占資本・民 族を売る貿易政策・産業はかいの 吉田政策・人民ギセイに大銀行救 済・技術医療機関の危機	[1949年]	活一B 5—18p
753	日本共産党中央委員会 調査部	『党内資料』 * 地方産業の崩かいと農村危機の深 化	[1949年]	活一B 5—16p
754	日本共産党中央委員会 調査部	『党内資料』 * 吉田売国政策のギセイ	[1949年]	活一B 5—6p
755	日本共産党中央委員会 調査部	『党内資料』 * 国際独占資本の矛盾の激化	[1949年 8月]	活一B 5—18p
756 759	日本共産党	『アカハタ』 第720号 第774号 第810号 第925号	1949年 6月22日 8月24日 9月30日 1950年 1月24日	活一全紙 活一全紙 活一全紙 活一全紙
760	日本共産党中央委員会 宣伝教育部編	『来るべき革命における日本共産党 の基本的な任務について草案』 * 『党活動指針』別冊(1)	1950年 5月18日	活一B 6—52p
761	〔日本共産党〕	『技術論』 * 非合法活動の技術・非合法活動の 国際的経験	1950年 8月	ト一B 6—37p
762	組合問題研究会	『北京人民日報の社説(9・3アピール) をいかに理解し・行動すべきか?』	[1950年]	活一B 6—55p
763	〔日本共産党〕	『大十月社会主義革命第三十三周年 記念日におけるエヌ・ア・ブルガー ニンの報告』	[1950年]	ト一B 6—36p
764	〔日本共産党〕	『失業者の組織形体と闘争方法』 プ ロフイニテルン第5回大会を前にし て M・ウオイトキエウィツほか著		ト一B 6—12p
765	〔日本共産党〕	『ポリシェヴィキ的自治体政策のた めに』 * 1930年 3月のコミンテルン拡大 執行委員会の決議	[1950年]	ト一B 6—13p
766	日本共産党	『アメリカ帝国主義の朝鮮侵略戦争 が日本経済に及ぼした影響』 * 『世界知識』1950年 9月30日号掲載 の翻訳 荘濤著	[1950年]	ト一B 6—21p
767	〔日本共産党国際派〕	『解放戦線』No. 3 * 同志の宮本百合子の霊前に誓う他	1951年 2月 1日	ト一B 5—16p
768	〔日本共産党〕	『市民対策部報』No. 1 * 社会保険及び医療戦線の動向と統 一の急務—社会保険医療強化全国 大会をもし上げるために—	1951年10月 1日	ト一B 4

769	〔日本共産党〕	『資料』No. 6 *「四全協」以後の財政活動の諸経験	1951年10月5日	ト一B 4
770	〔日本共産党〕	『資料』No. 7 *秋田県由利郡の調査報告	1951年10月9日	ト一B 4
771	〔日本共産党〕	『資料』No. 8 *平和擁護闘争の経験を生かせ	1951年10月12日	ト一B 4
772	〔日本共産党〕	『資料』No. 9 *農民闘争の飛躍的拡大と強化のため に—最近の四つの農民政策会議 から—	1951年10月16日	ト一B 4
773		「平和のこえ」公判資料特別審査局編 「アカハタ」後継紙停刊理由書	〔1951年〕	ト一B 5—50p
774	全日本将棋同好会 〔日本共産党〕	『詰将棋』「当面の要求」などの共産党 非合法出版物	〔1951年〕	活一A 6—164p
775	国民体育促進会 〔日本共産党〕	『健康法』No. 26 〔「日本共産党の当面要求—新しい綱 領」ほかの共産党非合法出版物〕	1951年	活一B 6—39p
776	日本共産党宣伝教育部	『宣伝指針』 *増加所得税にたいして		ト一B 4—2枚
777		日本青年会議情報No. 1		ト一B 4
778	秋月二郎	『私の自己批判—何よりも正しい態 度、全党的観点をつらぬくこと』		ト一B 5—32p
779	〔日本共産党〕	『インド共産党綱領草案』		ト一B 5—8p
780	日本共産党	『大衆組織活動におけるイタリア共 産党の任務』ピエトロ・セツキヤ著	〔1950年〕	ト一B 5—6p
781		『人民民主主義と社会主義革命』 ベ・エヌ・マニコフスキほか著		活一B 6—64p

## 2 広島県党関係

782	第4回三車経営細胞総 会	決議文	1946年11月15日	肉一24cm×28cm
783	共産党広島地方委員会	『広島地方党ニュース』 第1号	1946年11月	ト一B 4
784	日本共産党三原地区委 員会三車細胞	『赤いロケット』 No. 2	1947年3月3日	ト一B 4
786		No. 4	3月31日	ト一B 4
		No. 6	9月10日	ト一B 4
787	〔日本共産党三車細胞 委員会〕	指令第1号・賃金共同闘争について の第二組合決定の回答に対する党の 態度について、指令第2号・当面の 宣伝活動について	1948年6月8日	ト一B 4
788	〔日本共産党三車細胞 委員会〕	指令第3号・賃銀闘争に対する党の 態度について	1948年6月20日	ト一B 4

共産党関係

789	日本共産党三原車輛細胞委員会	全党員に訴える		1948年7月15日	トーB4
790	日本共産党三原車輛細胞	声明書〔重家草稿〕		1948年7月20日	肉一B4—4枚
791	日本共産党国鉄糸崎機関区細胞	松山機関区の闘争を勝たせろ!!		1948年8月7日	トーB5
792	〔日本共産党三車細胞〕	本年度第5回細胞総会議案「一般報告」要旨		1948年11月3日	トーB4
793	日本共産党広島県委員会	『ヒロシマ県ニュース』		1948年11月21日	トータブ—2p
794	〔日本共産党三車細胞委員会〕	宣伝指針第2号・第二組合が締結した労働協約のギマンについての宣伝のやり方	〔1948〕		トーB4
795	日本共産党三原車輛細胞	官製労働学校反対闘争方針〔重家草稿〕	〔1948年〕		肉一B4
796	日本共産党三車細胞	労働会館建設資金を資本家に要求する闘争を起せ!!	〔1948年〕		トーB4
797	水曜会〔三車細胞組織か〕	最低賃金制の経済理論(中川有三—上林貞治郎の筆名『前衛』34号より)	〔1948年〕		トーB5—7p
798	日本共産党忠海細胞	忠海町政綱領案	〔1948年〕		トーB5
799	日本共産党広島県委員会宣教部	資料No.1〔共産党中央委員会調査部「昭和23年度『予算』中間分析」	〔1948年〕		トーB4
800	日本共産党日本セメント糸崎工場細胞	『窯』No.1		1949年1月14日	トーB4
801	日本共産党三原車輛細胞	『ロッド』No.14		1949年2月20日	トーB4
802	日本共産党広島県委員会	共同闘争申入レ会		1949年2月26日	トーB5
803	日本共産党三原地区委員会敷島寮細胞	『ベルト』創刊号		1949年4月5日	トーB4
804	日本共産党国鉄糸崎機関区細胞	『ロッド』No.4		1949年4月24日	トーB4
805	日本共産党三原地区委員会敷島寮細胞	『だんご』〔『ベルト』改題〕	第2号	1949年5月7日	トーB4
806			第3号	6月5日	トーB4
807	日本共産党中国地方委員会	『中国戦線』	第4号	1949年5月20日	活—タブ
808	日本共産党三原地区委員会	『新三原』	第2号	1949年9月4日	トーB4
809			第3号	9月7日	トーB4
810	日本共産党中国地方委員会	『中国党報』No.6		1949年10月25日	活—B5—4p
811	日本共産党東部地区委員会〔広島県〕	入党申込書		1949年	トーB5

812	〔重家豊〕	最低賃金制闘争を如何に押し進めるか〔草稿〕	〔1949年〕	肉—B 5—5枚
813		〔農民問題対策委員会・市民問題対策委員会のメンバー〕	〔1949年〕	肉—B 5
814	〔重家豊〕	選挙闘争を利用した党员教育について	〔1950年〕	肉—B 5
815	〔日本共産党三原地区委員会〕	公安条例一斉制定の陰謀を粉碎せよ !!	〔1950年〕	ト—B 4
816	〔日本共産党三原地区委員会〕	団体等規正令(昭和24年4月4日政令第64号) *三原市公安条例制定反対闘争資料	〔1950年〕	ト—B 4・B 5各1枚
817	日本共産党広島県委員会	〔重家豊除名通知〕 *主流派による	1950年12月27日	肉—ハガキ
818		前県委員長長の自己批判書を発表するについて	〔1950年〕	ト—B 5
819	日本共産党中国地方委員会	『革命戦士』№32 *地方自治体選挙からメーデーへ平和擁護闘争を強力に展開せよ	1951年3月15日	ト—B 5—4p
820	〔日本共産党国際派(広島)〕	最近の『めまぐるしい変動』に際して全愛国者に訴う	〔1951年〕	ト—B 4—2枚
821	〔日本共産党広島県委員会〕	民族解放のための広島県民の反米愛国統一綱領	〔1951年〕	ト—B 4—2枚
822	国際問題研究所	『世界政治経済情報』第一集		活—A 5—48p
823		『国際情勢について』共産党・労働者党情報局会議		ト—B 6—36p
824		共産党・労働者党情報局会議の報告と決議 第1回・第2回・第3回会議党内研究資料	〔1950年〕	活—B 6—170p

### Ⅲ 救 援 運 動

825	労農運動救済会出版部	『検挙から公判闘争まで』不当弾圧と如何に闘うか 青柳盛雄著	1948年8月	活—B 6—62p
826		判決 *島亨 1948年7月15日大阪人権擁護大会での公務執行妨害事件の無罪判決	1948年12月	ト—B 4
827	労農運動救済会出版部	救済会パンフレット第3集『借家問題はやわかり』家屋追い立てに悩む人々のために 東本紀芳著	1949年12月	活—B 6—67p
828	松川事件対策委員会	三鷹事件公判速記録—特別頒布について—	1949年12月	ト—B 5

救 援 運 動

829	日本労農救援会東京支部	日本労農救援会東京支部の目的と活動・主なる綱領, スローガン・規約・役員一覧表	1949年	ト一B 5—4p
830	日本労農救援会	『救援活動情報』No.3	1950年2月5日	ト一B 4—2p
831	広島地方検察庁	処分結果通知について *坂田昭・長瀬一正・佐々木実義・日本労農救援会三原支部重家豊宛	1951年1月20日	ターB 5
832	日本労農救援会出版部	救援会文庫1『スターリン・毛沢東への手紙』死刑と闘う松川の労働者とその家族	1951年2月	活一B 6—48p
833	日本労農救援会中央委員会	勅令325号事件関係調査表	[1951年7月]	ト一B 5
834	人権民報社	人権民報に就いてお願い	1951年8月30日	ト一B 5
835	日本国民救援会中央本部宣伝部	宣伝部だより 中央委員会を終って	[1951年8月]	ト一B 5
836	日本国民救援会中央本部	『救援活動情報』No.56	[1951年8月]	ト一B 5—4p
837	松川事件無罪釈放百万人署名世話人会喜屋武由放	[松川署名について問合せ・日本労農救援会三原支部宛]	1951年11月3日	肉一ハガキ
838	自由法曹団本部	擬装追放無効確認訴訟の提起について[上村進代議士らの公職追放]	1951年12月6日	活一19cm×54cm
839	上村進他6名	擬装追放無効確認の訴状	1951年12月6日	活一B 5—17p
840	日本労農救援会三原支部	入会申込書	[1951年]	ト一B 6
841	日本労農救援会三原支部	日本労農救援会はどんな団体か	[1951年]	ト一B 6—15p
842	日本労農救援会三原支部	[調査表]	[1951年]	ト一B 5—4枚
843	日本労農救援会三原支部	労働災害犠牲者調査表	[1951年]	ト一B 5
844	松川事件[被告]無罪釈放百万人署名世話人会	『松川ニュース』No.7	1951年9月1日	ト一B 5
845	松川事件被告無罪釈放百万人署名世話人会	[幻灯「松川事件」などの広告]	[1951年]	ト一B 5
846	三鷹・松川対策委員会	死刑5人・無期5人の松川事件とは[広告ポスター]	[1951年]	ト一B 4
847	日本労農救援会	一円カンパ袋[松川・三鷹犠牲者]	1951年	ト一A 5
848		起訴状 *朝鮮人暴行事件	[1951年]	ト一B 4
849	日本労農救援会本部	『救援活動情報』	No.23 1951年2月3日	ト一B 5—6p
852			No.24 2月17日	ト一B 5—4p
			No.25 2月24日	ト一B 5—4p
			No.26 3月9日	ト一B 5—8p

853	『人権民報』第16号	1951年 8月25日	活一全紙—2p
854	『水源池』	No.53 1951年12月25日	ト—B 4—4p
855	*賀茂病院患者協会の機関紙	No.54 1952年 1月10日	ト—B 4—2p
856	〔重家豊〕 労農救援会活動記録	1950—51年	A 5ノ—ト 1冊

## Ⅳ 平和運動

857	沖縄大島解放同盟準備会	『解放』第5号	1950年 7月5日	ト—B 4
858	平和擁護世界大会委員会・平和を守る会・世界労連・全労連加盟日映演	戦争はくいとめうるか〔リーフレット〕	[1950年]	ト—新書大—8p
859	世界労働運動研究協議会	われわれは平和闘争をこう考え、こう実践している—各国平和活動家の生きた体験と実例—	[1950年]	ト—B 5—17p
860	広島平和祭祭典準備会	世界青年学生平和祭・広島平和祭の葉	[1951年]	ト—B 5—8p
861	ヴェ・テレンキン	平和擁護運動の新段階『星』パンフレット第1集	1951年 5月16日	活一A 5—10p
862		諱和投票	[1951年]	活—9cm×13cm
863	中国地方平和の闘士団協議会	第1回中国地方平和の闘士団大会報告集	[1951年]	ト—B 5—29p

## Ⅴ 文化・文学運動

### 1 新日本文学会関係

864	渡辺順三	〔重家批評に対する返事および『人民短歌』への寄稿要望・重家宛〕	[1946年10月1日]	肉—便箋—6枚
865	新日本文学会	『新日本文学会会員ニュース』No.15	1947年 9月25日	ト—B 5—4p
866	新日本文学会書記局	第3回常任委員会記録	1948年12月	ト—B 4—2枚
867	新日本文学会三原支部	あいさつ	[1948年]	ト—B 5—4p
868	新日本文学会三原支部	『みはら文学新聞』No.1	[1948年]	ト—タブ
869	新日本文学会三原市友の会	新日本文学会友の会に入りませう・同会規約	[1948年]	ト—B 5
870	新日本文学会常任中央委員会	法隆寺壁画焼失について文学者はかく訴える	1949年 1月	ターB 4



## 文化・文学運動

871	新日本文学会・新日本 歌人協会・新俳句人連 盟	声明	1949年8月16日	ターB 4
872	新日本文学会組織部	〔新日文組織綱領の意見集約依頼・各 支部宛〕	1949年12月5日	トーB 5
873	〔重家豊〕	〔新日本文学会三原支部集会での重 家挨拶メモ〕	1949年	肉一B 5
874	三原車輦演劇サークル 新日本文学会三原支部	〔リーフレット〕アリババ物語 前進 座少年劇場第1回公演	〔1949年〕	活一B 5—4p
875	新日本文学会・組織部 書記局	小林多喜二祭開催その他について	1950年2月1日	トーB 4
876	〔新日本文学会〕	刊行物配布回収調査	1950年2月	トーB 4
877	新日本文学会常任中央 委員会	機関誌定期刊行確保と会財政確立の ための訴え	1950年3月10日	トーB 4
878	新日本文学会	新日本文学会刊行物取次規定	1950年3月	トーB 4
879	新日本文学会	『小説委員会々報』№2	1950年5月	トーB 4
880	新日本文学会書記局	1950年度第2回中央委員会開催につ いて	1950年6月5日	ターB 4
881	新日本文学会書記局・ 組織部	支部現状調査について	1950年6月27日	トーB 4—2枚
882	〔新日本文学会〕	『新日本文学会小説委員会々報』№3	1950年6月	トーB 5—4p
883	新日本文学会詩委員会	委員会(第1回)記録	1950年6月	トーB 4
884	新日本文学会書記局・ 組織部	〔支部への活動強化要請〕	1950年7月4日	トーB 5
885	新日本文学会	『小説委員会々報』№4	1950年7月7日	トーB 5—4p
886	新日本文学会・組織部	各支部御中 *ストックホルム・アピール署名要 請ほか	1950年7月15日	トーB 4
887	新日本文学会	新日本文学8月号予告	〔1950年7月〕	トーB 6
888	新日本文学会常任中央 委員会	啄木祭の全国的開催のために	1951年3月10日	トーB 4—2枚
889	新日本文学会	全国啄木祭企画報告書	〔1951年3月〕	トーハガキ
890	新日本文学会詩委員会 ・新日本詩集編纂委員 会	新日本詩集(1951年版)発刊について	1951年3月	トーB 4
891	藤野菊治〔山口市〕	『文化新聞』№9	1951年5月15日	トーB 4
892	藤野菊治	〔新日文中国ブロック準備について 重家宛書簡〕	1951年7月1日	肉一A 4
893		新日本文学会中国地方ブロック会議 開催要領	1951年7月8日	トーB 4
894	菊地章一	〔重家宛書簡・三原支部会費滞納問題 など〕	1951年8月9日	肉一A 5—2枚
895	新日本文学会組織部	〔支部調査書送付依頼〕	〔1951年8月〕	トーハガキ

896	〔新日本文学会〕	在庫書籍並に代金精算内訳表	[1951年]	ト—B 5
897	新日本文学会	新日本文学会綱領・規約	[1951年]	ト—B 4
898	啄木祭準備委員会	啄木祭を行わう	[1951年]	ト—B 5
899	〔新日本文学会〕	『中常委ニュース』№.2	1951年9月10日	ト—B 4
900	新日本文学会呉支部	『小さな火』創刊号	1951年11月	ト—B 4
901	新日本文学会	入会確認通知〔重家豊宛〕		ト—B 5
902	新日本文学会県協書記局〔広島〕	〔三原の活動報告依頼〕	8月15日	肉—ハガキ
903	新日本文学会財政部	誌代の前納と読者倍加にご協力を		ト—B 5
904	御庄博実	掌中詩集《解放》1号発刊について * 峠三吉の重家豊宛の添え書き有り	[1951年7月]	ト—B 5
905 908	新日本文学会	『文学新聞』	第37号 1951年10月1日 第38号 11月1日 第39号 11月20日 第40号 12月25日	活—タブ—4p 活—タブ—4p 活—タブ—4p 活—タブ—4p
<b>2 勤労者文学会議</b>				
909	〔重家豊記録〕	勤労者文学会議日誌	[1947年5月～ 1948年10月]	A 5 ノート 1冊
<b>3 労働者教育・文化運動</b>				
910	財団法人広島県労働文化協会	三原支部規約案	1946年12月25日	ト—14cm×57.5cm
911	〔重家豊〕	第1回労働学校教材〔草稿〕	1947年1月29日	肉—B 4
912	三原労働学校	三原労働学校々則・綱領	1947年3月1日	ト—14cm×39cm
913	〔重家豊〕	三原労働学校〔講義メモ〕	[1947年9月7日]	肉—B 4
914		三原労働学校第1期生受講者割当	1947年	ト—B 5
915	〔重家豊〕	社会教育研究大会講演原稿(5月28日・10時・於福山中講堂)	[1948年5月]	肉—B 4—2枚
916		社会教育研究大会開催要綱	1948年	ト—B 4—3枚
<b>4 日本民主主義文化連盟・その他</b>				
917	日本民主主義文化連盟	日本人民文化賞の制定について	1948年	活—B 5—2枚
918	日本民主主義文化連盟調査部	文化年鑑調査資料	[1948年]	活—B 5
919	三原図書館・三原文化協会	夏季外語学校会員証	1949年8月	ト—7cm×9cm

## Ⅵ 占 領 軍

- |     |  |                                  |             |          |
|-----|--|----------------------------------|-------------|----------|
| 920 | 連合軍最高司令部   | 日本帝国政府ニ対スル覚書・題名<br>日本ニ与フル新聞紙法〔写〕 | 1945年 9月19日 | ト一B 4    |
| 921 | 福山市第三検閲局新聞部  | 〔検閲局移転通知〕                        | 1947年 3月24日 | ターB 5    |
| 922 | 極東軍最高司令部民間情報部民間検閲所第三地区検閲局(米軍郵第929号)司令官エリック・M・ウォンハースト | 〔『働く人』の受領通知・重家豊宛〕                | 1948年 2月12日 | ターB 5—3枚 |

## Ⅶ 三原市政・その他

- |     |                     |  |             |           |
|-----|---------------------|--|-------------|-----------|
| 923 | 三原市生活権擁護総隊起人民大会     | 〔三原市公安委員会宛公開質問書〕                               | 1949年 6月27日 | 肉一便箋—4枚   |
| 924 | 三原地方共闘              | 声明書〔企業整備反対・重家起案草稿〕                             | 1949年 7月 7日 | 肉一B 4     |
| 925 | 三原市生活権ヨーゴ人民大会       | 公安委員会を市民の手へ〔重家起案草稿〕                            | 〔1949年 7月〕  | 肉一B 4     |
| 926 |                     | 公安委員会に対する公開質問書〔三原市公安委員会宛〕                      | 1949年       | ト一B 5     |
| 927 | 三原市三原図書館後援会         | 三原図書館後援会結成趣意書                                  | 1949年       | ト一B 4     |
| 928 | 三原市三原図書館後援会         | 三原市三原図書館後援会規約                                  | 1949年       | ト一B 4     |
| 929 | 全日本造船労働組合中国支部日立向島分会 | 請願書〔第6次船建造量拡大要請〕                               | 1950年 6月16日 | ト一B 4     |
| 930 | 広島県御調郡向島東村会議長       | 新造船建造量拡大要望意見書                                  | 1950年 7月17日 | ト一B 4     |
| 931 | 三原市長戸田勝巳            | 議第110号 昭和25年度広島県三原市追加更正予算(第4号)                 | 1950年 9月21日 | ト一B 5—20p |
| 932 | 三原市長戸田勝巳            | 議第111号 議決更正の件                                  | 1950年 9月21日 | ト一B 4     |
| 933 | 三原市長戸田勝巳            | 議第112号 自昭和25年度至昭和26年度広島県三原市南小学校建築事業費継続年期及び支出方法 | 1950年 9月21日 | ト一B 5     |
| 934 | 三原市長戸田勝巳            | 議第113号 昭和25年度広島県三原市特別会計公益質屋事業費追加更正予算(第1号)      | 1950年 9月21日 | ト一B 5—4p  |

935	三原市長戸田勝巳	議案114号 三原市金庫設置並びに市金庫事務の取り扱いをする銀行を定める件	1950年9月21日	ト一B 5
936	三原市長戸田勝巳	議第115号 三原市議員定数条例の一部を改正する条例制定の件	1950年9月21日	ターB 5
937	三原市長戸田勝巳	議第116号 三原市職員退職手当支給条例の一部を改正する条例制定の件	1950年9月21日	ターB 4
938	三原市長戸田勝巳	議第117号 三原市吏員退隠料・退職給与金・遺族扶助料及び死亡給与金条例臨時特例の一部を改正する条例制定の件	1950年9月21日	ターB 5—3p
939	三原市長戸田勝巳	議第119号 行進及び集団示威運動に関する条例の全部を改正する条例制定の件	1950年9月21日	ターB 5—6p
940	三原市長戸田勝巳	議第120号 議会の議決又は住民の一般投票に付すべき財産營造物又は議会の議決に付すべき契約に関する条例の一部を改正する条例制定の件	1950年9月21日	ターB 5
941	三原市長戸田勝巳	昭和25年度広島県三原市特別会計運輸事業費歳入歳出追加更正予算(第2期)	1950年9月21日	ト一B 5—4p
942	三原市長戸田勝巳	議第127号 三原市税減免臨時措置条例制定の件	1950年9月21日	ト一B 5
943	三原市議会議長小林憲一	発第61号 糸崎天神山公園補強工事並児童遊園地併設について請願の件	1950年9月27日	ト一B 4
944	三原市議会議長小林憲一	発第60号 糸崎御山公園充実整美 <sup>〔附〕</sup> について請願の件	1950年9月27日	ト一B 4
945	三原市議会議長小林憲一	発第62号 西宮公園整備について請願の件	1950年9月27日	ト一B 4
946	三原市	〔三原市議會議員名簿〕	1950年	ト一13.5cm×34cm

## VIII 重家選挙・経歴

947		調査票〔選挙管理委員会提出重家豊経歴・控〕	1949年6月12日	活一B 5—17p
948	〔重家豊〕	〔農民大会での挨拶のメモ〕 * 県議補選で	1949年6月	肉一B 5
949	〔日本共産党〕	〔広島東部略図・選挙区〕	1949年	ト一B 4
950	〔重家豊〕	三原市内参院選得票数〔メモ〕	〔1950年〕	肉一B 4
951	〔重家豊〕	〔市議立候補演説草稿〕	〔1951年3月〕	肉一B 4—3枚
952	〔日本共産党・国際派〕	『党活動』No.3 * 革命的議会主義と当面の地方選挙闘争ノ	1951年3月10日	活一B 5—6p

重家選挙・経歴

953	〔日本共産党・国際派〕	『アジア指針』No.7 *選挙演説のために(1)	1951年3月25日	ト一B4—2枚, B5—1枚
954	〔日本共産党・国際派〕	『アジア指針』No.9 *領土問題を如何にとりあげるか	1951年4月4日	ト一B4
955		地方選挙闘争勝利のために(三原市政綱領案)	〔1951年4月〕	ト一B4
956		呼び込み原稿(第一例)一般市中向 〔重家豊推せん〕	〔1951年4月〕	ト一B5
957	〔重家豊〕	〔日本共産党市会議員候補者重家豊 ポスター〕	1951年	肉一B4
958	〔重家豊〕	労働者の皆さん〔原稿・三原市議選に 向けて〕	1951年	肉一B4
959	〔重家豊〕	自治体綱領〔メモ〕	〔1951年〕	肉一B4
960	三原市選挙管理委員会 委員長渡辺庄三郎	違反文書図画の撤去について	1951年4月11日	ト一B4
961		選挙運動費用収支報告書	1951年4月	ト一B4—4枚
962		三原市会議員立候補予定者	1951年3月8日	ト一B4
963	日本農民組合広島県連 合会	広島県会議員候補高瀬一視〔経歴〕	〔1951年4月〕	ト一B6
964		〔重家豊軍歴・控〕		肉一B4
965		〔重家豊〕身分証明書 *呉市長発行	1946年2月14日	活一B5
966		〔重家豊経歴・控〕		肉一B4
967		〔重家豊の昭和22年勅令第1号第7 条第1項の審査について「公職追放」 非該当についての〕確認書 *広島県知事発行	1949年9月30日	活一B5

1952—1980年

## I 文化・文学運動

## 1 新日本文学会

968	新日本文学会第6回大会	講和条約・日米安全保障条約・その行政協定に対する反対・新日本文学会第6回大会経過	1952年3月	ト一B4
969	新日本文学会第6回大会	朝鮮人強制送還に反対する	1952年3月20日	ト一B4
970	新日本文学会	新日本文学会役員名(1952年4月1日)	1952年4月	ト一B4
971	新日本文学会書記局	『新日文中常委ニュース』No.4	1952年4月	ト一B4
972	新日本文学会常任中央委員会	第6回大会の到達に立って前進せよ	1952年4月17日	ト一B4
973	新日本文学会常任中央委員会	『新日本文学』および文学会館防衛の〔以下不明〕	1953年10月	活一B5
974	新日本文学会	入会申込書〔井上治郎・吉見純一・田中敏博・吉田昇〕	1952年	ト一B4—4枚
975		〔新日文〕入会申込書〔石原紀文〕	1952年	肉一B5—3枚
976	新日本文学会	『文学新聞』 復刊第3号	1954年4月20日	ト一タブー4p
978		復刊第4号	5月28日	ト一タブー4p
		復刊第5号	8月25日	ト一タブー2p
979	新日本文学会常任中央委員会	一人の会員が二人以上の読者獲得を—会員のみなさんへお願いします—	1954年5月	ト一B5
980	〔新日本文学会〕大会準備委員会・常任中央委員会	追いかけてお知らせ	1954年12月22日	ト一B4
981	新日本文学会	新日本文学会創立十周年機関誌百号記念にあたってのおねがい	1955年9月	ト一B4
982	新日本文学会	『新日本文学会ニュース』 第19号	1956年12月1日	ト一B5—4p
984		第20号	1957年1月1日	ト一B5—4p
		第24号	5月1日	ト一B5—10p
985	新日本文学会組織部	領収書〔重家の会費〕	1957年2月26日	ハガキ
986	新日本文学会常任幹事会	財政について緊急のお願い	1957年5月10日	ト一B4
987	新日本文学会事務局長中野重治	この際3,000円を	1957年8月19日	ト一ハガキ
988	新日本文学会事務局長中野重治・財政部長壺井繁治	すべてを大会で明らかにするために	1957年9月20日	ト一ハガキ
989	新日本文学会	組織部報告	1957年9月25日	ト一B4
990	新日本文学会常任幹事会	われわれは声明する	1958年10月17日	タ一B4

991	新日本文学会	滞納誌代一掃についてのお願い	1957年10月19日	ト一ハガキ
992	新日本文学会幹事会	新日本文学会第8回大会のおしらせ	1957年10月	ト一B4
993	新日本文学会	一般報告要旨 *第8回大会	1957年10月	ト一B5—18p
994	新日本文学会	全組織の問題・その新しい焦点 —新しい協同の方式をつくりだすた めに—	1957年10月	ト一B5—16p
995	新日本文学会	財政報告 *第8回大会	1957年10月	ト一B5—15p, 付表4枚
996	壺井繁治	〔お礼および新日文財政部長退任の 報告・重家豊〕	1957年12月24日	肉一ハガキ
997	新日本文学会緊急拡大 常任幹事会	緊急カンパのおねがい	1958年10月23日	ハガキ
998	新日本文学会	領収書〔重家の会費・大会カンパ〕	1959年9月26日	ハガキ
<b>第9回大会</b>				
999	新日本文学会幹事会	大会御案内	1959年10月20日	ハガキ
1000	新日本文学会	活動概略	1959年11月	ト一B4
1001	新日本文学会	新日本文学会第9回大会—その草案 の草案—	1959年	ト一B4—6p
1002	新日本文学会	財政報告資料	1959年	ト一B4
1003	新日本文学会	新日本文学会規約〔第9回大会改正 草案〕	1959年	ト一B4
1004	新日本文学会	松川事件被告の無罪判決要請・緊急 のお願い	1961年6月21日	ト一B4—2枚, ターB4・B5各1枚
<b>第10回大会</b>				
1005	新日本文学会	第10回大会招集状	1961年11月27日	ターB4
1006	新日本文学会	大会議事日程	1961年12月	ト一B5
1007	新日本文学会	一般活動報告要旨	1961年12月	ト一B4—3p
1008	新日本文学会	第9回大会から第10回大会までの新 日本文学会の活動経過〔日誌〕	1961年12月	ト一B4
1009	新日本文学会	創造活動報告草案	1961年12月	ト一B4—6p
1010	新日本文学会	財政報告資料	1961年12月	ト一B5—4p
1011	新日本文学会	会費・機関誌の切離しについてお知 らせ	1962年1月22日	ト一B4・B5各1枚
1012	新日本文学会	領収書〔重家の会費〕	1963年9月12日	ハガキ
1013	新日本文学会常任幹事 会	年末のりぎりカンパの訴え	1963年12月21日	ト一B5
1014	新日本文学会幹事会	おねがい	1964年12月9日	ト一B4—1枚



1015	新日本文学会 ↓ 1025	『新日本文学通信』	1	1962年 3月	活—A 5—8 p
			2	4月	活—A 5—8 p
			4	6月	活—A 5—12p
			7	9月	活—A 5—8 p
			9	11月	活—A 5—8 p
			10	12月	活—A 5—8 p
			15・16	1963年 6月	活—A 5—12p
			17	7月	活—A 5—8 p
			18	8月	活—A 5—8 p
			21	12月	活—A 5—4 p
			23	1964年 3月	活—A 5—16p
1026	日本文学学校	『日本文学学校通信』No.1			活—A 5—4 p

## 2 地方の会

1027	地方の会〔三原市〕	研究会テキスト(1)		1956年 5月 7日	ト—B 5—4 p
1028	地方の会	地方の会方針(案)		〔1956年〕	ト—B 4
1029	地方の会 ↓ 1031	『地方月報』	第 3号	1956年 8月 31日	ト—B 5—8 p
			第 4号	1957年 1月 15日	ト—B 5—16p
			第 5号	1957年 6月 28日	ト—B 5—12p
1032	地方の会	〔官憲の人権じゅうりんについての報告依頼〕		〔1958年〕	ト—B 4
1033	重家豊	1958年地方の会—研究会ノート			肉—A 5 ノート
1034	地方の会	〔地方〕入会申込書		1962年 10月	ト—ハガキ
1035	地方の会	〔原稿投稿依頼状〕		1962年 10月	ト—B 5
1036	地方の会〔三原市〕 ↓ 1039	『〔地方〕月報』	第 1号	1962年 10月 10日	ト—B 5—8 p
			第 2号	12月 20日	ト—B 5—4 p
			第 5号	1964年 2月 25日	ト—B 5—6 p
			第 6号	6月 20日	ト—B 5—6 p
1040	国民文化会談生活記録部会	〔サークル調査・地方の会宛〕		1964年	ト—往復ハガキ
1041	岡田明美	書簡〔地方の会について〕		1964年 3月 15日	便箋 3枚
1042	地方の会	〔『地方』発行についての指導・協力の要請〕 *重家執筆			肉—便箋
1043	早坂美美子(日本作文の会事務局)	〔中国・四国地区日本作文の会会員リスト〕			肉—原稿用紙—3枚
1044	〔重家豊〕	〔地方の会〕再出発方針案			肉—B 4
1045	大出俊幸(日本読書新聞)	〔地方の会の状況問い合わせ〕		1955年 4月 13日	肉—ハガキ

## 3 広島県文化会議

1046	堀博自ほか 6名	〔平和のための広島県文化会議〕仮称 結成準備会(7月18日)ご案内		1962年 7月 16日	活—ハガキ
------	----------	--------------------------------------	--	--------------	-------

1047	平和のための広島県文化会議準備委員会	平和のための広島県文化会議結成総会への参加のよびかけ(案)	1962年7月18日	肉・青焼き—B 4
1048		平和のための広島県文化会議規約(案)	[1962年7月]	肉・青焼き—B 4
1049	堀博自	[重家豊宛・平和のための広島県文化会議第2回準備会報告, 同会議結成総会議長就任・同会議幹事就任要請]	1962年7月26日	肉—ハガキ
1050		[平和のための広島県文化会議結成準備会]入会申込書	[1962年7月]	活—ハガキ
1051	深川宗俊	[広島県文化会議第1回幹事会決議事項について]	1962年8月24日	肉—用箋—2枚
1052	深川宗俊	[広島県文化会議]第3回幹事会のお知らせ	1962年10月29日	肉—ハガキ
1053	広島県文化会議・峠三吉詩碑建設委員会	峠三吉詩碑建設のためお願い	1963年4月	活—B 5—4p
1054	広島県文化会議・峠三吉詩碑建設委員会	お知らせ	1963年4月	活—B 6
1055	平和のための広島県文化会議・峠三吉詩碑建設委員会	[経過報告]	1963年9月6日	ト—B 4—2枚
1056	平和のための広島県文化会議	幹事会開催について	1963年10月1日	ト—ハガキ
1057	広島県文化会議	平和と民主主義を愛する県内文化活動家のみなさんへのアピール	1963年10月20日	ト—B 4
<b>第2回定期総会</b>				
1058	平和のための広島県文化会議	第2回総会招集書	1963年10月14日	ト—B 6
1059	広島県文化会議	平和と民主主義を愛する県内文化活動家のみなさんへのアピール	1963年10月20日	ト—B 5
1060	広島県文化会議	私たちの仕事とすすめ方	1963年10月20日	ター—B 5—4p
1061	広島県文化会議	規約改正の要点	1963年10月20日	ター—B 5—4p
1062	広島県文化会議	第1回部会・支部会開催について	1963年10月21日	ト—B 5
1063	広島県文化会議	[文学部会開催通知・11月1日]	1963年10月29日	ト—ハガキ
1064	平和のための広島県文化会議・峠三吉詩碑建設委員会	人間のよのあるかぎりくずれぬ平和を	1963年10月20日	活—A 3—8p
1065	広島県文化会議・峠三吉詩碑建設委員会	峠三吉詩碑完工記念 講演とランド・カンタータ 人間をかえせ(L.P)を聞く夕べ	1963年10月	活—18cm×13.5cm
1066	広島県文化会議	[第1回幹事会開催通知]	1963年11月	肉・ト—B 5—2枚

1067	広島県文化会議	『広島県文化会議』	No.2	1963年11月15日	ト-B5-4p
1074			No.3	1964年1月1日	ト-B5-4p
			No.6	4月1日	ト-B5-4p
			No.7	5月1日	ト-B5-4p
			No.8	6月1日	ト-B5-4p
			No.10	9月1日	ト-B5-2p
			No.11	11月	ト-B5
			No.12	12月	ト-B5-2p
1075	広島県文化会議	『広島県文化会議ニュース』		[1963年12月]	ト-B5
1076	広島県文化会議	広島県文化会議美術部門小品展		1964年2月	活-ハガキ
1077	広島県文化会議	楽焼制作のご案内		1964年7月	ト-B5
1078	広島詩人会議グループ	堀ひろじ詩集『凍てつく大地に』出版記念会のご案内		1964年8月20日	活-ハガキ
<b>第3回定期総会</b>					
1079	広島県文化会議	第3回定期総会招集書		1964年10月1日	ト-B5
1080	広島県文化会議	第3回定期総会出席届		1964年10月	ト-ハガキ
1081	広島県文化会議	第3回定期総会議案書		1964年10月10日	タ-B5-8p・表1
1082	〔広島県文化会議〕	〔広島県文化会議名簿〕			ト-B4
<b>国民文化会議その他</b>					
1083	国民文化会議	国民文化全国集会〔集会スケジュール〕		1962年4月	活-18.5cm×52cm
1084	国民文化会議	『国民文化』	第43号	1963年6月1日	活-B5-16p
1095			第44号	7月1日	活-B5-16p
			第47号	10月1日	活-B5-16p
			第49号	12月1日	活-B5-16p
			第50号	1964年1月1日	活-B5-16p
			第51号	2月1日	活-B5-16p
			第54号	5月1日	活-B5-16p
			第56号	7月1日	活-B5-16p
			第59号	10月1日	活-B5-16p
			第72号	1965年11月1日	活-B5-16p
			第87号	1967年2月1日	活-B5-16p
			第138号	1971年5月1日	活-B5-16p
1096	片山潜生誕百年記念会	片山潜生誕百年記念会趣意書		1959年2月	活-19cm×24cm
1097	〔片山潜生誕百年記念会〕	片山潜年譜		1959年2月	活-B4
1098	大山郁夫後援会	大山郁夫先生療養基金応募者芳名簿			活-B5-4p

## 4 三原みんな歌う会・その他

1099	新日本歌人三原支部	新日本歌人三原支部第1回短歌会		1953年12月19日	ト-B4
------	-----------	-----------------	--	-------------	------

1100	第3回新日本歌人帝人三原工場サークル短歌会	1954年3月	ト—B 4
1101	広療短歌会・高原詩の会・広療文学研究会	啄木・晶子祭〔チラシ〕	ト—12.5cm×18.5cm
1102	〔新日本歌人協会三原支部〕啄木祭実行委員会	短歌雑感	ト—B 5—3p
1103	三原みんなうたう会文芸部	〔機関紙送付挨拶〕	1959年10月 肉—B 5
1104	三原みんな歌う会	『ねぎぼうず』	14号 1959年10月15日 ト—B 5—20p
1106			号外 11月10日 ト—B 5—4p
			15号 12月1日 ト—B 5—15p
1107	三原みんなうたう会	〔楽譜〕炭掘る仲間	1960年5月 ト—B 5
1108	麻井比呂志	書簡〔重家豊宛・統一詩誌の件について〕	1955年9月22日 ハガキ
1109		三原文学会とりきめ	ト—B 5
1110	中国映画鑑賞会	第2回例会のおしらせ	ト—B 5
1111	リアリズム研究会	入会申込書	1959年12月 ト—B 5
1112	リアリズム研究会	〔『リアリズム』購読願い、リアリズム研究会・規定〕	1959年12月 ト—B 4
1113	リアリズム研究会	『リアリズム研究会ニュース』第5号	1960年1月25日 ト—B 5—4p
1114	知加書房	列島詩集刊行のおしらせ	1955年10月 ト—B 5
1115	〔三原映画サークル〕	映画サークル御案内№1	〔1960年〕 ト—B 5—8p, B 4—2枚

## 5 峠三吉関係

1116	新日本文学会広島支部 峠〔三吉〕	〔講演会講師謝礼の分担金集め依頼・重家宛〕	1951年7月18日 肉—ハガキ
1117	新日本文学会広島県協議会事務局〔峠三吉〕	〔文芸講演会を三原又は尾道で8月10日に開催を要請・重家宛〕	1951年7月26日 肉—ハガキ
1118	新日本文学会広島県協議会事務局〔峠三吉〕	〔8月10日の三原での文芸講演会開催不可能の通知・重家宛〕	1951年7月29日 肉—ハガキ
1119	峠三吉	〔会費納入御礼および壺井重治の講演会報告・重家宛〕	1951年8月22日 肉—ハガキ
1120	峠三吉	〔病氣見舞、カンパに対するお礼—峠が新日文大会出席のため上京する途中、倒れ入院した静岡・日赤病院から—重家宛〕	1952年4月3日 肉—ハガキ
1121	坪田正夫	「手術室よりの報告—峠三吉の手術に立会して—」「峠三吉の死」〔『沿岸地帯』2号の原稿〕	1953年3月10日 肉—B 4—20枚

- |      |                                       |                        |            |               |
|------|---------------------------------------|------------------------|------------|---------------|
| 1122 | 峠和子・治, 峠一夫,<br>新日本文学会広島支部,<br>われらの詩の会 | 〔峠三吉会葬お礼〕              | 1953年3月15日 | 活—18.5cm×37cm |
| 1123 | 峠和子・峠三吉追悼集<br>出版委員会, われらの<br>詩の会      | 喪中につき年賀を欠礼させていた<br>きます | 1953年12月   | 活—ハガキ         |
| 1124 | われらのうたの会                              | 峠三吉祭会員券                | [1956年]    | 活—19cm×13cm   |

## 6 山代巴来翰

- |      |     |          |  |
|------|-----|----------|--|
| 1125 | 山代巴 | 〔重家豊宛書簡〕 | 1953年3月11日<br>1953年5月2日<br>1953年5月12日<br>1953年5月30日<br>1953年8月1日<br>1953年8月16日<br>1953年9月24日<br>1958年8月4日<br>1958年10月10日<br>1958年12月26日<br>1959年2月8日<br>1959年3月10日<br>1959年5月4日<br>1962年6月9日<br>1963年6月23日<br>1963年9月24日<br>〔日付不明5通〕 |
|------|-----|----------|--|

## II 平和運動・原水爆禁止運動

## 1 平和運動

## i 日本平和委員会

- |      |   |                                    |            |               |
|------|---|------------------------------------|------------|---------------|
| 1126 | 日本平和委員会   | 安保条約廃止, 平和共存推進日本平<br>和大会へのよびかけ     | 1959年1月16日 | 活—39cm×18.5cm |
| 1127 | 日本平和委員会   | 沖縄—東京間2,500軒 沖縄返還貫徹<br>大行進への参加よびかけ | 1960年1月26日 | 活—19cm×35cm   |
| 1128 |   | 沖縄返還貫徹大行進日程(案)                     | 1960年      | ト—B 4—2 枚     |
| 1129 | 日本平和委員会   | 沖縄返還貫徹大行進歓迎ステッカー                   | 1960年2月    | 活—12.5cm×34cm |
| 1130 | 安保改定阻止広島県民<br>共闘会議・原水爆禁止<br>広島県協議会・広島県<br>平和委員会 | 『沖縄ニュース』沖縄行進特集号                    | 1960年2月22日 | 活—タブ—2p       |

1131	日本平和委員会	ピカソ陶皿頒布会申込書	1960年5月	活—14.5cm×30cm
1132	日本平和委員会	軍備全廃促進軍国主義反対日本平和 大会開催のよびかけ *12月9～11日・東京・日本橋公会堂	1960年10月	活—19cm×21.5cm
1133	日本平和委員会	日本平和大会資料引換券	1960年12月	ハガキ
1134		第1回世界平和評議会 決議と報告		活—B6—48p
1135	日本平和委員会	『平和と日本』	第332号 1958年10月1日	活—B5—23p
1164			第333号 10月15日	活—B5—23p
			第339号 1959年2月1日	活—B5—23p
			第340号 2月15日	活—B5—23p
			第341号 3月1日	活—B5—23p
			第342号 4月1日	活—B5—50p
			第343号 5月1日	活—B5—39p
			第344号 6月1日	活—B5—39p
			7月号 第345号 7月1日	活—B5—39p
			8月号 第346号 8月1日	活—B5—39p
			9月号 第347号 9月1日	活—B5—39p
			10月号 第348号 10月1日	活—B5—39p
			11月号 第349号 11月1日	活—B5—39p
			12月号 第350号 12月1日	活—B5—39p
			新年号 第351号 1960年1月1日	活—B5—49p
			2月号 第352号 2月1日	活—B5—39p
			3月号 第353号 3月1日	活—B5—39p
			4月号 第354号 4月1日	活—B5—39p
			5月号 第355号 5月1日	活—B5—39p
			6月号 第356号 6月1日	活—B5—39p
			7月号 第357号 7月1日	活—B5—39p
			10月号 第360号 10月1日	活—B5—39p
			11月号 第361号 11月1日	活—B5—39p
			12月号 第362号 12月1日	活—B5—39p
			新年号 第363号 1961年1月1日	活—B5—55p
			2月号 第364号 2月1日	活—B5—39p
			3月号 第365号 3月1日	活—B5—39p
			4月号 第366号 4月1日	活—B5—39p
			5月号 第367号 5月1日	活—B5—39p
			6月号 第368号 6月1日	活—B5—39p
1165	日本平和委員会	『平和活動の指針』	第82号 1958年12月15日	活—B5—8p
1184		〔マ〕 第82・83号合併	12月15日	活—B5—8p
			第85号 1959年1月15日	活—B5—8p
			第86号 2月15日	活—B5—8p
			第87号 3月15日	活—B5—16p
			第88号 3月25日	活—B5—12p
			第90号 4月15日	活—B5—10p
			第91号 4月25日	活—B5—10p
			第92号 5月5日	活—B5—6p
			第93号 5月15日	活—B5—10p
			第97号 7月15日	活—B5—14p

第100号	1959年8月25日	活一B5—10p
号外	1960年11月17日	活一B5—18p
第134号	12月15日	活一B5—14p
第137号	1961年1月15日	活一B5—6p
第139号	2月5日	活一B5—10p
第140号	2月15日	活一B5—10p
第144号	3月25日	活一B5—10p
第145号	4月5日	活一B5—8p
第146号	4月15日	活一B5—10p

ii 広島(県)平和委員会

1185	広島平和委員会	入会申込書	1958年10月	ターハガキ
1186	上田正夫	生活と権利と教育を守り日中関係を 打開する国民大行進に参加して	1958年11月	ト一B5—8p
1187	広島平和委員会	広島平和委員会へ御入会の要請	1958年12月3日	ト一B5
1188	広島平和委員会	第2回総会開催についての御案内	1958年12月2日	ターB4
1189	広島平和委員会	第2回総会討議資料(資料1)	1958年12月7日	活一B5—4p
1190	広島平和委員会	第2回総会討議資料(資料2)	1958年12月7日	ターB4
1191	広島平和委員会	広島平和委員会結成1周年第5回総 会	1959年10月11日	ト一B4—4p
1192	広島県平和委員会・村 中好穂	〔重家宛書簡・三原市で平和委員会総 会の報告会の組織化依頼〕	1959年10月15日	肉一便箋—2枚
1193	広島県平和委員会	広島県平和委員会規約・入会申込書	[1959年10月]	ターB5
1194	広島県平和委員会	1959年度最後の平和集会開催につい て *12月27日・広島平和会館	1959年12月21日	ト一ハガキ
1195	広島平和委員会	『広島平和ニュース』№1 *「広島平和委員会発足す」他	1958年10月10日	ターB5—6p
1196	広島平和委員会	『広島平和ニュース』№2 *佐久間澄「1959年の年頭に当って」 他	1959年1月25日	ターB5—12p
1197	広島平和委員会	『広島平和ニュース』№3 *安保問題特集号	1959年2月16日	活一B5—10p
1198	広島平和委員会	『広島平和ニュース』№4 *「第4回総会の案内」他	1959年5月23日	ターB5—6p
1199	広島県平和委員会	『広島平和ニュース』№11 *「日本平和大会に私たちの代表を」 他	1959年11月5日	ターB5—8p
1200	広島県平和委員会	『広島平和ニュース』№12 *「広く、深く、強く、さらに改定 阻止にとりくもう」他	1959年12月22日	ターB5—6p
1201	広島県平和委員会	『広島平和ニュース』№13 *「岸首相渡米を前にして」他	1960年1月8日	ターB5—4p

1202	広島県平和委員会	『広島平和ニュース』№14 *「沖繩問題の重大な意義を徹底させよう」他	1960年2月19日	ターB5—2p
1203	広島県平和委員会	『平和ニュース』№16 *「さらに追撃を！—平和委討論集会より—」他	1960年7月2日	ターB5—8p
1204	広島県平和委員会	『広島平和ニュース』№17 *「広島平和委員会第3年を迎えるに当って」他	1960年11月29日	ターB5—8p
1205	広島平和委員会	御案内 * 国民闘争研究討論集会・6月23日	1960年6月20日	ターB4
1206	広島平和委員会	広島平和委員会財政確立についてのお願い	1960年11月23日	ターB4
1207	広島県平和委員会	総会開催について	1962年2月5日	ターB6
1208	広島県平和委員会	広島県平和委員会総会議案集	1962年2月11日	ターB5—6p, 付表B4—1枚
1209	広島県平和委員会	お願い〔会費滞納一掃〕	1962年4月28日	ターB4
iii 平和問題研究会				
1210	平和問題研究会	『平和問題月報』№2	1959年3月5日	ターB5—4p
1211	〔重家豊〕	平和研究会		A5ノート1冊
iv その他				
1212	三原子どもを守る会	平和をねがう市民のみなさん!!	1972年	ターB5
1213	核武装阻止岩国基地平和 大行進山口広島県民 集会	国際共同行動核武装阻止岩国基地平和 大行進	1958年11月9日	ターB5—8p
1214	岩国平和友の会	岩国基地	1958年11月9日	ターB5—15p
1215		反戦青空写真展通信	1972年2月	ターB5—8p
1216	日本アジア・アフリカ 連帯委員会	軍事条約・外国軍事基地とアジア・ アフリカ人民の闘争	[1961年]	ターB5—14p
1217	学生報編集委員会	『中国留日学生報』号外	1952年8月15日	活—A4—2p
1218		“中国封じこめ”反対・日中国交回復 実現・日中貿易、漁業政府間協定実 現・アメリカを含むアジア、太平洋 地域の非核武装地帯設置に関する請 願主旨〔請願署名用紙〕	1963年	活—B5
1219		日中友好文化会議(案)		ターB4
1220	在日本朝鮮人総連合会 帰国対策委員会	新春には帰国第一船を一再び在日朝 鮮人の帰国問題について	1959年1月	活—B5—8p
1221	在日本朝鮮人総連合会 中央本部	『朝鮮総連』号外	1960年11月20日	活—ターB—6p



1222	日朝協会	『日本と朝鮮』第87号	1960年11月25日	活一タブー2p
1223	新日本婦人の会	『新婦人しんぶん』第505号	1962年12月27日	活一タブー4p

## 2 原水爆禁止運動

1224	新日本医師会	『新しい医師』号外 *「全世界に訴えよう！ この原爆の 惨禍を！」「原子爆弾症の被害につ いて」	1952年8月20日	活一タブー2p
1225	原水爆禁止日本協議会	請願〔岸首相宛、核武装、安保改定阻 止のための〕	1959年	活一往復ハガキ
1226	原水爆禁止日本協議会	『原水爆死か平和か―第4回世界大 会はその鍵をにぎっている―』	1958年6月3日	活一A5—52p
1227	原水爆禁止広島県協議 会	3・1ビキニデーと沖繩行進のとり くみについて	1960年2月20日	ターB4・B5各2枚
1228	原水爆禁止広島県協議 会	核武装阻止・原水爆禁止・軍事基地 反対(新島・沖繩連帯)・原爆基地撤 去西日本大会への積極的参加と協力 要請の件	1960年4月10日	ト一B4
1229	原水爆禁止広島県協議 会	全県代表者会議への招請	1960年7月25日	ターB4—2枚
1230	原水爆禁止広島県協議 会	第6回世界大会日程会場一覧表	1960年7月	ターB4
1231	原水爆禁止広島県協議 会	第6回原水爆禁止世界大会 8・6 広島県民大会はこう行われる	1960年7月	活一9cm×14.5cm— 16p
1232	全学連広大教養部学友 会	アメリカ太平洋核実験を中止させよ う！ソ連核実験再開を阻止しよう！	[1962年8月]	ト一B4
1233	広島平和記念館	第8回広島平和美術展	1962年8月	活一B6—16p
1234	日本共産党	原水爆禁止運動と分裂主義者の理論と実 践[『アカハタ』第4955号のp.9～p.12 掲載]	1964年7月11日	活一全紙—4p
1235	原水爆禁止日本協議会	第10回世界大会速報	1964年7月30日	活一タブー4p
1236	三原地区平和委員会	第10回原水爆禁止世界大会の報告集会	1964年8月11日	ト一B5
1237 1245	原水爆禁止三原協議会	三原市原水協ニュース	No.1 1974年7月26日 No.2 7月27日 No.3 7月28日 No.4 7月29日 No.5 7月30日 No.6 7月31日 No.7 8月1日 No.8 8月2日 No.9 8月3日	ト一B5 ト一B5 ト一B5 ト一B5 ト一B5 ト一B4 ト一B5 ト一B5 ト一B5

### 3 60年安保闘争

1246	平和と民主主義を守る 広島県協議会	安保改定阻止一廃棄のための平和署名	1959年4月	活—B 5
1247	全日自労三原分会教宣 部	安保問題第一輯 平和と幸福の道は 安保改定阻止廃棄 中立へ	1959年11月10日	ト—B 4—3枚
1248	安保改定阻止広島県民 共闘会議	安保改定阻止・日中国交回復・生活 と権利を守る国民大行進の実施につ いて	1960年2月3日	ターB—2枚
1249	安保改定阻止三原地区 共闘会議	安保改定阻止のための居住地会議の 開催について	1960年2月23日	ト—B 4
1250	安保改定阻止三原地区 共闘	行動予定表(2月18日～3月20日)	1960年2月	ト—B 4
1251	安保改定阻止三原地区 共闘会議	三原地区共闘速報	1960年6月9日	ト—B 4
1252	安保改定阻止広島県民 共闘会議	第18次にわたる統一行動の成果と欠 かん並びに当面の闘いについて	1960年6月24日	ト—B 4
1253	日本労働組合総評議会	『総評』号外(農村特集号) *安保阻止国民会議・総評共同編集	1960年7月18日	活—タブ—4p
1254	安保改定阻止三原地区 共闘会議	時局大講演会(安保闘争の総括と今 後の見通について)ビラ	1960年7月28日	ト—B 6
1255	三原地区共闘会議	安保批准反対、安保資金カンパ及日 中友好回復署名簿配布表	1960年	ト—B 5
1256	安保改定阻止三原地区 共闘	活動家名簿	1960年	ト—B 5—13枚
1257	〔重家豊〕	安保闘争日録	1960年	肉—A 5—6枚
1258	三原地区労働組合評議 会、安保反対・平和と 民主主義を守る三原地 区共闘会議	要求書〔三原市長宛〕	1961年	活—B 5

## Ⅲ 公害反対運動

### 1 公害をなくす三原市民連絡会

1259	〔重家豊〕	公害をなくす三原市民連絡会〔1973 年5月1日～1974年2月19日〕	A 5ノ—ト 1冊
1260	〔重家豊〕	公害をなくす三原市民連絡会〔1974 ～1977年〕	A 5ノ—ト 1冊
1261	〔重家豊〕	公害をなくす三原市民連絡会 公害 をなくす三原市民連絡会会議メモS 50. 6〔1975年6月～1978年8月〕	A 5ノ—ト 1冊

公害反対運動

1262	三原市	市長の 附属機関に関する 条例(三原市公害対策協議会) *1967年10月19日制定		ターB 4
1263	公害をなくす三原市民連絡会	第5回公害勉強会ご案内	1972年4月13日	ト一ハガキ
1264	公害をなくす三原市民連絡会	第7回公害勉強会ご案内	1972年6月	ト一ハガキ
1265	公害をなくす三原市民連絡会代表沖三保子	要望書〔公害防止対策での市長宛〕	1972年7月7日	ターB 4
1266	公害をなくす三原市民連絡会代表沖三保子	陳情書〔衆議院公害対策委・環境保全特別委瀬戸内海汚濁状況調査団宛〕	1972年8月24日	複一B 5—3p
1267	公害をなくす三原〔市民〕連絡会	三原—竹原沿岸・公害関係地図	1972年8月25日	ト一B 4
1268	公害を無くす三原市民連絡会	〔除草剤グラモキソンについて 帝人アグロケミカル株式会社への質問原稿〕	1971 <sup>(2)</sup> 年9月	肉一A 4—4枚
1269	公害を無くす三原市民連絡会	〔除草剤グラモキソンについて 帝人アグロケミカル株式会社への質問〕	1972年9月	複一A 4—3枚
1270	公害をなくす三原市民連絡会	三原市民は公害から守られているか	1972年11月	ト一B 4—2枚
1271	浜脇勇治ほか	瀬戸内海のにごり *公害をなくす三原市民連絡会公害研究会資料	1972年11月19日	ト一B 4—3枚
1272	〔公害をなくす三原市民連絡会〕	生体と大気汚染 *第11回公害勉強会資料	〔1972年〕	ト一B 4—4枚
1273	三原市長長尾正三	回答書 *1972年7月7日付の公害をなくす三原市民連絡会の要望に対して付・事務局原案	1973年1月26日	ト一B 5—6p, B 4—2枚
1274	湧原川を守る会準備会	湧原川水系に関する問題打合せ御案内	〔1973年3月〕	
1275	湧原川を守る会〔三原市〕	『湧原川を守る会』発足の主旨	1973年4月14日	活一B 4, 複一A 4—2枚
1276	太郎谷川を守る会・公害をなくす三原市民連絡会	湧原川を守る集い御案内	〔1973年5月〕	活一B 5
1277	〔公害をなくす三原市民連絡会〕	高級アルコールの例 SDS (ドデシルスルホンナトリウム) *第16回公害勉強会資料	1973年4月21日	ターB 4
1278	〔公害をなくす三原市民連絡会〕	活動報告・総括・1973年度運動方針(第2回総会)	1973年7月14日	ト一B 4—6枚
1279	公害をなくす三原市民連絡会	昭和48年度総会 報告と方針:市民は如何にして公害から身を守るか。	1973年7月14日	ト一B 5—18p
1280	公害をなくす三原市民連絡会	1973年総会アピール—すべての親たちが決意するときが来た	1973年7月14日	ト一B 4

1281	公害をなくす三原市民 連絡会	第23回公害勉強会御案内—牛乳を勉強 しまししょう—	1973年12月	ト—B 6
1282	公害をなくす三原市民 連絡会	要望書〔中曽根通産大臣宛〕	1974年1月22日	ト—B 4
1283	公害をなくす三原市民 連絡会	抗議文〔草案〕	1974年1月22日	ト—B 4
1284	公害をなくす三原市民 連絡会	抗議文	1974年1月22日	ト—B 4
1285	公害をなくす三原市民 連絡会	合成洗剤について日本学術会議の見 解を問う	1974年2月5日	ト—B 4—3枚
1286	公害をなくす三原市民 連絡会	要望書〔湧原川上流の住宅団地着工 差止めで・広島地裁尾道支部宛〕	1974年2月8日	複—B 4—2枚
1287	重家豊	世話人会への提案	1974年2月5日	肉—A 4
1288	公害をなくす三原市民 連絡会	昭和49年度総会 活動報告と運動方 針	1974年7月13日	ト—B 5—18p
1289	〔公害をなくす三原市 民連絡会〕	測定の方針	1974年11月11日	複—A 4—2枚
1290	公害をなくす三原市民 連絡会事務局	三原から公害をなくす闘争 (当面の活動課題一覧表)	1974年	複—B 4
1291	公害をなくす三原市民 連絡会	アルカリ系紙法による三原市大気汚 染測定記録(52年度)	〔1977年10月〕	ト—B 4
1292	宮崎一郎	〔沖三保子宛書簡コピー〕	〔1978年〕8月29日	複—B 4
1293	〔公害をなくす三原市 民連絡会〕	〔大気汚染測定〕三原(市)1978.6.6~7	1978年6月	ト—B 4
1294	公害をなくす三原市民 連絡会代表沖三保子	芸南地域火電増建設による大気汚染 の三原市への影響に係る質問書	1979年3月11日	ト—B 4—2枚
1295	〔公害をなくす三原市 民連絡会〕	〔大気汚染測定〕(S. 51. 8. 2—9. 2)	1976年9月	複—A 4—2枚
1296	公害反対(火電阻止)総 決起集会	竜島火電建設に反対するアッピール	1977年9月22日	ト—B 4
1297	〔重家豊〕	〔公害反対(火電阻止)市民総決起集 会メモ〕	1977年9月22日	肉—A 5—2枚
1298	芸南地区火電阻止連絡 協議会	芸南火電阻止総決起集会ポスター		ト—B 4—21枚
1299	〔公害をなくす三原市 民連絡会〕	アンケートの集約	1977年10月	ト—B 4
1300	公害をなくす三原市民 連絡会	御案内〔大気汚染調査について〕	1980年2月	ト—ハガキ
1301	火電公害をなくす三原 市民会議	御案内〔竹原3号機建設について対 策〕	1980年3月5日	ト—ハガキ
1302	火電公害をなくす三原 市民会議	芸南火電に関する緊急報告会〔案内〕	1980年2月	ト—B 6

公害反対運動

1303	公害対策全国連絡会議	公害反対・住民のいのちと健康を守ろう・環境行政の後退と大企業の横暴を許さず住民といのちと健康を守る全国交流集会 (3月13～14日・三原市)	1980年3月	活一B5	
1304	公害をなくす三原市民連絡会	〔三原市会議員に対する公害問題アンケート集約〕		ト一B4-4枚	
1305	公害をなくす三原市民連絡会	無公害の洗濯石けんと食器洗いをどろぞ		ト一B5	
1306		心身障害児を生まないために *研究会資料		ターB5-7p	
1307	公害をなくす三原市民	『公害をなくす三原市民』	No.1	1972年7月1日	活一タブー2p
1314	連絡会		No.2	9月20日	活一タブー2p
			No.3	1973年2月20日	活一タブー2p
			No.4	7月10日	活一B5-8p
			No.5	11月20日	活一タブー2p
			No.6	1974年7月10日	活一タブー2p
			No.7. 8合併	1975年1月10日	活一B5-6p
			No.9	4月22日	ターB4-2p
1315	公害をなくす三原市民		『会報』	No.2	1974年6月30日
1316	連絡会	No.5		1975年1月1日	ト一B4-2枚
1317		No.7		7月22日	ト一B4-3枚
1318	公害をなくす三原市民	『公害勉強会案内と報告』	第26号	1977年10月11日	ト一B4
1331	連絡会		第30号	1978年2月17日	ト一B4-3枚
			第31号	4月20日	ト一B4
			第37号	10月13日	ト一B4
			第41号	1979年2月22日	ト一B4
			第42号	3月22日	ト一B4-2枚
			第47号	8月20日	ト一B4
			第48号	9月25日	ト一B4
			第49号	10月8日	ト一B4-2枚
			第51号	12月3日	ト一B4-2枚
			第52号	1980年1月14日	ト一B4-2枚
			第53号	2月14日	ト一B4
			第54号	3月7日	ト一B4
		第55号	4月21日	ト一B4	

2 そ の 他

1332	「火電公害」をなくする三原市民会議	『報告』1号		1979年6月20日	ト一B4
1333	芸南火電阻止連絡協議会	『スナメリ通信』	2号	1979年6月	ト一B4
1336			3号	7月	ト一B4
			4号	8月	ト一B4
			5号	9月	ト一B4
1337	建設省福山工事事務所	三原バイパス〔対策委研究資料〕			ト一B5-14p

1338	〔建設省福山工事事務所対策委〕	三原バイパス対策委員会誕生	1973年	ト—B 5—6 p	
1339	三原市教育委員会、公害と教育部会	公害と教育 H工場をめぐる公害	1972年10月	ターB 5—27p	
1340	三原地区支部山本棋佐登	「公害をどのように教材化したか。—H工場教材化を中心に—」第22次教育研究広島県集会報告書〔三原市内のH工場公害実態調査〕	1972年	ターB 5—28p	
1341	公害をなくす広島県連絡会準備会他	公害に反対し、県民のいのちとくらしをまもり、美しい自然をとりもどす広島県民集会		ターB 5	
1342	公害をなくす呉市民の会	『公害ニュース』第14号	1973年6月15日	活—タブ	
1343	広島大学工学部土木工学科都市研究グループ	『福山市における生活環境意識調査結果—小学校5年生を対象とするアンケートより』	1971年12月	ターB 5—24p	
1344	福山公害研究会	『福山市公害研究会機関誌』 0号	1972年7月1日	ト—B 5—6 p	
1345	福山から公害をなくす市民の会	『中電火力誘致に反対し福山から公害をなくそう』2—宇井純来福特集—	1973年4月	活—B 5—76p	
1346	全水道福山水道労働組合	芦田川を守ろう	1973年6月	活—B 5—41p	
1347	佐々木富三	『瀬戸内海大橋(尾道〜今治)の架橋と農業環境保全からの対策事項』	1973年6月15日	ト—B 5—15p	
1348	日本科学者会議瀬戸内シンポジウム実行委員会	『第3回瀬戸内シンポジウムニュース』№5	1973年12月15日	ト—B 5—4 p	
1349		公害をなくし・安心して魚をたべられる自然環境をとりもどすことを要求する請願書〔広島県会議長宛〕	1973年	活—B 5—4 p	
1350	公害と闘う水島連絡会議	「重金属公害」の犯人は“殺人工場”川鉄だ、		活—B 4	
1351	笠岡の環境を考える会	あなたの知っている公害の被害を知らせて下さい、		ト—B 5—1枚、 B 6—2枚	
1352	大企業の大環境破壊を告発する会〔岩国市〕	『海よ怒れ』№2	1973年7月31日	活—B 4	
1353	関西新空港建設反対東灘区住民の会〔神戸市〕	『東灘区住民の会ニュース』 №24	1974年5月16日	ト—B 4	
1354	新潟・地域問題研究会	『新潟県住民運動公害日誌』 第11号	1973年3月1日	ト—B 5—17p	
1355		第12号	4月1日	ト—B 5—17p	
1356	粉ミルクを調べる会	おそろしいPCB	1972年8月	活—B 6—21p	
1357	森永ミルク中毒のこどもを守る会〔岡山市〕	『ひかり』	第37号	1972年8月20日	活—タブ—2 p
1363			第38号	9月20日	活—タブ—4 p
			第39号	10月20日	活—タブ—4 p
			号外	1973年1月15日	活—タブ—2 p
			第46号	5月20日	活—タブ—4 p
			第47号	6月20日	活—タブ—4 p
			第48号	7月20日	活—タブ—4 p

公害反対運動

1364	砒素ミルク製造会社	『森永告発』	第11号	1972年3月1日	ト一B5一8p
1367	「森永」とその犯罪を支えた一切を告発する会 〔岡山森永告発〕		第12号	4月1日	ト一B5一8p
			第13号	5月10日	ト一B5一8p
			第14号	6月10日	ト一B5一8p
1368			水俣病センター設立委員会	水俣病センター(仮称)をつくるために	1972年頃
1369	水俣病を告発する会	『告発』	第24号	1971年5月25日	活一タブ一8p
1380	〔熊本市〕		第25号	6月25日	活一タブ一8p
			第27号	8月25日	活一タブ一8p
			第39号	1972年8月25日	活一タブ一8p
			第40号	9月25日	活一タブ一8p
			号外	10月15日	活一タブ一4p
			第41号	10月25日	活一タブ一8p
			第42号	11月25日	活一タブ一8p
			第43号	12月25日	活一タブ一8p
			第45号	1973年2月25日	活一タブ一8p
			第48号	7月25日	活一タブ一4p
			終刊号	8月25日	活一タブ一8p
1381	水俣病を告発する会	『水俣』	第1号(通算50号)	1973年9月25日	活一B5一8p
1398			第5号(通算54号)	1974年1月25日	活一B5一8p
			第6号(通算55号)	2月25日	活一B5一8p
			第12号(通算61号)	8月25日	活一B5一8p
			第14号(通算63号)	10月25日	活一B5一8p
			第15号(通算64号)	11月25日	活一B5一8p
			第17号(通算66号)	1975年1月25日	活一B5一8p
			第18号(通算67号)	2月25日	活一B5一8p
			第59号(通算108号)	1978年9月25日	活一タブ一4p
			第60号(通算109号)	10月25日	活一タブ一4p
			第61号(通算110号)	11月25日	活一タブ一4p
			第62号(通算111号)	1979年1月25日	活一タブ一4p
			第63号(通算112号)	2月25日	活一タブ一4p
			第64号(通算113号)	3月25日	活一タブ一4p
			第65号(通算114号)	5月25日	活一タブ一4p
			第66号(通算115号)	6月25日	活一タブ一4p
			第67号(通算116号)	7月25日	活一タブ一4p
			第68号(通算117号)	9月25日	活一タブ一4p
1399	自主講座実行委員会	『自主講座通信』	第28号	1972年11月16日	ト一B5一4p
1400			第29号	1973年1月1日	ト一B5一4p
1401	日本の医療を告発するすべての人々のつどい	アリナミンこの危険な薬 〔告発ステッカー〕		1971年5月	活一54cm×19cm
1402	日本の医療を告発する	『日本の医療を告発するすべての人々のつどい』			
1414	すべての人々のつどい		№1	[1971年4月4日]	活一B5一14p
			№2	[4月4日]	活一B5一13p
			№3	[4月4日]	活一B5一15p
			№4	1971年4月30日	活一B5一14p
			№5	5月20日	活一B5一13p
			№7	7月30日	活一B5一15p
		№10	10月30日	活一B5一13p	

		No.19	1972年 7月30日	活一B 5—14p
		No.20	8月30日	活一B 5—28p
		No.22・23合併	11月30日	活一B 5—13p
		No.24	12月30日	活一B 5—15p
		No.25	1973年 1月30日	活一B 5—24p
		No.30	6月30日	活一B 5—15p
1415	婦人民主クラブ	『婦人民主新聞』第1315号	1972年10月27日	活一全紙—4p
		*「公害の被害者・加害者」他		

## Ⅳ 労働運動

1416	労働者共同編集委員会	『統一日報』	1952年 9月15日	ト—B 4—2p
1417		労働者号外No.12	1952年 9月	ト—B 4—2p
1418	三原市役所職員組合	『始動』創刊号	1953年 7月 1日	活—タブ—2p
1419	新三菱重工業労働組合	『労働』No.58	1953年 8月21日	活—タブ—2p
1420	全日本自由労働組合三原分会	市民のみなさまえ!! 組合の名をカタッテの寄付集めについて	1954年 6月18日	ト—B 5
1421	帝人三原工場労働組合	『わたしたちの組合の十年の歩み』	1956年 1月25日	活—B 6—30p
1422	新菱重労組三原支部	『さんろう』	No.11 1958年11月 1日	ト—タブ—2p
1423			No.12 12月 1日	ト—タブ—2p
1424	全日赤労働組合連合会	『全日赤通信』2月号(No.19) *中央委員会議案	1961年 2月20日	ターB 5—22p
1425	全日赤労働組合連合会	『全日赤速報』	No.57 1961年 3月17日	ト—B 4
1430			No.60 3月18日	ト—B 4
			No.61 3月18日	ト—B 4
			No.62 3月20日	ト—B 4
			No.65 3月25日	ト—B 4
			No.66 3月25日	ト—B 4
1431	全日赤労働組合連合会	『全日赤ニュース』No.157	1961年 3月25日	活—タブ—2p
1432	全日赤労連・全日赤近畿地協・岐阜日赤労組	岐阜日赤病院はつぶされようとしています	1961年 3月	活—B 5
1433	〔重家豊〕	〔1961年糸崎赤十字病院争議メモ〕	1961年	肉—B 4
1434	糸崎赤十字病院従業員組合	県民の皆様へ!	〔1961年〕	活—B 5
1435	第32回メーデー三原地区実行委員会	祝第32回メーデー前夜祭	1961年 4月26日	活—B 6
1436	第32回メーデー三原地区実行委員会	『私たちは針をもっている』 *「地方の会」作メーデー前夜祭ジュブレッシ・コール公演台本	1961年 4月28日	ト—B 5—8p
1437	第32回三原地区メーデー実行委員会	メーデー歌集	1961年 4月	ト—B 5—4p
1438	三原地区共闘会議	三原地区共闘連絡	1961年 5月27日	ト—B 5



1439	三原地区民青	〔歌詞〕	1961年	ト一B 4
1440	失対打切反対広島県共 闘会議	福祉国家建設と国民の公益を破壊す る池田内閣の「失対事業全面打切り」 政策について県民の皆様にご訴えます	1962年 6月	活一B 4

## V 三原市・御調郡向島町

1441	三原市	昭和35年度施政方針と予算概要説明	1960年	ターB 5—12p
1442	三原市教育委員会	市民演劇祭	1956年11月11日	ト一B 5—5 p
1443	三原市三原図書館	昭和35年中三原市内上映映画のベ スト作品選定〔アンケート用紙〕	1961年 2月16日	ト一B 4
1444	三原市三原図書館	映画批評会御案内	1961年 2月19日	ト一B 6
1445	三原市役所	『広報みはら』第381号	1972年 8月15日	活一タブー 2 p
1446	三原市成人教育委員会 芦刈秀太郎	公害から子どもは守られているか (昭和47年度 P T A 連合研究会)	1972年11月12日	ト一B 5—12p
1447	三原市・三原市公衆衛 生連合会・広島県三原 保健所	春の衛生	1973年 3月	活一B 5—14p
1448	三原市教育刷新協議会	三原市教育刷新協議会結成趣意書	1975年 2月	活一B 4
1449	向島町議会	昭和29年第35号議案・昭和29年度 向島町歳入歳出予算	1954年 3月25日	ト一B 5—74p

## VI 共産党関係

### 1 本 部

1450	日本共産党臨時中央指 導部議長小松雄一郎	〔党員への訴え〕	1952年 1月1日	ト一B 4
1451	日本共産党臨時中央指 導部・日本共産党国会 議員団	吉田内閣を倒し国会即時解散を全国 民に訴える	1952年 1月22日	ト一B 5
1452	日本共産党	『電気熔接〔党建設者第2巻第4号通 巻19号〕』	1952年 2月	活一B 6—31p
1453	あかつき印刷株式会社	あかつき創立についての御あいさつ	1952年 3月	活一B 5
1454		書記長論文にこたえて	1952年 8月12日	ト一B 4—2枚
1455	〔日本共産党〕	党内教育の方針(草案)	1952年10月	活一タブー 4 p
1456		板野勝次紹介要旨	〔1952年〕	ト一B 4

1457	日本共産党	『国民評論』	第40号	1952年7月1日	活—A 6—64p
1459			第41号	8月1日	活—B 6—64p
			第45号	12月1日	活—B 6—97p
1460	〔日本共産党〕	『平和と独立のために』第237号		1953年2月22日	活—タブ—4p
1461		新綱領草案の討議を終結するに当って		〔1955年〕	ト—B 6—16p
1462	日本共産党中央委員会書記局	選挙地方自治体資料(第9号)		1956年5月25日	活—B 5—12p
1463	〔日本共産党〕須藤五郎	(党内資料)党员とご家族の皆さんに訴える		1958年11月	活—B 6—4p
1464	〔日本共産党〕	(弁士用資料)参議院議員選挙・日本共産党候補者全国区 須藤五郎		〔1959年〕	活—B 4
1465	中野重治	〔須藤五郎参議院選立候補推せんの手紙〕		1959年5月25日	肉—便箋
1466	日本共産党中央委員会	『党報』№3		1959年3月10日	活—B 5—6p
1467	日本共産党中央委員会 宣伝教育部	『新安保条約をめぐる15問—批准反対闘争の勝利のために—』 *日本共産党政策シリーズ第13集		1960年1月30日	活—B 6—56p
1468	日本共産党	『アカハタ』号外 *モスクワ81ヵ国共産党・労働者党 代表者会議コミュニケほか		1960年12月19日	活—タブ—8p
1469	日本共産党	『アカハタ』号外 *新しい情勢のもとで安保の共闘を さらに前進させよう		1960年12月20日	活—タブ
1470	山田六左衛門ほか	党の危機に際して全党の同志に訴う		1961年7月14日	ター—B 5—4p
1471	安部公房ほか	真理と革命のために党再建の第一歩 をふみだそう		1961年7月22日	ター—B 4—3枚
1472	安部公房ほか	革命運動の前進のために再び全党に 訴える		1961年8月18日	ト—B 4—3枚
1473	日本共産党中央委員会 幹部会	核戦争反対・軍事基地撤去のために アジア・太平洋を核非武装地帯とする ために核兵器の実験・貯蔵・使用 の禁止をふくむ全般的軍縮協定のた めに署名運動を精力的にひろめよう		1961年11月21日	活—B 4
1474	日本共産党	『アカハタ』号外 *原水禁世界大会統一を堅持し成功 に全力		1963年8月2日	活—タブ
1475	日本共産党中央委員会 書記局	『党報』第50号		1963年12月25日	活—B 5—4p
1476	アカハタ文化部	投稿依頼 *「地方の会」宛、テーマ：今日の農 民と文学		1964年2月	肉—青焼き—B 5
1477	日本共産党中央委員会 書記局	『党報』№63		1964年7月25日	活—B 5—8p

共産党関係

1478 〔日本共産党〕 4・18スト前の情勢について トーB5-4p  
—党中央指導部—

2 広島県党関係

1479 松川事件被告太田省次 広島県委員会の同志諸兄へ 1952年7月15日 トーB4  
外一同

1480 日本共産党広島県委員 神戸英水兵強盗事件は吉田自由党政 〔1952年8月25日〕 トーB5  
会 府が米帝のカイライ政府である事を  
証明した

1481 高橋武夫紹介要旨 〔1952年〕 トーB4

1482 アカハタ編集局文化部 〔重家豊宛・アカハタ掲載「新日本文大 1953年3月14日 肉一ハガキ  
会を前にして」の原稿依頼〕 付

1483 日本共産党広島県委員 『学習指針』№1 1953年5月13日 トーB5-4p  
会

1484 〔日本共産党広島県委 三原の自労・居住細胞の思想的偏向 1954年4月28日 トーB4  
員会〕東部B とその克服について

1485 日本共産党中国地方臨 中国地方における党活動の総括と当 1955年11月 活一B5-22p  
時指導部 面の任務—第5回中国地方党会議の  
報告草案

1486 日本共産党・三原地区 通達 諸滞納金の年内一掃運動につ 1958年11月28日 トーB5  
委員会 いて

1487 日本共産党広島県委員 『県党報』 №8 1959年3月26日 トーB5-4p  
1490 会 №12 1959年10月28日 活一B5-4p  
№6 1964年5月6日 トーB5-2枚  
№7 1964年5月14日 トーB5-1枚

1491 日本共産党広島県委員 第17回広島県党会議報告草案 1959年10月 ターB5-35p  
会

1492 日本共産党広島県委員 第18回広島県党会議報告草案 1960年9月 活一B5-13p  
会

1493 林護(日本共産党広島 私の経歴 〔1960年〕 活一B6-4p  
県委員会東部地区委員  
長)

1494 林護後援会趣意書 1960年 活一18.5cm×36cm

1495 日本共産党広島県東部 第4回東部地区党会議報告(草案) 1961年11月 ターB5-36p  
地区委員会

1496 日本共産党広島県委員 住民をギセイにして軍事基地・独占 1962年4月20日 活一B5-4p  
会 資本に奉仕する自民党県政をたおし  
働く県民の利益を守る県政を!

1497 村上経行・鈴木市蔵後 加入のよびかけ 1962年 活一19.5cm×54cm  
援会

1498 日本共産党広島県委員 連絡 新日本文学会第11回大会につ 1964年3月16日 肉一B5  
会 いて

- |      |                    |                    |            |           |
|------|--------------------|--------------------|------------|-----------|
| 1499 | 日本共産党広島県委員会        | 広島県党の全同志のみなさんに訴える  | 1964年7月31日 | ト—B 4     |
| 1500 | 日本共産党広島県委員会        | 連絡 県文化会議グループ会議の招集  | 1964年9月8日  | 青焼—B 5    |
| 1501 | 〔日本共産党広島県中部地区委員会〕  | 日本共産党広島県中部地区党報No.1 | 〔1964年〕    | ト—B 4—4枚  |
| 1502 | 三原民報社              | 『三原民報』復刊5号         | 1972年9月9日  | ト—タブ      |
| 1503 | 〔日本共産党広島県委員会〕      | 三良坂町の農村調査          |            | ターB 5—25p |
| 1504 | 〔日本共産党広島県東部三地区委員会〕 | うったえ 福山・尾道・三原の同志諸君 |            | ト—B 4     |

## Ⅶ 救 援 運 動

- |      |                      |                               |               |            |
|------|----------------------|-------------------------------|---------------|------------|
| 1505 | 発起人一同                | 東京合同法律事務所増築資金70万円カンパ趣意書       | 1952年6月1日     | 活—B 5      |
| 1506 | 日本国民救援会福島県本部         | 〔中華人民共和国北京・陳標煌の松川事件被告への激励文〕   | 1952年6月       | ト—B 4      |
| 1507 | メーデー・5.30犠牲者国民葬実行委員会 | メーデー・5.30犠牲者国民葬式次第            | 1952年6月26日    | ト—B 5—4p   |
| 1508 | 日本国民救援会東京都本部         | 『都民の人権』第8号                    | 1952年8月25日    | ト—B 4—2p   |
| 1509 | 日本国民救援会中央本部          | 〔各県別松川事件無罪釈放署名活動家名簿〕          | 1952年9月15日    | ト—B 4      |
| 1510 | 日本国民救援会              | 「メーデー統一公判速報」No.1              | 1952年9月16日    | ト—B 4      |
| 1511 | 日本国民救援会              | 緊急通達                          | 1952年9月25日    | ト—B 5      |
| 1512 | 三原松川の会               | 『三原松川の友』創刊号                   | 1957年2月1日     | ト—タブ—2p    |
| 1513 |                      | 故樺美智子さんの剖検所見に就て<br>(中田友也・坂本昭) | 1960年6月21日    | ターB 4      |
| 1514 |                      | 『救援ニュース』No.2                  | 1960年6月27日    | ト—B 4      |
| 1515 | 日本国民救援会東京都本部         | 竹内景助『三鷹事件真実の訴え』               | 1961年7月15日    | ターB 5—12p  |
| 1516 | 日本国民救援会              | 三鷹事件竹内景助氏の再審・助命要請署名のお願い       | 1961年7月       | 活—B 5—4p   |
| 1517 | 竹内景助                 | 〔山代巴宛書簡〕                      | 〔1962年3月～11月〕 | 肉—B 5—123枚 |

一般図書・逐次刊行物・その他

I 一般図書

1518	社会問題研究	河上肇	弘文堂書房	1923年11月	36p
1519	子供を丈夫にする新育児法	竹野芳次郎著	主婦之友社	1925年	514p
1520	国文鑑 5巻	垣内松三	文学社	1926年10月	315p
1521	社会問題研究 第72冊	河上肇著	弘文堂書房	1926年	34p
1522	口語歌集 晴れた日	西村陽吉著	紅玉堂書店	1927年4月	208p
1523	原文対訳唯物弁証法 (マルクス・エンゲルスおよびレーニンの諸著作よりの抜萃)	経済学批判会編	弘文堂書房	1927年7月	251p
1524	文芸思想 大思想エンサイクロペディア 第10巻	神田豊穂著	春秋社	1928年1月	392p
1525	思想家人名辞典 大思想エンサイクロペディア第24巻	神田豊穂著	春秋社	1928年4月	456p
1526	文芸辞典 大思想エンサイクロペディア 第29巻	神田豊穂	春秋社	1928年7月	345p
1527	世界文学と無産階級 マルクス主義芸術理論叢書 3	メーリンク著 川口浩訳	叢文閣	1928年12月	235p
1528	ドイツ経済史要 社会科学叢書 第14編	小林良正著	日本評論社	1928年12月	167p
1529	ソユエート・ロシア詩選	黒田辰男, 村田春海訳	マルクス書房	1929年2月	166p
1530	労働者の居ない船	葉山嘉樹著	改造社	1929年2月	118p
1531	東洋思想辞典 大思想エンサイクロペディア第28巻	神田豊穂	春秋社	1929年4月	308p
1532	歴史辞典 大思想エンサイクロペディア 第33巻	神田豊穂	春秋社	1929年8月	387p
1533	文芸思想 (2) 大思想エンサイクロペディア第11巻	神田豊穂著	春秋社	1929年10月	342p
1534	太刀打ち 日本プロレタリア傑作選集	片岡鉄兵	日本評論社	1929年12月	202p
1535	西式強健術と触手療法	西勝造	実業之日本社	1930年2月	285p
1536	日本プロレタリア文芸運動史	山田清三郎著	叢文閣	1930年2月	313p
1537	唯物論と経験批判論	レーニン著 山川均, 大森義太郎訳	白揚社	1930年7月	645p
1538	帝国主義論 改造文庫第1部第64篇	ジェー・エー・ホブソン著 石沢新二訳	改造社	1930年9月	452p
1539	左翼労働組合の組織と政策	渡辺政之輔	希望閣	1930年10月	400p
1540	新短歌はどう動く	清水信著	玉堂書店	1930年10月	224p

1541	史的唯物論大系 二輯 論及宗教論之部	イデオロギー	「マルクス主義の 旗の下に」編輯部	白揚社	1931年6月	224p
1542	20世紀の欧州文学 史叢書	マルクス主義芸術	フリーチェ著 熊沢復六訳	鉄塔書院	1931年7月	288p
1543	マルクス主義美学		メーリンク, ウィ ットフォーデル著 三宅洗, 屋井三市 訳	共生閣	1931年7月	296p
1544	資本論体系(中)	経済学全集第11巻	宇野弘蔵, 山田盛 太郎著	改造社	1931年9月	510p
1545	評議会闘争史		野田律太著	中央公論社	1931年10月	790p
1546	レーニン伝 偉人伝全集第21巻		向坂逸郎著	改造社	1932年2月	296p
1547	財政史 日本資本主義発達史講座 〔第2部 資本主義発達史〕		風早八十二著	岩波書店	1932年5月	76p
1548	明治維新の変革に伴ふ新しい階級分化 と社会的政治的運動 日本資本主義 発達史講座〔第1部 明治維新史〕		平野義太郎著	岩波書店	1932年5月	127p
1549	戦争史 日本資本主義発達史講座 〔第2部 資本主義発達史〕		田中康夫著	岩波書店	1932年6月	43p
1550	プロレタリアートと文化の問題		蔵原惟人著	鉄塔書院	1932年6月	285p
1551	交通機関の発達と内外市場の形成—展		小林良正	岩波書店	1932年6月	33p
1552	開(上・下) 日本資本主義発達史講 座〔第2部 資本主義発達史〕				8月	68p
1553	経済学辞典(上・中・下) 経済学全集		塚本三吉編集	改造社	1932年8月	424p
1555	56—58巻				—33年6月	—1079p
1556	新短歌論		簇劉一郎著	素人社書屋	1932年9月	291p
1557	北海・観想 世界名作文庫		ハイネ作 石中象治訳	春陽堂版	1932年11月	158p
1558	エンゲルスとデューリング 反デュー リングのために第2輯		ラスキーヌ著 片野有一訳	耕進社	1932年12月	133p
1559	芸術論		蔵原惟人著	中央公論社	1932年12月	548p
1560	ハイネ・回想録 世界名作文庫		ハインリッヒ・ハ イネ著 多田利男訳	春陽堂	1933年1月	86p
1561	ドイツ古典哲学の進歩性 改造文庫第 1部第81篇		ハインリッヒ・ハ イネ著 栗原佑, 高沖陽造 共訳	改造社	1933年2月	261p
1562	現代文学の諸傾向詩 岩波講座世界文 学		茅野蕭々著	岩波書店	1933年5月	45p
1563	叙情詩 岩波講座世界文学		竹友藻風著	岩波書店	1933年6月	43p
1564	青春独逸派 (1) 春秋文庫第3部21		ブランデス著 茅野蕭々訳	春秋社	1933年6月	198p

一般図書

1565	英国に於ける自然主義 (2)	ブランデス著 宮島新三郎訳	春秋文庫	1933年9月	398p
1566	「資本論」研究 第2編	レオンチュエフ他著 大竹博吉訳	ナウカ社	1933年10月	362p
1567	ロマンツェーロー (譚詩集) ハイネ 全集第3巻	吹田順助訳	学芸社	1933年10月	465p
1568	新しい美術とレアリズムの問題	岡本唐貴著	国際書院	1933年12月	106p
1569	神曲 (下巻)	ダンテ著 生田長江訳	新潮社	1934年1月	634p
1570	保健療養 <sup>オトツバシ</sup> 西式質疑応答集第2集	西勝造編集	大日本西会	1934年2月	226p
1571	短歌の諸問題	渡辺順三著	ナウカ社	1934年5月	310p
1572	バルザック批判	マリイ・ボオル著 石川湧訳	楽浪書院	1934年6月	136p
1573	文学史方法論	三木清著	岩波書店	1934年6月	90p
1574	ハイネ・浪漫派 世界名作文庫	ハイネ作 石中象治訳	春陽堂	1934年8月	254p
1575	全ソ作家大会報告	渡辺順三訳代表	ナウカ社	1934年11月	261p
1576	文学は如何なる道に進むべきか—ソヴェ ート作家大会に於ける報告及討論	外村史郎, 田村三 造訳	橘書店	1934年11月	314p
1577	分り易く覚え易い書簡文の研究	三省堂編輯所著	三省堂	1934年12月	32p
1578	文学古典の再認識	芸術遺産研究会編	現代文化社	1935年2月	342p
1579	労働生活史	ピエル・ブリゾン 著 松木勝喜代訳	刀江書院	1935年2月	366p
1580	小林多喜二全集 1—3巻	小林三吾編	ナウカ社	1935年3月	519p
1582				—6月	—618p
1583	生物学	石井友幸, 石原辰 郎	三笠書房	1935年5月	274p
1584	無神論 唯物論全書	秋沢修二著	三笠書房	1935年5月	293p
1585	日本資本主義発達史	野呂栄太郎著	岩波書店	1935年6月	339p
1586	近代唯物論 唯物論全書	森宏一著	三笠書房	1935年7月	261p
1587	「資本論」研究	大竹博吉著	ナウカ社	1935年9月	415p
1588	文芸評論 現代ソヴェト文学全集Ⅶ	ゴーリキー他 熊沢復六訳	三笠書房	1935年9月	454p
1589	レニン史的唯物論体系	アドラツキイ編 直井武夫訳	ナウカ社	1935年9月	584p
1590	芸術論 唯物論全書	甘粕石介著	三笠書房	1935年10月	257p
1591	歴史論 唯物論全書	服部之総著	三笠書房	1935年12月	216p
1592	グョエテ ファウスト 大思想文庫19	茅野蕭々著	岩波書店	1936年1月	184p
1593	社会主義的レアリズムの問題 ソヴェ ト同盟に於る創作方法の再討議	外村史郎訳	ナウカ社	1936年1月	285p



1594	文学と趣味	シュッキング著 金子和訳	清和書店	1936年1月	171p
1595	文芸学の発展と批判	F・シルレル著 熊沢復六訳	清和書店	1936年2月	454p
1596	小説の本質 文芸百科全書	コム・アカデミー 文学部編 熊沢復六訳	清和書店	1936年3月	186p
1597	朝刊 清水信第5作品集	清水信義著	生活社	1936年3月	198p
1598	独占資本—帝國主義 経済学教程Ⅳ	ラピドス・オスト ロヴィチャノフ著 橋本弘毅訳	白揚社	1936年5月	366p
1599	文芸の本質 文芸百科全書	コム・アカデミー 文学部編 熊沢復六訳	清和書店	1936年5月	170p
1600	ゴリキイ・文芸書簡集	ゴリキイ 横田瑞穂訳	ナウカ社	1936年6月	226p
1601	古代哲学史 唯物論全書	古在由重著	三笠書房	1936年7月	187p
1602	ハイネと青年独逸派	フランツ・メーリ ング著 土方定一, 朝広正 利訳	西東書林	1936年7月	307p
1603	現代物理学 唯物論全書	石原純著	三笠書房	1936年8月	292p
1604	ゲーテ・ハイネ・現代文芸	舟木重信著	清和書店	1936年9月	318p
1605	社会起源論 唯物論全書	梯明秀著	三笠書房	1936年9月	300p
1606	レーニンのゴオリキーへの手紙	レーニン 中野重治訳	岩波書店	1936年9月	147p
1607	文芸思想史 唯物論全書	高沖陽造著	三笠書房	1936年10月	283p
1608	家族論 唯物論全書	玉城巖著	三笠書房	1936年11月	243p
1609	ハイネ人生読本 人生読本叢書(3)	中野重治著	六芸社	1936年11月	356p
1610	リアリズム 文芸百科全書	熊沢復六訳	清和書店	1936年11月	173p
1611	一日一回便通主義の可否	西勝造	中府出版社発行	1936年12月	40p
1612	ゲーテ人生読本 人生読本叢書(4)	舟木重信著	六芸社	1936年12月	353p
1613	大トルストイ全集 第18巻	原久一郎訳	中央公論社	1936年12月	795p
1614	日本民俗史 唯物論全書	田村栄太郎著	三笠書房	1936年12月	307p
1615	広島県立呉第一中学校同窓会会報 第13号	広島県立呉第一中 学校同窓会編		1936年12月	125p
1616	社会主義と宗教	ニコライ・レーニ ン著 早川二郎訳	白揚社	1937年2月	157p
1617	文芸評論	宮本顕治著	六芸社	1937年2月	288p
1618	経済学史 1—3巻	ローゼンベルグ著	白揚社	1937年2月	417p
1620		直井武夫, 広島定 吉共訳		—9月	—524p

一般図書

1621	現代の文学 現代哲学全集第21巻	高橋健二, 外村史郎著	建設社	1937年3月	317p
1622	性科学 唯物論全書	太田武夫著	三笠書房	1937年4月	248p
1623	仏教論 唯物論全書	敵木勝著	三笠書房	1937年4月	258p
1624	文芸学の方法 文芸百科全書	熊沢復六訳	清和書店	1937年4月	176p
1625	孤独なライフワーク	神山恵三	文芸春秋	1937年5月	227p
1626	フランス唯物論 唯物論全書	石川湧著	三笠書房	1937年5月	223p
1627	芸術学	高沖陽造	美瑛堂	1937年6月	240p
1628	新経済学入門(上)	ラビドス, オストロヴィツァノフ共著 橋本弘毅訳	慶応書房	1937年6月	570p
1629	短篇・長篇小説 文芸百科全書	熊沢復六著	清和書店	1937年6月	194p
1630	西式健康法と「クリマダ」に就いて	林学著	中庸出版社	1937年7月	23p
1631	唯物史観ドイツ史 ソ聯大百科辞典版	永田広志訳	白揚社	1937年7月	464p
1632	現代哲学 唯物論全書	古在由重著	三笠書房	1937年9月	204p
1633	政治概論 唯物論全書	堀伸二著	三笠書房	1937年10月	257p
1634	リアリズム文学論	熊沢復六	清和書店	1937年11月	165p
1635	宇宙進化論 唯物論全書	石原辰郎著	三笠書房	1937年12月	194p
1636	現代哲学とファシズム 一現代思想 日本型ファシズムの批判一	秋沢修二著	白揚社	1937年12月	283p
1637	論理学	三枝博音著	河出書房	1938年2月	200p
1638	リアリズム論争	熊沢復六	清和書店	1938年3月	175p
1639	科学的工場組織の理論	J・エルマンスキー著 高山洋吉訳	東学社	1938年4月	210p
1640	批評精神	伊豆公夫著	白揚社	1938年4月	348p
1641	短歌論 三笠全書7	渡辺順三著	三笠書房	1938年7月	227p
1642	労働の理論と政策	風早八十二著	時潮社	1938年10月	292p
1643	ミケルアンジェロ	羽仁五郎著	岩波書店	1939年3月	829p
1644	歌集烈風の街 生活派短歌叢書第3編	渡辺順三著	文泉閣	1939年4月	123p
1645	西式健康法	西勝造著	中庸出版社	1939年4月	253p
1646	亡命文学 19世紀文学主潮第1巻	吹田順助著	春秋社	1939年6月	288p
1647	囚衣	山田清三郎著	文泉閣	1939年7月	124p
1648	独逸浪漫派 (1) 19世紀文学主潮 第2巻	吹田順助著	春秋社	1939年7月	256p
1649	仏蘭西の反動 19世紀文学主潮第4巻	G・ブランドス 茅野蕭々訳	春秋社	1939年9月	438p
1650	長期建設期に於ける我国労働政策 昭和研究会労働問題研究会中間報告	昭和研究会著	東洋経済新報社	1939年10月	252p

1651	現代文学論	窪川鶴次郎著	中央公論社	1939年11月	666p
1652	告白・回想 改造文庫第1部第179篇	ハイネ著 土井義信訳	改造社	1939年12月	220p
1653	仏蘭西の浪漫派 (1・2)	G・ブランドス著	春秋社	1940年2月	288p
1654	19世紀文学主潮7・8巻	内藤溜訳		3月	292p
1655	ハイネ研究	高沖陽造編	金鈴社	1940年3月	302p
1656	歩兵操典		武揚堂	1940年4月	376p
1657	原爆体験記	広島市原爆体験記 刊行会	朝日新聞社	1940年7月	259p
1658	新独逸国家大系 第11巻 経済篇3 —社会政策・労働政策—	二荒芳徳編集代表	日本評論社	1940年9月	419p
1659	子供の病気の早期手当と看護	築田多吉著	主婦の友社	1940年10月	104p
1660	戦時社会政策論	大河内一男著	時潮社	1940年12月	375p
1661	歌集 みたみわれ	影山正治著	日本打球社	1941年4月	242p
1662	技術文化史 科学史叢書	矢崎弾著	山雅房	1941年8月	442p
1663	産業報国運動関係通牒 産報指導資料 第7輯	阪本勝編集	大日本産業報国会	1941年8月	95p
1664	西式質疑応答集 第3集	西勝造著	大日本西会	1941年9月	240p
1665	太陽と泥で育てる	市橋善之助	教材社	1942年4月	257p
1666	職長教育の方法 大日本産業報国会技 能部長 根上耕一講述	橋本重遠編集	大日本産業報国会	1942年6月	65p
1667	維新者の信条	影山正治著	大東塾出版部	1942年7月	362p
1668	軍神につづけ	大政翼賛会文化部	大政翼賛会宣伝部	1943年2月	71p
1669	玄米の炊き方食べ方	橋本重遠編集	大日本産業報国会	1943年3月	11p
1670	イタリアとドイツ —文芸復興期の芸術—	ハインリッヒ・ヴェルフリン著 杉田益次郎訳	清閑舎	1943年10月	285p
1671	再説現代文学論	窪川鶴次郎著	昭森社	1944年4月	330p
1672	日本人の性格	宮城音弥	朝日新聞社	1979年8月	285p
1673	日本の情勢と日本共産党の任務に関する テーゼ		日本共産党京都 地方委員会	1944年12月	41p
1674	共産党宣言 解放文庫〔1〕	マルクス、エンゲ ルス著 界利彦, 幸徳秋水訳	彰考書院	1945年12月	60p
1675	国家と革命 —マルクス主義の国家論 と革命におけるプロレタリアートの 任務—	レーニン著 小堀基二訳	彰考書院	1946年2月	207p
1676	生活協同組合の手引	鈴木真洲雄編集	日本共同組合同 盟	1946年2月	43p

一般図書

1677	反ファシズム統一戦線の経験と批判 人民叢書第7輯	ピーク著 松本健二訳	人民社	1946年2月	30p
1678	科学論 唯物論全書1	戸坂潤著	三笠書房	1946年3月	189p
1679	共産党1932年テーゼ 民論叢書(3)	コミンタン著 民論社編輯部訳	民論社	1946年3月	35p
1680	ゴリキイ短篇集 幸福外八篇 ロシア文学叢書一1一	ゴリキイ 大塚博人訳	高山書院	1946年3月	128p
1681	D坂の殺人事件	江戸川乱歩著	静書房	1946年3月	49p
1682	日本共産党は何を要求するか 党行動 綱領解説 人民解放叢書・第一輯	平沢三郎著	日本共産党出版 部	1946年3月	63p
1683	亡命16年	野坂参三著	時事通信社	1946年4月	86p
1684	わが革命に於けるプロレタリアートの 諸任務 —プロレタリア党綱領草案—	レーニン著 真中澄生訳	星雲社	1946年4月	58p
1685	延安報告	黄炎培著 水谷啓二, 小椋広 勝訳	時事通信社	1946年5月	61p
1686	1917年革命の教訓 フナカタライブラリィ№4	レーニン著 中山一浩訳	船形書院	1946年5月	50p
1687	ソヴェートの婦人 人民群書	テ・セレブレニコ フ著 植村麗千代訳	伊藤書店	1946年5月	71p
1688	日本帝国主義の陰謀—田中義一首相の 満州侵略の上奏覚書全訳—	斎藤新吾編	イスクラ社	1946年5月	28p
1689	日本文学の諸問題	中野重治著	新生社	1946年5月	60p
1690	婦人の皆さんへ 人民解放叢書第8輯	大町米子著	日本共産党出版 部	1946年5月	29p
1691	ホイットマン詩集・草の葉	ワルト・ホイット マン原著 有島武郎訳著	富岳本社	1946年5月	176p
1692	理論物理学 学芸全書1	石原純著	三笠書房	1946年5月	264p
1693	レーニンについて 青共文庫第6輯	スターリン著	日本青年共産同 盟宣伝部	1946年5月	12p
1694	新民主主義論 毛沢東選集	毛沢東著 名和統一, 尾崎庄 太郎共訳	人民社	1946年6月	74p
1695	ドストイェフスキイ芸術と生涯 新文化叢書Ⅲ	林逸馬著	九州評論社	1946年6月	31p
1696	弁証法的唯物論	高山徹著	九州評論社	1946年6月	15p
1697	レーニン1917年4月テーゼ	レーニン 真中澄生訳	星雲社	1946年6月	30p
1698 1700	ソ同盟共産党史 I・II・III	ソ同盟共産党中央 委員会所属特別委 員会編	日本共産党出版 部	1946年6月 —1948年	126p —488p

1701	新しき文化のために	蔵原惟人著	新生社	1946年7月	58p
1702	共産主義ABC 第一分冊 ブルジョア社会機構の話	ブハーリン, プレ オブラシュンスキ ー共著 足利一夫訳	共和社	1946年7月	102p
1703	黒船前後	服部之総著	三和書房	1946年7月	178p
1704	ソヴェートの文化 人民群書	ベ・コーヂン著 植村鷹千代訳	伊藤書店	1946年7月	59p
1705	日本共産党行動綱領早わかり 附日本共産党規約		日本共産党石川 地方委員会	1946年7月	64p
1706	封建制下の文学 学芸新書3	永積安明著	丹波書林	1946年7月	86p
1707	新日本プロレタリア詩集	井上光晴編	九州評論社	1946年8月	93p
1708	新民主主義論 フナカタライブラリーNo.3	毛沢東著 日本民主化協会訳	船形書院	1946年8月	92p
1709	日本労働争議史	村山重忠著	霞ヶ関書房	1946年8月	238p
1710	転形期の歴史学	羽仁五郎著	中央公論社	1946年8月	203p
1711	ドイツ帝國主義の歴史的特殊性	ヴァルガ著 広島定吉訳	新興出版社	1946年8月	78p
1712	農民組合入門 社会新書	大西俊夫著	山水社	1946年8月	64p
1713	ポリシエヴィズム闘争史	ペー・ヴォーリン エス・イングロフ 日川三郎訳	京王書房	1946年8月	100p
1714	民主主義革命に於ける土地・農民問題	伊藤律著	日本橋書店	1946年8月	57p
1715	共産主義の「左翼」小児病	レーニン著 國部四郎訳	人民社	1946年9月	148p
1716	ソヴェートの家庭と生活 ソヴェート文化叢書I	スヴェルドロフ, パシエルストニク 著 ソヴェート研究者協 会訳	ソヴェート文化社	1946年9月	91p
1717	ソヴェート聯邦に於ける共産主義建設 に関するレーニン, スターリンの学 説	エム・ミーチン 柳春生訳	星雲社	1946年9月	48p
1718	鉄の話 新日本名作叢書	中野重治著	新興出版社	1946年9月	214p
1719	何から始むべきか 解放文庫〔8〕	レーニン著 服部斐生訳	彰考書院	1946年9月	40p
1720	現代唯物論 唯物論全書9	永田広志著	三笠書房	1946年10月	184p
1721	10月革命への道	スターリン著 佐伯嶺三訳	民主評論社	1946年10月	311p
1722	小説勉強	徳永直	伊藤書店	1946年10月	94p
1723	迫り来る大破綻 如何にしてこれと闘うべきか	レーニン著 服部斐生訳	イスクラ社	1946年10月	80p

一般図書

1724	中国共産党 中国叢書(1)	朝日新聞東亜部編著	月曜書房	1946年10月	273p
1725	日本共産党闘争小史	市川正一著	暁書房	1946年10月	214p
1726	亡命16年	野坂参三著	時事通信社	1946年10月	86p
1727	レーニン主義の諸問題 第一分冊	スターリン著 広島定吉訳	ナウカ社	1946年10月	283p
1728	新らしき日 人民短歌叢書	渡辺順三著	新興出版社	1946年11月	119p
1729	「戦争と平和」論	岩上順一著	河出書房	1946年11月	249p
1730	人間レーニン	マキシム・ゴーリキイ著 三宅威訳	社会書房	1946年11月	97p
1731	バルザック 人と作品	水野亮著	白日書院	1946年11月	366p
1732	現段階に於ける中国文芸の方向	毛沢東著 千田九一訳	十月書房	1946年12月	92p
1733	農民運動史 学生叢書 文化科学篇—11—	稲岡通著	日本科学社	1946年12月	176p
1734	レーニン —階級闘争の大戦略家—	ロゾフスキー著 玉城巖訳	解放社	1946年12月	80p
1735	ロシア文学研究	ソヴェト研究者協会文学部会	新星社	1946年12月	234p
1736	英国の労働組合	ハミルトン著 木下一夫訳	新世界文化社	1947年1月	59p
1737	ゴーリキイの生涯と芸術	昇曙夢著	社会書房	1947年1月	190p
1738	自立演劇のやり方 自立演劇叢書1	村山知義著	大川書店	1947年1月	38p
1739	ソヴェト労働組合の話 ナウカ社解説全書№1	ルイテコフ著 ナウカ社編集部訳	ナウカ社	1947年1月	14p
1740	民主的労働組合とは何か 総司令部労働教育叢書 第一輯	R・L・G・デヴラル著 服部親行訳	労働民主協会	1947年1月	32p
1741	レーニンと芸術	ドレイデン編 蔵原惟人、杉本良吉、村田春海、外村史郎、黒田辰男訳	社会書房	1947年1月	196p
1742	労働組合の育て方 アメリカCIOの実例	米国CIO系自動車従業員組合教育部著 労働協会訳	毎日新聞社	1947年1月	67p
1743	公開状 —第一輯—	真善美編集部編	真善美社	1947年2月	108p
1744	社会運動思想史 唯物論全書14	新島繁著	三笠書房	1947年2月	230p
1745	青年の任務について 青共文庫第10輯	スターリン著	日本青年共産同盟	1947年2月	53p
1746	明治思想史 唯物論全書13	鳥井博郎著	三笠書房	1947年2月	168p

1747	帝国主義戦争期 II レーニン選集第 3巻 一戦略戦術に関する一	エヌ・レーニン著	人民社	1947年3月	144p
1748	日本の産業と農業の将来	徳田球一著	日本共産党出版 部	1947年3月	35p
1749	メーデーとは何か 人民叢書第8輯	江森盛彌著	人民社	1947年3月	61p
1750	「くにのあゆみ」を検討する	自由懇話会編	人民新聞社出版 部	1947年4月	58p
1751	社会医学 唯物論全書6	宮本忍著	三笠書房	1947年4月	197p
1752	住民パワー入門 かよわき庶民が自衛するために	斎藤浩二, 佐和慶 太郎著	主婦と生活社	1972年4月	286p
1753	ソヴェート文学概論	岡沢秀虎著	東京堂	1947年4月	216p
1754	春	小堀杏奴	東京出版	1947年4月	276p
1755	美術と思想の話	福田新生著	大雅堂	1947年4月	247p
1756	ヘーゲル哲学への道	甘粕石介著	解放社	1947年4月	287p
1757	弁証法入門	ベ・ゴレーフ著 蔵原惟人訳	社会書房	1947年4月	57p
1758	唯物論哲学のために	永田広志著	ナウカ社	1947年4月	183p
1759	人民の文学	宮本顕治著	岩崎書店	1947年5月	302p
1760	スターリン伝	全ソ共産党中央委 員会附属マルクス ・エンゲルス・レ ーニン研究所編 箕浦義文訳	人民社	1947年5月	108p
1761	労働基準法		広島労働基準局	1947年5月	63p
1762	論理学 学芸全書2	三枝博音著	三笠書房	1947年5月	199p
1763	演劇論 唯物論全書19	村山知義著	三笠書房	1947年6月	172p
1764	芸術認識論	北条元一著	北隆館	1947年6月	382p
1765	創作集 新しい小説1・2	新日本文学会	新日本文学会	1947年6月	390p
1766				1948年4月	310p
1767	文学の端緒	小田切秀雄	世界評論社	1947年6月	182p
1768	民主主義文学の進路	新日本文学会編	新興芸術社	1947年6月	216p
1769	民主的労働組合運動	連合軍総指令部 経済科学局労働 課編	日本通信社	1947年6月	26p
1770	明日への文学精神 一民主主義文学のために一	中野重治, 松本正 雄, 窪川鶴次郎, 宮本百合子, 壺井 繁治, 徳永直	労働文化社	1947年7月	103p
1771	新しい労働賃銀	労働調査協議会	産業復興会議	1947年7月	52p
1772	進化論 唯物論全書3	石井友幸著	三笠書房	1947年7月	194p
1773	ソ連労働組合の文化活動	ツアレグラドスキ イ著 帆足図南次訳	社会書房	1947年7月	55p

1774	中野重治詩集	中野重治著	小山書店	1947年7月	224p
1775	日本史入門	守屋典郎, 信夫清三郎, 上杉重二郎, 小野義彦, 石母田正, 藤間生大, 伊豆公夫著	正旗社	1947年7月	108p
1776	ロシア文学研究	蔵原惟人著	昭森社	1947年7月	132p
1777	歌声よおこれ	宮本百合子	解放社	1947年8月	302p
1778	思想の進路	古在由重著	伊藤書店	1947年8月	124p
1779	ソヴェート聯邦 民主主義科学教程17	平館利雄著	彰考書院	1947年8月	118p
1780	哲学読本	山崎謙著	紀元社	1947年8月	209p
1781	日本文学史物語 人民群書	榊原美文著	伊藤書店	1947年8月	133p
1782	マルクス主義芸術論	ルナチャールスキイ著 昇曙夢訳	社会書房	1947年8月	256p
1783	朗読詩集 第1輯 自立演劇叢書2	新協劇団編	大川書店	1947年8月	39p
1784	哲学方法論 真理叢書	山崎謙著	岩崎書店	1947年9月	173p
1785	祖国を愛する道	神山茂夫著	岩崎書店	1947年9月	156p
1786	民衆芸術論	野坂参三著	日本民主主義文化連盟	1947年9月	46p
1787	新しい婦人と生活	宮本百合子	日本民主主義文化連盟	1947年10月	136p
1788	解説付 企業再建整備法	日本法規研究所編	江戸橋書房	1947年10月	156p
1789	企業独占排除関係法規—独占禁止法, 閉鎖機関令, 経済力集中排除法等—		膨剤協会出版部	1947年10月	53p
1790	細胞活動早わかり	竹中恒三郎, 春日正一著	真理社	1947年10月	55p
1791	日本財閥の新支配網一覽表 調査報告1号	労働経済研究所編	労働経済研究所	1947年10月	80p
1792	日本財政論 唯物論全書27	風早八十二著	三笠書房	1947年10月	138p
1793	労働関係法規罰則解説	神谷尚男, 長谷多郎著	三芳書房	1947年10月	197p
1794	近代日本労働者運動史 日本資本主義研究叢書	社会経済労働研究所著	白林社	1947年11月	231p
1795	虚無の花	江口涣著	十月書房	1947年12月	267p
1796	新物賃賃金体系のからくり		日本共産党中央委員会調査部	1947年12月	36p
1797	農業協同組合早わかり	日本共産党農民部著	日本共産党出版部	1947年12月	76p
1798	婦人問題講話 民主主義科学教程14	能智修彌著	彰考書院	1947年12月	167p
1799	文化革命の基本的任務	蔵原惟人著	日本民主主義文化連盟	1947年12月	108p



1800	一市民の歌	司代隆三著	新興出版社	1948年1月	111p
1801	科学と民主主義	原光雄著	三一書房	1948年1月	87p
1802	詩人の感想	壺井繁治	新星社	1948年1月	220p
1803	時のうごき 1947	中野重治編	プレブス社	1948年1月	271p
1804	文学の窓	小田切秀雄著	玄理社	1948年1月	235p
1805	変革の理論	松村一人著	日本民主主義文化連盟	1948年2月	218p
1806	よみもの天皇紀(上巻)	秋月俊一郎著	人民社	1948年2月	240p
1807	新日本詩集	新日本文学会編	新日本文学会	1948年3月	215p
1808	ストライキ	鮎沢巖	二見書房	1948年3月	75p
1809	政治必携 地方篇	日本共産党調査部編	日本共産党出版部	1948年3月	298p
1810	ソヴェトの農村 ソヴェト文化双書Ⅱ	斉藤建著	ソヴェト文化社	1948年3月	154p
1811	(必携)労働法規集	井田宗一	井田書店	1948年3月	250p
1812	民主主義芸術論	北条元一著	彰考書院	1948年3月	168p
1813	モリエール喜劇集	内藤濯, 小場瀬卓三訳	生活社	1948年3月	456p
1814	嵐に立つ少年	前川康太郎著	愛読会出版部	1948年4月	64p
1815	ヘルマン・ヘッセ研究 ヘルマン・ヘッセ全集別巻	相良守峯他	三笠書房	1948年4月	324p
1816	労働運動千一夜	野田律太	日本労働通信社	1948年4月	237p
1817	戯曲の書き方 自立演劇叢書3	村山知義著	トランク書房	1948年5月	36p
1818	日本プロレタリア文芸理論史 芸術理論叢書	一条重美著	彰考書院	1948年5月	270p
1819	美術論 唯物論全書17	武田武志著	三笠書房	1948年5月	208p
1820	大衆芸術論	民主主義科学者協会芸術部会編集	解放社	1948年6月	128p
1821	農村問題 唯物論全書25	桜井武雄著	三笠書房	1948年7月	153p
1822	小林多喜二研究	蔵原惟人 中野重治編集	解放社版	1948年8月	265p
1823	労働組合講話	春日正一	暁明社	1948年9月	283p
1824	小林多喜二全集 1-4・6・7・9巻	小林多喜二全集刊行会編	新日本文学会	1948年9月	290p
1830				—50年3月	—495p
1831	あぶら照り	徳永直	新潮社	1948年10月	271p
1832	時のうごき 1948	中野重治	新プレブス	1948年10月	237p
1833	ロシア文学問答	除村吉太郎著	日本民主主義文化連盟	1948年10月	181p

一 般 図 書

1834	こばやし・つねお詩集	こばやし・つねお著	解放社	1948年11月	133p
1835	事前割当早わかり —食糧確保臨時措置法の解説と運用—	松本三益著	船形書院	1948年11月	72p
1836	マルクス・エンゲルス芸術論	マルクス・エンゲルス著 外村史郎訳	真理社	1948年11月	162p
1837	労働戦線統一の諸問題	斉藤一郎著	日本労農通信社	1948年11月	133p
1838	勤労者詩選集 —1949年版—	新日本文学会編	新興出版社	1948年12月	152p
1839	世界名作大観 ロシヤ篇	除村吉太郎著	労働文化社	1948年12月	296p
1840	だれでもわかる, できる税金の知識	大原春次著	米村健(発行人)	1948年12月	18p
1841	労働組合論 ナウカ講座Ⅵ	聴濤克己	ナウカ社	1948年12月	130p
1842	共産党が政権を握ったら	日本共産党宣伝教育部編	日本労農通信社	1949年1月	119p
1843	農民は重税といかに闘うか	日本共産党農民部	日本共産党出版部	1949年1月	32p
1844	ファッション	岡田丈夫	暁明社	1949年1月	318p
1845	労働組合の訴訟手続早わかり —仮処分から行政訴訟まで—	森長英三郎著	日本労働通信社	1949年1月	78p
1846	共社合同と日本共産党の自己批判	民主評論社編集部	民主評論社	1949年2月	107p
1847	文化運動 ナウカ講座Ⅴ	蔵原惟人著	ナウカ社	1949年2月	117p
1848	シベリアの音楽生活	井上頼豊著	ナウカ社	1949年3月	179p
1849	重要産業国営人民管理早わかり	日本共産党中央委員会調査部	日本共産党出版部	1949年3月	40p
1850	広島文学	杉原芳治編集	新日本文学会三原支部	1949年3月	48p
1851	人民の健康をまもるには —共産党はこう主張する—	日本共産党科学技術部編	日本共産党出版部	1949年4月	46p
1852	日本プロレタリア詩集 1928~1936	新日本文学会著	新日本文学会	1949年5月	292p
1853	美しき実りのために	牧瀬菊枝著	学生書房	1949年6月	205p
1854	漁業の復興と漁民の生活 たたかいの組織とやりかた	日本共産党漁民対策委員会編	日本共産党出版部	1949年6月	56p
1855	漁民が生きるには・知っておくこと	日本共産党宣伝教育部	日本共産党出版部	1949年6月	56p
1856	改悪労組法のみ方とたたかい方の討論会		全日本金属産業労働組合協会	1949年7月	30p
1857	共産主義と道徳	日本共産党統制委員会編	五月書房	1949年7月	78p
1858	すべての土地を農民に	日本共産党出版部編	日本共産党出版部	1949年7月	22p
1859	問と答 子供会のつくり方	日本共産党文化部編	日本共産党出版部	1949年7月	67p

1860	労働組合法, 労働関係調整法		広島県労働部労働課	1949年7月	50p
1861	改正労組法施行令中労委規則の解説	中央労働学園	中央労働学園	1949年8月	189p
1862	景気はここから	日本共産党宣伝教育部編	日本労働通信社	1949年8月	16p
1863	失業の実相と解決のカギ			9月	16p
1864	下山・三鷹事件の真相	日本共産党宣伝教育部編	日本共産党出版部	1949年8月	16p
1865	引揚政策をあばく	日本共産党宣伝教育部著	ナウカ社	1949年8月	16p
1866	国民の疑問に共産主義はどう答える	古在由重	伊藤書店	1949年9月	40p
1867	デッチあげられた平事件	日本共産党教育宣伝部編	機械工の友社	1949年9月	16p
1868	農村の世なおし・インチキ篤農技術をあばく	日本共産党教育宣伝部編	政治月報社	1949年9月	16p
1869	財閥と総同盟幹部の連合軍をつく	日本共産党宣伝教育部編	日本かべ新聞社	1949年10月	16p
1870	シャープ勧告で税は軽くなるか	日本共産党宣伝教育部著	日本共産党出版部	1949年10月	16p
1871	新日本詩集 1949年版	新日本文学会編	新日本文学会	1949年11月	266p
1872	ソ連の謎をとく	伊藤書店編集部	伊藤書店	1949年11月	48p
1873	日本の婦人と子供 世界の婦人に訴う!	アジア婦人会議参加実行委員会編	日本民主婦人協議会	1949年12月	57p
1874	中国大革命の勝利 人民政治協商会議と中華人民共和政府	アカハタ国際部編	日本共産党出版部	1949年	64p
1875	メーデー歌と明るい歌		ユマニテ社	1949年	16p
1876	チェコ革命の一週間	ウォルター・ストーム	日本共産党九州地方委員会	1949年	95p
1877	党生活の刷新のために	徳田球一著	日本共産党出版部	1950年1月	34p
1878	警察国家の復活 時局と生活叢書第2集	細川嘉六著	日本共産党出版局	1950年2月	16p
1879	小林多喜二	小田切秀雄著	新日本文学会	1950年2月	179p
1880	中小企業の生きる道 時局と生活叢書第3集	板野勝次著	日本共産党出版局事業部	1950年2月	16p
1881	日本共産党第18回拡大中央委員会報告 決定集		日本共産党出版局	1950年2月	72p
1882	漁民の生きる道 時局と生活叢書第8集	田中松次郎著	日本共産党出版局事業部	1950年3月	16p
1883	米の値段はなぜ安いのか 時局と生活叢書第6集	小原嘉著	日本共産党出版局事業部	1950年3月	16p
1884	生活相談 家事百科	玉城肇著	伊藤書店	1950年3月	138p

一般図書

1885	世界はどうか1950年の国際情勢 時局と生活叢書第7集	鈴木東民著	日本共産党出版 局事業部	1950年3月	16p
1886	日本共産党内の偏向について —野坂・徳田コース批判—	中西篤編	高田書店	1950年3月	392p
1887	25年度予算の全貌 軍事的・植民地予 算を曝く	日本共産党中央委 員会調査部編	日本共産党出版 局	1950年3月	28p
1888	農業恐慌をどうする 時局と生活叢書第9集	福本和夫著	日本共産党出版 局事業部	1950年3月	16p
1889	文学案内	岩上順一	冬芽書房	1950年3月	169p
1890	ポツダム宣言は日本の人民に何を保障 しているか	日本共産党宣伝教 育部	日本共産党出版 局	1950年3月	68p
1891	スターリン民族問題とレーニン主義 —附解説アジジャン— マルクスレ ーニン主義民族問題体系〔Ⅱ〕	世界経済研究所編		1950年6月	95p
1892	三十八度線と日本 「二ツの世界」は爆発するか?	欧亜協会編	欧亜協会	1950年7月	61p
1893	新地方税のからくり 解説とそのたたかい方	木村栄著	日本農民組合総 本部	1950年8月	70p
1894	くるまぎ詩集 1	久保文子編集	裸電球の下での 会	1950年9月	17p
1895	歴史小品	郭沫若著 平岡武夫訳	岩波書店	1950年11月	203p
1896	帝国主義と民族問題	W・I・レーニン著		1950年	136p
1897	地下党機関は活動する 第1部	A・フォードロフ 著	真理社	1951年1月	224p
1898	抵抗の文学	加藤周一著	岩波書店	1951年3月	172p
1899	ドイツ文学小史	G・ルカーチ 道家忠道、小場瀬 卓三訳	岩波書店	1951年7月	278p
1900	大陰謀 —対ソ秘密戦争— (上巻)	マイケル・セイヤ ーズ・アルバート・ イー・カーン著 大木貞夫訳	ナウカ社	1951年8月	189p
1901	原爆詩集	峠三吉著	新日本文学会広 島支部、われら の詩の会	1951年9月	74p
1902	騰寫印刷術講義録	ひろし・たみ著	紅文堂	1951年10月	56p
1903	癡狂院	高旗宏著	三原孔版社	1952年1月	87p
1904	詩集 風の子物語 増岡敏和生活詩集	増岡敏和<いぜき みちお>著	人民文学広島友 の会・新日本文 学広島支部・わ れらの詩の会・ うなん詩の会	1952年3月	40p

1905	感情の世界	島崎敏樹著	岩波書店	1952年 5 月	206p
1906	文学と生活	丁玲著 岡崎俊夫訳	青銅社	1952年 7 月	236p
1907	橋	北橋, 李根全, 村路著	通俗文芸出版会	1952年 8 月	32p
1908	ソヴェート文学ノオト	山村房次著	九州評論社	1953年 2 月	188p
1909	魯迅評論集	魯迅 竹内好訳	岩波新書	1953年 2 月	211p
1910	職業としての出版人 職業と人間シリーズ	鈴木均著	中経出版	1978年 3 月	302p
1911	現代詩手帖	小野十三郎著	創元社	1953年 4 月	252p
1912	安芸津町勢要覧	安芸津町十周年記念 (祝賀行事要覧 芸津町役場 班) 編	広島県賀茂郡安 芸津町役場	1953年 5 月	93p
1913	貧しさからの解放	近藤康男編著	中央公論社	1953年 5 月	268p
1914	革命と人間解放・戦争に抗して 現代日本評論選 4	竹内好, 野間宏著	筑摩書房	1953年 9 月	244p
1915	総評	村上寛治, 井出武 三郎, 清水一著	東洋経済新報社	1953年10月	216p
1916	短歌的抒情	小野十三郎著	創元社	1953年11月	179p
1917	日本人の心理	南博著	岩波書店	1953年11月	212p
1918	国民文学論 これからの文学は誰が作りあげるか	高沖陽造著者代表	厚文社	1953年12月	378p
1919	国民文学論	竹内好	東京大学出版会	1954年 1 月	231p
1920	図解・国民の経済生活	有沢広己, 脇村義 太郎, 美濃部亮吉, 内藤勝編著	岩波書店	1954年 1 月	46p
1921	現代詩読本	村野四郎著	河出書房	1954年 2 月	206p
1922 1927	現代文学論大系 1—6 巻	吉田精一, 青野秀 吉, 中島健蔵他	河出書房	1954年 2 月 —10月	329p —394p
1928	日本人の生活心理	高木正孝著	創元社	1954年 3 月	210p
1929	短篇小説作法	アントーノフ 鹿島保夫訳	未来社	1954年 5 月	136p
1930	小説とは何か	E・M・フォルスタ ー著 米田一彦訳	ダヴィッド社	1954年 7 月	205p
1931	創作方法と創作体験 現代文学(2)	中野重治, 椎名麟 三編	新評論社	1954年 8 月	223p
1932	高校生文芸作品集		旺文社	1954年 8 月	128p
1933	文学・芸術の繁栄のために 中国文学・芸術工作者第 2 回代表大 会報告集	郭沫若, 周揚, 茅 盾著 中国文学芸術研究 会訳	駿台社	1954年 8 月	220p

一般図書

1934	日本プロレタリア文学大系	野間宏編	三一書房	1954年9月	379p
1942	序, 1—8巻			—55年5月	—478p
1943	エンピツをにぎる主婦	鶴見和子	毎日新聞社	1954年12月	238p
1944	詩集「冬の広場」	磯村礼二郎著	駱駝詩社	1955年2月	86p
1945	民族の詩 東大新書24	藤間生大著	東京大学出版会	1955年2月	195p
1946	芸術の認識と典型	アスムス・メーラ ッハ, ミヤスマコ フ・オーゼロフ 鹿島保夫訳	未来社	1955年4月	202p
1947	日本の国民生活	国民生活調査会編	三一書房	1955年4月	316p
1948	現代詩入門	小野十三郎	創元社	1955年5月	185p
1949	生活綴方ノートⅡ	国分一太郎	新評論社	1955年5月	276p
1950	文学と民族の伝統	ケッツルリンゼイ, アーロノヴィッチ トムソン	未来社	1955年7月	182p
1951	アメリカの短篇小説 20世紀アメリカ文学研究叢書	アメリカ学会文学 部会 龍口直太郎, 大橋 吉之輔共訳	評論社	1955年8月	218p
1952	西洋文学 岩波小辞典	桑原武夫	岩波書店	1955年9月	224p
1953	戦後日本の労働運動 岩波新書217	大河内一男著	岩波書店	1955年9月	240p
1954	日本文学 古典 岩波小辞典	高木市之助編	岩波書店	1955年9月	218p
1955	学校の詩サークルの詩 ポエム・ライブラリー5	伊藤信吉著者代表	創元社	1955年10月	265p
1956	ソヴェト短篇全集Ⅰ 革命・国内戦・新経済政策期	中村融, 清水邦生, 木村浩訳	新潮社	1955年10月	412p
1957	日本文学の現状とその方向 新日本文学会第7回大会報告集	新日本文学会編	河出書房	1955年11月	234p
1958	第二の性 文学に現われた女	ポーヴォワール 生島遼一訳	新潮社	1955年12月	192p
1959	中共職場文芸選集(1)	米田祐太郎訳	高風館	1956年1月	230p
1960	詩集 明日への眼	増岡敏和著	詩運動社	1956年2月	93p
1961	労働者のモラル	高野実著	理論社	1956年4月	226p
1962	ティーン・エイジャー	野辺地正之	三一書房	1956年6月	225p
1963	11年目の若もの	読売新聞社会部編	修道社	1956年11月	189p
1964	映画の心理学	波多野完治	新潮社	1957年1月	274p
1965	転向記・霧の時代	山田清三郎著	理論社	1957年4月	239p
1966	日かげの労働者	永丘智郎著	三一書房	1957年4月	242p
1967	文芸思想史 I—V	小島輝正他	三一書房	1957年4月	200p
1971				—58年3月	—262p

1972	現実と逃避	ルカーチ著 真下信一, 藤野渉, 竹内良知訳	平凡社	1957年7月	225p
1973	小説と詩の文体	J・M・マリイ 両角克夫訳	ダヴィッド社	1957年8月	227p
1974	昭和に生きる	森伊佐雄	平凡社	1957年8月	262p
1975	小説の技術 現代小説作法	P・ラボック著 佐伯彰一訳	ダヴィッド社	1957年10月	224p
1976	封建性 一部落を支配しているもの—	江口渙著	大日本雄弁会講 談社	1957年12月	240p
1977	病める芸術	ルカーチ著 真下信一, 藤野渉, 竹内良知訳	平凡社	1958年1月	227p
1978	演技しない主役たち	羽仁進	中央公論社	1958年2月	213p
1979	日本革命文学の展望	西田勝著	誠信書房	1958年2月	277p
1980	社会調査 岩波全書238	福武直著	岩波書店	1958年5月	250p
1981	5分間でできる自己暗示法	山口彰著	大和出版	1958年6月	214p
1982	日本文学 近代 岩波小辞典	片岡良一編	岩波書店	1958年6月	223p
1983	革命と芸術	佐々木基一	未来社	1958年7月	253p
1984	アメリカ国民の経済 その進歩, 問題と展望	米国大使館文化交 換局出版課		1958年8月	248p
1985	科学論 現代哲学全書12	甘粕石介著	青木書店	1958年8月	214p
1986	第5回文芸年度賞作品集	川上忠夫編	国鉄労働組合本 部教宣部	1958年8月	314p
1987	アメリカ社会の新展望	米国大使館US I S		1958年9月	182p
1988	日本再発見	岡本太郎	新潮社	1958年9月	286p
1989	現代文学講座 4・5	日本文学学校編	飯塚書店	1958年9月	196p
1990				1959年3月	192p
1991	小説 日本婦道記	山本周五郎著	新潮社	1958年10月	241p
1992	組織論	ルカーチ著 相沢 久訳	未来社	1958年10月	155p
1993	軍縮と国際協力のために ストックホルム平和大会の記録		日本平和委員会	1958年12月	336p
1994	原点が存在する	谷川雁	弘文堂	1958年12月	286p
1995	人間の探究	小松撰郎著	新読書社出版部	1959年2月	213p
1996	推理試験	二宮佳景	荒地出版社	1959年4月	184p
1997	アメリカの科学とテクノロジー	アメリカ大使館文 化交換局	書籍出版部	1959年6月	256p
1998	宣伝・広告の実務知識	新井喜美夫著	ダイヤモンド社	1959年6月	307p
1999	広島 一原爆の街に生きて—	深川宗俊著	短歌文学を研究 する会	1959年8月	62p

一般図書

2000	催眠術入門	藤本正雄	光文社	1959年9月	237p
2001	広告文案の技術	室田庫造著	同文館出版	1959年10月	204p
2002	チューホフ 作品を読みなおして	イリヤ・エレンブルグ 篠原茂	紀伊国屋書店	1960年1月	145p
2003	筑豊のこどもたち	土門拳	バトリア書店	1960年2月	95p
2004	性病と性器疾患	大越正秋著	創元社	1960年3月	212p
2005	黒い恐怖 安保と国民	黒い恐怖編集グループ	昌光社	1960年6月	77p
2006	ヒロシマ・1960	永田登三	バトリア書店	1960年8月	95p
2007	お母さんの童話集		広島県地域婦人団体連絡協議会	1960年9月	37p
2008	パワーズ裁判 1960・8・17—19 米スパイ飛行士フランシス・ゲイリー パワーズ事件の公判資料	ソビエト広報局編	ソビエト社会主義共和国連邦大使館	1960年9月	149p
2009	民主主義の神話	谷川雁, 吉本隆明, 埴谷雄高, 森本和夫, 梅本克己, 黒田寛一	現代思潮社	1960年10月	230p
2010	恒久平和と諸国民の自由のために	エヌ・エス・フルシチュフ	ソビエト社会主義共和国連邦大使館	1960年11月	62p
2011	思想としての戦争体験	三枝康高	桜楓社出版	1960年11月	277p
2012	るみえちゃんはお父さんが死んだ	土門拳	研光社	1960年11月	96p
2013	当面の内外情勢の特徴と平和運動の任務		日本平和委員会	1960年12月	32p
2014	能の面	鈴木慶雲著	わんや書店	1960年12月	94p
2015	冷戦政策の崩壊と日本 (中・下)	日本平和委員会編集	日本平和委員会	1960年12月	96p
2016					72p
2017	安保反対闘争記録写真集 日本人民の勝利への前進	日本共産党中央委員会宣伝教育部・文化部	日本共産党中央委員会出版部	1960年	96p
2018	広告文案ハンドブック	川勝久編	ダヴィッド社	1961年1月	184p
2019	親鸞その思想史	森龍吉	三一書房	1961年4月	247p
2020	安岡章太郎集 4		筑摩書房	1961年4月	258p
2021	若ものたち	毎日新聞社会部編著	三一書房	1961年5月	217p
2022	戦後日本の労働運動(改訂版) 岩波新書217	大河内一男著	岩波書店	1961年6月	240p
2023	株の秘密	亀岡大郎著	講談社	1961年9月	233p
2024	進路の指導	後藤豊治, 池上正道著	明治図書出版	1961年10月	209p
2025	アジア・アフリカ問題入門	岡倉古志郎	岩波書店	1962年1月	195p



2026	生活禅	森岡亀芳著	創元社	1962年 4月	233p
2027	集団の論理	中井正一研究会	前市プリント社	1962年 5月	9p
2028	日本の革命路線 対立点とその解説	宮本次郎著	新興出版社	1962年 6月	205p
2029	モダン・セックス入門	ロバート・ストリート 青木尚雄訳	荒地出版社	1962年 6月	254p
2030	御年代古噴	稲葉圭木編	本郷町教育委員会 本郷町観光協会, 沼田文化研究会刊	1962年 7月	23p
2031	スタミナのつく本	小池五郎著	光文社	1962年 7月	238p
2032	ゆるせない日からの記録	ジャパンプレス写真部, 共同通信写真部他	麦書房	1962年 7月	95p
2033	80年の歩み	日本セメント(株)		1963年 3月	136p
2034	新指圧入門	安部義雄著	主婦と生活社	1963年 4月	246p
2035	ビジネス催眠術入門 かくれた実力を発揮する法	山口彰著	講談社	1963年 4月	245p
2036	氷柱・ある脅迫	多岐川恭著	河出書房新社	1963年 4月	219p
2037	国宝・重要文化財案内		毎日新聞社	1963年 5月	434p
2038	三原郷土資料 第19集 代官役年々定規 規佃家文書出火之覚	迫口慶之訳編	三原市教育委員会, 三原市郷土文化研究会	1963年 5月	12p
2039	500万円の本		野村証券	1963年 6月	110p
2040	戦争体験	安田武	未来社	1963年 7月	250p
2041	世界政治資料		日本共産党中央委員会	1963年 8月	48p
2042	人間一体 一天衣無縫の悟道とその生涯	村田太平著	潮文社	1963年 9月	264p
2043	広告コピー入門	V・O・シュワプ著 西尾忠久, 木田宏子訳	ダヴィッド社	1963年11月	321p
2044	いまどきの若もの論	重松敬一著	ダイヤモンド社	1964年 1月	308p
2045	株式格言ABC	野田功	野田経済社	1964年 3月	270p
2046	恐るべき公害 岩波新書521	庄司光, 宮本憲一著	岩波書店	1964年 4月	209p
2047	生と死の妙薬	レーチェル・カーソン著 青樹築一訳	新潮社版	1964年 6月	309p
2048	信念の魔術	C・M・プリストル著 大原武夫訳	ダイヤモンド社	1964年 7月	265p
2049	日本を見なおす	鯖田豊之著	講談社	1964年 8月	250p

2050	日本式育児法	松田道雄著	講談社	1964年 9月	213p
2051	禅のすすめ	佐藤幸治	講談社	1964年12月	197p
2052	エッセー (1)	モンテーニュ著 原二郎訳	岩波書店	1965年 5月	415p
2053	1分間健康法 エンビツころがしから舌出し法まで	市松謙二著	芸文社	1965年11月	186p
2054	世代論	大野明男	三一書房	1965年11月	221p
2055	四十からの健康	杉靖三郎著	実業之日本社	1965年11月	234p
2056	日常の家庭医学と民間薬食療療法	日本家庭医学研究会編	日常出版	1966年 5月	254p
2057	おやじ対こども	松田道雄著	岩波書店	1966年 7月	206p
2058	脳 行動のメカニズム	千葉康則	日本放送出版協会	1966年 7月	208p
2059	菜食の効用	牛尾盛保著	光文社	1966年 8月	215p
2060	仏教とマルキシズム	稲葉襄著	創元社	1966年 8月	226p
2061	日本人の生き方 講談社現代新書90	星野芳郎, 鶴見俊輔著	講談社	1966年 9月	238p
2062	現代の名言	池田諭他著	ダイヤモンド社	1966年10月	228p
2063	人間の心のふしぎ	村松常雄著	講談社	1966年10月	202p
2064	頭の体操 パズル・クイズで脳ミソを鍛えよう	多湖輝著	光文社	1966年12月	214p
2065	地方自治読本 東洋経済読本シリーズ12	磯村英一, 星野光男編	東洋経済新報社	1966年12月	244p
2066	市場調査の実務要領	出牛正芳著	同文館	1967年 1月	189p
2067	日本の医療は狂っている 三一新書557	水野肇著	三一書房	1967年 1月	205p
2068	24時間強健法	三橋一夫	ダイヤモンド社	1967年 2月	217p
2069	日本文化の起源	江坂輝彌著	講談社	1967年 3月	189p
2070	新編・真実とは何か I	本多勝一著	未来社	1967年 5月	251p
2071	地獄の思想	梅原猛著	中央公論社	1967年 6月	247p
2072	発想法 中公新書136	川喜田二郎著	中央公論社	1967年 6月	202p
2073	予算分析の手引	自治体問題研究所	自治体研究社	1967年 6月	195p
2074	社内報編集ハンドブック 取材の仕方	堀川直義著	日本経営者団体連盟弘報部	1967年 9月	257p
2075	ツキとボカの科学	田多井吉之介著	現代書房	1967年 9月	271p
2076	催眠 一心の平安への医学一	池見酉次郎	日本放送出版協会	1967年10月	251p
2077	自己催眠術 劣等感からの解放・6つの方法	平井富雄著	光文社	1967年10月	215p

2078	自分でできる3分間指圧	浪越徳治郎著	実業之日本社	1967年11月	206p
2079				1968年6月	206p
2080	愛するということ	エーリッヒ・フロム著 懸田克躬訳	紀伊国屋書店	1968年1月	192p
2081	現代との対話 一若き創造者へー	粟津潔編	学芸書林	1968年1月	277p
2082	人体解剖学入門	三井但夫	創元社	1968年4月	279p
2083	脳を守ろう	白木博次, 佐野圭司, 椿忠雄著	岩波書店	1968年4月	224p
2084	市民運動とは何か	小田実編	徳間書店	1968年6月	301p
2085	公害の政治学 水俣病を追って 三省堂新書30	宇井純著	三省堂	1968年7月	216p
2086	採算点入門	鈴木敏夫	現代ジャーナリズム出版会	1968年8月	328p
2087	戦後賃金闘争史(上) 敗戦から講和まで	斎藤一郎著	三一書房	1968年8月	276p
2088	広島碑林	三田嘉一	三田蠟染堂	1968年8月	129p
2089	からだの科学 健康と病気の間を探る ブルーバックスB-123	高橋長雄著	講談社	1968年9月	229p
2090	新・危機に強い経営 一今日の繁営は明日を保証しない一	田辺昇一著	ダイヤモンド社	1968年9月	288p
2091	日本のローカル新聞	田村紀雄著	現代ジャーナリズム出版会	1968年9月	344p
2092	漂泊の俳人 山頭火の手記	大山澄太著	潮文社	1968年9月	329p
2093	シモーヌ・ヴェイユ その極限の愛の思想	田辺保著	講談社	1968年10月	236p
2094	健康食と危険食	河内省一著	潮文社	1968年11月	248p
2095	自治と民衆	河崎斉, 郷治光義, 坂本耕一	日本放送出版協会	1968年11月	262p
2096	人間にとって都市とは何か	磯村英一	日本放送出版協会	1968年12月	210p
2097	比較転向論序説 ロマン主義の精神形態	磯田光一著	勁草書房	1968年12月	316p
2098	都市の時代	榎並公雄著	三一書房	1969年3月	244p
2099	問題学誕生	城功著	日刊工業新聞社	1969年3月	209p
2100	消費者をバカにするな	消費者問題研究会	エール出版社	1969年4月	222p
2101	日本文学と風土	長谷章久著	講談社	1969年4月	194p
2102	現代の差別と偏見 問題の本質と実情	鈴木二郎監修 信濃毎日新聞社編	新泉社	1969年5月	407p
2103	新版株式野線の見方使い方	木佐森吉太郎著	東洋経済新報社	1969年5月	248p
2104	内海の輪	松本清張	光文社	1969年5月	255p

2105	島木健作	福田清人, 矢野健 二編	清水書店	1969年6月	185p
2106	都市の論理	羽仁五郎著	勤草書房	1969年6月	627p
2107	区画整理対策の実務	区画整理対策全国 連絡会議編	自治体研究社	1969年7月	190p
2108	現代ジャーナリズム論 三一新書659	鈴木均著	三一書房	1969年7月	218p
2109	自己コントロール	成瀬悟策	大進堂	1969年7月	240p
2110	増補・うそつき食品	郡司篤孝著	三一書房	1969年7月	292p
2111	都市と娯楽	加藤秀俊著	鹿島出版会	1969年7月	241p
2112	都市問題 その現状と展望 新日本選書20	佐藤武夫, 西山外 三編	新日本出版社	1969年7月	444p
2113	福山の史蹟めぐり	村上正名著	児島書店	1969年7月	167p
2114	有望株の発見法	浅井藩二郎著	ダイヤモンド社	1969年7月	238p
2115	わが心の地図	岡部伊都子	創元社	1969年7月	232p
2116	会員名簿	広島県呉三津田ヶ 丘同窓会		1969年8月	574p
2117	マイナスをプラスにする自己暗示	高橋孝治著	実業之日本社	1969年8月	227p
2118	三日坊主 精神集中力・持続力を身につける本	大原健二郎著	大和書房	1969年8月	221p
2119	暮らしのなかの自然食	早野登美江著	白揚社	1969年9月	237p
2120	五十歳からの健康	塚原国雄, 秋山房 雄, 村地悌二, 上 出弘之著	朝日新聞社	1969年9月	303p
2121	絶対健康法	森下敬一著	大泉書店	1969年9月	236p
2122	キャッチフレーズ100年 一秘められた日本人の心一	武田勝彦著	潮文社	1969年12月	246p
2123	情報化社会の戦略言語	亀谷悟郎	東洋出版	1970年1月	281p
2124	転向の論理	松原新一著	講談社	1970年1月	254p
2125	医師よ驕るなかれ 一稼ぎまくる白衣の商魂一	田村理一著	医事薬業新報社	1970年2月	272p
2126	統・発想法 中公新書210	川喜田二郎	中央公論社	1970年2月	316p
2127	道元入門	秋月龍珉著	講談社	1970年2月	225p
2128	沖縄問題を考える	中野好夫編	太平出版社	1970年3月	334p
2129	短期必勝1000万円利殖術	岡部寛之著	徳間書店	1970年3月	230p
2130	鷗外の婢	松本清張	光文社	1970年4月	322p
2131	情報整理学 一集める・捨てる・活かす技術一	川勝久著	ダイヤモンド社	1970年4月	276p
2132	70年代を考える	坂本二郎他著	潮文社	1970年4月	254p
2133	危険な医者・総点検	大塚仲著	ルック社	1970年5月	227p

2134	黒い株価 —信用取引の活きた手引き—	藤田貞夫著	経済文芸社	1970年5月	257p
2135	9000万人は何を飲んだか	高橋暁正著	医事薬業新報社	1970年6月	356p
2136	グループパワー	週刊朝日	朝日新聞社	1970年6月	354p
2137	景気と株価	松本和男	日本経済新聞社	1970年6月	301p
2138	これで病は治る	大浦孝秋著	人間医学社	1970年6月	410p
2139	自然環境の保護 —公害理論と実際—	A・I・ヴォロン ツォフ, A・Z・ ハクトノーバ著 杉山利子訳	ラテイス	1970年6月	405p
2140	不良商品一覧表	日本消費者連盟編 著	三一書房	1970年7月	316p
2141	よみがえれ地方自治	北日本新聞地方自 治取材班編	勁草書房	1970年7月	482p
2142	医療事故解決の法律実務	饗庭忠男著	ダイヤモンド社	1970年8月	324p
2143	親と子	詫摩武後, 松原治 郎編	至文堂	1970年8月	302p
2144	欠陥商品	巻正平	三一書房	1970年8月	240p
2145	公害にいとむ 新日本新書110 水島コンビナートとある医師のたた かい	丸尾博著	新日本出版社	1970年8月	211p
2146	ひとりでやる3分体操	三橋一夫著	青春出版社	1970年8月	228p
2147	公害の克服	半谷高久著	三省堂	1970年9月	202p
2148	地域経済と流通近代化	通商産業省企業局 編	大蔵省印刷局	1970年9月	210p
2149	不可視のコミュニケーション	野本三吉著	社会評論社	1970年9月	286p
2150	公害の子ら	西村安子著	講談社	1970年10月	262p
2151	公害列島 その実態と解決の道		日本共産党中央 委員会出版局	1970年10月	220p
2152	公務労働 現代に生きる自治体労働者	芝田進午編	自治体研究室	1970年10月	350p
2153	続・能の面	鈴木慶雲著	わんや書店	1970年10月	122p
2154	鼎談 人類は減びるか	今西錦司, 川喜田 二郎, 小松左京著	筑摩書房	1970年10月	216p
2155	農村の生活と健康 学習シリーズ「生活と協同」5	若月俊一著	協同組合経営研 究所	1970年10月	258p
2156	POP広告111のキメ手	島田陽介	同文館出版	1970年10月	272p
2157	自己改善法	L・M・レクロン著 小野浩三訳	創元社	1970年11月	280p
2158	辞世の哲学	伊藤晃著	布井書房	1970年11月	255p
2159	食品公害と市民運動	藤原邦達	新時代社	1970年11月	319p
2160	都市の魅力	清水馨八郎, 服部 銈二郎共著	鹿島研究所出版 会	1970年11月	280p
2161	日本人の意識構造	会田雄次	講談社	1970年11月	216p

2162	民主的自治体への道 憲法をくらしの なかに 自治体新書	憲法改悪阻止各界 連絡会議編	自治体研究社	1970年11月	221p
2163	株の体験	邱永漢	徳間書店	1970年12月	254p
2164	都市計画とはなにか	吉野正治著	三一書房	1970年12月	322p
2165	人間の魅力	田辺昇一	ダイヤモンド社	1970年12月	233p
2166	医者にかかるまえに	高橋暁正著	亜紀書房	1971年2月	228p
2167	原子力発電 岩波新書109	武谷三男編	岩波書房	1971年2月	206p
2168	情報整理の技術	遠藤昭	実業之日本社	1971年2月	313p
2169	日本列島地方都市その現実	奥田義雄他編	勤草書店	1971年2月	437p
2170	水の健康診断 岩波新書777	小林純著	岩波書店	1971年2月	206p
2171	株の心理作戦	村井幸也	日本経済新聞社	1971年3月	221p
2172	観破力 人に裏切られないために	浅野八郎著	徳間書店	1971年3月	230p
2173	くすり公害 UP選書69	高橋暁正著	東京大学出版会	1971年3月	325p
2174	公害・予測と対策	住民による京磁バ イパス公害研究グ ループ編	朝日新聞社	1971年3月	291p
2175	裁く・民衆が日本の軍国主義を	小田実編	合同出版	1971年3月	219p
2176	中小企業とコンサルティング 現代企業診断全集(第1巻)	中谷道達著	ビジネス教育出 版	1971年3月	348p
2177	いのちの値段	菱沼従尹著	文化出版局	1971年4月	243p
2178	医療抜本改革への方向	田村理一著	医事薬業新報社	1971年4月	253p
2179	公害行政の総点検 解決の道は?	加治康二	合同出版	1971年4月	222p
2180	子どもの心と社会	滝沢清人著	芸林書房	1971年4月	316p
2181	誰が人類を滅ぼすか 一戦いは始まっている一	小野満春著	KKベストセラ ーズ	1971年4月	239p
2182	都市と交通 クルマ社会への挑戦	平井都士夫著	新日本出版社	1971年4月	217p
2183	日本公害地図	NHK社会部編	日本放送出版協 会	1971年4月	294p
2184	人間環境の諸問題	外務省経済局編	大蔵省印刷局	1971年4月	477p
2185	労務診断 現代企業診断全集(第5巻)	石川淳二著	ビジネス教育出 版	1971年4月	367p
2186	公害(下) 青年新書2	天谷和夫、宮崎一 郎、小林勲著	日本青年出版社	1971年5月	174p
2187	災害は進化する あすの危険の総点検	木村耕三著	講談社	1971年5月	254p
2188	食品公害	帆足養右著	文理書院	1971年5月	159p
2189	都市と市民	柴田徳衛、石原舜 介	日本放送出版協 会	1971年6月	294p
2190	マスコミ大國を告発する マスコミ1971	木村哲夫	労働旬報社	1971年6月	298p
2191	有害な子供食品	郡司篤孝著	アロー出版社	1971年6月	222p

2192	欲望のコンビナート	飯田清悦郎著	医事薬業新報社	1971年6月	228p
2193	われらいかに死すべきか	松田道雄著	暮しの手帖社	1971年6月	275p
2194	新しい都市の人間像	R・イールズ, C・ワトソン編 木内信蔵監訳	鹿島出版会	1971年7月	271p
2195	汚染犯罪を追及する	公害取材記者グループ	医事薬業新報社	1971年7月	244p
2196	自然と暮らす健康法 環境変化の適応力をつける	神山恵三著	文潮出版	1971年7月	230p
2197	斜陽都市 あなたのマチは生きのこれるか	高橋潤二郎著	光文社	1971年7月	284p
2198	数字でみる観光	運輸省観光部監修	日本観光協会	1971年7月	93p
2199	続・株で儲けろ	町田恒男著	広済堂出版	1971年7月	229p
2200	はじめにイメージありき 原始美術の諸相	木村重信著	岩波書店	1971年7月	221p
2201	病気ノイローゼ	武田專著	KKベストセラーズ	1971年7月	232p
2202	ヨガ入門 精神が肉体を自由にできる	沖正弘著	光文社	1971年7月	243p
2203	革新首長と自治体労働者		自治体研究社	1971年8月	94p
2204	現代の倒産 日経新書148	小林武彦著	日本経済新聞社	1971年8月	212p
2205	社会調査入門 日経新書147	鮑戸弘著	日本経済新聞社	1971年8月	211p
2206	新訂・株で儲けろ	町田恒男著	広済堂出版	1971年8月	252p
2207	戦後文学覚え書 党をめぐる文学運動の批判と反省	西野辰吉著	三一書房	1971年8月	232p
2208	足で書いた経済ニュース	江上経雄著	自由国民社	1971年9月	225p
2209	誤れる現代医学 病者におくる一医師の実践記録	橋本行生著	創元社	1971年9月	296p
2210	子ども白書(1971版)	日本子どもを守る会編	子どものしあわせ刊行会	1971年9月	394p
2211	三分間心身強健法	銭天牛著	日本文芸社	1971年9月	253p
2212	日本の経営(集団主義の功罪)	間宏著	日本経済新聞社	1971年9月	204p
2213	破壊のマーケティング	吉田貴一, 工藤恒夫	ダイヤモンド社	1971年9月	256p
2214	やさしい情報整理学	かいきよみち著	社会思想社	1971年9月	270p
2215	医者にかかる人の法律知識	波奈土昇著	医事薬業新報社	1971年10月	316p
2216	県民性	祖父江孝男著	中央公論社	1971年10月	216p
2217	公害の経済衝撃	清浦雷作著	講談社	1971年10月	225p
2218	心のクセ	広瀬米夫著	日本生産性本部	1971年10月	259p
2219	サイドビジネス・タブー集	大矢息生著	白馬出版	1971年10月	254p
2220	死に絶えた風景 —日本資本主義の深層から—	鎌田慧著	ダイヤモンド社	1971年10月	274p

2221	情報 東京大学公開講座13	加藤一郎著	東京大学出版会	1971年10月	372p
2222	人体ツボの研究	芹沢勝助著	ごま書房	1971年10月	254p
2223	幹部のための損得学入門	千住鎮雄	日本能率協会	1971年11月	267p
2224	公害から身を守る医学知識	清水忠彦著	日本実業出版社	1971年11月	222p
2225	災害ピンチ脱出法	主婦の友社編	主婦の友社	1971年11月	222p
2226	四柱推命入門<年表増補改訂>	新章文子著	青春出版社	1971年11月	223p
2227	店舗診断 現代企業診断全集 7	井関純著	ビジネス教育出版社	1971年11月	259p
2228	日本人はどこから来たか	樋口隆康著	講談社	1971年11月	211p
2229	人間とは何か	飯島宗一, 加藤秀俊編	日本経済新聞社	1971年11月	283p
2230	改訂新版・薬の効用 薬を正しく使うための薬理学 ブルーバックスB-183	佐久間昭著	講談社	1971年12月	287p
2231	茶道の心理学	安西二郎著	淡交社	1971年12月	269p
2232	日本人研究 第2巻	坂坂康弘著	流動	1971年12月	289p
2233	日本文化および日本人論	深作光貞	三一書房	1971年12月	246p
2234	人間と環境	加藤一郎他著	東京大学出版会	1971年12月	329p
2235	病気の社会史 文明に探る病因	立川昭二著	日本放送出版会	1971年12月	266p
2236	欲望産業	片方善治編	毎日新聞社	1971年12月	312p
2237	首輪のない猟犬たち・トップ屋	中島宏著	産報	1972年1月	197p
2238	現代の革命の論理	羽仁五郎	自由国民社	1972年1月	293p
2239	この後に続く者へ	扇谷正造著	産業能率短期大学出版部	1972年1月	387p
2240	三年倍増の株式投資法	田中穰著	実業之日本社	1972年1月	245p
2241	情報ランチの調理士たち・雑誌編集者	中島宏著	産報	1972年1月	221p
2242	資料・水質保全	西川喬	山海堂	1972年1月	420p
2243	「やまとだまし」の文化史	斎藤正二著	講談社	1972年1月	330p
2244	世直しの倫理と論理(上・下)	小田実著	岩波書店	1972年1月 2月	224p 256p
2245	エコロジー入門 講談社現代新書271	ポール・B・ツァー ズ著 柳田為正訳	講談社	1972年2月	246p
2246	女の頭と心	源氏鶏太	青春出版社	1972年2月	231p
2247	株の発想	邱永漢	日本証券新聞社	1972年2月	230p
2248	公害防止の技術と法規 水質編	通商産業省公害保安局監修	産業公害防止協会	1972年2月	368, 226p
2249	図表デザイン入門 グラフの見方・表わし方	馬場雄二著	講談社	1972年2月	325p
2250	声相学入門	十一條龍樹著	潮文社	1972年2月	220p



2251	続・人体ツボの研究	芹沢勝助著	ごま書房	1972年2月	229p
2252	日本の風土と文化	会田雄次著	角川書店	1972年2月	275p
2253	広島県の歴史	後藤陽一	山川出版社	1972年2月	227p
2254	民族の起源	小林行雄著	槇書房	1972年2月	238p
2255	私の中の日本	古谷綱武	六藝書房	1972年2月	261p
2256	私の中の私たち —認識と行動の弁証法—	乾孝著	いかだ社	1972年2月	222p
2257	市民として 家庭時評・家庭	松田道雄著	毎日新聞社	1972年3月	289p
2258	続・電通公害論 政治権力と癒着する広告大国	猪野健治編	日新報道	1972年3月	215p
2259	組織情報と組織媒体の研究	田村紀雄	社会思想社	1972年3月	310p
2260	地域政治と住民	秋元律郎著	潮出版	1972年3月	192p
2261	日本人のイメージ構造	岡田晋著	中央公論社	1972年3月	178p
2262	人間、この非人間的なもの	なだいなだ著	筑摩書房	1972年3月	283p
2263	無援の前線 —教育へ逆射するもの—	村田栄一著	社会評論社	1972年3月	373p
2264	オヤジの戦後 —ジャーナリストは戦争を忘れない—	鈴木均著	産報	1972年4月	260p
2265	壁に挑む教師たち	兵庫県立淡川高校 教師集団著	三省堂	1972年4月	211p
2266	現代日本人	安部公房, 堤清二 他	毎日新聞社	1972年4月	206p
2267	好奇心と日本人	鶴見和子著	講談社	1972年4月	229p
2268	常識のウソ	石垣純二著	文芸春秋	1972年4月	252p
2269	情報術入門	安川秋一郎著	ビクトリー出版	1972年4月	313p
2270	たった一人の反乱	丸谷才一著	講談社	1972年4月	501p
2271	なにが環境の危機を招いたか エコロジーによる分析と解答	バリー・コモナー 著 安部喜也, 半谷高 久訳	講談社	1972年4月	360p
2272	四日市・死の海と闘う 岩波新書820	田尻宗昭著	岩波書店	1972年4月	206p
2273	かけがえのない地球	バーバラ・ウォー ド, ルネ・デュボ ス著 人間環境ワーキン ググループ環境科 学研究所訳	日本総合出版機 構	1972年5月	354p
2274	危険な幼稚園教育 子どものために親が読む本	村山貞雄著	産報	1972年5月	272p
2275	薬・この危険な副作用	高橋暁正, 平沢正 夫著	KKベストセラ ーズ	1972年5月	286p
2276	現代ジャーナリズム入門	扇谷正造著	角川書店	1972年5月	354p

2277	公害の政治経済学	都留重人著	岩波書店	1972年5月	222p
2278	自然食のすすめ	寺島文夫著	実業之日本社	1972年5月	254p
2279	10大都市時代 めざめる自治体と市民	高寄昇三著	日本経済新聞社	1972年5月	177p
2280	成長の限界 ローマクラブ「人類の危機」レポート	ドラネ・H・メド ウズ, デニス・L・ メドウズ, ジャー ガン・ラランダズ, ウィリアム・W・ ペアランズ3世著	ダイヤモンド社	1972年5月	203p
2281	地方史の思想	芳賀登著	日本放送出版協 会	1972年5月	284p
2282	日本の医療を告発する	日本の医療を告発 するすべての人々 のつどい編	亜紀書房	1972年5月	382p
2283	日本文化の構造 論集・日本文化 I	梅棹忠夫, 多田道 太郎編	講談社	1972年5月	235p
2284				9月	235p
2285	人間の地理学	浅井得一著	玉川大学出版部	1972年5月	254p
2286	はだか沖繩	青い海出版社	六月社書房	1972年5月	286p
2287	PCB汚染の恐怖 —カネミ油症の島からのレポート—	加賀節著	果林企画	1972年5月	302p
2288	文明の解体	三石巖	太平出版社	1972年5月	251p
2289	用途地域と住民	都市計画研究会編	自治体研究社	1972年5月	156p
2290	愛の原点 相手の恋愛心理を知るために	村山徳和監修	日本ロータリー センター出版局	1972年6月	211p
2291	当らん当り当る当る当れ当れ —喝采の実証—	小谷正一著	産業能率短期大 学出版部	1972年6月	363p
2292	ある軌跡 未来社20年の記録	松本昌次編	未来社	1972年6月	204p
2293	医—その驕りと退廃	朝日新聞社編	朝日新聞社	1972年6月	315, 41p
2294	老い (上・下巻)	ボーヴォワール著	人文書院	1972年6月	322p
2295		朝吹三吉訳			382p
2296	環境白書 (昭和47年版)	環境庁編	大蔵省印刷局	1972年6月	448p
2297	現代の児童文学 中公新書289	上野瞭著	中央公論社	1972年6月	227p
2298	現代を問い直す旅 海外の市民運動	松井やより著	朝日新聞社	1972年6月	321p
2299	公害教育の実践 —15年の記録—	鈴木頼恭著	黎明書房	1972年6月	262p
2300	公害と基本的人権	松本昌悦著	敬文堂	1972年6月	216p
2301	公害列島70年代	宇井純著	亜紀書房	1972年6月	254p
2302	ジャーナリストに何が可能か	鈴木均著	三一書房	1972年6月	231p
2303	日本人の探究 「日本再発見」のすすめ	会田雄次編	日本能率協会	1972年6月	206p
2304	日本の「道」	林屋辰三郎, 上田 正昭, 山田宗睦	講談社	1972年6月	294p

2305	日本文化と世界	梅棹忠夫, 多田道太郎	講談社	1972年 6月	227p
2306	日本列島改造論	田中角栄著	日刊工業新聞社	1972年 6月	219p
2307	野たれ死の思想	佐藤友之著	エール出版社	1972年 6月	229p
2308	われらにとって教育とはなにか	無着成恭, 阿部進著	潮文社	1972年 6月	215p
2309	ある聖医伝	福林正之	筑摩書房	1972年 7月	223p
2310	意識のなかの日本	日高六郎著	朝日新聞社	1972年 7月	286p
2311	忙しい人の健康医学	名和能治著	日本能率協会	1972年 7月	230p
2312	S Fに何ができるか	ジュディス・メリル著 浅倉久志訳	昌文社	1972年 7月	207p
2313	大気汚染と健康	丸屋博, 安賀昇, 橋本卓, 工藤翔二著	新日本出版社	1972年 7月	206p
2314	会社四季報で儲ける法	岡部寛之著	東洋経済新報社	1972年 7月	246p
2315	現代の自治体	自治体問題研究所編	自治体研究社	1972年 7月	300p
2316	混沌の中から未来を	野呂重雄	一ツ橋書房	1972年 7月	285p
2317	しぐさの日本文化	多田道太郎著	筑摩書房	1972年 7月	231p
2318	市民参加	本田弘	日本経済新聞社	1972年 7月	195p
2319	消費者貧乏の追跡 一日本人の欲求不満はどこから来るか一	矢野誠也, 山崎充著	東洋経済新報社	1972年 7月	274p
2320	図でみる環境白書	環境庁企画調整局編	第一法規出版	1972年 7月	129p
2321	滝川恵清写真集 17年目の訪問 森永と素ミルク中毒のこどもたち	滝川恵清著	柏樹社	1972年 7月	62p
2322	日常の生態学	水野寿彦著	築地書館	1972年 7月	171p
2323	日本文化の表情	梅棹忠夫, 多田道太郎編	講談社	1972年 7月	227p
2324	人間環境宣言	環境科学研究所編	日本総合出版機構	1972年 7月	76p
2325	P C Bの記録	磯野直秀編集	資料通信	1972年 7月	207p
2326	労働のなかの復権	熊沢誠著	三一書房	1972年 7月	261p
2327	わが存在の底点から	甲田寿彦	大和書房	1972年 7月	289p
2328	親と子と教師の願い 三原市の教育白書		広教組三原地区支部三原支区	1972年 8月	69p
2329	海洋の汚染 〈生態学と地球化学の視点から〉	清水誠著	築地書館	1972年 8月	151p
2330	健康をもとめて (老年期)	小野三嗣著	不昧堂出版	1972年 8月	207p
2331	現代社会と公害 公開自主講座「公害原論」第2学期1	宇井純, 戒能通孝, 坂東克彦, 宮本憲一, 荒畑寒村著	勁草書房	1972年 8月	276p

2332	公害前線を探る —主婦のゴミ白書—	サングループ編	自治日報社出版局	1972年8月	287p
2333	コミュニティ・メディア論	田村紀雄	現代ジャーナリズム出版会	1972年8月	270p
2334	自然食療法 健康をつくる献立と料理法	森下敬一	鶴書房	1972年8月	214p
2335	住民のための地方自治 —その実験と展開—	宮元義雄著	第一法規出版	1972年8月	263p
2336	精神公害 犯されているのは肉体だけか	斎藤茂太著	主婦と生活社	1972年8月	234p
2337	瀬戸内からの報告 「公害」に蝕まれる人間と自然	中国新聞社編	未来社	1972年8月	331p
2338	底辺からの告発	野添憲治著	評論社	1972年8月	275p
2339	人間への挑戦 公害時代の健康管理学	三石巖著	現代評論社	1972年8月	313p
2340	マーケティング情報駆使学	小嶋庸靖著	ダイヤモンド社	1972年8月	391p
2341	若者へのさようなら	川上源太郎著	潮出版社	1972年8月	206p
2342	私の教科書批判	丸谷才一, 松本清 張他 朝日新聞社編	朝日新聞社	1972年8月	324p
2343	株価の秘密	小林正和	産報	1972年9月	270p
2344	環境の科学	宝月欣二, 吉良竜 夫, 岩城英夫編	日本放送出版協会	1972年9月	409p
2345	教科書読いちゃった ぼくらは大人たちの子どもではない	安藤正昭編	産報	1972年9月	254p
2346	自分でわかる体の診断	杉山四郎編	青春出版社	1972年9月	325p
2347	正法眼蔵随聞記	山崎正一校注 現代語訳	講談社	1972年9月	348p
2348	大国ニッポンの悲劇 ルポルタージュ・公害先進国	ポー・グンナーソン著 ビャネール多美子 訳	文芸春秋	1972年9月	413p
2349	地域経済要覧(1972年版)	経済企画庁調査局 編	経済企画協会	1972年9月	369p
2350	ちぐはぐな部品	星新一著	角川書店	1972年9月	272p
2351	日本史の虚像と実像	和歌森太郎	毎日新聞社	1972年9月	334p
2352	パラドックス 論理分析への招待 中公新書297	中村秀吉著	中央公論社	1972年9月	214p
2353	ユダヤ商人のみた日本的思考法	アブラハム・シフ	日新報道	1972年9月	213p
2354	若返り自然食 —しあわせの献立—	飯塚律子著	堅省堂	1972年9月	267p
2355	安全食品	郡司篤孝著	ビジネス社	1972年10月	308p

2356	お多美さんの新聞	大岡清	フォトにっぽん社	1972年10月	201p
2357	環境権の考え方	村田喜代治著	産業能率短期大学出版部	1972年10月	295p
2358	健康管理百科	杉鎔三郎, 水野肇, 窪田登編	ダイヤモンド社	1972年10月	417p
2359	現代科学と公害 公開自主講座「公害原論」第2学期	宇井純他編	勁草書房	1972年10月	326p
2360	孤独の考察 一現代人の心と行動一	相場均著	平凡社	1972年10月	261p
2361	さあ大変! の医学 救急車が来るまでの緊急処置法	溝田弘著	ごま書房	1972年10月	227p
2362	思想史の周辺 久野収対話集・戦後の渦の中で3	久野収代著	人文書院	1972年10月	314p
2363	市民と医療 講座・現代の医療1	川上武, 中川米造編	日本評論社	1972年10月	282p
2364	情報の読み方	井上如著	日本経済新聞社	1972年10月	191p
2365	植物たちの生	沼田真著	岩波書店	1972年10月	234p
2366	真実とはなにか	田英夫著	社会思想社	1972年10月	213p
2367	生活に役立つ心理学	松本順著	ダイヤモンド社	1972年10月	273p
2368	立ちあがる地方 中央集権に抗して	五十嵐富英著	日本経済新社	1972年10月	193p
2369	地球村の戦争と平和	マーシャル・マクルーハン, クエンティン・フィオール, ジェローム・エイゲル著 広瀬英彦訳	番町書房	1972年10月	253p
2370	都市虚構論	池田亮二	鹿島研究所出版会	1972年10月	200p
2371	日本の体質	朝日新聞社編	朝日新聞社	1972年10月	268p
2372	人間この不可思議なもの		読売新聞社	1972年10月	338p
2373	民間医療法入門 お医者いらずの本	現代民間医療研究会編	東京スポーツ新聞社	1972年10月	252p
2374	迷宮としての人間	中野美代子著	潮出版社	1972年10月	257p
2375	新しい市民戦線	久野収	人文書院	1972年11月	327p
2376	新しきプロメテウスたち 現代科学の創造力と破壊力	ロバート・S・デロップ著 八杉竜一, 八杉貞雄訳	番町書房	1972年11月	317p
2377	医学を考える 潮新書93	水野肇著	潮出版社	1972年11月	230p
2378 2389	岩波講座現代都市政策(I-XI・別巻)	松下圭一他	岩波書店	1972年11月 —73年11月	284p —380p
2390	株式実践教室	岡部寛之	マネービル出版部	[1972年11月]	171p

一般図書

2391	現代への視角	松田道雄, 五木寛之, 久野収	三一書房	1972年11月	297p
2392	公害にいだむ瀬戸内住民 第1回瀬戸内シンポジウムの記録	日本科学者会議瀬戸内委員会編集	日本科学者会議 瀬戸内委員会	1972年11月	228p
2393	公害保健読本	山本宜正編	中央法規出版	1972年11月	523p
2394	こどもの四季	加太こうじ, 滝平二郎	河出書房新社	1972年11月	193p
2395	座談会 日本の朝鮮文化	司馬遼太郎, 上田正昭, 金遠寿編	中央公論社	1972年11月	374p
2396	消費者運動宣言 一億人が告発者に	竹内直一著	現代評論社	1972年11月	206p
2397	丈夫な体をつくる東洋の秘法	松田隆智著	佼成出版社	1972年11月	205p
2398	親鸞道元日蓮	池田諭	産報	1972年11月	273p
2399	図説・公害防止ハンドブック	編集委員会編	日刊工業新聞社	1972年11月	409p
2400	政府刊行物等総目録 '73	政府刊行物等普及強化連絡懇談会編		1972年11月	188p
2401	戦争商売 兵器売買の内幕	ジョージ・セイヤー著 田口憲一訳	日本経済新聞社	1972年11月	244p
2402	他者催眠	守部昭夫	KKベストセラーズ	1972年11月	245p
2403	長生き89のヒント	石垣純二著	双葉社	1972年11月	252p
2404	日本史の東と西	高橋富雄	創元社	1972年11月	213p
2405	日本人の再発見	和歌森太郎他著	弘文堂	1972年11月	258p
2406	日本人の知恵の構造	樋口清之	講談社	1972年11月	232p
2407	「人間らしさ」の構造	渡辺昇一	産業能率短期大学	1972年11月	223p
2408	仏像	青山茂, 入江泰吉著	保育社	1972年11月	190p
2409	料理ぎらいの料理の本	今田美奈子著	主婦と生活社	1972年11月	190p
2410	わたしの解放 一辺境と底辺の旅一	富山妙子著	筑摩書房	1972年11月	373p
2411	新しい都市づくりを求めて	日本科学者会議編	新日本出版社	1972年12月	342p
2412	危ない医者・危ない病院	九鬼亮康著	エール出版社	1972年12月	222p
2413	株式必勝セミナー	浅井涌二郎	カルチャー出版社	1972年12月	243p
2414	株の実戦 どうすれば自分で銘柄を選べるか	小林正和著	産報	1972年12月	277p
2415	苦海浄土 わが水俣病	石牟礼道子著	講談社	1972年12月	330p
2416	原説・般若心経	高橋信次著	フェリス出版	1972年12月	297p
2417	消費者の権利	正田彬	岩波新書	1972年12月	213p
2418	瀬戸内からの告発 よみがえれ青い海	日本経済新聞社編	日本経済新聞社	1972年12月	246p

2419	瀬戸内海汚染	星野芳郎	岩波書店	1972年12月	202p
2420				1978年2月	202p
2421	禅語百選 今日に生きる人間への啓示	松原泰造著	祥伝社	1972年12月	232p
2422	続・頭のいい583の実用集	ホームライフセミナー編	青春出版社	1972年12月	235p
2423	続・現代科学と公害 公開自主講座 「公害原論」第2学期3	石川哲, 若月俊一, 半谷高久, 石田好教, 宇井純	勁草書房	1972年12月	332p
2424	地球からの発想	樋口敬二著	新潮社	1972年12月	281p
2425	ドイツ革命	野村修著	平凡社	1972年12月	388p
2426	日本列島の前術科学	斉藤守弘著	大陸書房	1972年12月	238p
2427	マスコミ現代史'70	日本マスコミ市民会議編	社会思想社	1972年12月	360p
2428	歴史と人間	朝日新聞社編	朝日新聞社	1972年12月	329p
2429	われらみなジャーナリスト	鈴木均	第三文明社	1972年12月	222p
2430	アウシュビッツの時代	羽仁五郎著	潮出版社	1973年1月	266p
2431	お医者いらすの本	現代民間医療研究会編	東京スポーツ新聞社	1973年1月	252p
2432	地域開発はこれでよいか	宮本憲一著	岩波書店	1973年1月	242p
2433	地に棲む記録 一辺境の思想・底流の情念一	椋鳩十著	ダイヤモンド社	1973年1月	276p
2434	現代社会と人間 現代日本の共同体1	勝村茂著	学陽書房	1973年1月	305p
2435	国家 現代日本の共同体5	河原宏編	学陽書房	1973年1月	297p
2436	庶民の戦後 生活編 戦後大衆雑誌にみる	山岡明著	太平出版社	1973年1月	264p
2437	新全国総合開発計画(増補)	経済企画庁編	大蔵省印刷局	1973年1月	81p
2438	教育公害論	伊藤忠彦著	布井書房	1973年2月	205p
2439	現代日本の階級意識	安田三郎	有斐閣	1973年2月	230p
2440	工場日記	シモーヌ・ヴェイユ著 田辺保訳	講談社	1973年2月	265p
2441	都市	羽仁五郎著	岩波書店	1973年2月	268p
2442	浪花巷談 おおさかこのごろ	鈴木二郎著	創元社	1973年2月	205p
2443	日本の洗剤 その総点検 中性洗剤から石鹼へ	柳沢文正著	積文堂出版	1973年2月	287p
2444	日本の野人たち	桜井正信	日本生産性本部	1973年2月	246p
2445	平和・権力・自由 久野収対話集・戦後の渦の中で2	久野収著	人文書院	1973年2月	313p
2446	現代日本の差別構造	高杉晋吾著	三一書房	1973年3月	312p
2447	コンビナート列島 改造される側の現実	本間義人著	現代評論社	1973年3月	358p

2448	市民の暦	小田実, 鶴見俊輔, 朝日新聞社 吉川勇一編	1973年3月	405p
2449	社会主義と人間	菊地昌典 潮出版社	1973年3月	294p
2450	職場職業社会 現代日本の共同体 4	兼子宙編 学陽書房	1973年3月	258p
2451	親鸞	野間宏著 岩波書店	1973年3月	214p
2452	数学の世界	森毅, 竹内啓著 中央公論社	1973年3月	272p
2453	生活優先の原理	松原治郎 講談社	1973年3月	205p
2454	大衆文化の創造	江藤文夫, 鶴見俊輔, 山本明編 研究社出版	1973年3月	319p
2455	父心	高瀬広居著 双葉社	1973年3月	235p
2456	知的好奇心	波多野誼余夫, 稲垣佳世子 中央公論社	1973年3月	190p
2457	地方復権の思想	手島孝 西日本新聞社	1973年3月	279p
2458	都市はどうなる 新日本新書171	遠藤晃著 新日本出版社	1973年3月	199p
2459	都市を住みよくできるか 人間・環境・技術シリーズ3	三村浩史著 日刊工業新聞社	1973年3月	216p
2460	何を食べたい	読売新聞婦人部著 エール出版社	1973年3月	221p
2461	日照権	楠本安雄著 日本経済新聞社	1973年3月	180p
2462	日本人の意識改造	巻正平 双葉社	1973年3月	230p
2463	日本のユートピア コートピア双書1	水津彦雄著 太平出版社	1973年3月	262p
2464	ふるさととは何か 臥陀・対馬・由布院に行く	西日本新聞社編 未来社	1973年3月	246p
2465	よそのの連合太平記	小沢遼子著 筑摩書房	1973年3月	275p
2466	親と子 東京大学公開講座	加藤一郎著者代表 東京大学出版会	1973年4月	320p
2467	街道	山と溪谷社	1973年4月	199p
2468	解放への十字路	むのたけじ 評論社	1973年4月	455p
2469	義民	横山十四男 三省堂	1973年4月	200p
2470	現代経済を考える 岩波新書856	伊東光晴著 岩波書店	1973年4月	218p
2471	現代雑誌論	清水哲男著 三一書房	1973年4月	205p
2472	公害被害者の論理 公開自主講座 「公害原論」第2学期4	恩田正一, 甲田寿彦, 水上勉, 石牟礼道子, 渡辺栄蔵, 橋本十一郎著 勁草書房	1973年4月	303p
2473	光化学スモッグ	高橋暁正, 金戸真二, 花村君枝著 三一書房	1973年4月	258p
2474	食品・薬品公害 消費者主権確立への闘いのすすめ	高橋暁正, 藤木英雄, 森島昭夫, 柳沢文徳著 有斐閣	1973年4月	374p
2475	戦争からの教訓 久野収対話集・戦後の渦の中で4	久野収著 人文書院	1973年4月	307p
2476	地方都市の再開発	鉄川与八郎 日本生産性本部	1973年4月	297p



2477	予測・日本経済 —3年後・5年後・10年後—	矢野誠也著	ダイヤモンド社	1973年4月	277p
2478	ヨーロッパ狂雲記	弟子丸泰仙著	読売新聞社	1973年4月	334p
2479	NHK受信料拒否の論理	本多勝一著	未来社	1973年5月	235p
2480	株式売買術	岡部寛之	マネービル出版部	[1973年5月]	171p
2481	共同討議 日本人の風土	共同通信社文化部編	新人物往来社	1973年5月	318p
2482	極限状況における人間	五味川純平著	三一書房	1973年5月	274p
2483	試行としてのユートピア	山口富夫著	太平出版社	1973年5月	252p
2484	集中豪雨 新しい災害と防災	斉藤鍊一, 奥田節夫, 斉藤亮平著	日本放送出版会	1973年5月	285p
2485	多摩川の自然を守る 三省堂新書120	横山理子編	三省堂	1973年5月	200p
2486	地域社会 現代日本の共同体 3	勝村茂編	学陽書房	1973年5月	301p
2487	道元禪入門	田里亦無著	産業能率短期大学出版部	1973年5月	239p
2488	都市が減ぼした川 多摩川の自然史 中公新書325	加藤迎著	中央公論社	1973年5月	207p
2489	日本人の行動様式	荒木博之著	講談社	1973年5月	185p
2490	日本仏像100選	町田甲一編	秋田書店	1973年5月	277p
2491	人間浮浪考 一野垂れ死の系譜—	高木護著	財界展望新社	1973年5月	259p
2492	人間を考えた薬の話	大木幸介著	講談社	1973年5月	246p
2493	赤旗戦略	永田久光	講談社	1973年6月	221p
2494	あなたの運勢	設楽幸聖著	KKベストセラーズ	1973年6月	250p
2495	株に勝つ本	宮沢幸朔	産報	1973年6月	214p
2496	食品公害 添加物の恐怖	郡司篤孝著	亜紀書房	1973年6月	254p
2497	新聞月評 1972	須田禎一著	評論社	1973年6月	202p
2498	全集・戦後の詩 第二巻	鮎川信夫他	角川文庫	1973年6月	398p
2499	続・常識のウン	石垣純二著	文芸春秋	1973年6月	268p
2500	地方自治体と中小企業	政治経済研究所	新評論	1973年6月	373p
2501	テリトリー戦略	田岡信夫	ビジネス社	1973年6月	258p
2502	人間環境都市への実践 —明日の地方自治—	宮崎辰雄著	日本評論社	1973年6月	168p
2503	人間学への試み	山田慶児編	筑摩書房	1973年6月	239p
2504	病人は告発している 朝日市民教室—日本の医療 1	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年6月	253p
2505	医学は人を救っているか 朝日市民教室—日本の医療 2	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年7月	251p
2506	いま学校で(1)	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年7月	274p

2507	海洋汚染	神山茂夫, 古屋能子編著	三一書房	1973年7月	280p
2508	カストロフイーの理論 〈その本質と全貌〉	野口広著	講談社	1973年7月	291p
2509	からだの雑学事典		毎日新聞社	1973年7月	229p
2510	草の根に生きる	稲葉峯雄著	岩波書店	1973年7月	232p
2511	くらしの中の男二人	深沢七郎, 小田実著	現代史資料センター出版会	1973年7月	202p
2512	続・日本の教育をどう改めるべきか	教育制度検討委員会編	勁草書房	1973年7月	245p
2513	都市からの出発 地方都市の未来図	宮沢弘著	読売新聞社	1973年7月	271p
2514	日本公害地図第二版	NHK社会部編	日本放送出版協会	1973年7月	387p
2515	日本人とは何か	中日新聞社文化部	新人物往来社	1973年7月	208p
2516	日本列島再発見	清水馨八郎	角川書店	1973年7月	302p
2517	ローリング健康法	蓑原右欣	平河出版社	1973年7月	244p
2518	ある町の公害物語 元釜石市長12年のたたかい	鈴木東民著	東洋経済新報社	1973年8月	256p
2519	市場調査戦略	八田知成	ビジネス社	1973年8月	243p
2520	医療を支える人びと 朝日市民教室—日本の医療3	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年8月	257p
2521	親と子と教師の願い 三原市の教育白書		広教組三原地区支部三原支区	1973年8月	76p
2522	株大儲け定石集	岡部寛之著	徳間書店	1973年8月	222p
2523	健康の経済学 暮らしと医療 三省堂新書121	野村拓著	三省堂	1973年8月	186p
2524	語録・編集鬼たち	江国滋著	産業能率短期大学出版部	1973年8月	234p
2525	自然界99の謎	春田俊郎	産報	1973年8月	263p
2526	食物の生態誌	西丸震哉著	中央公論社	1973年8月	250p
2527	都会人 ゆがんだ精神構造を探る	岩井弘融著	日本経済新聞社	1973年8月	190p
2528	都市学入門 この東京、この列島を蘇生させる術	黒川紀章著	祥伝社	1973年8月	234p
2529	都市再開発と住民	遠藤晃, 佐藤哲郎著	自治体研究社	1973年8月	297p
2530	都市の思想 保存修景への指標	西川幸治著	日本放送出版協会	1973年8月	392p
2531	日本人民全滅	われらの命を守る会編	日本シェル出版	1973年8月	252p
2532	羽仁五郎対談集	羽仁五郎著者代表	潮出版社	1973年8月	215p
2533	広島県人	村上正名	新人物往来社	1973年8月	242p

2534	マスコミ現代史 '71	日本マスコミ市民 会議編	社会思想社	1973年 8月	276p
2535	妄想ニッポン紀行 高天原～伊勢～出雲	小松左京著	講談社	1973年 8月	679p
2536	わが文学, わが昭和史	椎名麟三他著	筑摩書房	1973年 8月	195p
2537	労組幹部	芦村庸介	日新報道	1973年 8月	316p
2538	かけ足の医療費 朝日市民教室日本の医療 4	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年 9月	246p
2539	軍事学入門	小山内宏著	潮文社	1973年 9月	242p
2540	荒廃をつくる構造 朝日市民教室日本の医療 5	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年 9月	254p
2541	子ども白書 1973年版	日本子どもを守る 会編	日本子どもを守 る会	1973年 9月	578p
2542	自己トレーニング	野沢秀雄著	青春出版社	1973年 9月	277p
2543	図説エポカ統計・資料 '74	旺文社編	旺文社	1973年 9月	338p
2544	地震列島	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年 9月	237p
2545	地方消費者行政 資料消費者行政(Ⅱ)	経済企画庁消費者 行政課編	大蔵省印刷局	1973年 9月	374p
2546	不老学のすすめ	湯沢雍彦, 新福尚 武, 青木茂編	有斐閣	1973年 9月	264p
2547	未来はあるか	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年 9月	294p
2548	革新自治体	サンケイ新聞自治 問題取材班	学陽書房	1973年10月	308p
2549	家族という財産	古木俊雄著	いんなあととりっ ぶ社	1973年10月	283p
2550	公害と住民 公害出版シリーズ 1	河村博編集	日報	1973年10月	354p
2551	昭和48年版大阪府公害白書	大阪府生活環境部 公害室		1973年10月	505p
2552	生命のための科学 国民文庫<現代の教養>803	川上武著	大月書店	1973年10月	210p
2553	世界史こぼれ話 1	三浦一郎著	角川書店	1973年10月	173p
2554	日本戦後詩の展望	小海永二	研究社	1973年10月	322p
2555	人間を生きている	児玉隆也	いんなあととりっ ぶ社	1973年10月	252p
2556	般若心経	金岡秀友校注	講談社	1973年10月	215p
2557	150万人の群像 現代学生気質	読売新聞社文化部 編	協同出版	1973年10月	254p
2558	広島のア芸 I 知的風土と軌跡 広島文化叢書 5	岩崎清一郎著	広島文化出版	1973年10月	203p
2559	環境の地球化学 環境科学ライブラリー 3	山県登著	大日本図書	1973年11月	180p

一般図書

2560	近郊都市 ある地方都市の戦後社会史	鈴木均著	日本経済新聞社	1973年11月	208p
2561	子どもが危い(下) 21世紀にはばたく子を育てるために	「こどもの城の会」 代表上田哲編	徳間書店	1973年11月	299p
2562	社会福祉労働論	「福祉問題研究」 編集委員会編	鳩の森書房	1973年11月	380p
2563	立ちあがった群像 朝日市民教室—日本の医療6	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年11月	250p
2564	地方政治・新時代	朝日新聞内政部	勁草書房	1973年11月	234p
2565	人間変革の思想 グリーンブックス2	池田諭	大和出版販売	1973年11月	227p
2566	物価騒動を起こそう 三一新書804	大門一樹著	三一書房	1973年11月	218p
2567	ボディ占い入門	田口二州著	虹有社	1973年11月	290p
2568	別れの名文句 愛と死の鎮魂歌	赤塚行雄著	ベストセラーズ	1973年11月	227p
2569	医者いらず自強法 身体の芯からつくりかえる本	原崎勇次著	徳間書店	1973年12月	245p
2570	強精美容 台所漢方	長塩容伸著	ごま書房	1973年12月	226p
2571	古代食健康法	平井小糸	サニー出版	1973年12月	230p
2572	3分間ひとり療法	刑部忠和著	東京スポーツ新聞社	1973年12月	314p
2573	自由を子どもに 岩波新書379	松田道雄著	岩波書店	1973年12月	188p
2574	証券会社とつき合う秘訣	小林正和	産報	1973年12月	232p
2575	大衆戦略	石川弘義	KKベストセラーズ	1973年12月	248p
2576	どう医療をよくするか 朝日市民教室—日本の医療7	朝日新聞社編	朝日新聞社	1973年12月	252p
2577	土地の病理	朝日新聞土地問題 取材班	合同出版	1973年12月	213p
2578	日本資源読本	黒岩俊郎編	東洋経済新報社	1973年12月	273p
2579	百科事典操縦法 —1,000万人の情報整理学—	梅棹忠夫, 加藤秀 俊, 小松左京訳	平凡社	1973年12月	195p
2580	マスコミレポート —操作されるマスコミ—	マスコミ共闘, マ スコミレポート編 集委員会編	第一出版センタ ー	1973年12月	419p
2581	生きるとは何か	島崎敏樹	岩波書店	1974年1月	215p
2582	汚染物質 新日本新書186	長崎誠三著	新日本出版社	1974年1月	220p
2583	変わる地場産業 日経新書200	山崎充著	日本経済新聞社	1974年1月	206p
2584	革新自治体と学校	大槻健他編	民衆社	1974年1月	204p
2585	過密過疎への挑戦 あすの地方自治をさぐる I	伊藤善市編	学陽書房	1974年1月	324p
2586	経済記事の見方		日本経済新聞社	1974年1月	516p
2587	古代人99の謎	篠弘道	産報	1974年1月	249p

2588	ゴミ戦争	寄本勝美	日本経済新聞社	1974年1月	196p
2589	除毒料理法 食品公害時代・何をどう食べるか	清水桂一著	アロー出版社	1974年1月	204p
2590	都市の文化	田村紀雄	白馬出版	1974年1月	300p
2591	水と緑と土	富山和子著	中央公論社	1974年1月	188p
2592	道はただ一つこの道を 蜷川虎三自治体論集	「蜷川虎三自治体 論集」編集委員会 編	民衆社	1974年1月	243p
2593	49年お金儲けのタネ	邱永漢	実業之日本社	1974年1月	221p
2594	住民参加と自治の革新 あすの地方自治をさぐるⅡ	松原治郎編	学陽書房	1974年2月	308p
2595	続・人間は病気で死なない	早島正雄著	東京スポーツ新聞社	1974年2月	228p
2596	地方権力		朝日新聞社	1974年2月	315p
2597	日本の余暇マーケット	斉藤精一郎、松田 義幸著	日本経済新聞社	1974年2月	185p
2598	人間滅亡の記録 生き残る道はあるか	小野満春著	KKベストセラーズ	1974年2月	239p
2599	瀕死の日本列島 人類安住の限界を探る!!	中江克己著	久保書店	1974年2月	238p
2600	新しい生物学	野田春彦他著	講談社	1974年3月	249p
2601	いやな感じ	高見順著	角川書店	1974年3月	624p
2602	革新自治体 その構造と戦略	サンケイ新聞	学陽書房	1974年3月	294p
2603	株常識のワナ	町田恒男著	広済堂出版	1974年3月	254p
2604	奇門遁甲入門	田口真堂	青春出版社	1974年3月	207p
2605	暗闇の思想を 火電阻止運動の論理	松下竜一著	朝日新聞社	1974年3月	262p
2606	経済政策の舞台裏	朝日新聞経済部編	朝日新聞社	1974年3月	293p
2607	権威と権力	なだいなだ	岩波新書	1974年3月	242p
2608	催眠技術入門	守部昭夫著	日本文芸社	[1974年3月]	206p
2609	情報源 (74年版)	講談社編	講談社	1974年3月	626p
2610	日本人とすまい	上田篤著	岩波書店	1974年3月	216p
2611	日本の地蔵	富士正晴著	毎日新聞社	1974年3月	228p
2612	大阪の文化を考える	大阪文化振興研究会編	創元社	1974年4月	242p
2613	環境心理学への道 NHKブックス203	入谷敏男著	日本放送出版協会	1974年4月	203p
2614	健康長寿法	三石巖	実業之日本社	1974年4月	222p
2615	子どもの遊び空間	藤本浩之著	日本放送出版協会	1974年4月	245p
2616	戦争の不条理 人間の発見Ⅲ	外山滋比古他編	三省堂	1974年4月	266p

一般図書

2617	地域開発公害への対応 あすの地方自治をさぐるⅢ	佐藤竺編	学陽書房	1974年4月	321p
2618	小さい巨像		朝日ジャーナル	1974年4月	320p
2619	都会人が長生きするためのバイオ・リズム健康法	田多井吉之介著	講談社	1974年4月	256p
2620	バイオリズム四週間	田多井吉之介著	東京スポーツ新聞社出版	1974年4月	294p
2621	むぎ健康法	柳沢文正著	読売新聞社	1974年4月	251p
2622	環境汚染と指標植物 科学ブックス23	埴田宏著	共立出版	1974年5月	170p
2623	現代情報学入門 情報操作のウラを読む	奥村誠次郎著	東洋経済新報社	1974年5月	258p
2624	ちの本 なぜできる・どう治す・どう防ぐ	矢沢知海著	光文社	1974年5月	211p
2625	都市の自然史 中公新書361	品田稷著	中央公論社	1974年5月	200p
2626	仏像に想う(上・下)	梅原猛, 岡部伊都子	講談社現代新書	1974年5月	175p
2627					175p
2628	物理法則集 “科学音痴”にサヨナラする本	都筑卓司著	ごま書房	1974年5月	227p
2629	変革に対応する地方財政 あすの地方自治をさぐるⅣ	恒松制治編	学陽書房	1974年5月	315p
2630	労働現場の叛乱 8企業にみる合理化と労働の解体	鎌田慧著	ダイヤモンド社	1974年5月	236p
2631	株のからくり活用法	山本正純	青年書館	1974年6月	277p
2632	管理と運動 「支配」を克服する視点	大野力著	東洋経済新報社	1974年6月	278p
2633	機械文明の崩壊のなかで	星野芳郎著	人文書院	1974年6月	263p
2634	コンビナートの労働と社会	中岡哲郎	平凡社	1974年6月	237p
2635	自動車の社会的費用 岩波新書890	宇沢弘文著	岩波書店	1974年6月	180p
2636	状況倫理ノート	小原信著	講談社	1974年6月	213p
2637	自立する市民	小田実著	朝日新聞社	1974年6月	324p
2638	大新聞の虚像・実像	桶谷繁雄著	日本教文社	1974年6月	232p
2639	地方自治診断事典	柴田啓次編	帝国地方行政学会	1974年6月	870p
2640	都市問題概説	磯村英一, 黒沼稔共著	鹿島研究所出版会	1974年6月	253p
2641	百円健康法	三橋一夫著	六法出版社	1974年6月	252p
2642	乱世だから儲かるニッポン新商売	白水胖, 佐々山晃著	実業之日本社	1974年6月	293p
2643	現代社会と自治制度の変革 あすの地方自治をさぐるⅤ	成田頼明編	学陽書房	1974年7月	356p
2644	戦争と民衆	秋元律郎著	学陽書房	1974年7月	278p

2645	団地を考えなおす “灰色の巣箱”からの解放 日経新書212	日本経済新聞地方部編	日本経済新聞社	1974年7月	203p
2646	導引術	早島正雄著	徳間書店	1974年7月	226p
2647	ビタミンC健康法	アウウィン・ストーン著 稲垣長典監訳	徳間書店	1974年7月	222p
2648	火を噴く世界経済	長洲一二, 歌川令三	産報	1974年7月	255p
2649	民衆史の創造 NHKブックス210	芳賀登著	日本放送出版協会	1974年7月	216p
2650	韓国からの通信	T・K生「世界」編集部編	岩波書店	1974年8月	233p
2651	恐怖の加工食品	竹村一著	三一書房	1974年8月	253p
2652	経済指標の見方(上・下)	日本経済新聞社編	日本経済新聞社	1974年8月	180p
2653	日経文庫				180p
2654	自己催眠による性格強化法	竹内芳夫著	ダイヤモンド社	1974年8月	237p
2655	住民運動読本 一公害反対・消費者運動のすすめ方一	藤原邦達著	新時代社	1974年8月	286p
2656	種田山頭火	金子兜太著	講談社	1974年8月	202p
2657	都市自治の構図	飛鳥田一雄, 富田富士雄	大成出版社	1974年8月	389p
2658	都市と英米文学	刈田元司編	研究社出版	1974年8月	446p
2659	日本共産党に与える書 一その政治・組織路線批判一	片山さとし著	三一書房	1974年8月	228p
2660	日本語のために	丸谷才一	新潮社	1974年8月	213p
2661	まず、ぼくたち自身を問題にしよう	向井孝, 渡辺一衛	太平出版社	1974年8月	229p
2662	薬草のすすめ アロエ健康法		主婦の友社	1974年8月	218p
2663	石の民芸	池田三四郎著	文化出版局	1974年9月	301p
2664	いたずらカメラ入門	楠山忠之著	青春出版社	1974年9月	223p
2665	恐怖の都市公害	大阪自治センター編	三一書房	1974年9月	226p
2666	個性表現辞典 一人柄をとらえる技術と言葉一	青木孝悦著	ダイヤモンド社	1974年9月	192p
2667	この見事な人たち	青木雨彦	産業能率短期大学	1974年9月	277p
2668	社会指標	国民生活審議会調査部会	大蔵省印刷局	1974年9月	337p
2669	消費と貯蓄の動向(昭和49年版)	経済企画庁調査局編	大蔵省印刷局	1974年9月	197p
2670	生活の恐怖 お母さんノ台所が危険です	大川博徳著	KKベストセラーズ	1974年9月	309p

2671	生命の環境 (上)	K. E. マクスウェル著 小泉明, 長岡滋, 渡辺格訳	講談社	1974年9月	268p
2672	西洋手相術	銭天牛	ごま書房	1974年9月	218p
2673	絶望の経済危機 日本のかかえる8つの問題	加藤寛著	日本経済通信社	1974年9月	236p
2674	鎮魂の海峡 一消えた被爆朝鮮人徴用工246名	深川宗俊著	現代史出版会	1974年9月	247p
2675	倒産の怨念	太田俊夫著	日本経済通信社	1974年9月	242p
2676	日本の歴史 太平洋戦争	林茂	中央公論社	1974年9月	496p
2677	ビジネス365日調査術入門	岡本光極著	啓明書房	1974年9月	237p
2678	広島文化通信		春陽社出版	1974年9月	
2679	歩く健康法	阿久津邦男著	女子栄養大学出版部	1974年10月	220p
2680	生きがい療法 病氣と仲よくする従病主義のすすめ	高島博著	祥伝社	1974年10月	232p
2681	生きぬくための医学常識 医者にかかる前に読む本	横森周信著	ヘルスカウンセラー社	1974年10月	173p
2682	改訂増補 コミュニティ・メディア論	田村紀雄著	現代ジャーナリズム出版会	1974年10月	294p
2683	革命と民衆 国家論への試み	菊地昌典著	潮出版社	1974年10月	410p
2684	逆転の発想	糸川英夫著	ダイヤモンド・タイム社	1974年10月	236p
2685	新聞をどう読むか	林三郎著	PHP研究所	1974年10月	197p
2686	成人病は予防できる	広田滋	婦人生活社	1974年10月	366p
2687	太平洋戦争 日本の歴史25	林茂著	中央公論社	1974年10月	496p
2688	地下街と人間 安全性の総点検 日経新書217	神山恵三著	日本経済新聞社	1974年10月	181p
2689	地方自治と住民参加 一埼玉方式の模索一	埼玉県社会経済総合調査会編	中央大学出版部	1974年10月	153p
2690	都市革命	アンリ・ルフェーブル著 今井成美訳	晶文社	1974年10月	275p
2691	日本人の生活空間	梅棹忠夫他著	朝日新聞社	1974年10月	238p
2692	人間と都市	高柳俊一著	産業能率短期大学出版部	1974年10月	373p
2693	ppm への挑戦	大八木義彦著	講談社	1974年10月	212p
2694	三原のあゆみ	芸陽日日新聞社	芸陽日日新聞社	1974年10月	236p
2695	よみがえる日本 日本の歴史26	蠟山政道著	中央公論社	1974年10月	488p
2696	内ゲバの論理	埴谷雄高	三一書房	1974年11月	265p



2697	梅干と日本刀	樋口清之著	祥伝社	1974年11月	232p
2698	大阪にルネッサンスを	黒田了一著	法律文化社	1974年11月	268p
2699	階級意識とは何か 三一新書828	ヴィルヘルム・ライヒ著 久野収訳	三一書房	1974年11月	196p
2700	肝臓に強くなる —人体最大の化学工場を探る—	飯島登著	講談社	1974年11月	212p
2701	企業は生き残れるか 新日本産業論	朝日新聞経済部	朝日新聞社	1974年11月	268p
2702	公害住民運動 公害原論補巻Ⅱ	宇井純著	亜紀書房	1974年11月	282p
2703	言葉ぐせ相性判断 相手の性格を即座に見ぬく法	三村侑弘著	主婦と生活社	1974年11月	223p
2704	新版 予測・日本経済 —3年後・5年後・10年後—	矢野誠也著	ダイヤモンド社	1974年11月	295p
2705	地図の歴史 日本篇 講談社現代新書369	織田武雄著	講談社	1974年11月	188p
2706	日本語をさかのぼる	大野晋	岩波書店	1974年11月	217p
2707	仏像 祈りの美	佐和隆研	平凡社	1974年11月	144p
2708	欲望の考現学	石川弘義	日本経済新聞社	1974年11月	185p
2709	陰陽五行入門 東洋占術の粋が導くあなたの運命	内田勝郎著	小学館	1974年12月	204p
2710	京童から町衆へ	林屋辰三郎, 加藤秀俊	大進堂	1974年12月	254p
2711	思想としての風俗 朝日選書24	山本明著	朝日新聞社	1974年12月	242p
2712	続・倒産学 “地獄の沙汰も金”の物語	坂本藤良著	ゆまにて	1974年12月	337p
2713	ふるさとの本	原康男	主婦と生活社	1974年12月	243p
2714	80年のあゆみ (NCR)	日本ナショナル金銭登録機㈱		1974年	
2715	株のからくり活用集	山本正純	青年書館	1975年1月	277p
2716	食事革命 玄米菜食の秘密	森下敬一著	ビジネス社	1975年1月	252p
2717	絶対健康食入門	唐木秀夫, 本多京子著	日本文芸社	1975年1月	214p
2718	地方を見る眼	坂井正義	東洋経済新報社	1975年1月	254p
2719	町人から市民へ	林屋辰三郎, 加藤秀俊	講談社	1975年1月	236p
2720	長生き健康法 「お若いすね」と呼ばれるために	清水桂一著	ニール出版	1975年1月	216p
2721	公害犯罪	藤木英雄著	東京大学出版会	1975年2月	202p
2722	古都の近代百年	林屋辰三郎, 加藤秀俊	講談社	1975年2月	198p
2723	催眠健康法	柴田出	久保書店	1975年2月	218p

一般図書

2724	株の科学	杉江雅彦	光文社	1975年3月	204p
2725	自然観察入門 草木虫魚とのつきあい	日浦勇著	中央公論社	1975年3月	224p
2726	政治的市民の復権	久野収著	潮出版社	1975年3月	222p
2727	党员戦略	永田久光	講談社	1975年3月	238p
2728	にっぽんの商人	イザヤ・ベンダサン著 山本七平訳	文芸春秋	1975年3月	206p
2729	ひとり暮らしの戦後史	塩沢美代子, 島田とみ子著	岩波書店	1975年3月	219p
2730	ヒフ(皮膚) 健体術 全身活性と体質改造の極意	三橋一夫著	祥伝社	1975年3月	232p
2731	梅干と日本刀(続)	樋口清之著	祥伝社	1975年4月	232p
2732	ガンも治る 西式健康体操	山崎佳三郎著	高橋書店	1975年4月	222p
2733	催眠療法入門 現代の催眠	河野良和	河野心理教育研究所出版部	1975年4月	240p
2734	爽快ツボ刺激法	中谷義雄著	講談社	1975年4月	254p
2735	地方主義の研究	三輪公忠著	南窓社	1975年4月	262p
2736	都市化社会と人間	奥田道大, 副田義也, 高橋勇悦著	日本放送出版協会	1975年4月	262p
2737	怠け者の健康法	三橋一夫著	エール出版社	1975年4月	192p
2738	複合汚染(上・下)	有吉佐和子著	新潮社	1975年4月	241p
2739				7月	269p
2740	もの与人間の文化史・石垣	田淵実夫著	法政大学出版局	1975年4月	214p
2741	焼け跡は遠くなったか	永井蕨二著	学芸書林	1975年4月	237p
2742	顔判断	松島茂雄, 松原安治著	池田書店	1975年5月	190p
2743	ガンの科学99の謎 かならず治る 最新研究と発見の知識	高谷治著	産報	1975年5月	235p
2744	君はいまどこにいるか ちくま少年図書館26 歴史の本	山代巴著	筑摩書房	1975年5月	243p
2745	新・貧乏物語 インフレ・不況への告発状	朝日新聞経済部編	朝日新聞社	1975年5月	213p
2746	体質革命クロレラ強健法	福井四郎著	講談社	1975年5月	213p
2747	長寿の100カ条	近藤宏二著	文芸春秋	1975年5月	270p
2748	転向の思想史的研究 その一側面	藤田省三著	岩波書店	1975年5月	272p
2749	都市問題の基礎知識	伊藤善市著	有斐閣	1975年5月	394p
2750	バイオリズム博士の健康法 現代病46	田多井吉之介著	学陽書房	1975年5月	259p
2751	涙をたらした神	吉野せい著	弥生書房	1975年5月	202p
2752	妙薬・梅の効用115	多田鉄之助著	講談社	1975年5月	222p
2753	株価夏季報	町田恒男	広済堂出版	1975年6月	459p

2754	健康哲学のすすめ	石川中, 森沢康著	有斐閣	1975年 6月	263p
2755	健康の秘密365の知恵	大沼晶誉著	日本文芸社	1975年 6月	218p
2756	現代に生きる民話	大川悦生	日本放送出版協 会	1975年 6月	218p
2757	荒廃する日本列島 経済成長のひずみ 日本の経済 2	星野芳郎著	学陽書房	1975年 6月	268p
2758	先を見抜く経済眼力 盲点をつくウラの理論	青野豊作著	徳間書店	1975年 6月	212p
2759	自己変革101の法則	山口彰	日本実業出版社	1975年 6月	229p
2760	死を考えて生きる	三橋一夫著	エール出版社	1975年 6月	206p
2761	ストレス健康法	池見酉次郎著	潮文社	1975年 6月	254p
2762	ハリの科学99の謎	谷美智士著	産報	1975年 6月	229p
2763	ふるさと考	松永伍一	講談社	1975年 6月	201p
2764	老後 安心できる老後を考える	東京新聞編	サイマル出版会	1975年 6月	255p
2765	続・韓国からの通信 1974.7~1975.6	T.K生, 『世界』 編集部編	岩波書店	1975年 7月	235p
2766	日本の伝説 (下)	松谷みよ子編著	講談社	1975年 7月	380p
2767	足の健康法	柿崎泰賢著	広済堂出版	1975年 8月	240p
2768	語りつく戦後史 (上・下)	鶴見俊輔編集	講談社	1975年 8月	327p
2769				9月	446p
2770	環境権ってなんだ —発電所はもういらぬ—	松下竜一編	ダイヤモンド社	1975年 8月	251p
2771	市民の論理と科学	武谷三男	筑摩書房	1975年 8月	214p
2772	庶民にたいする弾圧 昭和特高弾圧史 5	明石博隆, 松浦総 三編	太平出版社	1975年 8月	340p
2773	都市環境の蘇生 —破局からの青写真— 中公新書405	末石富太郎著	中央公論社	1975年 8月	228p
2774	破綻する地方財政		日本経済新聞社	1975年 8月	187p
2775	版画—京都百景	徳力富吉郎著	保育社	1975年 8月	151p
2776	広島昭和二十年	大佐古一郎	中央公論社	1975年 8月	264p
2777	ランニング健康法	松井秀治著	講談社	1975年 8月	285p
2778	株価操作	仲本潤平	新現論社出版局	1975年 9月	230p
2779	自己暗示術 自信がもりもりわいてくる本	多湖輝著	ゴマ書房	1975年 9月	214p
2780	市民自治の憲法理論	松下圭一著	岩波書店	1975年 9月	196p
2781	小説『複合汚染』への反証	岩本経丸他著	国際商業出版	1975年 9月	262p
2782	食べるのが怖い	河野友美	主婦と生活社	1975年 9月	225p
2783	地域の変革と中小企業 (上・下)	清成忠男	日本経済評論社	1975年 9月	218p
2784					277p

一般図書

2785	日本の公害	庄司光、宮本憲一著	岩波書店	1975年9月	238p
2786	ヨガの特効知られざる健康法	藤本憲幸	青春出版社	1975年9月	253p
2787	危ない日本経済パニック図解 誰も知らない数字	飯田清悦郎著	KKベストセラーズ	1975年10月	234p
2788	取材学	加藤秀俊著	中央公論社	1975年10月	184p
2789	一九三〇年代の構造	竹内静子著	田畑書店	1975年10月	236p
2790	トータル・フィットネス 奇跡の健康 体操 いつでもどこでも週30分	ローレンス・E・モアハウス著 石河利寛訳	徳間書店	1975年10月	241p
2791	病気の自己診断	三橋一夫著	エール出版社	1975年10月	211p
2792	魅力ある都市づくり 市民のための地方都市	星野光男著	第一法規出版	1975年10月	241p
2793	江戸三百年 1・2巻	西山松之助他編	講談社	1975年11月	222p
2794				12月	238p
2795	身体の不安はすぐに消せ!	笹本浩著	講談社	1975年11月	261p
2796	護身強健法	三橋一夫著	ダイヤモンド社	1975年11月	244p
2797	都市と文化問題	大阪文化振興研究会編	創元社	1975年11月	246p
2798	人間・気象・病気 NHKブックス244 気候内科へのアプローチ	加地正郎編著	日本放送出版協会	1975年11月	235p
2799	人間詩話	吉川幸次郎著	岩波書店	1975年11月	202p
2800	老働学入門 定年対策56のチエ	辻川泰著	日刊工業新聞社	1975年11月	200p
2801	あなたを狙う肝臓病	泉谷守著	三陽社	1975年12月	245p
2802	効く効かない健康食	伊沢一男著	広済堂	1975年12月	221p
2803	薬いらずの治療法	三橋一夫著	エール出版社	1975年12月	236p
2804	健康の設計	神山恵三著	大月書店	1975年12月	222p
2805	私債から公債へ 一社会問題としての ワクチン禍一 岩波新書951	吉原賢二著	岩波書店	1975年12月	205p
2806	食養・カルシウム強健法 食べながら 体質を改善する健康強化の秘法	青山士郎著	講談社	1975年12月	222p
2807	対論 世直し	宇井純	創樹社	1975年12月	245p
2808	便秘が治る本	大槻彰著	広済堂出版	1975年12月	236p
2809	有限の生態学	栗原康	岩波書店	1975年12月	187p
2810	若さの秘訣 驚異のビタミンE	松木康夫著	弘済出版社	1975年12月	266p
2811	われ住むところわが都	むのたけじ	家の光協会	1975年12月	219p
2812	にぎやか温泉・あい宿 みどりオールガイド3	緑書店編集部編	緑書店	1975年	302p
2813	日本の情報産業 1・3	YTV情報産業研究グループ編	サイマル出版会	1975年	255p
2814					269p

2815	五味人相教室 顔が表わす男女のシンボル	五味康祐著	光文社	1976年 1月	261p
2816	住民運動の論理	松原治郎, 似田貝 香門	学陽書房	1976年 1月	417p
2817	誰でも百三十歳まで生きられる	三橋一夫著	エール出版社	1976年 1月	188p
2818	長寿者の健康法	村田太平著	潮文社	1976年 1月	212p
2819	背骨矯正 カイロプラクティック	松田悦夫著	光文社	1976年 1月	205p
2820	遺伝の謎がとけた!	小山寿著	ベストブックス 社	1976年 2月	239p
2821	株で儲ける127か条 人の行く裏に道あり花の山	浦宏著	ナツメ社	1976年 2月	206p
2822	驚異の催眠法	加藤洋二	金沢文庫	1976年 2月	242p
2823	原子力発電	武谷三男著	岩波書店	1976年 2月	206p
2824	3分間SEX療法	刑部忠和著	東京スポーツ新 聞社	1976年 2月	230p
2825	新解体新書	朝日新聞科学部著	朝日新聞社	1976年 2月	255p
2826	信じてはいけない 危ない健康常識	野沢秀雄著	いんなあととりっ ぶ社	1976年 2月	241p
2827	地域と自治体 第3集	自治体問題研究所	自治体研究社	1976年 2月	228p
2828	般若心経を考える	竹井博友	竹井出版	1976年 2月	236p
2829	ほくろ占い 幸・不幸を予言する小さな黒点	山口素桜	光文社	1976年 2月	212p
2830	真菰健康法	横田清	西東社	1976年 2月	221p
2831	危ない健康法 早くやめないと死んでしまう!	高須克弥著	サンケイ新聞社 出版局	1976年 3月	224p
2832	韓国の経済	隅谷三喜男著	岩波書店	1976年 3月	225p
2833	暗い谷間の労働運動	大河内一男著	岩波書店	1976年 3月	222p
2834	出版業界 産業界シリーズ38	清水英夫, 小林一 博著	教育社	1976年 3月	235p
2835	新・会社四季報で儲ける法	岡部寛之著	東洋経済新報社	1976年 3月	254p
2836	“信用取引入門”の入門	町田恒男著	東京スポーツ新 聞社	1976年 3月	258p
2837	地方都市の権力構造	Y・クロダ著 秋元津郎, 小林宏 一訳	勁草書房	1976年 3月	273p
2838	鉛が人間を呑みこむとき	三石巖著	太平出版社	1976年 3月	255p
2839	食品汚染のない家庭	新井通友著	自由ブックス社	1976年 4月	196p
2840	都市と港	北見俊郎	同文館	1976年 4月	304p
2841	知的生活の方法	渡部昇一	講談社	1976年 4月	214p
2842	人間 その誕生から死まで	朝日新聞科学部編	朝日新聞社	1976年 4月	244p
2843	世の中, 不公平だ “善人が損する社会”を告発する	藤林貞治著	サンケイ新聞社 出版局	1976年 4月	257p

一般図書

2844	運姓判断	八切止夫著	日本シェル出版	1976年5月	286p
2845	株で儲けるヒント68	足立真一著	実業之日本社	1976年5月	238p
2846	競歩健康法	細川俊夫著	双葉社	1976年5月	213p
2847	裁かれる自動車	西村肇著	中央公論社	1976年5月	218p
2848	詞集 たいまつⅡ	むのたけじ	評論社	1976年5月	216p
2849	絶望的近代の民衆像 —地方主義の復権—	林英夫著	柏書房	1976年5月	248p
2850	日本風俗の起源99の謎	樋口清之著	産報	1976年5月	217p
2851	バイオリズム	白井勇治郎	地産出版	1976年5月	212p
2852	「病いは気から」の医学 どうすれば防げる・こうすれば治る	阿部正著	光文社	1976年5月	227p
2853	予防医学	磯谷公良著	鳩の森書房	1976年5月	359p
2854	一億半病人を救う道	岩尾裕之, 沼田勇, 田村真八郎	農山漁村文化協会	1976年6月	228p
2855	工場への逆攻 原発・開発と闘う住民	鎌田懸著	柘植書房	1976年6月	288p
2856 2859	山頭火著作集 I—IV	大山澄太編	潮文社	1976年6月	214p —329p
2860	自己暗示精神改造法	原野広太郎著	自由ブックス社	1976年6月	230p
2861	人間栄養学のすすめ 食品はどこまで近代化できるか	大木幸介著	講談社	1976年6月	217p
2862	ヒロシマの歌ほか	今西祐行	講談社	1976年6月	203p
2863	教育白書運動の手引き	日本教職員組合		1976年7月	40p
2864	ミニコミの論理 「知らせる権利」の復権	田村紀雄著	学陽書房	1976年7月	273p
2865	朋あり遠方より来る 現場からの哲学	北沢恒彦, 渋谷定 輔, 花崎卓平著	風媒社	1976年7月	281p
2866	落と日本人 入浜権の背景 NHKブックス254	高橋裕士, 高桑守 史著	日本放送出版協会	1976年7月	206p
2867	ガラスの靴	安岡章太郎著	角川書店	1976年8月	300p
2868	健康への知恵	パー・オロフ・オ ストランド著 本田良行他訳	真興交易(株)医書 出版部	1976年8月	215p
2869	住民運動“私”論 〈現代の自由〉選書4	中村紀一編	学陽書房	1976年8月	245p
2870	上手に食べて長生きする本	木村登著	徳間書店	1976年8月	217p
2871	食品ブラックリスト	八藤晟	ごま書房	1976年8月	215p
2872	多国籍企業	石川博友著	中央公論社	1976年8月	195p
2873	中国秘伝 鏡で占う顔相術 20歳なら 左額, 40歳なら右目で運氣を見る	郷三豊著	小学館	1976年8月	232p

2874	ニッポン偏見辞典	ピーター・ローザック著 赤塚行雄訳	筑波書林	1976年8月	235p
2875	氷河期が来る 異常気象が告げる人間の危機	根本順吉著	光文社	1976年8月	210p
2876	明るく健康な晩年を	近江明著	厚生出版社	1976年9月	142p
2877	株でもうけるための本	笹淵金二著	ダイヤモンド社	1976年9月	211p
2878	教師ひとりひとりの生きざまを	菅龍一他著	昌平社出版	1976年9月	246p
2879	自伝的戦後史	羽仁五郎	講談社	1976年9月	414p
2880	転向研究 筑摩叢書233	鶴見俊輔著	筑摩書房	1976年9月	405p
2881	沖繩戦後史 岩波新書981	中野好夫, 新崎盛暉著	岩波書店	1976年10月	221p
2882	仕手株の発見法	西宮史朗	東京スポーツ新聞社	1976年10月	246p
2883	自律神経失調症は治る	高島博著	実業之日本社	1976年10月	254p
2884	成人医学	広田哲士編	朝日新聞社	1976年10月	254p
2885	食べ方健康法	蔡一藩著	青春出版社	1976年10月	210p
2886	地図入門 地形図からナショナルアトラスまで	高崎正義著	日本放送出版協会	1976年10月	247p
2887	中国式養生法 5千年の伝統をもつ食生活の知恵	陳東達著	PHP研究所	1976年10月	215p
2888	図書館づくり運動入門	図書館問題研究会編	草土文化	1976年10月	289p
2889	難病列島	吉川俊夫, 早田昭三著	竹書房	1976年10月	260p
2890	日本の工業地帯 第三版	山本正雄編	岩波書店	1976年10月	225p
2891	ぬれ手にアワのリスト屋商法	武代典矢	啓明書房	1976年10月	187p
2892	ひろしま歴史の焦点 (上・下)	中国新聞社編集	中国新聞社事業局出版部	1976年10月	199p
2893				12月	226p
2894	気学推命	田口真堂著	青春出版社	1976年11月	230p
2895	郷土教育運動小史 土着の思想と行動	桑原正雄著	たいまつ社	1976年11月	219p
2896	薬その安全性 岩波新書984	砂原茂一著	岩波書店	1976年11月	212p
2897	手相で健康診断	門脇尚平著	講談社	1976年11月	236p
2898	天気が強くなる本	有賀淳, 宮内駿一著	エール出版社	1976年11月	174p
2899	年金生活入門	橋本司郎著	大陸書房	1976年11月	272p
2900	エアロビクス健康法	ケネス・H・クーバー著 原礼之助訳	実業之日本社	1976年12月	248p
2901	肝心かなめの健康	原田尚	KKベストセラーズ	1976年12月	286p

一般図書

2902	くたばれコンピュータピア!	津川敬, 鈴木茂治 著	拓植書房	1976年12月	341p
2903	高タンパク健康法	三石巖著	講談社	1976年12月	258p
2904	地図で遊ぶ本 地形図を楽しむコツ集	清水靖夫著	文潮出版	1976年12月	214p
2905	働きにくさの構造 —職場の日本的風土—	岩崎隆治著	日本労働協会	1976年12月	294p
2906	厄年の科学	金子仁	光文社	1976年12月	236p
2907	ルポ・地方公務員	中国新聞社編	日本評論社	1976年12月	362p
2908	革命が歴史をつくる	寺尾五郎著	たいまつ社	1977年1月	224p
2909	写楽の謎の「一解決」	松本清張著	講談社	1977年1月	94p
2910	都市と主婦たち 神戸市婦人団体協議会のあゆみ	毎日新聞神戸支局 編	毎日新聞社	1977年1月	270p
2911	流民烈伝—風のなかの旅人たち—	朝倉俊博著	白川書院	1977年1月	249p
2912	頭の切りかえ方 新機軸を生み出すためのテクニック	多湖輝著	ごま書房	1977年2月	220p
2913	生れかわる本	坂巻公男著	広済堂出版	1977年2月	220p
2914	家族を中心とした人間関係	中根千枝著	講談社	1977年2月	176p
2915	驚異のミル健康法 体質をかえ若さをつくる	片山京介	徳間書店	1977年2月	251p
2916	人体エンジニアリング	ジョン・レニハン 著 池田豊信訳	森林書房	1977年2月	253p
2917	ミニコミ	田村紀雄著	日本経済新聞社	1977年2月	171p
2918	一日一禅(下)	秋月龍珉著	講談社	1977年3月	198p
2919	書いて花咲く哲学	橋本義夫著	樺出版	1977年3月	278p
2920	季節のない街	山本周五郎著	新潮社	1977年3月	327p
2921	道路公害と住民運動	道路公害問題研究会	自治体研究社	1977年3月	326p
2922	入門株式記事の読み方	加藤惇著	日本実業出版社	1977年3月	222p
2923	老年期	加藤正明, 湯沢雅彦, 清水信編	有斐閣	1977年3月	226p
2924	カネの流れが変わった	邱永漢著	日本経済新聞社	1977年4月	250p
2925	新版・株のヒント	浦宏著	東京スポーツ新聞社	1977年4月	290p
2926	マスコミ自由業	飯田靖宜編	池田書店	1977年4月	207p
2927	まちの選挙 叢書・民話を生む人びと②	小野菊枝著	而立書房	1977年4月	314p
2928	道	吉野せい著	弥生書房	1977年4月	139p
2929	ジャーナリズムの社会学	田村紀雄	ブレーン出版	1977年5月	190p
2930	頭痛に強くなる	J・W・ランス著 加藤秀訳	講談社	1977年5月	292p



2931	地方都市ルネッサンス	宮沢弘著	日本経済新聞社	1977年5月	190p
2932	ドイツの職人 中公新書467	高木健次郎著	中央公論社	1977年5月	185p
2933	広島の方言とその語源	田淵実夫著	鼎出版社	1977年5月	216p
2934	マンガの描き方	手塚治虫	光文社	1977年5月	247p
2935	病いは食から	沼田勇著	農山漁村文化協会	1977年5月	263p
2936	生き方発見の旅	真鍋博著	文芸春秋	1977年6月	230p
2937	からだの雑学事典		毎日新聞社	1977年6月	229p
2938	環境アセスメント	島津康男	日本放送出版協会	1977年6月	251p
2939	出版戦争	小汀良久著	東京経済	1977年6月	166p
2940	年金に勝つその秘訣	毎日新聞社編	毎日新聞社	1977年6月	261p
2941	わがアリアンの歌	金達寿著	中央公論社	1977年6月	261p
2942	生きるということ	佐野哲郎	紀伊国屋書店	1977年7月	284p
2943	驚異の若返りプロテイン	カーソン・ウェイド著 杉靖三郎訳	実業之日本社	1977年7月	238p
2944	続・会社四季報で儲ける法	岡部寛之著	東洋経済新報社	1977年7月	244p
2945	タウン誌の論理 創る・読む・旅する	岩田薫著	潮出版	1977年7月	318p
2946	都市に生きる方途	吉村元男著	日本放送出版協会	1977年7月	206p
2947	日本は快適か		快適な環境懇談会事務局	1977年7月	214p
2948	軒下のたたかい	福山火電阻止・旧料金を払う会編	たいまつ社	1977年7月	221p
2949	複合汚染 その後	有吉佐和子著	潮出版社	1977年7月	258p
2950	ブラック・ユーモア入門 毒舌と皮肉に強くなる	阿刀田高著	KKベストセラーズ	1977年7月	218p
2951	未来の事実 100年を3時間で楽しむ本	ステファン・ローゼン著 加藤秀訳	KKベストセラーズ	1977年7月	286p
2952	切り絵入門	山室正男著	日本文芸社	1977年8月	154p
2953	写真で見る広島あゝのころ	津田一男著	中国新聞社	1977年8月	183p
2954	和漢方入門	三橋一夫, 松本茂著	日刊工業新聞社	1977年8月	189p
2955	おんなの神経科	斉藤茂太著	大和書房	1977年9月	217p
2956	家庭菜の危険 その副作用総点検と賢い使い方	新井基夫著	祥伝社	1977年9月	248p
2957	原子力戦争	田原総一郎	筑摩書房	1977年9月	288p
2958	治安維持法	潮見俊隆著	岩波書店	1977年9月	223p

一般図書

2959	人間・労働・技術	久野収, 星野芳郎 著	三一新書	1977年9月	227p
2960	病気をなおす100の秘法	小林三剛, 佐藤久 三著	ナツメ社	1977年9月	239p
2961	無意識の構造	河合隼雄著	中央公論社	1977年9月	191p
2962	痛みを止める健康法	飯野節夫	KKベストセ ーズ	1977年10月	202p
2963	株価大暴落	町田恒男	広済堂出版	1977年10月	254p
2964	奇跡の暗示療法 家庭で治せる催眠術	長谷川大著	鶴書房	1977年10月	286p
2965	工場と記録	鎌田慧	晶文社	1977年10月	300p
2966	新訂・株価大暴落	町田恒男著	広済堂出版	1977年10月	254p
2967	旅の発見	岡田喜秋著	玉川大学出版部	1977年10月	243p
2968	阿Q正伝	増田渉著	角川書店	1977年11月	202p
2969	安野光雅 絵本作家文庫	村松武司編	すばる書房	1977年11月	79p
2970	医事紛争	饗庭忠男著	日本経済新聞社	1977年11月	188p
2971	食品を見わける	磯部昌策著	岩波書店	1977年11月	196p
2972				1979年8月	196p
2973	ストレス養生法	杉靖三郎著	PHP研究所	1977年11月	196p
2974	日本縦断	色川大吉著	人文書院	1977年11月	291p
2975	人の砂漠	沢木耕太郎著	新潮社	1977年11月	297p
2976	環境毒性学 複合汚染の恐怖(上巻)	加須屋実著	日刊工業新聞社	1977年12月	317p
2977	四柱推明 あなたをあやつる宿命の星	千種堅著	光文社	1977年12月	192p
2978	スタミナ運動健康法	体育科学センター	講談社	1977年12月	244p
2979	肉体言語術 人の心は腕組み一つにも表われる	石川弘義著	ごま書房	1977年12月	213p
2980	毛沢東『実践論』入門	坂元ひろ子訳	長崎出版特	1977年12月	203p
2981	歴史の方法	色川大吉著	大和書房	1977年12月	259p
2982	市民運動と政治 続・雑兵の思想	大野明男著	創世記	1978年1月	215p
2983	深層言語術	多湖輝	ごま書房	1978年1月	216p
2984	タイミング株式投資法	田中稔著	実業之日本社	1978年1月	224p
2985	「間」の日本文化	剣持武彦	大進堂	1978年1月	189p
2986	ユーロコミュニズム	野地孝一著	岩波書店	1978年1月	225p
2987	頭の時計を使う法	篠原直	ごま書房	1978年2月	216p
2988	イラストからの発想 絵地図から国家計画まで	真鍋博著	PHP研究所	1978年2月	254p
2989	現代職人伝	大谷晃一著	朝日新聞社	1978年2月	259p
2990	動物は知っている	辺見栄	かんき出版	1978年2月	235p
2991	都市は「ふるさと」か	F・レンツニロー マイス 武基雄, 伊藤哲夫 訳	鹿島出版会	1978年2月	204p

2992	袴田問題 そこが聞きたい		日本共産党中央 委員会出版局	1978年2月	39p
2993	目撃者の証言 袴田転落問題の 真実		日本共産党中央 委員会出版局	1978年2月	55p
2994	一枚の地図	サンケイ新聞社編	PHP研究所	1978年3月	250p
2995	一休	水上勉	中央公論社	1978年3月	349p
2996	環境政策を考える	華山謙著	岩波書店	1978年3月	210p
2997	森林の思考・砂漠の思考	鈴木秀夫	日本放送出版協 会	1978年3月	222p
2998	すぐ効く療法	鈴木博著	広済堂出版	1978年3月	234p
2999	地域主義	玉野井芳郎, 中村 尚司, 清成忠男	学陽書房	1978年3月	336p
3000	爪と唇ズバリ健康診断法	田中樹生久著	講談社	1978年3月	245p
3001	ファッション	アンリ・ミシェル 著 長谷川公昭訳	白水社	1978年3月	174p
3002	医者と患者	青山英康	家の光協会	1978年4月	234p
3003	医者の薬—危険のないのみ方	田村豊幸著	農山漁村文化協 会	1978年4月	267p
3004	記念碑	堀田善衛	集英社	1978年4月	279p
3005	薬の選び方便覧 —薬屋まかせは危険—	高橋暁正, 里見け い子, 北野蓉子著	農山漁村文化協 会	1978年4月	268p
3006	健康食・総点検	三石巖著	現代評論社	1978年4月	238p
3007	動物の目で見る文化 日高敏隆対談集	日高敏隆他著	平凡社	1978年4月	274p
3008	討論 青年にとって労働とは何か	小中陽太郎編	三一書房	1978年4月	330p
3009	七十歳までの性	中村良雄著	津軽書房	1978年4月	198p
3010	脳卒中どこまで防げるか	朝日新聞科学部,	朝日新聞社	1978年4月	214p
3011		武部俊一著		6月	214p
3012	漫画のある部屋 現代まんがへの視角	尾崎秀樹著	時事通信社	1978年4月	249p
3013	からだの数学小辞典	朝日新聞科学部	朝日ソノラマ	1978年5月	277p
3014	ジャーナリズムを考える旅	立花隆著	文芸春秋	1978年5月	238p
3015	生薬の世界	三橋博	講談社	1978年5月	197p
3016	誰にもわかる漢方健康法	中祖英雄著	中国新聞社	1978年5月	285p
3017	地図のみかた	横山卓雄著	保育社	1978年5月	151p
3018	「中流」の幻想	岸本重陳	講談社	1978年5月	262p
3019	病気に勝つ健康器具	松原英多著	広済堂出版	1978年5月	237p
3020	老化と寿命 —生物学の立場から—	江上信雄著	東京書籍	1978年5月	194p
3021	書かれざる一章	井上光晴著	集英社	1978年6月	281p

一般図書

3022	株の落とし穴82	小林正和著	東洋経済新報社	1978年6月	206p
3023	中年からの性	壮快編集部	マイヘルス社	1978年6月	253p
3024	文化運動論	農文協文化部編	農山漁村文化協会	1978年6月	279p
3025	400字健康法／春夏秋冬	大門八郎著	鱒すばる書房	1978年6月	239p
3026	ある昭和史	色川大吉著	中央公論社	1978年7月	384p
3027	驚異の新開発 自律健康法	飯田宏著	青春出版社	1978年7月	205p
3028	住民運動を斬る —地域エゴの虚実を衝く—	吉田信美著	日新報	1978年7月	211p
3029	セルフ・コントロールの医学	池見酉次郎著	日本放送出版協会	1978年7月	305p
3030	五味手相教室	五味康祐	光文社	1978年8月	236p
3031	催眠の効用	多湖輝	ごま書房	1978年8月	226p
3032	「民」の論理, 「軍」の論理	小田実著	岩波書店	1978年8月	273p
3033	地図との対話	中野尊正	講談社	1978年8月	213p
3034	足のツボベスト爽快法	星虎男	広済堂印刷	1978年9月	238p
3035	生きがいの周辺	加藤秀俊著	文芸春秋	1978年9月	229p
3036	原初生命体としての人間	野口三千三著	三笠書房	1978年9月	256p
3037				10月	256p
3038	実戦・株式投資法	野村和弘著	ナツメ社	1978年9月	254p
3039	都市環境の美学	漆原美代子	日本放送出版協会	1978年9月	231p
3040	都市人間のための空気の健康学 鼻・のど・肺をまもる法	三浦豊彦著	かんき出版	1978年9月	199p
3041	人間の死に方	島影盟	白揚社	1978年9月	261p
3042	80歳現役論	佐藤富雄	英知出版	1978年9月	163p
3043	風土の中の衣食住	市川健夫著	東京書籍	1978年9月	258p
3044	臨床薬理学者がおしえる 効く薬・効かない薬	石崎高志著	かんき出版	1978年9月	221p
3045	エネルギー問題の混乱を正す	星野芳郎著	技術と人間	1978年10月	267p
3046	株式記事で儲ける法 生きた情報をどう 掴み活かすか	村瀬育男著	こう書房	1978年10月	225p
3047	からだの設計にミスはない	橋本敬三	柏樹社	1978年10月	206p
3048	国境線は違かった	筒井康隆著	集英社	1978年10月	270p
3049	自伝的戦後史(上・下)	羽仁五郎著	講談社	1978年10月	281p
3050					320p
3051	人生のチャンスを知る運波推命術 あなたの命はいまどう流れているか	松柏天著	かんき出版	1978年10月	227p
3052	入浴健康法	阿久津邦男著	講談社	1978年10月	225p
3053	老年ほど素晴らしいものはない	高瀬広居	山手書房	1978年10月	269p

3054	あなたは名医だ 痛みの発作をとめる本	原田尚著	ベストセラーズ	1978年11月	253p
3055	健康法24の知恵	新田豊造著	潮文社	1978年11月	218p
3056	職業としての地方公務員 職業としての人間シリーズ	太田久行著	中経出版	1978年11月	239p
3057	地図と風土	堀淳一著	そしえて	1978年11月	319p
3058	百歳まで生きられる	スティープン・ウ ェスト著 高木長祥訳	講談社	1978年11月	190p
3059	病気の因を断つ血液健康法 —あなたの血も酸毒化している—	岡田一好著	経済界	1978年11月	316p
3060	マーノス式手相術	マーノス比奈子	実業之日本社	1978年11月	276p
3061	無害・有害・薬のひろば	高橋暁正	日本書籍株式会 社	1978年11月	247p
3062	自己健康法室内トレーニング	小守良貞	青春出版社	1978年12月	237p
3063	昭和恐慌 ファンズム期の国家と社会 1	東京大学社会科学 研究所ファンズム と民主主義研究会 編著	東京大学出版会	1978年12月	366p
3064	住民参加行政の光と陰	五十嵐敬喜他	巫紀書房	1978年12月	301p
3065	地域主義の時代	清成忠男著	東洋経済新報社	1978年12月	282p
3066	地方は動く	小浜喜一	日本経済評論社	1978年12月	196p
3067	人相判断	坂田篤威	光文社	1978年12月	200p
3068	ホルモン・バランス 不老の不思議	朴応秀著	米国財団法人パ ーク心臓研究財団	1978年12月	217p
3069	歴史小説の整理学	武蔵野次郎	かんき出版	1978年12月	204p
3070	希望との旅	ノリ・ハドル著 西村寛訳	サイマル出版会	1978年	245p
3071	ジャーナリストたちの履歴書	人間の科学の会編	現代新社	[1978年]	186p
3072	脳細胞トレーニング	飯田宏	太陽企画出版	1978年	212p
3073	子供のための生命の起源	三石巖著	サンボウジャー ナル	1979年1月	220p
3074	食べる	柳沢文正	日刊工業新聞社	1979年1月	191p
3075	中国激動の世の生き方	城山三郎	毎日新聞社	1979年1月	259p
3076	野口体操・おもさに負く	野口三千三	柏樹社	1979年1月	252p
3077	125歳まで生きられる	揚名時	青春出版社	1979年1月	229p
3078	密告 —昭和俳句弾圧事件—	小堺昭三著	ダイヤモンド社	1979年1月	233p
3079	NHK「健康百話」Ⅱ	NHK編	日本放送出版協 会	1979年2月	382p
3080	記録文学ノート	杉浦明平	オリジン出版セ ンター	1979年2月	297p

一 般 図 書

3081	薬は毒じゃない	田村豊幸	医学研究社	1979年2月	244p
3082	食養と物療	山崎敏子	ナニワ印刷	1979年2月	205p
3083	人体この不思議なしくみ	鈴木弘文	健友館	1979年2月	221p
3084	「地域」からの発想	樺山紘一著	日本経済新聞社	1979年2月	210p
3085	中・高年の体力管理学	波多野義郎著	泰流社	1979年2月	171p
3086	日本の薬害	高野哲夫著	大月書店	1979年2月	270p
3087	人間開発法	等々力文雄	日刊工業新聞社	1979年2月	186p
3088	瞑想術で自分を強くする 不思議な力が湧きでる本	綿本昇著	ベストセラーズ	1979年2月	219p
3089	ヨ一ガ背骨健康法	綿本昇	広済堂出版	1979年2月	237p
3090	江戸浮世絵師たち	福田和彦著	読売新聞社	1979年3月	194p
3091	休暇村の人びと	佐々木章一	晩声社	1979年3月	248p
3092	自己発想の方法 —自分の頭を持っているか—	羽仁五郎著	青春出版社	1979年3月	224p
3093	性格推命術	松柏夫著	かんき出版	1979年3月	251p
3094	生命の深淵をさぐる	川田洋一	第三文明社	1979年3月	270p
3095	続・中高年の体力管理学	波多野義郎著	泰流社	1979年3月	171p
3096	羽仁五郎の大意言	羽仁五郎	株式会社話の特集	1979年3月	305p
3097	非行老年のすすめ	土岐雄三著	山手書房	1979年3月	214p
3098	釈迦がのこした健康法	岩淵亮順著	経済界	1979年3月	232p
3099	歴史の読み方	渡部昇一著	祥伝社	1979年3月	248p
3100	運動と抵抗 (上) ファシズム期の国家と社会 6	東京大学社会科学 研究所「ファシズ ムと民主主義」研 究会	東京大学出版会	1979年4月	315p
3101	求聞持法・瞑想入門	桐山靖雄著	講談社	1979年4月	244p
3102	現役で死にたい	邦光史郎著	主婦と生活社	1979年4月	234p
3103	主権ハ人民ニアリ	羽仁五郎	潮出版社	1979年4月	214p
3104	食物の生態誌	西丸震哉	中央公論社	1979年4月	190p
3105	住民参加をめぐる問題事例	佐藤竺編	学陽書房	1979年4月	301p
3106	新・健康論	広田哲士著	創元社	1979年4月	254p
3107	1945年8月からの出発	内田千寿子	而立書房	1979年4月	314p
3108	どんな病気も食べながら治せる	松本紘斉著	徳間書店	1979年4月	235p
3109	にんぎょのおひめさま	アンデルセン原作 島村宏	日本書房	1979年4月	207p
3110	反原発事典	反原発事典編集委 員会	現代書館	1979年4月	374p
3111	老年期の性	大工原秀子	ミネルヴァ書房	1979年4月	268p

3112	工業社会の崩壊	樋田勲著	四季書房	1979年5月	281p
3113	市民運動の視点	宮川淑	法学書院	1979年5月	271p
3114	生命系の危機	綿貫礼子	株式会社アン ヴェル	1979年5月	255p
3115	1930年代問題の諸相	宮川透編	農山漁村文化協 会	1979年5月	300p
3116	仙人不老不死学	高藤聡一郎	大陸書房	1979年5月	251p
3117	即効刺激療法	牧野武朗	講談社	1979年5月	328p
3118	地域メディア時代 コミュニティ情報 をどうとらえるか	田村紀雄著	ダイヤモンド社	1979年5月	235p
3119	特効薬の疑典	久保文苗, 柳補才 三, 永井恒司著	自由国民社	1979年5月	210p
3120	脳をあやつる分子言語 知能・感情・意欲の根源物質	大木幸介著	講談社	1979年5月	215p
3121	バカの大研究	赤塚行雄	青也書店	1979年5月	220p
3122	映画つくりの実際	新藤兼人	岩波書店	1979年6月	220p
3123	主婦専従農業	小林みさを	而立書房	1979年6月	309p
3124	ソビエトの地方自治	坂梨昌弘編著	ありえす書房	1979年6月	169p
3125	脳卒中克服法	佐野恵	サンケイ新聞社	1979年6月	316p
3126	80歳現役論	佐藤富雄著	英知出版	1979年6月	163p
3127	「私」の構造 —情緒社会と“個”の論理—	政次満幸著	PHP研究所	1979年6月	238p
3128	菜なしで生きる	ロマンショフ・F・ N, フローロフ・ V・A 秦正氏訳	水曜社	1979年7月	210p
3129	ゲルマニウムの神秘	山崎敏子著	カイガイ	1979年7月	154p
3130	健康ものしり事典	三石巖著	講談社	1979年7月	229p
3131	磁気健康法	中川恭一	実業之日本社	1979年7月	266p
3132	心臓の健康法 心臓発作を予防する	柳原博著	KKベストセラ ーズ	1979年7月	212p
3133	速効の漢方・急性・慢性病にすぐ効く本	松繁克道著	KKロングセラ ーズ	1979年7月	210p
3134	誰も知らない相場の秘密	岡部寛之著	徳間書店	1979年7月	210p
3135	誰も知らなかった心身壮快法	河野良和	実業之日本社	1979年7月	232p
3136	日本のファッション	河原宏他	有斐閣	1979年7月	286p
3137	よくわかる食の安全学 —環境汚染からまな板まで—	岩尾裕之, 細貝祐 太郎編	女子栄養大学出 版部	1979年7月	366p
3138	60歳からの健康	古川幸慶著	成美堂出版	1979年7月	247p
3139	私の魚博物志	内田恵太郎著	立風書房	1979年7月	242p
3140	新しい人間観と生命科学	渡辺裕	講談社学術文庫	1979年8月	234p

一般図書

3141	活動年齢をのばす健康 —高齢化社会を生き抜く医学—	有川清康著	りくえつ	1979年 8月	270p
3142	健康法のウツ 健康食品・民間療法の非科学性	横田清著	日新報道	1979年 8月	188p
3143	子どもの「健康」に必要な知恵	荒井良著	日本書籍	1979年 8月	196p
3144	この年齢でも OP叢書17	九重年支子著	ミネルヴァ書房	1979年 8月	268p
3145	誰も教えなかった株必勝法	町田恒男著	徳間書店	1979年 8月	232p
3146	近きより 2	正木ひろし著	旺文社	1979年 8月	423p
3147	158人の証言 若がいり健康法	前山茂編	蒼海出版	1979年 8月	204p
3148	わが世代大正10年生まれ	河出書房新社編集部	河出書房	1979年 8月	253p
3149	うまんちゅぬ すくちから ルポルタージュ叢書18 —アメリカのカイザー資本・琉球セ メントと闘った民衆の記録	石原昌家著	晩声社	1979年 9月	196p
3150	株の銘柄選び43のポイント	真島弘	日本実業出版社	1979年 9月	230p
3151	極意! 医学的人相占い	志賀貢著	毎日新聞社	1979年 9月	238p
3152	知的人相学	竹井博友著	竹井出版	1979年 9月	237p
3153	日本を知る小事典 1—3	大島建彦他編	社会思想社	1979年 9月	303p
3155				—11月	—435p
3156	山本周五郎のヒロインたち	木村久邇典	文化出版局	1979年 9月	247p
3157	わらじ医者京日記	早川一光	ミネルヴァ書房	1979年 9月	384p
3158	子どものからだは蝕まれている	正木健雄, 野口三千三	柏樹社	1979年10月	287p
3159	3分間筋力健康法	宮崎義憲著	潮文社	1979年10月	233p
3160	自分史発見のすすめ イメージ・カード60枚による自己確立の技術	小川俊一著	産業能率大学出版部	1979年10月	226p
3161	人と生き物48講	奥野良之助著	どうぶつ社	1979年10月	217p
3162	美の幾何学	伏見康治, 安野光雅, 中村義作著	中央公論社	1979年10月	241p
3163	ある図書館の戦後史	藤原覚一著	築地書館	1979年11月	228p
3164	かぜからガンまで 天候とからだ	ジュリスト・ファースト著 西丸震哉訳	三笠書房	1979年11月	294p
3165	体にまかせる健康法	岡島治夫	潮文社	1979年11月	239p
3166	昭和きすらい派の論理	志水速雄	大進堂	1979年11月	246p
3167	人生“お天気次第”100選	藤井幸雄	産報出版株式会社	1979年11月	222p
3168	すぐ役立つ実践的編集・取材の知識100	猪野健治著	日本ジャーナリスト専門学院出版部	1979年11月	258p



3169	地域への視角	清成忠男, 中村秀一郎編	日本経済評論社	1979年11月	237p
3170	年齢をとるといふこと その哀しみ, 楽しみ, そして知恵	畑秀彦著	光文社	1979年11月	268p
3171	脳卒中は防げる治せる	壮快編集部編	マイヘルス社, マキノ出版	1979年11月	221p
3172	脳と健康	荒井良著	雷鳥社	1979年11月	220p
3173	ひとりでもやる幽默(ツボ)健康法	藤本憲幸著	太陽企画出版	1979年11月	244p
3174	老人ホーム日記	日高登著	朝日新聞社	1979年11月	261p
3175	いい脳わるい脳	馬杉則彦	広済堂出版	1979年12月	237p
3176	医者ぎらいに捧げる本	田中小実昌, 阿刀田高, 結城昌治他著	池田書店	1979年12月	199p
3177	地域主義の思想	玉野井芳郎	農山漁村文化協会	1979年12月	313p
3178	転形期80年代へ	加藤周一, 鶴見俊輔, 日高六郎, 高島通敏	潮出版社	1979年12月	274p
3179	病みと闘う	清原迪夫	東京大学出版会	1979年12月	250p
3180	地方官僚 その虚像と実像	塩沢茂著	産業能率大学出版部	1980年1月	186p
3181	母親たちの自分史	わいふ編集部編	青娥書房	1980年1月	201p
3182	広島県労働運動史(第1・2巻, 年表)		広島県労会議	1980年1月	511p —1211p
3183	歴史の転換のなかで	小田実著	岩波書店	1980年1月	274p
3184	あなたの体は何歳か	飯塚鉄雄著	青春出版社	1980年2月	245p
3185	おんながつづる おんなのくらし7年をとる	田辺聖子, 中山あい子編	筑摩書房	1980年2月	227p
3186	株は投機しかない 波乱相場を勝ち抜く法	守屋陽一著	徳間書店	1980年2月	236p
3187	公害摘発最前線 岩波新書111	田尻宗昭著	岩波書店	1980年2月	204p
3188	骨盤調整健康法	五味雅吉	潮出版社	1980年2月	222p
3189	最新にんげん健康法	吉田信弘	読売新聞社	1980年2月	255p
3190	生命を探る(第2版) 岩波新書112	江上不二夫著	岩波書店	1980年2月	219p
3191	地方紙の時代か! 一現場からの報告・討論一	日本新聞労働組合新聞研究部編	晩声社	1980年2月	205p
3192	脳卒中患者の家族に	村上慶郎	潮文社	1980年2月	230p
3193	80年代株式投資4つの非常識	上原敬之典	青春出版社	1980年2月	263p
3194	ひとすじの道を求めて 戦争を知らない君たちへ	谷川巖著	学習の友社	1980年2月	215p
3195	指さき健康法 指さき刺激が生む驚異の特効効果	堤芳郎著	KKロングセラーズ	1980年2月	213p

一般図書

3196	老婚へのみち	森幹雄著	ミネルヴァ書房	1980年2月	233p
3197	労働現場 岩波新書110	鎌田慧著	岩波書店	1980年2月	232p
3198	夫と妻のための老後設計	水野肇著	中央公論社	1980年3月	210p
3199	株式投資はウラ情報を知らないと損をする	小野田修三著	日新報道	1980年3月	218p
3200	小麦胚芽油の秘密	藤原津多男	KKロングセラーズ	1980年3月	224p
3201	熟年時代	邦光史郎著	サンケイ出版	1980年3月	238p
3202	スピルリナの秘密	藤井尚治	広済堂印刷	1980年3月	234p
3203	説話のなかの民衆像	小林豊	三省堂	1980年3月	222p
3204	貫くことが自分を活かす —道を開く生き方10章—	桜木健古著	大和出版	1980年3月	230p
3205	黄金の瞑想	坪井繁幸著	潮文社	1980年4月	228p
3206	くらしの商品学	中農晶三	朝日新聞社	1980年4月	254p
3207	国家成立の謎	松本清張他著	平凡社	1980年4月	319p
3208	ネコと魚の出会い	西丸震哉著	角川書店	1980年4月	256p
3209	反原発事典	反原発事典編集委員会	現代書館	1980年4月	375p
3210	私はこんな死を迎えたい	松原泰道	山手書房	1980年4月	246p
3211	明日の明日の夢の果て	小松左京	角川書店	1980年5月	296p
3212	中年からの出発 男女協力社会をめざして	富士谷あつ子著	読売新聞社	1980年6月	232p
3213	文章の発見	田中隆	ダイヤモンド社	1980年6月	190p
3214	現代人の寿命予知学	田村豊幸著	農山漁村文化協会	1980年7月	344p
3215	たたかいに生きて	渡辺悦次, 鈴木裕子	ドメス出版	1980年7月	214p
3216	霧氷の花 囚われの女たち 第一部	山代巴著	径書房	1980年11月	344p
3217	アジアの平和と日本 ソ連共同宣言 周総理会談とその解説 国民シリーズ第1集		日本共産党出版局事業局		48p
3218	健康常識のウソ	千葉健一郎	ミリオン出版社		204p
3219	健康と若さを保つ食生活百科	清水桂一著	文陽社		173p
3220	子供をまもる戦い どうしたら日本民族の教育を守れるか	日本共産党文化部教育委員会編	日本共産党出版部		16p
3221	全民主勢力の団結のために —大浜炭鉱労働者の闘い—		日本共産党中国地方委員会		16p

## Ⅱ 逐次刊行物

3222 3225	思想 第117・268・269・434号		岩波書店	1932年2月 —60年8月
3226 3276	唯物論研究 第1—29・38・39・41— 54・60—65号	唯物論研究会編	木星会書院刊	1932年11月 —38年3月
3277 3284	ニュース		神戸塗装工組合	1933年1月 —34年5月
3285 3286	月刊ロシア 第1巻第4・5号		日蘇通信社	1935年10月 —11月
3287	ニルンテ <sub>ニ</sub> 第8巻第3号		東京帝国大学独 逸文学研究会	1937年1月
3288 3289	テトラバシー 第9巻第1・2号		大日本西会	1940年4月 —5月
3290 3292	西式 第4巻第3—5号	西勝造編	大日本西会刊	1940年7月
3293 3315	健康科学 第4巻第6—12号, 第5巻 第1—10・12号, 第6巻第1・3—6号	西勝造編	大日本西会刊	1940年8月 —42年9月
3316 3319	皇洋医学 第9巻第5—8号	西勝造編	大日本西会刊	1940年9月 —12月
3320 3326	朝日新聞縮刷版 昭和17年5月, 昭和18年1・4・5・7—9月		朝日新聞社	1942年5月 —43年9月
3327	農業世界 第37巻第10号	農業世界編輯部	博文館	1942年10月
3328	朝日評論 第2巻第5号		朝日新聞社	1947年5月
3329	美術 第1号		日本美術出版社	1944年1月
3330 3334	日本評論 第20巻第5号, 第21巻 第1—3・6号	鈴木三男吉編	日本評論社刊	1945年10月 —46年6月
3335 3341	人民評論 第2号, 第2巻第1—5号, 臨時増刊(日本民主革命の経過と展望)		伊藤書店	1945年12月 —46年8月
3342 3343	改造 第27巻第2号, 第33巻第8号		改造社	1946年1月 —52年6月
3344 3346	中央公論 第683・684・686号		中央公論社	1946年1月 —4月
3347 3348	言論 第1巻第2・4号	小林英三郎編	高山書院刊	1946年2月 —4月
3349 3371	人民短歌 創刊号, 第1巻第3—11号 第2巻第1・2・5—9・11号, 第3巻第1・3・4・6・8号	新日本歌人協会編	新興出版社刊	1946年2月 —48年8月
3372 3373	展望 第2・3号		筑摩書房	1946年2月 —3月

逐次刊行物

3374 3375	人間 第1巻第2・3号		鎌倉文庫	1946年2月 —3月
3376	文明 創刊号		文明社	1946年2月
3377	民衆の旗 創刊号	中野重治編	日本民主主義文 化聯盟刊	1946年2月
3378 3382	思潮 第1巻第1—3号, 第4号, 第 9号		昭森社	1946年3月 —47年6月
3383 3384	時論 第1巻第3・4号	嬉野瀧洲雄編	大雅堂	1946年3月 —4月
3385 3387	新潮 第43巻第3・4・6号	斎藤十一編	新潮社刊	1946年3月 —6月
3388 3585	新日本文学 1—44・46・48—183・ 185—190・192—202・401号		新日本文学会	1946年3月 —81年1月
3586 3587	民主主義科学 第1巻第1・2号	松村一人編	彰考書院	1946年3月 —5月
3588 3596	経済評論 第1巻第1—8号, 第2巻 第1号	鈴木三男吉編	日本評論社刊	1946年4月 —47年1月
3597	自由懇話会 第1巻第4号	自由懇話会編	建設社刊	1946年4月
3598	新小説 第1巻第3号	松村太郎編	春陽堂刊	1946年4月
3599 3601	評論 第3・4・11号	田邊典夫編	河出書房	1946年5月 —47年3月
3602 3605	産業労働調査月報 第1巻第1・2・ 5号, 第8号	日本産業労働調査 局編輯	解放社刊	1946年6月 —48年2月
3606 3620	社会評論 第3巻第3—7号, 第4巻 第1—5号, 第5巻第1—3・8・ 9号		ナウカ社	1946年6月 —48年12月
3621 3626	文学城 第1巻第1—5号, 第2巻第 6号		浮城書房	1946年6月 —47年6月
3627 3628	調査時報 創刊号, 第4号		日本共産党出版 部	1946年8月 —46年12月
3629 3630	月刊ソヴィエト 創刊号, 第2号		ソヴィエト文化 協会	1946年9月 —10月
3631 3633	世界評論 第1巻第7号, 第2巻 第1号, 第3巻第9号		世界評論	1946年9月 —48年9月
3634 3636	人民戦線 第4, 16・17, 19・20号		人民戦線社	1946年10月 —48年3月
3637	生産と文化 第12号	近藤吉雄編	国民工業学院	1946年10月
3638 3646	ソヴィエト文化 №5・8—11・13—16	ソヴィエト研究者 協会・日ソ文化連 絡協会編輯	ソヴィエト文化 社刊	1946年12月 —49年3月
3647 3648	労働運動 創刊号, 第1巻第2号		有紀書房	1947年1月 —2月

3649 3656	文化革命 第1巻第1—4・6—9号		日本民主主義文 化連盟	1947年3月 —48年6月
3657 3659	コスモス 第5・9・12号	秋山清編	コスモス書店刊	1947年5月 —10月
3660	労働問題研究 第8号		中央労働学園	1947年5月
3661 3663	樞 No.7~No.9	新田尚三編輯兼発 行	国鉄労働組合三 原分会文化部	1947年6月 —11月
3664 3666	潮流 第2巻第5号, 第3巻第5号, 第4巻第1号	吉田正蔵編	潮流社刊	1947年6月 —49年1月
3667 3694	新しい世界 第3—11・15・18・19・ 22—37号	金谷栄次郎編	日本共産党出版 局事業部刊	1947年8月 —50年8月
3695	労働と科学 第2巻第6号		労働科学研究所	1947年9月
3696 3700	科学と技術 第2—5・7号		日本共産党科学 技術部	1947年10月 —48年5月
3701 3707	文学サークル 第1—5・7・8号		東京地方文学サ ークル協議会	1947年11月 —48年12月
3708	山河 第5巻第6号		山河社	1947年12月
3709 3710	働く人 第1・2号		勤労者文学会議	1948年1月 —3月
3711 3715	文学時標 第1—5号		新日本文学会東 京支部	1948年2月 —8月
3716 3725	労農情報 第1—6・11・13・14・18 ・26号		日本労農通信社	1948年2月 —49年11月
3726 3733	勤労者文学 第1—6・8号		新日本文学会	1948年3月 —49年10月
3734 3736	自由国民 第11・13号, 別冊第1号		時局月報社	1948年3月 —49年4月
3737 3742	民主評論 第4巻第3号, 第5巻第2 —6号		民主評論社	1948年3月 —49年6月
3743 3744	夕風 第3巻第1・5号		汽車製造(株)岡山 製作所労働組合 文化部	1948年6月 〔1号不明〕
3745	詩作 第5集		詩作社	1948年10月
3746 3750	山脈 第1—5号		三菱三原車輛文 化会文学部	1948年10月 —49年7月
3751 3756	働く人 第11—13・15—17号		三原車輛文学サ ークル	1948年11月 —49年5月
3757 3758	芸術評論 号数なし・第5号		芸術評論社	1948年12月 —49年3月
3759	言論 第2巻第6号	富重義人編	言論社刊	1949年2月
3760	広島文学サークル1	広島地方文学サー クル協議会編	文化ライト社刊	1949年3月

逐次刊行物

3761	スクラム 第6号	関西労働学園	1950年1月
3762	新日本歌人 第46・63号	新日本歌人協会	1950年2月
3763			—51年8月
3764	新時代 第1—3号	新時代社	1950年7月
3766			—9月
3767	くるまざ 第7号	裸電球の下での会	1950年8月
3768	われらの詩 №7・10・13・14・18・19	われらの詩の会	1950年8月
3773			—53年7月
3774	経済ジープ 第19号	ジープ社	1950年9月
3775	楨峰文芸 第3号	広島県尾道北高等学校文芸部	1950年12月
3776	蟻 第1号	備前地方文芸友の会	1951年1月
3777	映画新潮 第2巻第1・2号	制作社	1951年1月
3778			—2月
3779	真相 第56号	人民社	1951年1月
3780	理論戦線 №1	瀬川陽三ほか著	1951年3月
3781	春陽 第2巻第4・5号合併号	尾道春陽会	1951年6月
3782	社会文芸 第5号	日本社会党出版部	1951年7月
3783	処女地 創刊号・№2	西神戸文学サークル	1951年11月
3784			—52年3月
3785	青蔭 第10号	青蔭会	1951年11月
3786	人民文学 第2巻第11号, 第3巻第6	人民文学社	1951年12月
3789	—7・10号		—52年11月
3790	文学通信 第2号	新日本文学会神戸支部文学新聞	1951年
3791	希望 L'ESPOIR 第1号・6月号・9号	エスポワール社	1952年1月
3793			—11月
3794	東海作家 創刊号	東海作家社	1952年4月
3795	沿岸地帯 創刊号, 第2号	沿岸地帯社	1952年5月
3796			—53年11月
3797	列島 第2号	葦会内列島	1952年5月
3798	文芸 第9巻第6・12号	河出書房	1952年6月
3799			—12月
3800	日本週報 第153・214・224・226・	日本週報社	1952年7月
3814	233—234・238・245・276・278・ 280・312・334・342・417号		—57年8月
3815	新創作 第6号	三原高校文学同好会	1952年12月

3816	意思 第20号		意思短詩型文学研究会	1953年1月
3817	近代文学 第8巻第1号, 第9巻		近代文学社	1953年1月
3820	第2・4・6号			—54年6月
3821	理論 季刊第20号		理論社	1953年3月
3822	知覚 I		知覚発行所	1953年5月
3823	文学 第21巻第6号, 第24巻第3・12号		岩波書店	1953年6月
3830	第25巻3・5・7・12号, 第30巻第3号			—62年3月
3831	解放 第1巻第2号		解放社	1953年7月
3832	新女性 7月特別号		新女性社	1953年7月
3833	はぐくみ 創刊号		P T A成人教育委員会	1953年7月
3834	平和 第16・22号	日本文化人会議編	大月書店刊	1953年9月
3835				—54年4月
3836	国語研究 第15号		愛媛国語研究会	1954年2月
3837	多喜二と百合子 第2—63・65—68・	多喜二と百合子研		1954年2月
3903	70号	究会		—61年3月
3904	真相 第61—63・69・72号		真相社	1954年3月
3908				—11月
3909	ありのさ 第12号	ありのさ編集部編	ありのさ社刊	1954年4月
3910	全貌 第18号		全貌社	1954年4月
3911	Books (十四社出版だより) No.48		Booksの会	1954年4月
3912	沿岸詩人 第1—4号		沿岸地帯社	1954年7月
3915				—12月 [4号不明]
3916	神戸文学 8号・13号	新日本文学会神戸		1954年7月
3917		支部編集委員会		[13号不明]
3918	三原小P T A新聞 第8・9・11号		三原小学校	1954年7月
3920				—55年1月
3921	どろんこ文学 創刊号, 4・7・8号		神戸勤労者文学	1954年8月
3928	・16—18号・20号		研究会	—62年8月
3929	しま 第4—10・12—32・34—36号		全国離島振興協	1954年10月
3959			議会	—63年12月
3960	前衛 97・344・364号, 索引表		日本共産党出版	1954年10月
3963	(45号付録)		局事業部, 日本	—74年2月
			共産党中央委員	
			会	
3964	文学評論 季刊第8号		理論社	1954年11月
3965	ていじん 第20巻第12号		帝国人造絹絲株	1954年11月
3966	現代詩 第1巻第5号, 第2巻第1号	新日本文学会詩委	百合出版刊	1954年12月
3968	第2巻第6号	員会編		—55年6月
3969	村のしんぶん 第4号		土の会	1955年4月

逐次刊行物

3970	作文と教育 通巻第36号—50号,	日本作文の会編	百合出版刊	1955年5月
3992	52号—55号, 第8巻第1—4号			—57年4月
3993	若竹詩歌人 第3号		若竹詩歌研究会	1955年6月
3994	日本児童文学 1—7号		児童文学者協会	1955年8月
4000				—56年3月
4001	広島文学 8月号		広島文学協会	1955年8月
4002	菊池野文学 第3号		菊池野文学会	1955年9月
4003	地人 第5号		長崎文学懇話会	1955年10月
4004	生活と文学 第1巻第1・2号,	新日本文学会編	百合出版刊	1955年11月
4020	第2巻1—12号, 第3巻1・3号			—57年3月
4021	みなと 第5号		みなと発行所	1955年11月
4022	列島通信 No.5		知加書房	1955年
4023	駱駝 第44号		駱駝詩社	1956年4月
4024	地方—創作と評論— 創刊1号—5号		地方の会	1956年5月
4029	1959年特別号			—59年11月
4030	雑草 7・9号		雑草の会	1956年6月
4031				
4032	綴方教室 第2号		帝人三原工場労働組合	1956年7月
4033	畦道 第5号		畦道クラブ	1956年8月
4034	玉津 10月号・2月号		玉津俳句会	1956年10月
4035				—57年2月
4036	芸備地方史研究 第19号	芸備地方史研究会編	三国書院刊	1956年11月
4037	原子林 5	原子林編集室		1957年1月
4038	詩学 臨時増刊		詩学社	1958年8月
4039	映画月報 No.4		(共産党)中央文化部	1958年9月
4040	サークル村 第1巻第2—4号,		九州サークル研	1958年10月
4047	第2巻第1—5号		究会	—59年5月
4048	リアリズム 第1号—6号		リアリズム研究	1958年10月
4053			会	—60年12月
4054	上智経済論集 VOL. VI No.1—No.2	上智大学経済学会編	上智大学出版委員会刊	1959年10月
4055				—60年3月
4056	木靴 第22・23冊	木靴詩話会編	木靴発行所刊	1960年6月
4057				—11月
4058	エコノミスト 別冊		毎日新聞社	1960年9月
4059	映画評論 1		映画出版社	1961年1月
4060	歩道 第2・3号		歩道の会	1961年4月
4061				—11月
4062	世界労働組合運動 第226号	世界労働組合連盟編	世界労連日本出版協会刊	1961年7月



4063	別冊新日本文学 創刊号, 第1巻	新日本文学会	1961年7月
4064	第2号		—11月
4065	解釈と鑑賞 臨時増刊	至文堂	1961年11月
4066	日本の記録 第1—4号	日本生活記録セン	1961年12月
4069		ター編	—62年10月
4070	文化評論 No.1—19	日本共産党中央	1961年12月
4088		委員会	—63年6月
4089	ぐんしょ 創刊号	統群書類従完成	1962年1月
		会	
4090	過渡期 第1・2号	過渡期同人誌編	1962年2月
4091			—5月
4092	雁木 第1—3号	雁木の会	1962年4月
4094			—63年11月
4095	現代史研究 第12号	現代社会思想研究	三月書房刊
		所編	1962年4月
4096	集団の論理 No.1	中井正一研究会	1962年5月
4097	中央公論 第41・1125号	中央公論社	1962年9月
4098			—80年8月
4099	広島共同映画ニュース 第75・76号,	広島共同映画社	1962年9月
4103	79—81号		—11月
4104	現実と文学 第13・18・19・26号	リアリズム研究会編	現実と文学社刊
4107			1962年9月
			—63年10月
4108	どんぐり 36号	双三作文の会	1962年9月
4109	安芸文学 第12集, 25号	安芸文学同人会	1962年10月
4110			—68年11月
4111	現代の眼 第3巻第10号, 第4巻	現代評論社	1962年10月
4112	第1号		—63年1月
4113	地方 月報 第1・2・4号	地方の会	1962年10月
4115			—63年6月
4116	AV週報〔広島共同映画ニュース改題〕	広島共同映画社	1962年11月
4119	第82・100・105・106, 107合併号		—63年10月
4120	記録 地方 —私と私のまわり—	地方の会	1962年12月
4121	第1・2号		—63年6月
4122	れへるぶ 第14号	れへるぶ同人会	1962年12月
4123	三文評論 第2巻6—11号	三文評論同人	1963年4月
4128			—10月
4129	三原の文化財 第2・3号	三原市文化財協	1963年5月
4130		会	—64年10月
4131	新房総文学 第8号	新房総文学会	1963年9月
4132	日本の人形劇人 第3巻第5・6号,	日本人形劇研究	1963年9月
4135	第4巻第1・4号	所	—64年8月
4136	若い職場 第1・3号	広島教育通信社	1964年1月
4137			—3月

逐次刊行物

4138 4141	みちづれニュース 第26・32・102号, 特別号		みちづれ会	1965年1月 —75年2月
4142	月刊株式会社っぽん8月号 別冊付録		市場新聞社	1965年5月
4143	みちづれ 第6号		みちづれ会	1965年7月
4144	広報みどり 第1号		三原市みどりの 町づくり推進協 議会	1966年9月
4145	広報みはら 第239号		三原市役所	1966年9月
4146	三津田ヶ丘 第9号		三津田ヶ丘広島 同窓会	1966年10月
4147	わすれな草 No.1		呉一中二五期会	1967年6月
4148	潮流ジャーナル 第10号		恒文社	1967年7月
4149	中小企業 第427・430—432・434—446・ 448・449・451—465・467—478号		中小企業経営研 究所	1969年6月 —70年12月
4150	季刊国民教育 第2号	国民教育研究所	労働旬報社	1969年11月
4151	日本店装新聞 第562号		日本店装新聞社	1971年5月
4152	子どもの家 No.21		日本児童文学者 協会広島支部・ 広島児童文学研 究会	1971年6月
4153	公害と対策 第7巻第9号		公害対策技術同 好会	1971年9月
4154 4155	実業の日本 第1692・1758号, 別冊付録		実業の日本社	1972年2月
4156	先春 第23号		西小PTA	1972年3月
4157	PHP 第286号		PHP研究所	1972年3月
4158	広島民報 縮刷版No.4		広島民報社	1972年3月 —74年12月
4159	季刊人間として 第10号		筑摩書房	1972年6月
4160	週刊切り抜き速報 第140号		ニホン・ミック	1972年8月
4161 4168	広島ジャーナリスト No.44・47・48・ 51・54—56・61	日本ジャーナリス ト会議広島支部編 集委員会		1972年10月 —74年12月
4169 4173	価値ある情報 第9巻第13号, 第17巻 第7・8号, 別冊		ダイヤモンド社	1972年12月 —80年7月
4174 4175	月刊地域闘争 第27・47号		ロシナンテ社	1972年12月 —74年9月
4176	消費者運動 No.28	日本生活協同組合 連合会編集発行 全国消費者団体連 絡会編集協力		1972年12月

4177 4186	人間家族 第1—5・8—10・14・15号		DM通信社	1973年1月 —74年3月
4187	愛児に樂園を 第2号		ヤマギンズム幸 福学園設立準備 委員会	1973年4月
4188	企業診断別冊(48年版)	中小企業振興事業 団	同友館	1973年4月
4189	広島教育時報 第748号	広島県教組情宣部 山田昭編集発行	広島県教職員組 合	1973年4月
4190	季刊現代史 春季特別号	松本清張	現代史の会	1973年5月
4191 4192	赤狼火 第24・28号		日本共産党革命 左派全国委員会	1973年6月 —9月
4193	自治研究 第49巻第7号		良書普及会	1973年7月
4194	ひととき 108号	ひととき会岡山グ ループ編	ひととき会岡山 グループ	1973年9月
4195	現代のエスプリ No.77(現代都市論)	奥田道大編	至文堂	1973年12月
4196	世界政経 第2巻第12号		世界政治経済研 研所	1973年12月
4197 4203	広島民報 第444—445・447—449・ 452号, 号外		広島民報社	1974年7月 —9月
4204	毎日グラフ別冊 1億人の昭和50年史 第16巻第1号		毎日新聞社	1975年1月
4205 4206	襤褸の旗 No.3・4			1975年5月
4207	商業界別冊 変貌する商店街 '75		商業界	1975年12月
4208	投資相談 第21巻第4号		実業之日本社	1976年3月
4209 4241	現代の眼 第17巻第10号, 第18巻第11 —12号, 第19巻第1—12号, 第20巻 第1—12号, 第21巻第1—6号		現代評論社	1976年10月 —81年6月
4242 4274	潮 第211・222—253号		潮出版社	1976年12月 —80年6月
4275	月刊教育の森 創刊号		毎日新聞社	1976年12月
4276	毎日ライフ 第95号		毎日新聞社	1976年12月
4277 4278	ひと 第50号, 第116号		太郎次郎社	1977年2月 —82年8月
4279 4287	別冊壮快 第8・10—14・16・17号, 号数なし		マイヘルス社 講談社編集発行	1977年2月 —79年7月
4288 4289	旬刊株式につぼん 第380・467号		市場新聞社	1977年3月 —79年7月
4290 4328	思想の科学 No.80—85・87—119	思想の科学編集委 員会編	思想の科学社	1977年4月 —79年10月
4329	実業の日本 第1894号		実業之日本社	1977年7月

逐次刊行物 その他

4330 4441	朝日ジャーナル 第967・971—983・986 ・994・996—998・1000—1002・1004— 1007・1009—1017・1019—1029・1031 ・1032・1034・1037—1080・1082— 1092・1105・1107—1112号, 総索引	朝日新聞社	1977年8月 —80年6月
4442 4446	波 第11巻9・10号, 第12巻3・4号, 第13巻1号	新潮社	1977年9月 —79年1月
4447	人と日本 第10巻第9号	日高成美編 行政通信社	1977年9月
4448 4449	本 第2巻第9号, 第3巻第8号	講談社	1977年9月 —78年8月
4450	ふるさと展望 創刊号	千秋社	1977年10月
4451 4452	別冊新評 第43・44号	新評社	1977年12月 —78年4月
4453 4454	図書 第341・356号	岩波書店	1978年1月 —79年4月
4455	議会と自治体 第232号	守田達弘編 日本共産党中央 委員会	1978年3月
4456	まんが広場 創刊号	まんが広場編集室 中央書店	1978年4月
4457	歴史と旅 第5巻第6号	鈴木享編 秋田書店	1978年6月
4458 4459	埼玉県労働運動史研究 第10・11号	埼玉県労働運動 史研究会	1978年7月 —10月
4460	伝統と現代 55	伝統と現代社	1978年11月
4461 4462	月刊総評 第257・258号	日本労働組合総 評談会	1979年5月 —7月
4463	俳句公論 64号	小寺正三編 俳句公論社	1979年12月
4464 4465	社快 第7巻第5・6号	マイヘルス社	1980年5月 —6月
4466	さゝやき 第3号	曙文化サークル	
4467 4468	星座—生活綴方のために— 第6・7号		

Ⅲ そ の 他

4469	国際赤色救援会の任務と組織 マルクス スレーニン主義パンフレット第2輯	国際赤色救援会執 行委員会編 中村耕平訳	マルクス書房	1929年11月	36p
4470	近畿関西旅行案内 修学旅行の栞		三省堂	1931年2月	48p
4471	全建築労働者諸君!! 組合を造ろう		神戸土木建築労 働組合準備会	[1933年]	ト一B 5
4472	作戦要務令		兵書出版会, 藤 谷崇文館	1938年12月	218p

4473	新聞切抜		[1946年 —1963年]	1袋
4474	労農手帳		人民新聞出版部	1947年1月 68p
4475	新しい憲法 明るい生活		憲法普及会	1947年5月 30p
4476	日本に関するテーゼ 1927年テーゼ 〔研究資料〕		日本共産党	1947年12月
4477	人形劇脚本集		日本人形劇協議 会中国支部	1949年1月 27p
4478	三原市税條例案		三原市	1950年8月
4479	大崎南村郷土史	正畑規矩監修	学校組合立木江 中学校崎南分校 刊	1951年
4480	螢雪 第8号		広島県尾道南高 等学校生徒会	1952年3月
4481	日本共産党の新綱領の基礎 (国民通信 パンフ第1集)		国民通信社	1952年3月 31p
4482	はぐくみ集		三原小学校P T A成人教育委員 会	1954年
4483	生活指導と作文教育 昭和29年度、		三原市立西小学	1954年
4484	30年度第2集		校	1955年
4485	学芸会のしおり		三原小学校花組 文化部報道係	1955年1月
4486	国語科作文教育研究会要項		三原市立西小学 校、三原市教育 委員会、三原市 教育研修所	1955年11月
4487	第9回生名簿		三原市立第二中 学校心友会	1956年3月
4488	詩集 河童昇天	麻井比呂志		1956年7月 49p
4489	創立75周年早稲田祭		早稲田祭委員会	1957年10月 20p
4490	座談会 入海事件の真実を語る			1959年2月 12p
4491	電源 第6回美術文芸コンクール		電源開発株式会 社	1959年3月
4492	うたごえ 一仏通寺のつどい		三原高校十回生 有志	1959年8月
4493	広島県青年研究発表集		広島県青年連合 会、広島県教育 委員会	1960年1月 1961年1月
4494				
4495	松川事件〔映画パンフ〕		松川事件劇映画 製作委員会発行	1961年1月 34p
4496	国民文化全国集会 記録		国民文化会議	1962年5月 96p

そ の 他

4497	新三菱重工㈱三原製作所工場案内〔パンフ〕		1963年8月	
4498	フォトアサヒ 全日本写真連盟機関誌	全日本写真連盟	1963年8月	28p
4499	三原市事業所名鑑	広島県三原市	1963年	160p
4500	〔運動における地方性について意見要請〕	「三文評論」地方文化グループ	1963年	
4501	自動車事故の賠償（どれだけ請求できるか）	三原安全協会	1966年8月	
4502	広島県都市賃金調査結果報告 第16回 広島県都市職種別民間給与実態調査 付 新卒新採用者調査 昭和42年12月分	広島県統計協会	1968年11月	124p
4503	無欠点(ZD)運動テキスト	三菱重工業㈱三原製作所	1969年3月	20p
4504	東京へ 関東方面修学旅行〔パンフ〕	素人社	1969年4月	75p
4505 4508	安全衛生管理指針 1969～1972年度	三菱重工業㈱三原製作所		
4509	ZD運動テキスト	東中国三菱重興産㈱	1970年1月	20p
4510	目標による管理	三菱重工業㈱三原製作所	1970年4月	23p
4511	全国労働衛生週間 1970年度 10月1日～10月7日	三原労働基準監督署・三原労働基準協会主催		18p
4512	公害問題情報	日本ビジネス	1970年11月	
4513	新聞・雑誌・スクラップ		〔1970年～73年頃〕	2袋
4514	スクラップブック〔クレジット広告、写真等〕		1970年頃	1冊
4515	農薬害とその対策について	財団法人協同組合経営研究所	1971年1月	22p
4516	三田会会員名簿（昭和17年）	昭和17年三田会	1971年3月	
4517	瀬戸内海・四国（観光と道路図）	東京鉄道交通社四国支部	1971年6月	
4518	水質汚濁防止法関係法令集	環境科学研究所	1971年7月	103p
4519	騒音規制法関係法令集	環境科学研究所	1971年7月	35p
4520	大気汚染防止法関係法令集	環境科学研究所	1971年7月	64p
4521	通信教育講座教材〔テキスト11冊・問題5冊〕	環境科学研究所	1971年11月	
4522	小さな画帖	藤井綏子	1972年頃	81p
4523	瀬戸内海汚染総合調査報告	瀬戸内海汚染総合調査団	1972年5月	528p

4524	南高来郡と観光の島原〔地図〕		東京交通社	1972年11月	
4525	文集 出会い ―“中川先生”を詩う―	三原市立沼田西小学校5年生の仲間を中心に		1972年12月	20p
4526	河川公害を追放し、きれいな水をとりもどそう！ ＝全水道水質汚染公害反対闘争方針＝		全日本水道労働組合	1972年	12p
4527	労務安全衛生管理指針 1972年度		三菱三原協力会		
4528	児童生徒等の健康の保持増進に関する 施策について〈保健体育審議会答申〉	文部省	大蔵省印刷局	1973年3月	63p
4529	水辺の空間を市民の手に ―水系の思想と人間環境―	与川幸男編	三多摩問題調査研究会	1973年3月	61p
4530	鉄斎〔パンフ〕		朝日新聞社	1973年4月	
4531	―子どもたちになにを食べさせたい いか― 食品公害シリーズ No.1		日本子どもを守る会	1973年8月	26p
4532	名古屋高速道路公社の公害対策批判		日本科学者会議 愛知支部交通問題研究委員会	1973年10月	34p
4533	千葉県自然破壊	日本科学者会議 葉支部・房総の自然を守る会・千葉県住民運動連絡会 千葉県自治体問題研究所編		1973年11月	50p
4534	肝臓のはなし	柿崎泰賢著	東洋医学研究所	1974年8月	21p
4535	第20回 原水爆禁止世界大会に参加 しましょう〔ビラ〕		原水爆禁止広島県協議会	1974年8月	
4536	激動とあらしの半世紀昭和50年展〔パンフ〕		朝日新聞東京本社企画部	1974年10月	80p
4537	三原案内図 三原No.1〔地図〕		太宣企画	1974年	
4538	浮世絵名作300選展		日本経済新聞社	1975年1月	
4539	沖縄民芸振興展		日本民芸協団	1976年1月	
4540	昭和51年運勢暦	日本占術協会編纂	鶴書房	1976年	256p
4541	学習のてびき「環境・公害」	「公害と教育」研究会 その他編	ほるぶ総連合	1977年4月	135p
4542	岩波文庫解説目録		岩波書店	1977年	157p
4543	〔写真ネガ〕				1袋
4544	考え方教室ノート	小柴隆弘著	考え方教室 隆心館	1979年1月	164p
4545	銃後史ノート No.3		女たちの現在を 問う会	1979年4月	88p

4546	一カセットによる一催眠法入門Ⅰ・Ⅱ	小柴隆弘著	JASS	
4547	誰でもできる催眠法〔カセットテープ〕			
4548	過度経済力集中排除に関する法規集		日本電気産業労働組合民主化対策委員会	81p
4549	過度経済力集中排除法に基づく手続規則・鉱工業等の部門における過度の経済力の集中に関する基準・指定企業者の手続一指定より手続の終結まで一	企業弘報編集局編	産業再建通信社	38p
4550	講演と詩の朗読の夕 キューバ〔パンフ〕			B5—6p
4551	高級アルコールの例 SDS (ドデシル硫酸ナトリウム)		〔論文の一部を複写〕	複—B 4 —1枚
4552	工場新聞の作り方	春日庄次郎・春日正一著		ト—B 6 —29p
4553	氏族制度の用語について〔法政研究第11巻第2号抜刷〕	小越達也		〔11p〕
4554	しろい手袋	熊田鶴子		36p
4555	人民民主主義から社会主義へ(研究資料)			96p
4556	人民民主主義の『国家と革命』(研究資料)	コトーク、フェルベロフ、マニコフスキー著	国際研究会	78p
4557	スターリン主義を学ぶために(研究資料)	ベ・ボノマリョーフ著		44p
4558	続・整風文献(所内研究資料)	中国研究所調査部編	中国研究所刊	
4559	ソ同盟の文芸対策(研究資料)			169p
4560	誰れにも出来る美容と健康〔健康器の説明書〕		富士製作所医療器研究所	29p
4561	チロルの秋〔劇台本〕	岸田国士		12p
4562	津田木材工業従業員必携			72p
4563	転形期の技術と文化〔雑誌の一部、雑誌名は不明〕	相川春喜		18p
4564	特定工場における公害防止組織の整備に関する法律・法律施行令・法律施行規則			35p
4565	どんぐりひろい		三原市立西小学校	
4566	二学期作文集 みかん		因島市田熊小学校3年1組	
4567	日本共産党 農民綱領・行動綱領・規約			33p



4568	年表(附録)〔日本プロレタリア文学 年表1の1〕	日本近代文学研究 所編		83p
4569	農薬を告発する(ニッソール中毒事故 裁判を支援するために)〔ペンフ〕		ニッソール中毒 研究会	
4570	広島県民文庫〔複写資料〕			11p
4571	三原市街図		塔文社	
4572	三原市住居表示案内市街図		日本地図協会	
4573	毛沢東 新段階論—1938年10月12日か ら14日までの中共拡大六中全会席上 の報告—(教育資料)		日本共産党宣伝 教育部	169p

補 遺

4574	組合ノート〔アカハタ主要教育 用記事用記事目録他のメモ〕		重家豊	1946年 8 月	B 6 手帳 1 冊
4575	世界史教程	ボチヤロフ, ヨア ニシアニ共著 早川二郎訳	白揚社	1947年 3 月	308p
4576	〔文学活動に関するメモ〕	重家豊		〔1954年〕	B 6 手帳 1 冊
4577	平和問題月報 №1	平和問題研究会		1959年 2 月	4p
4578	全労第 6 回定期全国大会議事速 記録	全労大会共同デス ク		1959年11月	48p—71p
4581	みんな肩を組もう 第33回メー デー前夜祭物語歌集			1962年 4 月	30p
4582	歴史と人物 第79号		中央公論社	1978年 3 月	336p

## あ　と　が　き

重家資料は、戦後日本の労働運動に一時代を画した三原車輛にかかわる資料です。去る昭和52年に刊行した『広島市職労三十年史』の編集過程で、私たちはこの資料の存在を知ることができました。これは一重に渡辺悦次・鈴木裕子両氏の地道で粘り強い史料探訪によるものです。その後、資料の散逸を心配された両氏が、その保存方法等について奔走された結果、今日まで紆余曲折はあったものの、広島市職員労働組合が寄贈を受け、広島市公文書館に保管されることになりました。資料の寄贈を受けた私たちは、『三十年史』を裏づける貴重な史料として位置づけ、昨年、これを目録の形で公刊することを決定しました。

資料の寄贈にあたっては、重家氏の長男三嘉氏ならびに長女圭子氏には深いご理解をいただきました。ご厚意に対し深くお礼申し上げます。また、資料の保管についてご理解下さった総務局長福島隆義氏および公文書館長植田保之氏に感謝の意を表します。

資料の発見から目録の刊行にいたるまでの間、多数の方々のご尽力とご助力がありました。私たち広島市職員労働組合は、労働運動史研究にとって貴重な資料を専門的に高い水準の目録として完成できたことを皆さんとともに喜び、今後の利用に強く期待するものです。

1984年3月31日

広島市職員労働組合

---

## 重家豊資料目録

—広島県社会・労働・文化運動史料—

---

発行 昭和59年3月31日

編修 広島市職員労働組合

〒730 広島市中区国泰寺町1丁目6-34

TEL (082) 243-9 9 1 2

印刷 中本本店印刷株式会社

---

非売品

